

コロニア小説選集

第三卷★目次

(注・当文庫には十二編を収録しています。●印)

●描写の試み……………	水野 林
日本から来た女……………	杉村士郎
多喜の決心……………	佐光仁奈
●ウバツ―バにて……………	菅野みさお
●移植……………	川原 奈美
●井 戸……………	高野 耕声
●朝の予感……………	醍醐麻沙夫
遠い虹の橋……………	蓼科冨智雄
地 表……………	いこま 正
ふたつの間……………	葦屋 光延
●洪水……………	高橋 英一
E町にて……………	伊那 宏
せせらぎ……………	長田三千枝
はまゆうの唄……………	星野 良江

放浪一代	伊原 久
●断絶	則近 正義
海に見える街	福村 琳
●みさ子とわぐり	矢島 健介
●流亡	山野千枝子
●帰郷	新井知里
切手	梅木幹弘
●狂犬	松井太郎
●河は歌う	海野牛子
折れる葦	滝井康民

◎コロニア用語注釈	
-----------	--

◎第三巻の編集を

担当して	・藪崎 正寿
------	--------

描写の試み

水野 林

朝早く起きると、この日も輝かしい朝日はなく、大気は重苦しい沈黙を始めていた。その夏の朝、私は郡役所に出頭する用件があり、ある田舎の町を訪れた。その小さな町までは、約五十キロあり、私は早く行き、早く着くようにと、朝の七時にバスに乗った。

サレゾポリス。これは古代ギリシャの都市国家風の名前であるが、全くそのように独立自給自足の入ポリスVのような町である。もともと、自給の点では貧困のようで、もっぱら自足しているに過ぎないのであるが。

十年昔には、何度かその町サレゾポリスを訪れたことがあった。その後、私は東京に帰り、短くもない歳月をあわただしく浪費し、やつと昨今この国に戻って来たのであった……。

私の用件は、放置されたままになっていた私の管理

する農地の租税を収め、その他の書類を整理すること
で、そのため先方の役所との交渉も、若干必要なよう
であった。このいづらか煩雑な用件を携えて行くこと
に、うんざりしつつも、やはり私は、自分の記憶の中
の小さな町を訪ねることのできるこの機会をたのしん
でいた。この町は、現実に存在している、つまらぬ汚
い、とるに足らぬ田舎町なのであるが、一方私の脳裏
に少しばかり場所を占め、長い年月収まっており、私
が記憶を呼び覚ましさえすれば、どこでもこの小さな
田舎町は、目前に蘇った。いわば、私はブラジルの田
舎町を一つ、そっくり仔細に折り畳んで、頭の中に持
ち歩いていたのである。例えば、あの新宿駅の広い地
下道の雑踏する群衆の中で、こんなものを、誰がほか
に持ち歩いていただろう。私が寝ようとするとき春の
嵐が雨戸を打つ夜に、誰がほかに、こんなはるかを遠
い町サレゾポリスを思い浮かべるだろう。それは、い
までもなく、あの水を満たしたコップの中に入れさえ
すれば花開く「日本の水中花」のたとえのようなもの
である。

こうして私は、まさにその朝「過去」への路をたどつ
ていることにはかならなかった。

バスは、たつぷり一時間ほど走った。はじめのうち
は日本人の野菜畑を左右に見て、粗末を木造の家や、

レンガの白い家が点在していたが、そのうちに風景は変っていき、牧場ばかりになった、まるい丘の連なりで、牧場は多分痩せ地で、草は短い。丘のあちこちに巨きな灰色の岩が露出しており、等高線に沿って、幾条にも無数についている細道は、牛たちが毎日毎日丘をめぐって、草を食みながら踏み固めたものらしい。アスファルト道路はこれらの丘裾の低みを選んで進み、際限もなく曲りくねり、止むを得ぬときは、のろのろと丘を登り、また下った。道端に、買物袋をさげた農夫が立って手をあげるとバスは止り、具合のわるい空気ドアをしぶしぶと開ける。

こうしてドアは何度も開けられた。

最後に、長い曲線を運転手が楽し気にハンドルを切ると、町が、あのサレゾポリスが見えてきた。それは先ず小高い丘を背景にした教会の尖塔にはじまり、次第にその周囲のこまかな集落が、白い壁と茶褐色の屋根と樹々の緑とを混ぜて現われてきた。バスは、この町に入ってゆくことを、何の感動もない日常的事として近在の人々を乗せて走っている。

町の入口で州道が尽きた。すると急に道が悪くなった。すでにここは市政に任された州道で、市は貧しくて舗装をするいとまがないのであろう。バスはうねりに乗った港内ランチのようにゆれて、終点にたどり着くと胴ぶるいしながらエンジンの響きを止めた。

具合のわるいドアが開いた。長い大げさな空気ドアの吐息。少年の車掌は、軽い紙包みを外に投げ出した。車外で町の若者が、それを受けとめた。それはたかだか十部あまりの日刊紙の包みで、この町の新聞の読者は、それ以上にふえないらしかった。運転手に切符を渡しながら、乗客たちは、急がずに降りた。

朝風のなかに降り立つと、その時、私の過ぎてきた海路の記憶もその土を踏むためにのみあったような気がした。船出も、寄港地の夜、明滅する燈火も熱帯の海の紺青もその別離も、その不安も、その苛立つ憶いもはや路傍の些事となって退き、今やその成果だけが目前となったような気が……。

私が、自分の国を遠い彼方に押しやってきたのも、この小さな、人知れぬ野性の頽廢の中の一点に近づくためであつたのかと。もしそうならば、夜通しおどろに鳴る船の機関の音を聞き、夜通し航海士をウオッチに立たせ文明の機構を動員した挙句の果てが、そのすべては私の夢のなかの小邑を獲得するのに捧げられていたのだと小気味よく確信してもいい。

ところで、私のこんな懷慕の念に、だれであろうと関心のあるはずがない。人々はいつも無関心である。私も、なにも人に話すことはなかった。私が私の国に於てこの草深い田舎町のことを語っても始まらなかったように、今またここでだれかに私の感激を語っても

始まらないのであった。

朝まだき、町は目覚めたばかりのようだが、人々は、だ情だが早起きにちがいない。商店は扉を上げ、馬に乗った男たちは町に着き、閑人は早くも暇であり、そこかしこ戸口にたたずんでいた。これで充分であった。人々は変わりなく過ごしている。十年前も今も、まるで、たった一日が経っただけのようである。この考え方は、まるで船乗りみたいだと、私は思った。船乗りが、陸に帰ってきたとき思うだろう。俺は、さんざ海を径めぐって、危険にも苦しみにも、はたまた楽しみにも沢山遭ってきたというのに、その同じ時間の間に、此処は何一つ変わっていない、と。

すでに我々は、自分の国に帰っては、そのように感じることはできないだろう。むしろ、自分の変らなさを感じるばかりである。そこでは、夏の雲のような変貌が営々と行なわれているのであるから。

だが、何度でもこの南の国に帰ってくるかぎり、世の中の変らなさを感じる。あの、海の果てのさすらいから帰ってきて、そつと我が家の窓辺から中をのぞくサイラス・マアナーのように。

さて私は、役場への道を尋ねるつもりで、一軒の店にはいって行った。撞球台が三台おいてある酒場であつた。

私はコップ一杯の熱いコーヒーを飲み、それから店

番の少年が教えてくれるままに、店のわきの坂道を登って行った。役所は、まだ閉まっていたが、横手の通用口には使用人らしき若者が居た。九時頃には、事務が始まるものと思っていたが、念のため、その若者に聞くと、なんと役所が開くのは、毎日正午からであつた。私は早く来すぎてしまったのだ。この国では、役所を午前中に訪ねるのは、常識的なことではなかつた。この国に來れば、この国の尺度を学ばなくてはならない。さもないと、いつも三四時間待たされる結果になるう。

私は、どこにも行くところがなく、さしあたり何も用件がなくなつてしまった。そして、役所の前にたたずみ、急に我がものとなつた自由をもて余した。これから東西南北どこへでも好きな所に行けるのであつた。こんなわけで、私は、自分が望む以上の時間を、この町の散歩に費さざるを得ないことになり、こんな朝早くから、仕方なく閑人の仲間入りをすることになった。

朝風が街路と家々の窓と、雲つて暗い夏の空の下を渡つていく。目をあげると、彼方の森が騒いでいる。そこは、この町一番の高みにある墓地だつたはずだ。

―ある夏の昼すぎに、人影もないその墓地を通つたことがあつた。その時のことが、にわかに思い出されてきた。

この国の墳墓は、すべて十字架を載き、その大小高

低の死者の家々は、真夏の午後の陽炎のなかに、静かに燃えて立ち並んでいた、その記憶である。さきほどまで、あちこちで何かの作業が行なわれていたらしく、しかし人夫達の姿はなく、ただ鍬やスコップがおき捨てられていた。そして、手押車には、土が積まれたままになっており、その土には、麦色したいくつかの白骨がまじっていた。それは何の作業であつたろうか。昔の墓が廃されて、新らしい墓が作られているのであつた。それは、新らしい墓に、新らしい悲しみを埋めるための準備なのであつた。掘り出された骨は、すでに靈氣を失ない、もはや土に帰ったような古い骨で、軽々と乾燥し、今は夏の日の輝きに曝されているのであつた。かくて、時古りた無縁仏は発かれ、遺骨のはなればなれとなる時は、縁者の知るところではないのであつた。たまたま、何のえにしもない私が通りかかり、散逸する寸前の骨々を目に収め、私が思い起しさえすれば、それは私の頭の中に縁者も知らぬ場所を得て、今も在るのであつた。

まさに記憶のがらくたには違わないが、それにしてもおそらくモオツアルトの骨も、こんな風にして散逸したのではなからうか。

私は、かつて我が酒友であつたある老人が、私の居らぬ間に亡くなり、今は、この墓地に葬られていることをかねてその家族を訪ねた折に聞いていた。この人

は、白髪の丈高な翁で、品格あるやさしい顔立ちであつたが、その鼻翼には、いつも剥げ落ちかゝつた瘡蓋がひつついており、それを一向に気にしないことが、一種の風格を作る一因ともなっているのであつた。全く顔を洗つたことはないらしかつた。その話しぶりも、手の動きも、素人くさい操り人形のように遅すぎる動作で、何を話してもらちがあかないのであつた。その堂々めぐりの話術はどんな芸人も及ばない本物で、これにひつかゝると、私はすぐには別れることができなかった。この国の強い酒は、人をこのようなアルコール中毒者にするらしかつた。

老人は、アルコールがいつも頭の中を駆けめぐっている状態が好きなたちなのであつた。私は、この老人の晩年しか知らない。老人は時々畑の雇われ仕事に、若い連中の尻にくつついて出かけて行き、夕べともなると鍬を肩に、縄たばこをふかしながら、やはりいちばんあとから帰つてきた。

ある時、この老人の若い頃の写真を見せられたことがあつた。その一つでは、彼は馬上にあり、鍰広の帽子をかぶり、その当時の写真作法の通例にならない、鼻白むまでにとりすましている。そこには、日頃の冗談も、覺えたての如才なさも、友だちとする女の話も忘れ去られてはいるが、その眼差しには、かえつて粗野な田舎青年の情念のありだけが籠められているように

も見える。ありふれた格子のシャツの腕は、やや緊張し、馬の手綱を引きしめているが、この時馬は剩御するまでもなく、おとなしく佇立し、眠たげに半眼をつぶっている。

おそらくその青年は、写真師のそばに立っている仲間からの冷やかしに懸命に耐えて、その顔を作っているのかも知れない。

この写真が、黄色く古びてしまった間に、その若者もまた野心と健康とを磨り減らし、鼻翼に瘡蓋の剥げ落ちかゝった好々爺となった。その老人は、自分の年令を忘れていた。彼には、齒の抜けた妻と、息子や娘たちが五人ほどいたが、子供たちもまた父親の生年を記憶してはいなかった。小さな茅葺きの家に住み、家の内部はランプの油煙で真黒であつた。その暗い住居のように、一家もまた暗愚の只中にあつたが、暗愚とは一つの幸福であり、私は、その気樂さをよろこんで、しばしば酒瓶を携えて、その家を訪ねた。

昔彼は近隣一帯の地主だつたそうである。その土地は、緑濃い密林の中の川や、輝かしい夏の乱雲の下の大木や、丘の上の騒がしい一群のバナナ林内を境界とし、雨期の激しく吹き煙る白い雨の円柱は、その土地の一部を乾したまゝ降り過ぎていった。当時は、我々の土地のすべてが、そこに含まれていた広い土地で、無数の蟻塚があり、何種類もの小動物の天国であり、

地価は只のようなものであった。

私は、彼の晩年の姿を好んでいるので、その若い頃に知り合いになっていたかったとは、別におもわないが、ちよつとその頃の生活ぶりも見えてやりたかったものである。私が老人と知りあつた時は、彼の土地も、彼の馬も彼の喉元を通り過ぎたあとであつたから――。

その老人、ジヨゼ・トビアス・カルドーゾが、胸の上に手を組んで眠る墓地を私はただ眺めやっただけで、そこまで登って行こうとはしなかった。今どきその老人の貧しい墓に参つたとてなにになろう。

そこで私は、風に騒ぐ墓地の森をしばらく見入っただけで、役所のそばの公園へ、この小さな町を中心となつている教会前の公園へ、所在ない時を過すために歩いて行つた。そこは、樹々の茂るほの暗い静かな場所であつた。

南国のあまたの植物が、天にむかつて送るようになり、育し、太陽の光りの雨を受けとめようと、広い葉を差し出して待っている。植物の無音の生命の営みには、かえつて騒然たる響きが聞き取れはしないだろうか。丁度巨大な工場の日常の騒音が、かえつて深い静寂と錯覚されるように。

公園の樹の幹は、石灰で白く塗られ、その白は、壁にかけられたまま古びたタペストリーのうすよどれた

白にちがいはなく、その大小の樹の幹の作る縦縞の背景は、灰色の教会の壁で、今しも前庭部の石段には、黒々と開かれた入口に向かって、小さく一つの点景人物が登っていった。そして、教会は丘の高みに、この町ただ一つの大建築として、鐘楼を高々と揚げてそびえていた。

―ある時には、家族のすさびとして曹洞宗を持つにすぎない東洋人が、一たん好奇心からこの教会をのぞいてみたことがあった。

そこに一步踏みこんだとたんに、私は光りに満ちた自然の空間から遮蔽され、執拗に沈黙としのび足との異教の精神的煙霧の中に包まれた。教会の石の壁は厚く、いかなる白日のさなかにあつても、頑なに森嚴な闇を封印しているのであった。この異教の伽藍の空間のひろがりには、サン・パウロのあのモニュメンタルなセー寺院のそれに比べれば、よほどつゞましいものであった。しかしながら、田舎町の教会の空気の底にも、ヨーロッパ中世の快い朦昧はわだかまっております、私にはこゝに拝跪する祈祷者を傍観することに、いつに変らぬ、ある冷笑をさそう興味があつた。そして、それを見つめている神を持たぬ自分自身には、いっぽうあるいかがわしさを感じるのであった。そのとき、父親を失ったらしい娘とその母親が、祈祷台に両肘を置いて手を組みあわせ、奥深い内陣に向つて祈りを捧げ

ているのを私は見ていた。黒いレースをかぶっているため、娘のうなじはかくれておりその横顔の白い稜線だけが、いつまでも不動のままであつた。

公園には、ようやく暑さがきざしてきた。だが、公園の石のベンチは、腰かけるにしては、まだ少し冷たそうであつたので、私は近所をもうひとまわりしてなるべく坂を下つた。そして、ある雑貨屋の前を通りかゝつた。

この町の商店には、おしなべてあまり商品が置いてないのであるが、その店のガラスケースは、わけでも品物が少なく、わずかな縫い糸、洋服の芯、駄菓子などがほこりをかぶっている。客もなく、手持ちぶさた夜店の主と目を合わせ、仕方なく私は挨拶をかわした。この町では知らぬ者どうしても、おはようの一言ぐらいは交すのであるから。そして両者は、なんとなく近より、ひまつぶしの相手として認めあい、こゝに我々はさりげない会話を交す事態となつた。

その会話は、とくに興味ある会話ともならなかつたので、ここに再録する愚はさけるが、私が知り得たことを記せば、この町の周辺には、牧場と植林されたユーカリ林とがひろがっており小さなレンガ工場も散在しているが、そのほかには、特色ある産物はないということである。四年目ごとに伐採されるユーカリは、サン・パウロ方面のユーカリパルプ工場にトラックで

運ばれる。また痩せ牛たちも遠くの屠殺場に送られる。この町の周辺の人々は、これらの産業に労働力を提供するが、ユーカリ植林地や牧場の持ち主たちは、他の町に住んでいるので、この地方の人々が、これらの産物の取り引きの分け前にあずかるわけではない。この町には、さっぱり金が落ちないのである。産めども産めどもかたつぱしから玉子を持って行かれてしまう牝鶏のような人々。

我々は、店の前の小さな空地で話していた。道路を見おろすテラスのようなその空地からは、今、一人の女が髪ふり乱し、わめきながら下の街路を行くのが見えた。

裸足に、破れ放題の服を着、大声であちこちに話しかけるその顔つきは、すっかりペースに乗ったいい気な独演会の芸人のそれで、話しかけては、相手にされぬあまり両手を振りあげてわめきまた人を馬鹿にしたようにせせら笑いながら話しかける。この意外な登場人物に私はおどろき、私たちは話すのを中止してながめた。狂女のいつていることは、意味不明ではあるが、そのふてくされた態度から察するに、どうやら抗議とか、悲しみを述べたものではなそうであった。それは、世間一般への、理由のはっきりした軽蔑、呵責ない嘲けりといったものらしかった。これは、さしたる力量のある気ちがい女ではなく、その侮蔑と嘲笑も、人々を

不愉快にするほどの力はないのであった。女は、さかんに不特定多数者を相手に罵倒し、鼻先で笑った。その女は、以前は娼婦であったが、今は誰も寄りつかなくなった、と雑貨屋の主人は話してくれた。この説明役は、狂女の独演にあきあきして、自分の店へと退場し、私は路上の狂女のふるまいを暇にまかせて見入っていた。それは、やや羨望に価する自由自在ぶりであつた。都会の騒音から遠く離れたこの田舎町でも、人々はそれなりにお互いを規制しあつて生きているのである。その田舎町の規制からも外された、一種特権的な気まゝな精神状態。狂女の声は、この静寂な町の昼には、突拍子もないもので、町の人々の無気力な眠たげな神経を相手に、ひとり徒労な気力の充実ぶりを示しているのであった。

この奇妙な騒ぎをよそに、雑貨屋の店先には猫が一匹静かにすわっている。この小さな動物は、種族の間でおどろくべき均質な一つの性格を持っていて、それは人間の及ばぬやり方で、一切を完全に黙殺し去る能力であつた。猫はそれで、自ら外界のすべてを閉め出して無関心をきめこんでいる。

猫のまわりには、にわとりが四五羽、落ちてもない飼いをさがしており、自分の胃袋に入れたものかどうかを小石の粒を吸んだり、また転がしたりしている。そのそばに、何匹かの犬も寝そべっている。どの犬も

痩せて、その毛並みには、ところどころ丸いふくらみがあった。

それは皮膚に食いこんで成長する寄生虫「竹の子蛆」のためである。犬たちは時々頭をもたげて、めんどくさそうに首を振るが、それはどの犬の頭上にも一日中飛びかっではなれない蠅を追いついてるのであった。

私は、犬たちの間を通って、中央市場に入って行った。

市場は細長い古い建物で、汚れて暗い陰気な場所であつた。

中央の通路をはさんで、両側に小間が並んでいるが、右側にはほとんど商品がなく、物置となっている小間もあるほどで、一軒の肉屋だけが正式開業をしている。肉屋では、釣にかけられた牛の半身が一つ、存分に蠅をたからせてぶらさがっている。肉の表面はひからびているが、腐っているわけではない。この町のあたりは、高原のなかでも特に高く、地図に海拔七八五米と記されており、空気が乾いているからである。この地方の牛肉は、多分いつも新鮮で、きつとゴムのように固いにちがいない。

肉屋の主人は肩が首に埋まるほどの肥大漢で、店仕切りを間に、農夫らしい客と無駄話をしているのであるが口を動かしながらも私に気づくと、こちらに気をとられるあまり次第に、その口の動きが緩慢になつて

いく。

客との話はうわの空となり、その二重にも三重にもくびれた白い頭が動かなくなっていく。その様子に、閑人の客も首をめぐらすと、一緒になつて私を観察しだすのであつた。左側の小間に目を転ずれば、これはどれも小さな飲食店で、どこにも客はなく、店番の老若の女たちがやはり私の歩みを目で追っている。私の運ぶ一歩々々がこれら閑をもてあます商人たちに、かつこうの見ものとなつたようだ。かくの如く私は市場の見物に來たのであるが、見るべきものはなく、かえつて市場の商人たちに見物されることになつた。私は思いがけない注目にとまどい、この奇妙な緊張状態を解決しようと、一つの店に立ち寄つて、珈琲をたのんだ。目の前に置かれた部厚な黒ずんだ容器は、年数を経たもので、そのひび割れの間には、細菌が巢食つてゐるに違ひなかつた。女は、コーヒーを注がずに、無言で待っている。私が砂糖を先に入れるのを待っているのであつた。そして珈琲は乱雑に惜し気なく満たされて、受け皿にこぼれた。

私は、このぬるい珈琲を市場中の人間の注視のうちに吞んだが、それはさながら土着民を帰順させるために吞んで見せるというコップ一杯の牛の生血のようであつた。

このようなことの後で、市場を通り抜けると、そこ

はさきほどバスの止った広場であつた。撞球台が三台
おいてある酒場では、すでに三人の青年が玉を撞いて
いた。

私はそれを見に店に入つていった。彼らは忙しく台
の周囲をまわり、玉の位置を見定めるために丁度シャ
ムの踊り子のように首を動かしていた。そのうちの一人
は、この町の警官であつた。警官は、台の上に半身
をのせかけて黄玉を狙つた。私の目の前で、警官の大
きな尻が一瞬静止する。彼は勢いよく右腕を動かして
玉を撞いた。すると腰の拳銃ははげしくゆれた。玉突
台の上では、玉のぶつかり合う音が絶えなかつた。け
れども台の下では、こんな場所にも犬たちが寝そべつ
ていて動こうともしないのである。

私には、まだたつぷり時間があつた。もうこの町に
は行くところもなく、さればといって、まだこの町を
出てゆくこともできなかつた。

私は公園に帰り、石のベンチに腰をかけた。石の冷
たさが静かに背筋を這いのぼってくるのを感じながら
すわっていると不意に教会の鐘が鳴りだした。それは
十時を告げていた。目をあげると木の間から鐘楼が見
え、鐘楼の中で鐘はせわしく半転し、またおどけて半
転した。

私は、ながいこと母国の言葉も話きぬ流離の身と

なつたように自分を感じた。日本人が一人も住んでいない、こんな田舎町に、私は住みつくことができるかどうかと考えた。

この町のレバノン人の呉服屋は、彼以外一人のレバノン人も住んでいないこの町に、もう何十年も住んでいる。私には、おそらく真似はできないだろうと考えた。

私は、昔この町を何度か訪れた折にも、その公園の石のベンチで、そのレバノン人のことを考えたのを思い出し、自分が今まさに過去の時間の流れの中に居るのを見だした。思えば郡役所に出頭する用件のあつたその日その町で、私は私のすぎさつた日々がつぎつぎと蘇るのを感じた……。

公園に、裸足の掃除人夫がやって来て、木から落ちた黄色の木の葉や、枯れ落ちた重いヤシの葉をひろいだした。木の葉は一枚一枚が大きいので、拾うたびに小脇にはさみ、そうやってのんびり公園を一周し、そして去っていった。裸足の掃除人夫の足音が、ひたひたと舗道の上を遠ざかって行くとき、私の近くで、黄色の木の葉が一枚、おくれればせに落ちた。木の葉は葉柄を中心に旋回しながら落下し、音をたてて芝生にさゝつた。

ウバツバにて

菅野みさを

略歴 本名 高野 みさを

一九一四年十一月二十二日生まれ

出身地 北海道室蘭市

渡伯 一九二九年

最初の入植地 ビリグイ駅プレイジョン植民地の付近

学歴 なし

職業 主婦

趣味 日本舞踊、手芸

本掲載作品は、一九六六年パウリスタ年鑑に発表

ウバツバにて

靴を通し、歩道のコンクリートを通し、しつとりと、
軀の芯までしみ通って来る快よい冷たさ。空気に溶け
込んでしまった波の飛沫が細胞の一つ一つの空間に忍
び込み、生活の為に疲れはて、潤いを失い、弾力を失っ
てしまった。たゞ、人間であるために呼吸している。物
体に過ぎない干物のような肉体を持ち、柔かみを持つ
てふくれ上って来るのをじっと、心の奥でたしかめな
がら、白い飛沫を上げて ニメートル先に砕け散る波
のしぶきが微かに砂を鳴らして引いて行く。その砂の
音が、押し寄せる波濤の繰り返しの間に微かに聞える。
こんな微妙な囁きのように柔かい音を、聞き取るだけ
の繊細な神経が未だ私の内に残っていたのかしら
……。。

突然、左方のクルーペ（クラブ）の庭から、若い男
女の喚声が上がった。バスケットに興じているらしい。そ
こだけの明るい照明に照らし出されて暗闇の中に、華
やかに浮んで見える、ごむまりのように弾む若い肉体。
奢った海浜着のとりどりの色、この人達は豊かさの中
に住む人達なのだ。

私の生活とあまりにもかけ離れた、そうした人々の
姿態は、心に痛みを与えるだけだ。帰らなければ……。

ゆつくりと立ち上り、波打ち際まで下りて行く。ア
スファルトを歩きなれた足に、肉体の重みに崩れる砂
は、何か、はかなく頼りなく歩きにくい。靴を取ると、
波の引いた跡のしつとりと濡れた砂は、身慄いする冷
たさを足の裏から這い上らせ、するどい恐怖が、一瞬
身内を抜ける。足首を濡らした波が引くと、足裏の砂
が崩れ、軀ごと黒い波の中に倒れ込んで行くような錯
覚を覚える。

絶間なく押し寄せる黒い波のうねりが、恐怖に満ち
た巨大な生き物のように、地鳴りをさせ、盛り上って
は迫って来る。

こゝには太古の闇と、そして悠久の彼方から押し寄
せる波があるだけなのだ。

サンパウロから何百キロか離れたこの海辺の小さな
街には、太古のまゝの姿がある。何億年か、人間が生
存するために繰返して来た闘争も、殺戮も、文明も、煩
らわしいものは何もない。ただ水平線の彼方から、湧
き上り押し寄せて来る力強いうねりがあるだけなのだ。
瞳を上げると、五メートル先はただ暗く、もり上る波
のうねりが、微かな街の暗い照明に照らし出されて
光っている。

沖は水平線も空も一つに連らなり、ただ無限にひろ

がる暗黒の闇があるばかり。左右から腕を伸したようにこの入江を抱いている、より一段と濃い暗さは、岬なのだろうか。その暗さの中に、微かに五つ六つ、本当に微かに五つ六つまたゝくのは、電燈なのか、漁場でもあるのだろうか。塩の香を含む夜気は、しつとりとブルーザを濡らし、立ち尽している足裏の砂は深くくぼんで、足首まで海水をたゝえている。

帰らなければ……。

背後に、さつき私が座っていた歩道のあたりに、四、五人の人々の低い囁きが聞える。暗い海に一人立ち尽す女に、不審を抱いているのだろうか。

帰ろう……。

ブラジルへ来て三十年、始めて海を見た。そして、磯に砕ける波の音を開いた。

深々と大きく呼吸をする。こんなに大きく深い呼吸が、私の肺で出来たのだろうか。吸っても、吸っても、呼吸困難のように苦しかったサン・パウロの空気。呼吸器は、あの汚染した空気を拒み、苦しめ続けていた。いや、汚染した空気ではなく、生きなければならぬことへの嫌悪が、網の目のように交錯された人間関係の煩らわしさが、深く大きい呼吸をすることさえ忘れさせていたのかも知れない。汚染した空気を深々と呼吸している人の方が遥かに多いのだから……。

濡れた足のしめりをとるために、靴をぶら下げたま

ま、乾いた砂を歩く。足裏に触れる固いものは貝殻なのか。

素足の感触も大地をゆっくり踏みしめて歩いた思出も遠い記憶の底に忘れはててしまっていた。大地は母のように、ほのかな暖かさと冷えきった砂の中にこもらせ、優しく足裏をくすぐる。荒々しくささくれ立ちその極限にまで緊張しきった堅い肉体と心をそっと抱きしめてくれるかのように……。

ふいに、鼻の先に鋭い痛みが走り、暖かい涙が、ふきこぼれるように落ちた。

生活の中で、泣くまいときつく唇を噛み、陰しく眉を寄せ、瞳を鋭く光らせて、心弱くなる涙を流すまいと耐えて来たのに、今はただ、溢れるまゝに溢れさせて置こう……。

海に来たのだもの。主人夫妻の好意で、女中代りとはいえ、海に来た事は事実なのだ。私は今、こうして、夜の海に向って、あたりはばかりらず涙を流しておれるのだ。

足の砂を払い、そっと靴をはく。柔かい大地の感触になれた足は、しばらくの間、堅い靴の圧迫を拒むかのように痛み続けた。それは無理矢理に押し込められる足のように、そうした生活の中に戻ることを拒む。久しく抱き続けてきた、私の秘かに怖れている、誰に

も覗かせない心の秘密であつた。生活との闘いは、その秘密との闘いでもあつた。それに打ち負かされる時、それは永遠の敗北なのだ。

涙の跡に、海面をわたる風は頬を打つように冷たい。

さあ帰ろう……。。

海に向つて再び大きく深く息を吐く。

これが大西洋なのか。何んと海は涯ないひろがりを持つているのだらう。水平線はどんなのか。暗い海はただ涯もなく、瞳をこらしても、それは無限に広がるしつ黒の闇と磯に砕ける白い波濤だけ。時々ぱつと明るい自動車のライトが過ぎると、また元の闇がそこにある。

ひとすくいの砂をそつと握りしめる。さらさらと指のあいだに落ちる砂（注・この一行は推定の読み）

生命なき砂の悲しさよ……。。

うつむきながら歩くのは止めよう。思いわずらうことの多い私の無意識の習癖なのだ。首を真直に立て、胸を張ろう。

あつ！ 夜の空に星がきらめいている。鋼鉄色に半円を画く大空、蒼く妖しくきらめく星の輝き。夜空が磨かれた鋼鉄のように美しいことも、そこを飾る無数の星座からまばたく星の神秘的な輝きも、ここ何年間か知らずに過ごした。ふり仰ぐ、高層建築の倒れかかるような狭い谷間から、のぞいている細長い空は地上の

ネオンにぼっと明るみ、舞い上った埃の微粒子は霧のように立ちこめて星を遮ぎり、鋼鉄色の空をとじ込めてしまい、そして私はその灰色の空をふり仰ぐことを忘れてしまっていた。

そうだ。この半円を画く美しい夜空を、そして手のとどきそうに低く輝く星を遠い昔毎晩のように挑め続けていた。苦しいコロノ（農村労働者）の生活であったけれど、そこには溢れる希望があつたら、明日へのかすかな期待があつたから：：：。

さあ、こんどこそ、本当に帰ろう：：：。

始めての夜の町で、迷子になつては大変。教会の前の椰子を目あてに、ゆっくり歩き出す。夜を楽しむ避暑客のように。

狭い小さな公園は、人々で溢れ、明るい照明のシネマ館の前は、生活を享樂することのできる人々のはじける笑い声で湧き返っている。ピポカ（ポップコーン）のとび跳ねるかぐわしい香り。大きな袋を二つ買う。掌のほのかなぬくもりを抱きしめながら、ピポカを噛み、ゆつくりと教会の側を過ぎ、少し大きな公園の角を曲って二つ目の角が、ドナ・カタリーナの邸宅である。

「ドーナ・マ・リ・ア：：：。」

私はそう呼ばれていた。洗礼も受けてはいないけれど、その方が呼び易いのだろう。本名を呼ばれるより

は気楽だった。それは生活するために働いている時の、符牒のようなものだ。働くためにスイッチを入れられた機械にはられたレツテルなのだ。

自分自身をみつめる時もなく、意識の片隅に押し込められて、生きなければならぬことの空しさに、絶望し、怒り、そして諦めている哀れな私は、とじ込まれたまま小さな隙間から、悲しげに瞳をうるませ、もう一人の私・マリアをじつと見つめている。

テラスにくつろいでいた夫人は、安堵の響きを込めてほほ笑む。わびをこめて柔かく笑いながら、差し出すピポカの袋を受け取り、

「クルゼーロに行っていたのね、あすまでゆつくりお休み！」

一年に五、六回は来るといふ夫人は、三十年以上も……というのに、驚きあきれ、使用人らしく働くコスツレーラ（縫い子）達の中で、使用人らしくなく働く私への興味？と労わりの結果がこうして、夜の海の素晴らしい感動に胸をふるわせることができたのだ。

ガラージの脇の女中部屋には、もう安らかな寝息をたてて、入口に背を見せてローザが眠っている。きしませないように、折り畳み式の寝台にそっと横たわる。

静寂と闇の底に、微かな潮騒が子守唄のように遠くから響いて来る。あすへの緊張を息識しながら、騒音の中に眠り続けた習慣は、静寂と解放感の中で、糸の

切れた風のようになにかたよりない。

人生ではじめて― 明日への目的を持たず―責任もなく― しなければならぬ何物もない ―。こんな真空状態の中でいつまでも闇を見つめ続けていた。

「あすはゆつくり、寝坊してもいいのよ。何んにもすることないんだからね」

それなのに、もう眼がさめてしまった。遠足の朝の小学生のように：：・。

そうだ、水平線を染めて上る太陽を見ておこう。今日のために、わざわざ買ったゴムぞうりを履き、そつと戸外に出る。海辺の街はまだ深い眠りの中に沈み、湿気を含んだ朝霧が重たくたれ込めて白っぽく、その白い厚い霧の上に、小さな街を囲んでいる折り重なった山々が、鮮やかな縁に樹々を浮き立たせ、驚くほどの近さに見える。霧は地上から徐々にその中腹にたゆたい、頂上に這い上り ちぎれては斜めに透き通った水色の空の中に消えて行く。地上はしつとりと重く風もないのに、霧がちぎれて飛び去る上空は、激しい風があるのかも知れない。

一本一本の木木の円みと影が油絵のように見える。重なり合った山々の一つ一つが、遠のくほどに霧を深め、薄墨色にぼやけ、そして空の中に溶け込んでいる。昨夜よりソ穏やかな海鳴りだけが、街に立ちこめ、漁

船のエンジンの音が静けさをゆきぶっている。昨夜見た椰子をたよりに、クルゼーロの海辺に出る。

陽は彼方の水平線の霧の中にあるのか、銀灰色に小波を立てて輝く海は、夜の大きく荒々しいうねりを忘れたかのように、穏やかに磯の砂にたわむれている。照明の中に華やかだったクルーベの庭は、ひっそりと静まり、エンジンを響かせて、漁船が二つ三つ、クルゼーロの海を左方に廻って行く。磯釣りの小船が一つ、釣り上げた魚を砂上にはうり投げそれを綱に入れて担ぎ去って行く。

売る価値もない、見捨てられた小魚は、喘ぎ、跳ね返り、海を求めて躍り上っている。砂にまみれて……。やはりこゝにもある、弱く小さいものゝ悲しい憤りに、その小魚を砂もろとも掻き集め、押し寄せる波に投げ込んでやる。陽はすでに高いのか、水平線はまばゆい程の銀色に変わり、太陽はまだ濃いもやの中にとじ込められている。電車のきしみもオニブス（バス）の騒音も人影もない海の街の家々は末だ固く窓を閉ざし、朝を迎えようとはしない。すでに朝が来ているのに……。

レイチとポン（ミルクとパン）を買い、冷えきった公園の石の椅子にかける。ゆるやかにゆれる椰子の葉ずれの音が、爽やかな音楽のようにふりそぐ。教会の朝の鐘が全身をゆさぶり、厳そかに柔かく私を包む。

そして家々の間を通り抜け、緑の山を越え中空に消えて行く。息を止め、その鐘の余韻を追って瞳を閉じる。空の彼方に、潮騒の音にも消されず、かすかにかすかに達のいて行く鐘の音を：・。

枷のように、身動きも呼吸もできない程に圧迫され続けてきた、そうした何物もない海にいるのだ。ゆっくり一步一步たしかめるように歩く。ゴムぞうりに触れる砂の音が聞こえる。庭の芝生をそつと横ぎる。葉末に白っぽく光っている露が、しとどに足を濡らす。テラスの壁にそつて這い上る、厚く固い大きな濃緑の葉はその一枚一枚の葉先に、燦めくような水滴を光らせ、生きていることの証しを立てゝいるかのようだ。近寄って、その葉先の露を、そつと舌の上に受けて見る。微かな歓びが暖かく心を包む。

ローザは未だ起きないのか、室内はひっそりと物音もない。レイチとポンを置き、再び戸外に出る。教会と反対側の道は、真直ぐに山の中まで続くかのように人影もなく白く静まり、ところどころに自動車が止めてある。

白い霧はすでに消え、山々は艶やかな濃緑に染まり、眼の前に迫るように輝やいている。陽はすでに高いのだろう。不意に、左側の空地から、真黒なかたまりが屋根の上に飛び上る。ウルブーだ。不気味な黒い汚い鳥。腐肉をついばむ大きな口ばし、灰色の目、細い首、

大きな肩、墓石のように屋根の上に並び、じっと私を見下している。

手を大きく振って物を投げつける身振りをすると、一斉に飛び立ち隣の屋根に移り、やはりじっと見下して居る。

あの灰色の目で……。シユフ！シユフーというような空気を切る羽根の音をはじめて聞いた。この鳥は鳴き声を持たないのか？。持ち続けてきた明るい心に、暗い影を落したウルブーを憎みながら、また街の中心に向う。遠く教会の鐘が七時を告げる。この時間私は、オニブスに乗るために、せかせかと家を出ている頃なのだ。

子供達はどうしているかしら……。オニブスと電車の騒音の中を、人々は激しく行きかい、朝がすでに始まっているのに……。海辺の街は、末だ深々と眠りの中に静まり、漁船の響きと潮騒だけがしつとりとそれを包み、朝の光が眩しくふりそそいでいる。

昨日の午後遅く着いたので、持ち込まれた食料品はそのままに置かれ、掃除もしていなかった。大きな窓に囲まれた清潔な台所、海にきた何日かを、充分に楽しませてくれるために、すべての調度品は贅沢に整えられている。包を解き、ガスに火をつける。湯のたぎる音が微かに聞える。慌ただしい朝だけを迎えなれて

いる私は、始めて聞く音のように、しばらくそれに耳をかたむける。

一年に何回か来る避暑地の家を、立派な調度品で整え、おごった食品を持ち込み、休養をとっている、疲れていないこの実業家のコヂンニヤ（台所）で、やつと身動きのできる狭いコヂンニヤに住む私は、このコヂンニヤの主でもあるかのように、ゆつたりと豊かに、朝のカフェーを飲んでいる。

この人達には、使っても使いきれないほどのお金が湧き上り、私には、働いても働いても必要とするお金すらもない。世の中つてそういうものなのかしら……。努力してもあがいても、報われることのない人生。放棄することも出来ず、絶望し、不満をくすぶらせ、それでも、なお、生きて行かなければならない。

出社と退社時刻の、溢れる人々の壁に押しつぶされ、いらいらとオニブスを待ち、電車を待ち、せかせかと腕時計を覗く人々の中に私も混り、眼の前で閉まるオニブスの扉を恨めしそうに見送り、出勤時間に遅れ、帰宅の遅くなったことへの口惜しさに、醜く、歪む顔を人々から伏せ、貴重な時間を無為に失う憤りに、飛び上がり駆けずり廻りたい衝動に耐えて、平静を装わなければならぬことで自からの心を痛め続けている毎日。いらいらと靴を鳴らし、ガサガサと新聞を拡げた、む周囲の見知らぬ人垣に押され、やつと着いた満

員電車の中に押し込まれ、押し出される毎日を繰返し、そしてやっと生きているのだ。

期待・努力と絶望を繰り返し、なおも求め続ける幸福は、平行線のように私の運命の脇に並び、未来に向って冷ややかに伸びている。過去にもそれがなく、そして将来にもそれを求め得られない生活であるなら、むなしい努力を繰り返すことをやめたい。生活に追いつめられた時、緩和剤のように、それを思いつめ、その方法を考えた。微かに砂をきしませて高級車がゆるやかに通り過ぎる。海辺の街に朝が始まろうとしている。

冷えきったカフェーをそつと置く、主人の好意にあらまえ過ぎてはいけない。

八時半ころ、やつとローザが現われ、九時過ぎに、ドナ・カタリーナ夫妻が起き、奇麗に磨かれふき清められたすがすがしい朝のカフェーに満足気であつた。

「ドーナ・マリア、海に来てまで、そんなに働かなくてもいいのよ。ローザが心得て何でもしてくれるのだから、ね、ローザ：：：」

心優しい召使は、その大きな黄色い眼を伏せて小さく頷く、車に酔って苦しそうだったが、もうよくなつたのか。

ショート・パンツの後から、買物かごをさげてつい

て行く。サイア（スカート）姿の私は、この海の街には、あのローザと同じように、似合わないようであった。陽は高くむせかえるように暖かい。プライア（砂浜）に向って、色とりとりの高級車が滑って行く。美しい肢体に海浜着の裾がひらめき水着の胸は豊かにふくらみ、素直に伸びた足は朝の陽をはね返してまばゆく輝き、滑らかにはじける笑い声が溢れ、やつと海浜の街に朝が来たようだ。

橋の側の魚市場には、新鮮な魚を求める人々で賑わい並べられた類多くの魚はこりつと堅く身がしまり、うろこが銀色に輝やいている。こんなにも丸い棒のように、海の色そのまゝに鮮やかな青と縁に輝やいているとは。

眼の赤くなった、平たく柔かい鰯だけを買いなれている私には、フェーラ（朝市）に並ぶ魚と同じものなのに、それはみな種類が違うかのように見えた。

「プライアから帰って、それから昼食の仕度をしたらいいのよ。女が三人もいるんだもの。急ぐことないものね。一緒においで……」

誘われたけれど、ローザはついて来なかった。借り着の黒い水着に着換え、ブルゾンをはおり、ゴムぞうりをはいた私をのせて、プライア・ペンケについた。ゆるやかに孤を画く遠浅の砂浜には、砂漠の中に咲いた花のように原色の陽覆いがいくつも広げられ、ゴマ粒

をまき散らしたように人々は泳ぎ戯れている。

黄と赤の陽覆いの下にゴザを敷き波打ちぎわに下りて行く。

「ママイ、始めて海に入った日はね、五分か十分なのよ
忘れないでね」

心配そうに注意した子供達の顔が、ふっと心をよぎる。

「私達は、またいつか、きつと行ける時があるのよ。あんなに海を見たいって、ママイいつもいつてたんじやないの……」

「でもね、一週間も家をあけて」

「そんなことかまわない、折角だもの行ったら。こんなこと、二度とないのよ。ママイが海に行けるとすると、私達まで何だか嬉しくなってしまう……」

ドナ・カタリーナが、腰の深さで手を引かれながら泳いでいる。大声で何か叫び乍ら手を振っている。きつと呼んでいるのだろう。ウワァー何という冷たさ、一瞬大きく息をのむ。つま先で砂を蹴ると、ふわっと軀が浮く。海に近い町で、毎年の夏を楽しく過した若い日の希望に溢れていた時の肌に触れたこの冷たさも、いま肌に触れるこの海の冷たさも同じなのだ。故郷の海辺に打ち寄せる波に続くこのうねりも、海も空も一つに溶け合って、水平線は白く、真上の空は紺碧に輝き海辺の太陽は白い肌にこもり、うつすらと赤く染め

る。水の戯れにあきた夫妻は、波打ちぎわをゆつくりと手を引き乍ら歩いてくる。陸み合うこの風景は美しい。

渴望し、祈り続け、求め続けたこの風景は私の女の生活の中ではついに求め得られなかった。そしてただ、肉体の生理の中で母になってしまった。やがて終ろうとする私の生涯の中に、生命を燃焼させた女の歓びを持ち得なかった悲しさが、心の底に悔恨となり、憤怒となつてくすぶり続けている。あまりにも空しく、あまりにも虚ろな過去を。

私もしばらく休もう。足を投げ出し、砂の山を築く。子供のようなこんな動作も、この海辺では、誰も不審の目を向ける者もなく、崩されては築き、崩されては築いている。それは、私の歩いて来た過去のように、そしてこれからも続けてあろう私の生活のように。崩れ去るとは知りながら、やはり明日のために、それを築かずにはおられない。

空しい努力の繰り返しに疲れはてゝしまった、詮索、侮蔑、憐憫、そうした瞳の矢に射すくめられまいと、胸を張って生きる努力に疲れはてゝしまった。こうした努力でむくいられる何もないのに。

とおい昔、幸福になるために砂を掻き寄せ小さな山を築き始めた。その一方的な努力を、夫の行為が蹴ちらし、そして雨と風が翻弄し嘲笑し、無惨にも崩し

去ってしまった。ずぶ濡れの頬に涙を流し、乱れ散る髪を風になびかけ、胸の下にその砂の山を抱き、崩されまいと空しい努力を繰り返してきた。そして今も―― そうしたものではないはずだ。もつと何かがなければ――。五年か十年か十五年の後にくる私の終りの日まで、この空しさを持ち続けることに耐えられるだろうか？。絶望と疲労のはてに、それを投げ出してしまいたくなる自分が怖ろしいのだ。子供達がいるから！。子供達のために――。何十年呪文のように、それを唱え続けてきたことか。そしてこれからも――。

「ドナ・マリア、ここへ来なさい」

「ありがとう。私にはこの砂の上が似合うのです」

陽覆いの下に寝そべり、肩を組み合っている中年過ぎのこの夫妻には、子供もなく、大きな縫物工場を持ち、二度もポルトガルに行き、去年はヨーロッパを廻って来たのだそうだ。モジ市の郊外に、大きな果樹園と養鶏場を持ち、土曜日ごとに夫妻はそこへ行き、二人だけの愛情をたしかめあい、労りあっていくことを大切に、楽しみ合っているようだ。

「子供があつたらと思うのよ」

赤くつややかな頬をほころばせてたのしそうにつぶやく。子供がなくても幸福だからなのだ。私には子供がある。だが、ドナ・カタリーナの持っているものは何もない。

一年前、ついにミシンを売ってしまった。それを手離しては、明日からの生活を脅かされることは判っていても、道端に寝ることは出来ない。広いサンパウロに、安い家を探し当てることは、夕暮時、時たま見かける敗惨者の、路傍に転がって寝ている姿に、そうまでして生きなければならぬ生への執着に驚き、霧に濡れてオニブスを待ちながら、ミシンを売る決心をしたのだ。レイデ工場のブルーザを縫っていた私から、ミシンを奪ったら何が出来るのだろう。子供を抱えポルトゲースの充分でない中年に近い女に、真面目な職業を探し当てることは至難なことであった。新聞広告をたよりに、オリエンテ区の、ドナ・カタリーナの店を尋ねた時、二世の娘も二、三人いて、一目でわかる客でない私を、遠くから憐れみと蔑みをこめて見つめていた。

負けてはいけない。気を弱くしては駄目だ、いまこの仕事にありつけなかったらミシンがなくても、通勤で働けるこの店の工場に雇ってもらわなくては。明日のための糧を私の手で得なくては――。

「ママイ！」子供達の声が胸の中で私を呼び続けている。

勇気を出すんだ。負けてはいけない。信頼をこめて見つめる円らかな瞳が、くじけようとする心を支えてくれる。

主に子供物を縫うこの仕事は楽しかった。私の子供に着せることの出来ない服を、よその子供達のために縫う。

それでも、モードのきらびやかな婦人服を縫うより遥かに楽しい。この服を着て喜ぶ子供達を想い浮かべながら……。虚栄と傲慢と浪費につらなる、表面だけの空しさよりは充実した喜びがあった。こゝに働き始めてから一年近くなる。遠くから警戒するように見つめていた私と同じ下層階級に属するこの縫子達、教養も品性もその生活のように貧しく、受取る報酬だけでは、朝食とオニブスに消えてしまう、という。

「でも、美味しいもの腹一杯喰べれて、たまにシネマも見れて、靴が買えるんだもの……」

彼女等にとって、この生活は最上なのだという。この娘達は開放的で屈託がなかった。きょうが終ったら、あすではなく、つぎの朝はやはり今日なのである。明日を思いわずらわずに生きれたら。だが、人生にはあすが必要なのだ。あすがなければいけない。生きるために。

この娘達は、時に、小さなブルーザを、サイア（スカート）の下にしまいこんだ。私は慌てゝ目をそらし、慄えてくる指先を懸命に布地に押しつけ、にやつと笑う彼女等の視線を外らし、歪むような笑いをうかべ、怒ったようにモトール（モーター）を踏みつける。こ

うした社会では、彼女等の行為を黙認すること、共犯者の位置にしなければはじき出されることを知ったからだ。そうした行為に、あまり低抗を感じないらしいこの娘達との生活に慣れた今は、罪悪感と恥辱と、恐怖に、頬を上気させることもなくなった。

また今日も、誘いかける笑から目をそらし、力をこめて雑布を床にこすりつける。私のこの性格が、上手に世の中を泳がせないのだ。だがいい。これでいゝのだ。心に悔いをのこさず、精一林に生きれたら、貧しく不幸を者が生きて行かれる小さな誇りなのだ。誠実と労わりだけを私のために失いたくない。そのために、かえって不幸になることだつてあつたけれど。

「ドーナ・マリアー」

パールジンニヨの窓から呼んでいる。焼けた砂を歩いた足に、日陰の、海水に濡れたセメントの庭は、足裏を刺すように冷たい。

小さなカリスの白っぽいピンガ（火酒）は、泳ぎ疲れた身体に何の抵抗もなく溶け込んで行く。始めて見る穀についたカキ。こじあけてくれる陽焼けした海の男から受取り、リモン（レモン）をたらしてすゝる。生きたカキの柔かい舌ざわり。

カキを壊べる楽しみのために来ると笑うシモン氏の前は、すでに貝殻の山なのに、また三ダースも注文している。

女中は、主人より先に帰っていなければ。プライアに向う車と美しい人々の中を、私だけが街へ向って歩いている。何か場所を間違えたような気拙さ。せめて、ここで暮す何日かを、水着一枚の生活を楽しまなければ。

五、六人の漁師とその家族が、棒の両端に七、八匹の魚をくゝりつけ私を追い越して行く。その母に抱かれた幼児の黄色くむくんだ艶のない顔が、肩越しにまばたきもなく、どんよりと濁った視線を空に投げている。鋭く研ぎすまされた刃物を、いきなり心臓にあてられたような狼狽が心を走る。これが、この避暑地に生きている人々の顔なのか。その男達もその子の母も――あの担がれた天秤の先の魚が彼等の一日の糧に変わるのか。漁のない日は――しける日は――避暑客の絶える寒い冬は――魚の釣れない日、彼等は何を喰べるのか？ マンジョカの粉とバナナと、そして重さが倍にもなったように感じるであろう、担いで帰った売れなかった魚を、遠い海岸べりの木立の中の小さな家の中で、それを喰べる彼等。ほの暗いランプの乏しい光の中で、そして夜は、あの激しい潮鳴りの闇の中にのみ込まれたように、ひっそりと眠るのか。のろのろと歩く川べりの潮の引いた泥の中に、泥にまみれたかにが、黒い甲羅を朝の陽に乾かしながら這い廻っている。橋の下
の海水は、泥とまじりあつて、私の心のように暗く重

たく濁っている。

食べるために生きるのか。生きるために食べるのか。四時過ぎ、午睡から醒めたドナ・カタリーナは、私達の居る裏庭へ出て来た。

「どう？ プライア、いいでしょう。カフェーはもうすんだの？」

「はい、よくおやすみになっていたから、私達先にすませました」

私はコジンニヤに入り、新らしくカフェーをこの主人のために作り、小さな卓上に置いた。椅子が一つ、やっと入る朝の台所で、高層建築の閉じられた窓々に向って窓を開け、たった一つの、私の贅沢、香り高い濃いカフェーを作ったのむ。熱い褐色の液体の舌を刺す爽やかな刺激。舌の上にもてあそぶ一すすりの液体が、喉を通り胃に拡がり、そして消えて行く。冷えないようにシーカラを両手で囲い、眼を閉じ、カフェーの香気が軀全体にしみわたり、そこから徐々に湧き上ってくる生きることへの心の張りを待っている。そのあとを、子供達のために甘い茶色のカフェーに濾して置く。朝以外の、どの時にのむカフェーにも、この美味しさは味わえない。爽やかな朝の空気と、静叔と孤独との中で、一杯のカフェーをのむ、短いわずかな時間だけが、一日のうちの私のための時間なのだ。この飲むのために、化学者のような正確さで、カフェー

を作る。シモン氏も起きて来て、カフエーの美味さを賞めてくれた。

「さあ、これからジャンタまで、どうするかね」

「プライア・テノーリオにでも行つて見ましようか。波が高く泳ぐところではないけれど……」

桧葉書きで見たりオの海岸のように、ゆるやかな孤をえがく波打ちぎわの、アスファルトの道をしばらく走りまばらな木々の野原を過ぎ林と岬に囲まれたプライアに着く。真白いきしむように滑らかな砂に立ち、私は息をのむ。怒涛―大西洋の怒涛！。荒れ狂う狂暴な怒涛―。

話す声を吹き散らし、砕けた波の飛沫が霧のように顔を打つ。五メートル位の高さに湧き上る波が、青い緑色にすけ、その頂上に白い波を泡立たせ、押し寄せ、引き寄せ、ぶつかり合うしぶきが、白い霧となつて波打ちぎわを覆う。立ち上がり押し寄せ、のしかかるように引く。波から、逃れるように、二三步後へ退る。かすかな戦慄が霧に濡れた体をふるわす。こゝは怒りの海なのか。怒涛に翻弄された砂は、白い粉のように砕かれ、歩くと絹の触れるような音を立てる。

危険地帯なので、人影もまばらに、何があるのか、七八人のかたまりがあるだけ。近づいて覗くと、そこには裸婦の打伏せになった姿がある。きめの細かい

砂は、石膏のような美しさで、人々の視線の中に横たわっている。

誰なのか、霧の砂浜にこれを作っていた者は。やがて夜の満潮がこの砂の裸婦を海底深く呑み込んでしまうだらう。太古の昔、溶岩が流れ込んでできたような一枚岩の岬から、海を見るために、私達はぶきに濡れた足場のない円い岩をよじ登り、やつとの思いで辿り着くことが出来た。美しい曲線を持った、滑べるようなその岬の鼻に立ち、泡立ち押し寄せ湧き返るしぶきに濡れて見つめていると、のめり込んで行くような、いきなり駆けだして、妖しく誘うその線の中に飛び込みたくなる不安に、あわてて両足を投げ出し、支えるように両手をつつ張り、体をそらす。この大いなる自然の前に、何とちっぽけを存在でしかない私。

その夜、シモン氏夫妻はクルーベに出かけ、ローザはレビスタ（雑誌）を読み耽けり、私はテラッソ（テラス）に夜の星を眺め、思索する時間だけのあるこの海で、じっと、私の心を見つめ続けていた。借りてきた婦人雑誌が膝の上にしっとりとしめ力、夫妻が出がけにくれたコペンハーゲンのチョコレートが手の中に柔らかくなっている。瞳を閉じると、渦巻き泡立つ鮮やかな縁の海の中を白い砂の裸像がよぎる。挫折し、立上り、そしてそれを繰り返す人生。地球に夜があり

朝が来るように……。もり上り湧き上る力強い波のうねりのように――。停止することを許さない生の厳しさ。この流れの中で、もがくことは、苦しみを倍加するばかりなのだ。子供達の手を握り、肩を抱き、その流れの中を流されて行こう――。何かがあるかも知れない明日に期待を持とう。振り向くな後を……。。

何日か後、再び、波の碎ける磯を通り、縁の山々を抜け、海岸山脈を越え、ヅットラ街道の、かまぼこ形に切り開られた紫紅色の山肌の美しきに目を見張り、一直線に帰ろう。大いなる人の海の中に。子供達の胸の中に。

移植

川原奈美

略歴 本名 河島 静野

生年月日 一九〇九年二月十二日

出身地 熊本県宇土郡花園村大字立岡

着伯 一九三二年五月三日、サントス港（サントス丸にて）

最初の入植地とその後、ソロカバナ線 ア・マツシヤード駅プレジョン植民地 入植約十九年後、プ・ブルデンテ市に転居、一九六九年、サンパウロ市に移転以後今日に至る。

学歴 最終卒業校、仏教専門学校

職業歴 在日中小学校教師、ア・マツシヤード在住中は農業の傍ら日語指導、プ・ブルデンテ市に転居後は日語教師、病をえて出聖二カ年静養、再び日語教師、三年余で退職、現在無職

趣味 絵画製作

本掲載作品は、一九六七七年コロニア文学 二号より五号までに発表

移 植

自分の錢で買った植木の苗を、主家の庭に植えた時、私は別にどうという考えもなかったのですが、いざ、比の家を出て独立した生活をする事に心が決った途端、あの松とつつじは是非持つて行こうと思ったのでしたら、我がものの顔に羽根を拡げた格好の旅人木のかたわらに、遠慮げにちんまりと根付いている松とつつじをじつと見ていると、私は何か容易ならぬ心持ちになり、今真実、自分の物といえるのは、この可憐な植木だけだと思ふのでした。鉢植えにして持つていこう。松もつつじも、移植にいためられないで根付くようだったら、自分の道も開けると思い始めると、私は、その事にえらく熱心になり、本気で自分の未来を松とつつじの生死に賭ける氣になったのでした。

結婚式と、ブラジルへの出発をかねたのですから、私の移住の旅は、新婚旅行ともなったのですが、私の結婚生活は、リオ・デ・ジャネイロに着く二日前、大西洋上で霧散してしまつたのでした。その事については、後程くわしく話しますけれど……。ブラジルの土を踏みますと、唯もう、命をつなぐ為に、私がすが

りついたのが、女中職でした。日本を発つ時、夢にも想わなかった女中職は、しかし案外働き易い仕事でした。それなのに、惜しむ主人の手を振り切って、今こそ唯一人の道へ踏み出すのですから、その道連れになる松・つつじのどの一本が枯れても、私の前途が塞がるような思いがして、なかなか迂潤にはできないことでした。

月末には主家を出ることにして、遠くもない所に貸間も探しましたし、洋裁なり、美容術なりを身につけるまでの生活費も、つましくすれば足りあうだけの蓄えもできていました。

私が雇われていった家は妾宅でした。ドーナ・リンダは七人目の妾で、彼女も何年か前は、私同様女中の身分であつたそうです。結婚するといつて一応女中をやめたのが、何時頃からか主人のシルバーノと関係をもつようになったものか、私が働き始めました時の女主人エレーナと入りかわつたのは、三年半ばかり前のことでした。ところが、ドーナ・リンダも、もはや、長くは妾の座に落ち着いておれそうにも見えなくなりました。シルバーノには、新しい女ができへその女が何時、八代目の妾として乗りこんでくるかわからない状態を察しますと、私の方が、ドーナ・リンダ以上に落ち着けなくなつてしまいました。前のエレーナが、比の家を出て行きました折の様子が、あまりにも凄じ

かったものですから今度リンダが、比の城を開け渡すには恐らく前の時同様の乱暴狼藉がなされることでしょう。二回にわたってあのような場面を私が平然と傍観しているとしますならば：私は、自分の人間性を疑いたかったかもしれません。

大体日本を出て以来、あまりに異常な事にばかり出会ったものですから：、そしてそのことでさほど私が傷ついていないようなのが、我ながら恐ろしいのでした。

何かしら、自分に納得のいく生き方がしなくなつて、わりと働き易い職場を捨てる氣になつたのでした。

言葉もわからない新移民の私を、四年間働かせてくれたシルバーノは、町一番の資産家で、それに名の通つた好色男。教養はないけれど、何か一つ芯の通つたところがあるのに、關係を持つ女は、下劣な事をする者ばかりで、六代目のエレナが、妻の座をすべりおりて行きました日の物凄かつたことと言つたら：。洋服だんす、鏡台食器棚などは言うまでもありませんが、洗濯場のバケツに至るまで、連れて来た男をさしずして、カミニヨンに積みこんでしまいました。そして窓や扉の硝子という硝子は、一枚残さず、その男が鉄棒を振りまわして割ってしまったのですから……。私は庭隅の菩提樹の幹にもたれ、女心の凄じきに、唯もう見惚れていたのです。氣がついた時私はしつか

りと猫を抱きしめていました。

シルバーノですか、……彼は、そんな危険を場所には寄りつきません。嵐が過ぎ静かに荒廃した屋敷に現われた時、シルバーノはリンダを小脇にかかえ、幸福そうでした。しかし、すごくお金があるということは、実に重宝なものです。硝子を張りかえ、新しい家具が運び入れられるのに三日とかかりませんでした。

その日以来、二人は誰はばからない愛慾の絵巻物を繰りひろげる生活が続いたのですが、先代エレナがそうであつたように、リンダもだんだん荒れ始めたのでした。

「最早、シルバーノは、片手でしか自分を愛してくれない」と、私を相手に愚痴るのでした。正妻から夫を奪っている罪の意識などは持たないリンダですから、唯もう新しい女と見かえられることだけに心をとがらせるのでした。私は、ブラジル語のわからない新移民と安心されていたのですから、シルバーノとリンダの痴話喧嘩はおおっぴらなもので、たとえば、朝の出かけに、シルバーノが生卵黄を五個もすすったことから、リンダの胸には嫉妬のほむらが燃え上るのでした。以前自分がそうしたように、一日も早く妾宅にはいたい新しい女が、どのようにしてシルバーノを飲ばせようとして女体をはるか……、そして、それに応じるためシルバーノは絶倫の精力をつけねばならない。卵

黄をすすり補精剤を使つて、新しい女を求めるシルバーノを憎みながら「私より深くシルバーノを愛する女が、この世に在ると思うか、私の肉体はシルバーノの生命の泉となつていると、お前は思わないか」と私に向かつてまで、愛の証明を求める始末で、「いいえ決して」と力をこめ、短い言葉で、私は証してやらなければなりませんでした。

私が二十五才の女であることをリンダはまるで無視しているのか、異国の女は、恥部を白日にさらすようなことを平気で話す人種なのか：・おそらく、それはリンダの無教養が、そうさせるのでしようが、一つには、私の顔、器量の悪さがリンダに安心感を与え、警戒を無用にしていたのでありましよう。リンダにしてみれば、私くらい安心して使える女中は他にいないと思つていたことでしょう。私の顔器量を、男を盗む程の代物とは見ておりませんでしたし、其の上ナフキン一枚だつて、行方をくりますことがないのですから：・給料もはずんでくれましたし、洋服地や靴など、不自由のない程に買つてくれるのでした。でも、リンダが安心しきっている程シルバーノが私に無関心ではないことを、私は気づいていました。私の顔器量が、私に救い難い劣等感を強いたのは、リオ入港二日前の早朝、離婚の決意をした、あれまでの事で、以来私には最早、自分の不器量で後ずさりする気持ちはありません

んでした。特にリンダやシルバーノの前で、目鼻立ちが至って不出来であることなど、私は念頭においてはいませんでした。私の家事処理の手腕は働き始めた日から認められていました。その誇りは言葉や態度に出さないままに、何処かに、私のねうちを高めていたようですし、二十五才の私の胸の隆起、細腰の締り工合、手指のしなやかさ、足指の媚めかしい表情、きめこまやかな私の肌を、稀代の好色男がいたずらに見のがしている筈はありませんでした。唯、私が、シルバーノを好ましい男と思っていない点で、彼の食指が私へ向いて来ないだけのことだと、私には解っていました。私にその気さえあれば、リンダがしたように、一度は、妾の座に上ってみるのも、あながち不可能なことではないと、それは自分一人の自惚れからではなく、シルバーノの心を洞察した上で私は、そう思っていました。リンダは、別れは私の夫と同様に、女の価値判断を、顔器量だけにたよっていたようでした。

それは、私だって、人並みの恋をしたことがありません。あまりにも一人の男を愛したばかりに、私は自分の顔に絶望したのでした。

「顔器量なんか問題でないよ。完璧ということは、却って・気詰りだ」と慰さめられて育て上げた愛情でしたけれども、私達の恋愛の最中に、男の方に縁談が持ち

ありました。親達がすすめる結婚の相手が、村でも指折りの器量好し娘であつたのか、私の愛には致命傷でした。言葉を尽くして、心がわりをしたのではない、と言いながら、親達の意志に従つた男の後姿を見送りながら、愛の持続のむずかしさを、私は自分の顔器量に見出したのでした。

（注・一行活字かすれあり。判読不能）

青年に、私は探し当てられたのでした。サン・パウロ州の奥地に大農場を持っているという伯父を頼つて行く高等学校出の青年が、何故私のような女を選んだのか、その辺のことを深く考えてみる余裕も与えないで、その縁談は世話をする人達の間で、早速進められました。愛の持続の至難さを自覚した私でしたし、その結婚は、愛と言うものを抜きにして始まつたのですもの、忽ちにして破綻に及んだとしても悲嘆にくれる資格さえも私にはなかつた訳です。

私の夫だつた花園道夫は、それはもう、目から鼻にぬけるといった型の男でした。乗船の手続きや、そのほか種々の用事でも、利用価値のあるものは余さず利用する態の男でした。十人兄弟の五人目という身軽さからでもあつたでしょうが、まるで遊山にでも行く気易さで「大仕掛けの新婚旅行だ」と、私の母などに恩をさせながらブラジル丸に私を押し乗せたのでした。「うまくいかない時は帰つておいで、旅費は都合して送

るから」見送り人の下船を促すドラが鳴った時、たまりかねたように、母は私の耳もとにささやきました。よほど、私の様子が影薄くあやうげに見えたのでありましょう。

結婚についての覚悟のたりなさ、不誠実とさえいえる自分の心底を、私はわきまえていました。そして、道夫のような小才の利く男が、親達を選んで与える女と易々諾々と結婚するには、それ相当の理由があつたに違いない、と察してもいたのですから、甲板や食堂などで、道夫が年頃の娘達の中で、憶面もなく冗談を弄したり、それと露わな流し目を或る女に送ったりするのを見ても、それは私には驚くにあたらないことでした。縁談の成立ばかりを急きたてられた理由を、後からなるほど、なるほどとうなずく思いでした。そして、その肯定は、はねかえって、結婚に対して投げやりであつた自分自身を叩くばかりでした。

神戸を発って何日目だったでしょう、東支那海を船は走っていました。夜の十二時過ぎ、道夫はひどくほてった顔で、船室に戻って来ました。「すごく面白い女と会ったんだよ。全く自由な女だ。彼女写真結婚をするんだがね、向うへ着いて現物を見た上でなくつちや、どうなるかわからない、というから、だって君渡航費貰ってるんだらうと、僕が訊くと、そりや勿論よ、そのくらいのお金、自分で働いてかえしますよ。若しか

したら、喜んでたてかえてくれる男が見つからないものでもあるまいってさ：・、とんでもない花嫁さ：・随分िकास御面相だぜ」、私がだまっていると、「ね、僕がその立て替え男になって、君を、その女の身がわりに：・ってことだって、まんざら考えられないこともない：・よね、・なアんと、外国まで発展する甲斐が、こんなに早く現われるものかね」私はお隣りのベットで、殊更荒々しく寝返りするのを、その時、ききとめていました。「今のは冗談だよ。：・しかし、旅すること、いいもんだね。ふくらむ空想に際限がなくって愉快だな僕は：・」とひとりでしゃべり、その後道夫は私に触れてき、ひどく興奮して、あたりに気がねな程、私の肉体を責めさいなむのでした。すると、私までが、自分の意志を裏切って、肉体の歓びは波立ちさわぐのでした。「敏感だね」と、満足げに道夫の胸の下で、「顔に似げなくね」と、我ながら驚くばかりの、ふてぶてしい言葉を、私は胸の中で押しつぶしたのでした。夜毎、道夫は、十二時過ぎまで、私の知らない所で過どし、夜明けには欠かさず私の体を求めるのでした。サイゴンでの一夜は、うだる程の暑さでしたが、相変わらず私の顔となく胸となく、たらたらと汗を流した道夫は、朝になると、甲板で、花嫁となっていくA子と肩を並べて、水中の少年に銅貨を投げ興じているのでした。A子が放りあげた銅貨が水面にとどき

たゆたいたながら沈んでいくのに、少年がうまく飛びのくと、二人は嬉しげに肩を抱きあうのでした。無邪気な夜遊びを偽装して、淫微な享樂に刻をわすれている様子は、さすがに、船客達の眉をひそめさせ、その視線は、私の方へ向く時、同情とも軽蔑ともつかない光となつて、私をいたたまなくするのでした。好意のこもった目色で、「しっかりしなさいよ」と忠告してくれる人もありましたけれども、結婚生活への意欲稀薄の自責ばかりが先に立って、どうしつかりのしようも、私にはありませんでした。嫉妬は愛の裏の面だとしますと愛を育てていない私に嫉妬を生むことは許されないことです。私は真実そう思っておりました。日も細く、眉も薄く、ひくく目立たない鼻をもっている私の人相学からいっても、自然ひかえ目になり、熱愛すること、憎悪することもできない半端な性格は、顔器量の悪さ以上に、女の魅力をそいでいるのだ、と自分を姐上にのせることばかりをしていたのでした。

ケープタウンを出ましたら、次はもうサントス。船客は目に見えてざわついて来たのでしたが、道夫の他にも、船内恋愛におちた幾組かがあつて、心の動揺は、

（注・一行判読不可）

はA子のほかにも関係を持つ女性があるらしく、A子と、その女性が張りあつていているという噂が流れており

ましたが、そういうことにも、かわらず、明け方になると、道夫は汗みずくになって、私の肉体を揺すぶるのでした。

そのたび、私は私で、結婚ということの証しは、唯このことばかりにかかっているとでも思っている女のように、肉体の歓びに投入してしまい、そんな刻には、サントス港にいたら対決しなければならぬであろう自分の運命さえしばし忘れはてる始末でした。サントスの波止場に待ち受けている出迎え青年と道夫とのいずれをA子が選ぶかによって、私の運命が決まるという理不尽なことが、どれ程の重量となって、私を押しつぶすか、考えてみようとしなかったのです。

でも、その決定的場面は、サントスに着くまでもなく船の中で起こりました。後二日で、リオ港に入るという日の明け方、私はまだベッドの中にいました。随分おそく帰って来た道夫は、珍らしく明け方になって、私に触れてはきませんでした。まるで馴律された動物のように、刻をうたおうとします私の肉体は、その刻を無為に過したことに機嫌を悪くし、常の朝の爽かさになれない

（一行・判読不可）

ブラジルを間近にして、早起きする人も多く、何か気ぜわしい足音が往き来し、その中の一つの足音が、私のベッドの枕もとに止ったと思った瞬間、パツと

カーテンが引開けられました。誰かベッドを間違えたのかを、といぶかる私の耳に激しいピンタ打ちの音が飛びこみ、それが幾つか続いた後で、髪をつかまれ、頬をなぐられている道夫を、私は見たのでした。「亭主が他人の女房を盗むのにも気づかないで、寝くきつて：・」その男は、そんな言葉で、私を叩きました。その時でさえ、「細君を盗まれたあなたは、何していましたか」と怒鳴りかえすことを、私はし得なかったのです。毒気を少しも放出することのできない私は、まるで中毒者のように、急に吐き気を催し、洗面所へ走りしました。えずき上げた胃液の苦さにほろほろ涙をこぼしながら、私は指を二本、喉の奥に突込んで、意地になって胃の中の物をしぼり出しました。結婚が何さ！不器量さが何よ、と声になる前の氣息で叫んでは、指を一本喉の奥深く突込みました。一刻も早くブラジルに着きたい。劣等感に押しつぶされた醜い自分は、暁方の大西洋の波間に微塵となって霧散して欲しい…。私は生まれて初めての激しい昂奮の中で、生れ変わろうとしている自分を見出し、急にいじらしくなって、洗面所の水を顔にぶっかけながら、あるだけの涙を洗い流しました。

サントス港に出迎えた道夫の伯父のすすめで、一応私たちは奥地の農場に落ち着きました。

A子ですか：・、気の好さそうな出迎えの青年に伴

われて行きました。不様にも寝込みをおそわれた道夫より、その青年の方を選んだのでしようが、その後、どうしていますか……。道夫をなぐつた男は、私達からさえぎるようにして、道夫に抱かれたことのある細君を連れて、人ごみの中にまぎれて行きました。

道夫の伯父様には随分心配をかけました。離婚の決意を、私がひるがえさないことがわかると、日本との間を飛行便が飛び交い、私が、シルバーノ家の女中になつて、農場を出ますまでには、百日余りの日数を資したのでした。母は手紙の藍に、日本へ戻ることを促しましたが、折角、自分の意志で歩き出した道を、引き返す気に、私はなれませんでした。道夫は農場の労働をきらつて、サン・パウロ市へ行ったそうですが、離婚で、私が傷ついてはいないように、彼の男も口笛でも吹いているかも知れません。

シルバーノ家に働き始めて四年間、その間に、シルバーノの本宅に一度だけ使いに行つたことがあります。それはもう、妾宅を十も合わせたような豪勢な建物の中に、プールからダンスホールまで抱えている豪華さでした。その中に、四種類の子供達が、案外平和な協同生活を営んでいるというのですから、それは驚嘆に値すると言えましょう。正妻の子が四人、あとの三人は妾達が産みおとして行つた子供だそうです。正

妻はもうずっと、リュウマチズモで、身の自由が利かないそうですが、その人の考え方が愉快ではありませんか。「自分の母親もリュウマチズモで、長い間父親の重荷となっていたのだから、自分は親譲りの業病にとりつかれたのだと、すっかり諦めているのです。母親とは比較にならないぜいたくを生活をさせて貰っているのだから、夫が、外で、どんな女関係をもっても、私は文句を言えない」いわば、悲しい諦観ですけど、その方が、正妻なる人も救われることでしょう。でも、いくらブラジルだといっても、幾種類かの我が子を（他人でない点が最も重大）正妻の許で、仲睦まじく暮らせるところに、シルバーノの非凡さがうかがえるかも知れません。牧場では、知らぬ間に牛は仔を産み、農場に並んだ倉庫には、カフェーや南京豆の袋が山積みになされ、ユーカリ林からは、木材が運び出され、その小枝は木炭となって、町の需要を満たしているのですから：・、シルバーノは、おそらく大陸的な男と、言えるかも知れません。

雨がしつぽりと大地をしめらせた翌日、もう主家を出る日も近いというので、私は松とつつじを用意しておいた鉢に植えかえました。シルバーノは、わざと機嫌の好い顔で「気が向いたら、何時でも戻って来るように」と言いながら、私の肩に手をかけんばかりにして、用心深く鉢に植えこむ私の手つきをのぞきこんで

いました。四年の間、こんなに身近く寄つて来られたのは、はじめてだったものですから、私は平気ではおられなくなり、シルバーノの強烈な体臭に、私の背中にくすぐられ、驚き突然たたき起こされた寝覚め人の戸惑いにも似たうろたえをおぼえるのでした。すると濡れた黒土を圧しかためる指先きの動きにも私は心を配り媚態を漂わせていたのでした。私の意志を裏切り燃え上がる女体の歓びを道夫の背をたたき、かなでた、ある刻の指先きを思い出させるような媚めかしさを、移植する指に浮かべていたのは、何としたことだったでしょう……。女というものは、日の当たらない所から、明るい道への曲り角に来た時ですら、ふと暗い道に心惹かれる、ふてぶてしさを秘し持っているものなのでしょうか……。自分の運命を賭ける思いで、用心深く植えかえをしている動作の蔭でシルバーノの男心を挑発しかけていた私は、妙にまぶしく、細い目を殊更細くして、背後にあるシルバーノの顔を振り仰いだのでした。

行く手を占う心持ちで鉢に移し植えました苗木は、二本とも枯れ去りました。日に日に褪せてゆく松葉の色艶に心を痛めて、朝に晩に水を注いでみたのですが、移植は一ヶ月余り過ぎた或る朝私は思切り良く、抜き捨ててしまいました。

“今少し待って見なさりやよかった。若しかしたと新芽が出ないもんでもなかったろうに”と母屋の小母さんは惜しがってくれたものでした。それまでの、私の執着振りを見ていた小母さんから見れば、突如・バツサリと抜き捨てた私の事を、随分せつかな女だと思われたのでありましょう。

確かに、その朝の私は異様でありました。女の生理というものに奔弄され、気も転倒していたのですから：健康な肉体を持った若い女には、誰にでもあの様な事態が起こり得るものなのでしょうか。松を抜き捨てましたのは夢にたぶらかされた結果でした。移り住んだ佗び住いの一人寝の夢路に花岡道夫がしのび込んで来たのでした。彼は夫顔然として、私の肉体を責めました。

「きつぱり別れたのではありませんか」

と拒絶しながらも、いつか私の肉体は、たかぶりゆく女の歓びに揺れていたものでした。生々しいその感覚は、夢から醒めた後までも消えないでいました。雛別して四年間も過ぎた時になって、あの様な恥辱を何故私は受けてしまったのでしょうか。(そして、それは一度に止まらず半年ばかりの間しばしば、そんな状態に墜ちてしまったのですが) 翌朝、きわめて機嫌の悪い私の眼に萎えた松葉はまるで花岡の髪の毛の様に見えたのでした。迂潤にも女の一生を賭けて寄りそったことのあ

る男の残骸に見えた松を、荒々しく抜き捨てた私の姿の愚かしさは、思い出すたびに、我ながら目をそむけなくなるのです。

それから一年半過ぎました。花岡はもう、私の夢路をおびやかしには来なくなりました。そして、植木鉢には、今　モノステーラの葉が様子面白く広がっております。

立派な鉢も　からで置くのは勿体ないから、と言って、母屋の小母さんが持って来て下さった苗を植えたのです。

その時小母さんは、モノステーラは幸運の木と言われていたから植えてみなされ、うまく繁り出すようだったら、あんたさんに運が向いて来るでしょう、とおっしゃったのでしたが、植木に私の運を賭けてみた事や、突如、松の木を抜き捨てた折の私の心情など知っていらした訳でもなかったでしょうに、小母さんの前で、私は何だかひどく恥かしくなりやたらとお礼をのべたことでした。

モノステーラは唯今六、七枚の葉数になりました。新しく出る毎に葉型が大きくなっていくものですから、
“それ見なはれ、あんたさん、運の強いお人じゃ”と、小母さんの方が私より得意になって、水をやるのを私が忘れていたりすると、やれやれ、セツカしてしもうて”　といって、牛乳びんの洗い汁などを注ぎにやって

おいでる始末です。ブルーザやサイア（スカート）を縫って上げて、お金を頂かなかったものですから 大変な御機嫌です。

つつじが枯れたあとには、白玉水仙の花が咲きました。

今は萎んでしまいましたが、ほの暗い朝の廊下に、花開いている白玉水仙の花を見ました時、私の心は長い間の低抗をかなぐり捨て、古里の家へ、まっしぐらに飛翔したのでありました。其処には、黄水仙が群がり咲いている庭がありました。紅椿の花かけに目白が囁いておりました。絵を画くのが好きな少女は、図画の先生と並んで、庭の写生をしておりました。小学校の絵の先生は、少女の家に下宿していて、少女は、絵の先生のお嫁さんになると公言して、よく肩車に乗せて貰いました。少女は小学三年生でした。豊かな両頬にはさまれて、鼻は遠慮探そうにちんまりと坐っておりました。

「お嫁さんにしてあげる」

と先生がおっしゃると、少女の眼は、おでこと、ほっぺの境の線くらいの存在になりました。でも少女は得意でした。学校のお友だちに、絵の先生の言葉を聞かせてやれないのが残念でした。何故か、学校では、そんなお話をしてはいけないと、少女は心得ていたのです。少女の母親が、少女の顔器量の悪さを哀れがつ

ている事など夢にも知りませんでした。「先生、ほんとうに、お嫁さんにしてくれる？」「ほんとうだよ」「ほんと？」「ほんとだから、ほれ、ここにお乗り」少女は先生の肩車に乗せられて紅椿の花下へ連れて行かれました。胸の処に開らいている先生の掌の上に両足を踏ん張り、少女は椿の花の蜜を吸いました。

「オイオイ、蜂雀みたいなことをしてはいけないよ」「蜂雀ってなアに？」

「ブラジルにたくさんいる小鳥だよ、鳥の中で一番小さいんだよ」「先生見たことあるの」「ああ、ブラジルに僕の姉さんが行ってるからね、剥製送って来たんだ」「ブラジルってどこ？」「お船で行くんだよ。遠いぞ、ブラジルは」絵の先生はブラジルのお話をしました。然し少女はブラジルの話など、どうしてもよかったのです。ちんまりとした鼻の頭に、花粉を黄色くつけて、先生のお嫁さんになれることで唯、幸福に満ちておりました。

絵の先生は、間もなく、学校の年度がわりの移動で、海を渡り天草の学校へ転任していかれました。少女は小学校を卒え、中学を卒業した頃、最早、あのまどかな心が無器量者の強い自意識で傷だらけにしておりました。

ブラジルに来て、初めて見た白玉水仙の花の前で、現実に戻った私は、久し振りに涙をこぼしました。涙

は、こんこんと溢れ出るのです。手離して古里の人々や、山、川を恋しがりました。

「地球の裏側に別れてしまった」

と嘆息を洩らした母の手紙。初子の出生を告げてきた、妹の手紙。そんな手紙の前でさえ、かたくなに抵抗の扉を開かなかった私でしたの：・絵の先生に教わった、「山のあなたのふるさとよ、どうして入日が遠ざかる」と、その後で感傷をこめて、私は口ずさんだりしましたが、その日の私は、縫い物を幾度も間違えたのでした。

仕事／仕事／女らしい感傷は、奥深い処に、そつと伏せてかかなくてはと、我と我が心に言い開かせて一流の婦人服店という目標を殊更大きく、心の中にえがいて見たりしたものでした。

シルバーノの家を出て一年半余りになります。今、私はまがりなりにも独立した裁縫師になりました。比の町の繁華街に、高級婦人服店を開きたい夢を抱きあたためているのです。シルバーノの家を出た次の日、縫い物で身を立てようと思い定めまして以来、まるで獲物を追う猟犬のようにまっしぐらに走って行く私の後から、あせるな、あせるな、と呟きながら、もう一人の私が従って行くのです。そして、その二様の私の姿を、分別くさい顔をして見比べている、もう一人の

私も、同時に私の中に住んでおります。ですから、うつかり考えこんだりしますと、やたらと混乱して、徒らに疲れるばかりですから、つとめて考えないことにしています。危険と言えば、危険な生方をしているのですが、仮今、転んだと致しましても、失う物持つてはいないので：：・ 親からも、古里からも、そして現在住んでいる処の世間からも、私は何の拘束も受けてはおりません。そのかわり、頼りとするものは、一メートル六十一センチ、四十九キロ半の我が身一つきりなのです。自分のその肉体さえも、何時病気になるって私の精神を裏切ることになるかも知れません。考える事を止めにして、働くはかないではあゝソマセんか。

思えば、縫物で身を立てる決心をしましたのも、私が熟考の末、確信を以って決めたものではありませんでした。

四年間、文句なしに働いた私が、愈々、暇をとります時、シルバーノは、ミシンをプレゼントしてくれました。

リンダもシルバーノと競うようにして中古の洋服ダンスや、私一人が食べるに事足りる程の食器を贈ってくれました。感謝の言葉も、辞退の言葉も言えなくて、細い眼を痛い程見開いている私に、

“ゆみは、（私の名前はゆみ）四年間も休みなしに働い

たから、シルバーノも私も、とても喜んでいるのよ、そのお礼の心持だけね。他に何んの意味もありはしない” と、リンダは私にそう言い、それから、シルバーノに、しつかりと念を押すようにして”ねエ”と、複雑な日差しを向けたのでした。その電光の様な日差しの中に、私はリンダの或る不安を見たのでした。リンダ自身、女中の身分を離れてから、シルバーノと愛慾の交渉を持つ様になったのですから、シルバーノが、私に、ミシンを贈ることに、内心穏かならないものがあつても不思議なことではありません。私は考え込みそうになる自分を、そっと押しのけて、心の中で呟きました。

「四年も働いたんだもの、退職手当でと思えばよい。貰うことに責任を感じたりしたら却って不純なことになるではないか、胸を張って貰えばいい」

そう言った心持で我が物となりました、ミシンが、私をして、彼これと迷うこともなく、縫物で身を立てようと決意させてくれたのでした。シルバーノは、その後もマンティガ、ケイジョ（バター、チーズ）など彼の農場で出来る物を届けてくれます。そんな時、「頂くことでは負い目を感じません」

という態度を見せるのですが、でもこれは何と非情なことでありましょう。然しこの広大な地球上に、芥子粒位の意力を持って唯の一人で生きようとしてい

るのですから：・日本に居たら思っても見ないでありましよう比の、心象風景を私は今切な気持で凝視しているのです。私の中に秘めている或る種の非情は生活上の武器なのです。

私の新居ですか、駅の前から東に走るアベニード（大通り）の北側の斜面にすがり付いた様に建っている木造建です。勉強や結婚の為子供達が出払って、老夫婦がひっそりと暮している、その離れ家なのです。名ばかりの応接間と寝室、台所も浴室もあるにはあります。

先ず私は自分の着物を縫わねばなりませんでした。四年間、めったに外出することもなかったのですから最近の流行が、どんなモードであるか、リンダの衣類の手入れに依って得たくらいの知識では、自分の着る物さえ缺を入れる自信がありませんでした。日本にいる頃、洋裁の基本を習ったとはいえ、縫う機会はきわめて稀だったのですから：：：。

私は街歩きを始めました。セントロ（中心）に出て、婦人服店を克明に見て廻りました。マネキンが着ている物、ショーウインドに飾ってある物、布地の色、模様デザイン、そんなことをしつかり頭に入れて家に帰ると、きつそくデザイン帖に描き入れました。三、四日もすると、一冊のデザイン・ブックが出来上がります。

した。ショーウインドで見覚えた一つのモードは、私のデザインブックでは、三つにも四つにも変化していくのでした。街路を歩いている人達の服装を研究するのも面白いことでした。比の様な勉強で、果して裁縫師になれるか、どうか、考えてみる時間すら惜しんで街路歩きをしました。全く、獲物を狙う猟犬そのままでした。夜ともなれば、様々のデザインを自分の着る物の上で実証する仕事で、夜中までミシンを踏みました。私は一日一日に変貌して行く自分を見ました。そうした日が二十日も続いた或る日 私は最も魅力を感じている高級婦人服店のショー・ウインドをのぞき込んでいました。ふと気がついて見ると、私の背後に立った背丈の高い中年婦人が、私に何か話しかけているのでした。

“あなたが着ている洋服はとても立派だ、何処でその布地を求めましたか、誰に仕立ててもらったのですか” たしか、こんな風に話かけているその婦人に、「日本着物を解いて縫い直した物であって自分で縫いました」

と私は答えました。お召特有の、深みのあるしゅい色と模様が、余程、その婦人の心にしみたのでしよう。その私達の話の中に、婦人服店の女主人が加って来ました。

たどたどしいボルトゲースの会話は端折りますが、

その立ち話が縁となって、私は婦人服店に就働するこ
とになったのでした。こうして、裁縫師という目標に
向って思いがけない扉が開けたのですから、こおどり
して働きました。既製品を売り捌く秘訣は、お客様の
注文通り、即坐に縫い直すことだそうです。私の職場
には先輩の伯人娘が二人おりました。彼女等の不器用
さと申しましたらたとえば、ボタンの位置をかえる簡
単な事すら、お客様をいらいらと待たせる程でした。
袖つけを直したり、衿の形を変えたり、ふくらみ加減
の肩線を少しそり加減に直したり（これは、私が思い
ついた事で、少しやせ過ぎた中年婦人をひどく満足さ
せました）そんな面倒な仕掛を後輩の私に廻して、伯
人娘は、鏡の前で、自身の顔に見入ったりする邪気の
ない女たちの中で、私はひどく重宝がられました。謝
礼がいらない上に労賃をもらいながら仕立物の勉強を
するのですから、生れて始めて充実感の溢れた生活に
恵まれたわけです。

私は服装道楽になりました。四年間に蓄えたお金で、
惜し気もなく布地を買いました。大胆なモードを試み
たりして、スマートに洗練されていく自分の姿を楽し
むこともありました。服装道楽は、私の生活目標へ一
歩一歩近付く道中着の役にも立つことでした。

あつ！自分の話にばかりかまけて、ミシンを贈って、

私の生活に決意を促がしてくれたシルバーノの上に起きた大事件を話し忘れておりました。

あれは、私が店で働き出して四ヶ月目でした。私は珍しくも電話に呼び出されました。かん高いリンダの声がやたらと響いてしばらくは何の事か解りませんでした。が、「シルバーノが死ぬかも知れない」とリンダは言っているのです。

「昨夜、シルバーノは誰かに殺されようとした。すぐ病院に運ばれた。オスピタル・サン・ルイス。自分は見に行く事ができない」と言つて、私に病院へ行つてシルバーノの容態を見て来て欲しい、と言う電話でした。

リンダは、あわてふためいている様子で、シルバーノの容態を早く知りたい、死なれてもしたら、自分はどうなるだろう、何一つ持たないで、自宅の人達から追い出されるだろうと、電話の向うで嘆いているのです。私は次第に腹立たしくなりました。私に容態を見させ、容態に依つては、先代がやった様に、家財道具を、運び出そうとしている魂胆が窺えて、電話器を投げつけてやりたくなりました。

「あんたはシルバーノを少しでも愛しているのか」

と怒鳴りたくなつても、私のポルトゲースは、私の自由にはならないのでした。早くポルトゲースを覚えないと、いつもこんな目に会ったら外部から来るポル

トゲースに作用されて、私でない人間にされてしまう様な不安にかられながら、「すぐ行く」とだけ答えました。リンダに頼まれたのでなければ、私は驚きあわてて、病院へ馳せつけるところだったでしょうに：。

S病院に向う私の足は一步一步重くなるのでした。伺と言って見舞ったものか。シルバーノの本宅の人達が多勢集っているだろうか。その人達はどんな目で私を見るだろうか。リンダが浴びねばならないその人達の憎しみの視線を、私はどんなにして受け止めるだろうか。私は、自分がリンダのかいらいになった心持で、病院の階段を上がりました。シルバーノの病室は二階の特別室でした。

廊下のベンチにしばらく休んで息を整えてから、恐る恐る扉をノックしたのですが、病室には看護婦が一人付そっているだけでした。ほっと安堵するかたわら、シルバーノのまわりの寒々とした空氣に身がすぐむ思いも致しました。不審そうな眼差しで、看護婦は私を招き入れてくれました。シルバーノは目醒めてい、私を見迎えた瞳は案外生氣を張っておりまして。私の黙礼に答えて、かすかに笑みをうかべた瞳は、何とも淋しそうでした。

それは顔から頭にかけてまきたてられているほうたいの隙間に見たせいであつたかも知れません。

「左の耳下の傷はもう一センチくらいも後方に寄っていたら、命取りになったろう。下腹部の傷は大したものではない。二三日は話をするのができないが十日もしたら退院するだろう」

と、小声で話して下さった看護婦の言葉から、これだけの事がわかりました。話しを聞く間も、私はシルバーノの瞳を見ていました。すがり付くような、いたいたしい眼色をしているシルバーノの言葉を、誤りなく読み取りたかったからでした。愚な女ばかりと次々に関係を持っていくこの男は、きつと人間不信の泥沼に足を引きずり落された事があるに違いない。

「この女も！ ほら比の女も！ 女なんて、信じる奴が馬鹿なんだ」と、一度は信じ、その真実を踏みにじられた男の愚さを、次から次に関係を持つ女に実証させて彼自身を、嘲笑しているのではあるまいか。比の男が、人間不信に陥る以前の彼に戻らせてやる女は、いないのだろうか？・リンダの様な女に、あんな豪華な生活をさせているシルバーノに、私はひどく腹立たしくなりました。彼女は、生死の境をさ迷っているシルバーノの事より、豪華な家財道具を自分の物にするかしないかの方が一大事なのだ。

“あなたは、セニョール・シルバーノの何になる人で”

リンダを憎んでいる私の耳を、看護婦の声が驚かし

しました。私は落着もなく、「女中です」と、答え、「本宅の方の？」と、訊ねられると、もうすっかり自分の悪事を追求されている様な心理状態に墜ちてしまつて声も出ないのでした。僅かに頭を横に振つたのでしたが。後になつて想つて見ましたらあれは全く、男と肉体関係を持った事のある後暗さを呈した女の姿と見なされても弁解の余地のない私の態度だつたようです。

“そう、ああ、よかった。シルバーノも今度は考え直すわね。外にかこわれている女の事で刺されたのに達しないから：。私がどんなに彼を愛しているかが、今頃、わかつてるわ。私つて運がいいのね。ぐうたらな前の天はミナスへ遠ざけてもらったし、今度の事で、その女とは別れて、私一人の男になつてくれるんだもの：。ありがとう、ゆみ”

リンダのぬけぬけしきには、腹を立てるのも馬鹿氣ているので、私は、さようならも言わないで帰りました。

“明日、お礼に行くよ”

そんな声が追いかけて来ましたが、私は振り向きませんでした。

次の日、リンダが店にやつて来ました。

「何か布地を買つて上げたいけれど：。比の方が良いと思つて」

リンダは、むき出しの小切手を、有無をいわせない

で、私の手に握らせたのでした。店にはお客様が四、五人もいらしたし、私の辞退など、眼中にしないリンダの態度が、はずかしくなつて、押し戻すことを諦めました。

五十コントスの小切手を貰つてしまったことで、

「買収されて悪事に加担した愚劣な人間」と言つた心持に私はなつていくのでした。いつもの様に、
「貰つたことに責任を持つ必要はない」

と、うそぶく事も出来ず、長い間、現金にかえなかつたのでしたが、私と言う人間は、愛することも、憎むこともできない、不明瞭な性格の上に、罪悪感に徹することも出来ない、いい加減を性格も同居させているのでしよう。現金になつた五十コントスは、毎日のように、氷菓子や、サンドウィッチになつて、店で働く女運を喜ばせたり、驚かしたりしました。

後になつて判りました事は、シルバーノは彼の農場で働いている男達の争いを止めようとして、刺された、と言うことでした。勿論その男達の争いも女出入りでありました。生きとし生けるもの、すべてが男と女とから成り立っているのですから その事から争いが起きるのは不思議ではありませんまい。

ああ！ そう言えば、サントスを目前にした移民船の一隅で、花岡道夫も他人の細君を盗んで、鉄拳を喰いました。それによつて 夫婦であつた私達は別々の

道を歩くことにもなりました。何処を見ても、男女の愛憎絵図ばかりの様です。私にしたところで、きつぱりと別れた筈の道夫によって、夢の中で、とはいえ私の肉体に、女を覚醒させられた事が幾度もあつたことですし、恋愛をしたと思つた古里の青年や、童心ながら好きでたまらなかつた絵の先生などは、一度も、私の夢路に現れてくれませんのは：・精神のみの愛とは、それ程、はかないものなのでしょう。それとも、私だけが、精神的に稀薄な業深い女体の持ち主であるのでしょうか：・。

ああ、考えることは止しましょうー

仕事！仕事です。目標から視線を外らしてはいけない私です。

婦人服店で一年間、みっちり勉強致しました。そうです。あれは私にとって、学校以上の勉強でした。縫い目を解いて、着る人の肉体が、満足するまで縫い直す。言ってみれば職業人の仕事を、より良くするために私の手を加えたのですから。芯や裏布の使い方、既製品に対する私なりの批判、等、実際に、即物的な研究が出来たのでした。事業家である女主人は、「盗み覚え」とでも言うような私の収穫を、ちゃんと見通しておりました。

店を出て、コスツレイラになるつもりだ、と私が相談を持ちかけました時、快く解雇してくれた上、お客を

紹介してやる、とまで約束して貰ったのでした。

「開業後、縫物のお客があるか」

と、おっしゃいますか。手に余る程ではありませんが、縫物の絶える日ありません。妙な事に、日系のお客様を末だ一人もお迎えしておりませんが、どうしてなのでしょう。私が日本から来て、間がないという事が、比の国の御婦人達にうけるのも何としたことでしエウ。

シルバーノの友人の家族達が、どんどん、縫物を持つて参ります。

縫い賃を他所より高くすること。仮縫と仕上げの日時を厳守すること。これが今の私の信条なのですが、これは婦人服店の女主人に教えて頂いたのです。

其の後のシルバーノ、彼も変わりました。若しかしたら彼はもうお妾さんを養う必要のない男になったのかも知れません。彼は、ようやく精神的な生方を求める段階にはいったのかも知れません。

ケイジヨやマンティガ、時には南京豆をシルバーノが私に届けてくれますのは、最早、習慣みたいになつて、余り長く姿を見せないと私の生活図に妙な空間が生れて、落着けなくなったりもします。

お裾分けのケイジヨに眼を細めてお礼を言いながらも、母屋の小母さんは、しきりに気をもんで、「用心しなされや名の通った女たらしと言いますけに」

と世話をやいてくれます。

「私のような無器量を、何が物好きに」

と笑ってすますのですけれど、最近の私は自分の顔の事を卑下するよりも、私の縫物の技術を自ら試して見る時の洗練された姿態を、自惚れに似た気持で見つめている時が多いくらいなのです。それなのに、ぬけぬけとー小母さんの前で笑って見せる私は、若しかしたら、手に負えないしたたか者ではありますまいか。実際、目に見えない衣類を幾枚となく、着重ねているらしい私でありますので、それ等の衣類を全部かなぐり捨てるといたしましたら、一体私はどんな変貌を遂げることになるでしょう。

井戸

高野耕声

略歴 本名 高野 芳久

生年月日 一九三四年七月四日

出身地 山梨県 石和町

渡伯 十三才にて家族と共に最初の入植地ノロ

エステ線カフェランジャ駅、ボアビスタ耕地

職業歴 最初は農業、現在、フォルクスワーゲン代理店、サンタ・ルイザ・ベライクロス商会を経営

本掲載作品は、一九六八年パウリスタ年鑑に発表

井戸

坂本さん達五家族が、先発隊となってこの山に入りこみ、原始林をやき払って珈琲樹を植えつけて一年になるが、どうにか飲料水を井戸から求められるのは、坂本さん一軒だけだった。

それぞれ家族ごとに井戸を掘ってみるのだったが、水脈に達するまでの深さに掘った者はだれもなかった。壮年の息子が三人もある坂本さんだからこそ八十四メートルの井戸も掘れたわけであった。

食器をよごきぬようと、さんど、三度の食事をにぎり飯ですませて、水を節約している家族もいくつかあった。水のない開拓地の家事をすませると、女たちは珈琲樹を植えつけた畑仕事もして手伝った。男たちより一足先に帰ると、坂本さんまで貰い水の仕事があった。女手で、つるべ一ばい二十リットルの水を汲むのに二十分もの時間がかゝった。

去年入植した、草分けの五家族と、その使用人家族、ことし山伐りにのりこんだ、七家族と二十家族近い家族が、この坂本さんの井戸の水を貰っていた。八十四メートルのぞきこむと水面は小皿くらいの大きさにし

か見えなかった。この深さで当った水脈であるから、水量は豊富にあるかというところでもなく、夕飼の仕度の水をみんなが汲みあげると、つるべ七分くらいにあがった水は赤くにこっていた。その水でたくと飯が赤くなつた。

煙曇りのうっとうしい午後、水を汲みあげている女たちに「井戸が深くてすまんなあ」と、坂本のじいさんが。ピング（火酒）やけの猪首に赤茶けたタオルをまいて、裏口から出てきて、つぶやくようにいった。気兼ねしながら水を貰っている者も、じいさんのその気遣いの言葉に、心が明るくなるのを感じた。

アンタ（獺）の足跡などある原始林を四キロほどいくと、蝶が水面ををいつくすほどいる谷に、小川があった。週にいちど、女子供が洗濯物をついでいて洗ってきた。

井戸に水のある坂本きんでも「これは村の飲み水だ」といって、家の者だけでも井戸の水で洗濯はさせなかった。

軒の底には、椰子の木をふたつ割にした樋を作って、屋根の雨水をセメントで作った天水堀にためて、風呂水や洗いもの用に使った。村のどんな小さな小屋の底にも椰子の樋がつけてあった。

坂本さんのところは高台で、土地も赤土であるし、井戸も八十四メートル、ずうっと水脈に当るまで地層

の変化もなく、途中いちどもピサラ（小石の雜った土）も石にも当たらなかったそうだが、自分たちがこれから入る土地は砂質で、パウダリヨの木もある地帯だから、岩は出るだろうが、四、五十メートル掘ったら、水脈にぶつかるだろう。

町の金物屋で、兄が買って来たワイヤも売れのこりの束をそつくり買ったので、長さが六十二メートルあったという。まあ運がわるく五十メートルを越しても、六十二メートルのワイヤーが全部おりるまでには、きつと水を見るだろう。水を見ても我慢して、二、三メートル深くして、いくら汲んでも汲み尽くせぬような井戸を掘ってやろう。近所の人びとが汲みに来たら「うちの井戸は深くてすみませんね」と坂本きんのじいさんがいうあの言葉はいい言葉だ、と兄貴がいつていたが、俺も「井戸が深くてすみませんね」といつてやろう。しかし井戸の水が出ると、俺は坂本さんのじいさんのように家にいないから、そんな機会はないな。

井戸杵の心棒に、町の自動車修理店から使い古したローラメントを買ってきておいたからあれも入れると楽につるべを巻きあげられる。

元二はその日一日そんな思いにふけりながら、セラリア（木材所）から買ってきた角材のイツペで井戸杵を作ったり、つるはし二丁と、エンシャドンというエンシャード（鋏）より巾のせまいものに、井戸の中で

使い易いように、短かい手頃の柄をすげた。またコーヒーの麻袋を一枚に拵けてしまったものも一枚重ねて、縄を十文字にかけて、四隅を針金で固くむすんで土を出すもつこも作った。バイアで水晶堀りに働いたことのあるという、家族をおいて出稼ぎに来ている黒人ジョンを、きのう、山伐りの方からまわして貰った。井戸堀りの仕事は、井戸口に働く者がもつこであがって来る土を、たとえ豆粒程の大きさのものでも、井戸の中にこぼさぬように注意して仕事の出来る者でなければならなかった。ジョンは無口で几帳面な男なので、使って見ることにした。

ある雨の降った午後、山伐りもてきぬので住家をたてる予定地をきめて、家をたてる面積だけ切り倒した大木の切株を掘ったり、土ならしもやっておいた。るいるいと重なり倒されている大木のこずえの葉もすっかり黒ずんで、生気を失なつた無気味の色がてのひらほどの大きさの家をたてるところをかこんでいた。そこは低地からちよつとあがつた場所で、ゆくゆくはそこから低地にかけて牧場を作り、家から頂にかけて珈琲園にするという目算だった。その土ならしをした一隅に井戸も掘ることにした。「なんぼの太さにするかね、井戸ちゆうものは大体五パルマだね」「五パルマ？一メートルが四パルマ半だから、一メートル十セ

ンチ位の直径になる訳か」ジョンが節くれだった黒い手をかすかに震わせながら細いまっすぐを小枝を親指と小指を伸ばして、白い掌のひらをおしつけるようにして五回ばかりその枝先をぽきんと折って、元二にわたした。元二の掌の寸法は親指から小指の第1関節まで二十センチある。五回計ってまだその先が十センチほどあまった。

井戸のさしわたしは一メートル二十センチとなる。「お前の。パルマは」とパルマの長短が口に出かゝったがものごとの始まりだ。一緒に働く以上ひとつくらい彼の言（げん）も入れておこうと元二は妥協した。

二メートル半の長さの井戸枠を支える支柱を、井戸の円の直径のところから半メートル宛離してたてた。井戸枠の両端に巻手をつけて、ふたりでも巻きあげれるようにした。

この山に来て靴を脱ぐことなぞ始めてだった。自分の身体中にこんな白い部分があったかと、びっくりするような白い足が、冬の陽にむき出された。右足の親指の爪が外側に傾斜してすり減っている。立ちあがると、はだしの足うらに新しい土がこそばゆい。右肩から腕先に力を入れて、野球の投球モーションをくりかえした。新しい仕事に取り組む前の心身ともに充実した快よいひとときだった。

支柱をたて終ったジョンは、元二の姿にふり向きも

せず、柱の埋った所を棒でついていた。

A V A N T Eと書いて、兵士がブラジルの国旗を持って、進め！といった表紙画のある日記帳に、七月十二日井戸を掘り始める。二メートル掘る。とその夜書いた。

きのうはスコップで投げあげられたが、いよいよ今日から、掘った土をもっこに入れて巻きあげ始めた。井戸杵がぎこちない音をたてゝあげさげされた。

午後になると、煙曇りとなって、井戸の中は夕暮れのような暗さになった。

つぎの日の夕方のことだった。

「ピサラ（小石まじりの土）になったぞ！」元二は立ちあがって叫んだ。

「ほんとうか？」あげた土をエンシャードで遠くへ引きならしていたジョンが顔を出していった。

「いい兆だ。この井戸は浅くて、いゝ水が出るぞ」

ピサラと地層の変った土をあげて、明るい陽ざしでよく見たジョンは、大声で下に叫んだ。

坂本さんの井戸は八十四メートル、全然地層が変らなかったそうだが、俺達の井戸は三日目で変って、ピサラが出たのだから、俺の想像した通りだ。

「うちの井戸は深くてすみません」なんていわなくてもいゝような、浅い井戸になるかも知れんぞ。坂本さん

の井戸は深いから、みんなうちの井戸に来るかも知れんぞ。

元二は、わくわくするような嬉しさで、「意地は男よ、なさけおなご、まゝになるならあ男をすてゝ」鼻歌がつるはしの音と共に、いつの日よりおそくまで、井戸の中にあつた。

夕食の時、水が出たような勢で、地層の変つたことを兄貴に話すと、「地層のよく変る井戸は、ガス発生が多いそうぞ」と、いなすように答えた。

ピサラの層も三日ぐらい掘るとまた變つて、始めと同じ赤土の層に變つた。それから再度ピサラの層が現われた時には、井戸の深さは十メートルあつた。井戸枠のさがる音もなめらかになって、ジョンにもっこをあげる合図も声をだきずにワイヤーを下でゆするだけでもわかるようになった。

新しいピサラの層は、小石が前に出た層より多く混じつて、つるはしを力一ばい打ちこまぬと掘れぬほどの固さに變つた。

「いゝ兆だ」ジョンはもっこをおろすごとにもっこに声をのせておろしてよこした。

だんだん巻きあげられる数が少くなつた。そしてどこの角につるはしを打っても同じ固さで「かちん」と音をたてゝ、つるはしが横ぶれして打ちこめぬ固さの岩盤にぶち当たつたのは、十六日目のことだつた。

十メートルを越すと井戸も井戸らしい体裁を整えて、井戸口のまわりは新らしく堀りあげた土でおおわれていた。十日以上も嗅ぎなれた、独得の土の臭いの空、気も火花を散らしてはし口から白い粉が舞いあがって、別な臭いに井戸の中が変った。

つるはしのはし先が丸く人の指先のようになって、使いものにならなくなった。

その日は早目に小屋に引きあげた。布製の靴をひっかけて、まくりあげたズボンから出ている脛にあたる、七月末の夕風は足の指先までしびれるほどの冷たさだった。

今日は朝からもっこでいちどの土をあげることも出来なかった。

深く掘った井戸の中で、岩盤につき当たったという感じより、大きな岩石の上につくねんと座っている思いだった。

明日からつるはしを三丁ぐらい用意して、はし先をやいて叩き出して使うようにしよう。朝めしにあがった時に、火をたかせておいてやきを入れ、トマカフエーにもやくようにしよう。井戸の中でこう考えていたので、早目に帰途についたのだった。

鉄を打つ手ごろの鎚もないので、坂本さんにいくと、五キロぐらいの錆ついた鎚をじいさんが出してきて、「何を打つのだい」と開いた。

「つるはしの先にやきを入れて叩き出そうと思うのです」

「もう岩が出たかい。やきを入れるのはなかなかあんなにばいがむずかしいものだそうだ。やき過ぎるとやきがまわるといつてなまくらになるし、やき入れは湯加減といつてなあ。叩き出した鉄を、じゅんと湯の中に入れる。その湯加減がむずかしいそうだ。むかし、鎌倉に有名な刀鍛冶がおつてな。弟子にどうしても湯加減の秘伝を教えないのだな。ある日、相鎚を打っていた弟子は主人のすきを見て、湯桶の中に手を入れた。主人はふりむきざま、その左手を切り落として破門したそうだが、弟子の頭の中には湯加減が入ってしまったそうだよ。講談だろうが、やき入れはそれ程むずかしいという話さ」

風呂の火でも見にくいのだろう。じいさんはピンガの匂いだけそこに残して、風呂小屋にかくれた。

「長谷川さんの堀っている井戸のように、土がやわらかくてくずれる危険性のある井戸を堀るより、少しは固いが岩の出る井戸の方が安全だからな」

岩が出たと聞いて、のぞきに來た兄貴にそういいながら、元二はもっこにのつておりていった。

きのう岩盤の表面の土はきれいにとりあげておいたので、くろぐろとした岩盤もつるはしを打ったところだけうす白く、まだらの色に改定の岩の（注・数文字

不明)

を素足はうけた。

ひざまずいてつるはしを横かぶりさせぬよう力を抜いて、岩盤の機嫌をとるように、こんこんと叩いてみた。

しだいに力を加えてみても、はし先から火花が散つて、白い粉が舞いあがるばかりだった。はし先が岩に当たるたびに両腕にひびく、そして鈍痛を腰に感じ始めた。壁にぶち当たるという言葉があるが、底知れぬ岩盤の上に座って途方にくれた。

「あがるぞ」大きな声でわめいた。けさから、ろくにつるはしの音もせず、大きく吸いこむ息の音ばかりが、いくたびも溜息のように上にあがってきた。のぞきこんでいたジョンは井戸杵をまき始めた。

「固い」井戸口に腰かけると、吐き出すように元二はいつて、しばらく井戸の中に目を落としていた。

「岩の表面だけが固くて、ちよつと地面を掘ると固さが変わるのじゃないかね」

地下十幾メートルの下に、表面も内面もあるものか、と元二は思ったが、ジョンが気休めにいつてくれる言葉だ。

「そうかも知らん。掘って見なければわからんさ」気を荒立てまいと努力しながら、そう答えた。

「縁を丸く岩を剥ぐようにして見るのもこつだよ」

まだ立ちあがりもせず、井戸口に腰かけている元二に巻手を握ったまゝジョンがいった。

「そこの新しいつるはしをとつてくれ。靴もくれ」

唐突の元二の指図にジョンはとまどつた。ジョンから受けとった布製の靴ももっこに入れて井戸口からまたそのままおりてしまった。

「小便に上つたのじゃなかったか」

ジョンのつぶやく声が頭の上にした。

岩を剥ぐ、うまいことを言ったものだ。俺は掘ろう、掘ろうとつるはしを岩に突き立てることばかり考えたが気長に岩の表面を剥いでいけば掘り下がるわけだ。ジョンに井戸の掘り方を教えられてしまったわい。示唆をあたえられた恰好になっちゃった。「ふ・ふ、ふ、」と笑い声をふくみながら布製の靴をはくと、もっこを四つ折にたゝんで尻の下に敷き、縁の方の岩を剥ぐようつるはしを斜めに打った。

しばらくつるはしを打つても、両手にのる位の岩しか剥ぐことが出来なかった。朝飯にあがる時、もっこに掘った岩石とその上に先の丸くなつたつるはしをおき、自分も乗つてあがるほど仕事ははかどらなかつた。そして八の月に入つた。

山伐りのおくれた者たちの山の乾燥するのを待つて、同時に山やきの火を入れねばならぬが、せかせるよう

に毎日山やきの煙りがあがって、太陽は煙の向うにトマトのような姿だけ見せていた。

火花を散らして白い粉をあげながら、毎日つるはしをふるった。ジョンがいったように岩盤も一応表面を剥ぎとると、その下は表面より心持ちやわらかい岩になった。

縁をずっと十センチくらいの深さに剥いでひと廻りして十センチぐらいの厚さの岩がごっそりまくれるように剥がれることがあったりした。岩の剥ぎ方もだんだん要領を得て来た。大小の岩石をもつこでまきあげるのは危険になった。兄が町から外国の農薬の入っていた八十リットル入りぐらいの厚い鉄板の缶を求めてきたので、もつこと代えた。一日に二十センチか、三十センチ掘りさげていく日がつづいた。

「水をおろせ」朝飯前から、喉の乾きを感じるような気候になって、煙曇りの空はますます煙の層を厚くした。

風がないので、太く立ちのぼる煙りは、煙曇りの空を支える柱のように暗くなってもつつ立っていた。からからに乾き切った大気も、西のパラナ（州）の方からの夕方の風にゆらぎ始めるのは、八月の半ばだった。

しかし、その西風もつぎの日にはおし返されて、むせったい煙曇りがなおつづく、永い乾燥期に川も沼も乾しあがって、息づまるように気圧のさがったある昼

すぎ、黄いろいイツペの花やリツシヤの花が咲きだした、森の中の沼に釣にいった子供たちが、トライラを棒で担ぐほど釣って売りにきた。その夜、西の地平線をかすめておそった強風は、バラバラと雨も交じえてうつとうしい煙を追いやった。朝夕はまだ薄寒い八月にかえった。

「このつぎの風は雨になるぞ、ぜひその前に山をやかんと大変なことになるぞ」家たての材料をあつめ終えて、柱にする丸太をけずっている兄はいった。

いよいよ山やきの日が来た。元二もジョンと井戸掘りを休んで、山やきする者たちの中に加わった。飛火して他所の原始林をやいてしまうこともあるので、山つづきの原始林の所有者のポルトガル人に山やきの通知にいったが、ちようど留守ですぐ帰るから、ちよつと待ってくれという。火を入れる二時になつても姿は見えない。四時になると反対側から待ちきれずに煙があがった。「それっ」こちらからも火を入れて見たが、ばりばりと火を入れたところだけやけて火の手があがらない。あせり始めた者たちが駆けずりまわって、火をつけて見るのだが一向に燃えあがらぬ。火つけばかりに氣をとられて気づかなかつたが、運わるくその日はいつもより早く気温がさがり始めていた。

「明日の昼、もう一度火を入れなおそう」

引きあげる時、すっかり火は消えてしまっていた。

「二度にどつと火の手があがらなければ、山はやけないよ。石油をふりまいて、火の手をあげよう。二時というのに四時頃寒くなつてから火をつけたのが、失敗の原因だったよ。ボルトゲースの山どころかこっちの山が全然やけないじゃをいか。」

久し振りに皮靴をはいて駆けずつたので、靴ずれの出た足に赤チンキをぬりながら、元二は不機嫌にいつて、靴を投げた。

つぎの日、石油をまいて火を放つた。石油のかゝつたところはよく燃えるが、火の勢は伸びず、山やきは失敗に終つた。「明日、家に帰ってくる。一日も早く移転して、十月の珈琲の蒔きつけまでに、山を片づけねばならん。俺が帰ってくるまで枝落しをして、焼仕事の方を進めておけ。日給を明日から十ミルレース増して払え。奴らに足許を見られて、動かれたら大変なことになる」兄の一郎は仕事の手順を元二にいつけて、つぎの朝真暗い内にピストルと懐中電灯を持って町にいくオニブス（バス）の出るところまで八キロの原始林をいった。

原始林に挑む開拓者たちが開拓の第一歩の山伐りよりも、天候に左右されたりして、山焼きの首尾、不首尾が事業を左右した。山が不焼けになつて、気が狂つてしまった男の話も聞いた。

兄が出かけて四日目だった。警笛がなってライトが、ねている元二の顔を照らした。

「ついたぞ」大きな声にとび起きた。

「ゆうべは一晩中走ったので、荷物の上は寒かったぞ」荷物の上から兄の声がした。抱いて来た犬が、元二の姿を見ると吠えたてた。犬を一番先におろすと、元二にとびついてはなれなかった。

「遠いところだなあ」運転台から父がおりながらいった。

母もつづいておりたが、この移転に不賛成だったので不機嫌なのか車に酔ったのか黙っていた。東の空が白んで寒さがましてきた。

暗くて見えないからいゝが、不焼けの山を見て親達がどんなに失望するか、年老いた親を可愛想に元二は思った。

家財道具は積みかさねておいて、防水剤のかゝった大布でおゝつて外におき、山伐り人夫の小屋と両方の小屋を使ったら、どうにか人間は屋根の下にねられた。人夫達は坂本さんの綿小屋があいたので、そちらに移しておいた。

家族も着いたので、井戸掘りもピッチをかけた。朝も今までより早く仕事を始めた。

家中の者が全力をあげて枝落しをして、山をやく仕事にあたった。人夫達には仕事を請負わせたので、仕

事は予想以上にはかどつて、十月に入ると山をやくのがすんだ。

井戸も二十五メートルの深さになって、井戸の底から見あげると、ぴかぴかひかる岩や黒い岩層のはるか上の方に、嬉しがらせたピサラの層があつた。井戸を掘り始めて八十日がたつていた。

珈琲の蒔きつけが始まつた。土地の真中に真直に道をあげ、その道を基準に直角に針金を引っぱつて、珈琲を蒔く場所をきめ、穴を掘る者、穴の上におく割木を作るもの、蒔きつけ終るまでは不焼の山の後片づけぐらいの忙しさだった。井戸掘りは中止して、珈琲を蒔きつけた。

十月末、一ヶ月振りに井戸の仕事にかへつた。元二が例の通りに缶に乗つて井戸におりながら、もう二、三メートルで底につくという時、暗い底にうごめくものが見えた。

「ジョン、とめろ。井戸の底に何かいるぞ。蛇かも知れんぞ。あげろ」

蛇と聞いて、ジョンはあわてふためいて、井戸綱を巻いた。家から懷中電燈を持ってこさせておりて見ると、それは無数の大蛙だった。

捕えて缶の中に叩きこんだら、二十三匹もの蛙だった。

十月の暖くなつた夜、水を求めて飛びこんだものらしい。

蛙をあげて「ほっと」していると、布製の靴を這つて無数の蟻がのぼつてきた。

「ジョン、あげろ。こんどは蟻だ」

蟻退治をせぬことには仕事が出来ぬ。またジョンを家に駆けさせて、タツ（センザンコウ）の印のついた殺蟻剤の入った小缶を持つてこさせた。

はし先にやきを入れるときに使う、水の入ったラッタ（缶）をそのまま井戸の底におろした。殺蟻剤を水の中に入れて手でまぜた。その溶いた水を岩の上にまくと、異様な臭気を放つて殺蟻剤のガスがあたりに充満した。

すうーつと、後頭部から何か抜けるような感じがした。

ガスだ！。殺蟻剤のガスにやられた。早く出ないと死ぬぞ。「ジョン」と叫ぼうとするのだが、もう喉から声が出ない。缶の中に座つただけは覚えている。

ジョンはワイヤーがゆれたような気がしたので、枠を巻くと手ごたえがあった。

「げえーっ」ものを吐く音がして、底に水のおちる音がした。元二は缶の中であがりながらいくたびも吐いた。ジョンは夢中で巻いた。蒼白な顔が現われた。

ジョンは右手で巻手をおさえ、左手で缶の中に気絶

してぐにやぐにやの元二の体を引きずり出して、井戸口においた。元二は夢遊病者のようにふらふらと立ちあがると、せきこんで吐いて又倒れた。

「おおい大変だ」ジョンの声に一郎や人夫たちが家建のところから駆けつけた。

小屋の中に担ぎこまれたのも、その日が経ったのも記憶がなかった。

正月までには何とか水を出して、坂本さんの小屋から自分達の土地の家に移って、正月をむかえたかった。

珈琲を蒔いた間へ間作に植えた米も綿も順調に伸びていた。

三十メートルの深さになった時だった。黒い岩と岩との間に、薄い粘膜のような水分を含んだ今までになかった岩に当たった。

やっと水の近くなった岩が出たぞ。顔をあげて井戸口をふりあおぐと、くらくらと目まいがした。水気の岩を見たので、根をつめすぎたかな。と元二は思った。あたりに紫色の煙りが立ちこめている。ほとぼしる汗の湯気があがっているのだろうとも思った。つるはしを持ったが、息切れがして呼吸が困難になった。水が近づくともガスが発生する事は知っていたが、いよいよ水の前ぶれのガスが出たのか。

もう水は近い。

ガスの気配がうすらぐと、水分を含んだ岩もなくなつて元の岩層になつてしまった。

ジョンが井戸口から両足を井戸の内にたらし、昼寝しているのだろう。軽いびきがおりてくる。

井戸の水は出なかったが、正月は自分の家でむかえようと引越して正月をむかえた。

雨期に入つて雨も多くなったので、天水桶に溜まる水で風呂水も洗濯をするのにも事かゝなかった。兄嫁が蒔いた百日草も、種の入つて来たアメリカの袋を棒にさして、立てておいたが、はるかにその袋の棒を追い抜いて大きな蕾をつけ始めた。

井戸を掘っている元二とジョンは、みんなからその仕事の井戸掘りも存在さえも忘れ去られたようで、珈琲の伸びた話や、早蒔きの種に花が咲いたり、綿の害虫が少なくて綿の花のとまりがいゝとかいう話は、無線の遠いところの話を聞くような元二は気がした。

いくたびも、岩層の変わるたびにガスは発生した。五月になると五十メートルになった。八本のつるはしを使い尽した。ある日、町から井戸掘りを商売にしている男が来て、五十メートル岩ばかりという井戸は珍しい、掘つて見てもいいと威勢よくシャツをぬぐと、右腕に女の裸体のいれずみがあつた。さがつて二、三十分つるはしの音がこつこつしていたが、ガスで仕事

ができぬと真青な顔をしてあがってくると、そうそうに帰ってしまった。

八月の末には、とうとう六十二メートルのワイヤーが全部くりだされてしまった。

井戸掘りも一年以上つづけると、陽のあたらぬ仕事なので、病人のような青白い顔色となりガスの発生に耳鳴や頭痛がつづいて、陽にあたらぬだけでなく、健康の状態ではなくなっていた。この頃、親はとうとうたまりかねて、病気や怪我のないうちに止めてくれ、あの殺蟻剤にやられた時にやめておけばよかったのに。こゝは水脈の外れたところではないだろうか。掘って見るなら、別に低い方に掘って見たら、と兄嫁もいつて親達に同調した。

九月になると、岩層の変化がはげしくなつて、水気を含んだ岩と同時にガスの発生は濃くなつた。元二はつるはしをおくと、帽子をとつて帽子であおいで顔に風をあてゝいると頭痛はいく分遠のくが、いつか知らぬ間に小便が、汗にぬれたズボンの中にもれていた。大便を催してくる。赤ン坊の頭の大きき程の岩石を手もとにおいてそのたびに岩を肛門の下においてしばらく、じつとしていると大便の方はおさまる。失禁状態の日がつづき始めると、いよいよ能率はあがらなくなつた。食慾がなくなつて来た。ものをつかむと、ぶるぶる手が震えるようになってきた。

水が出なくてもいい。八十四メートル、坂本さんの井戸の深さだけは掘って見たい。

八十四メートルの深さは元二の執念となった。

十月のある日、二つ、三つつ、つるはしを打ちこむとはし先に嘔吐した。ふらふらと首をあげたはずみに後頭部を「がつん」とうしろの岩壁に打ち当てた。

「もう駄目だ。たとえ十センチ下に水脈があつても、このまゝでは掘れぬ。残念だが体が持たぬ。体力の限界線ぎりぎりのところまで来た。俺の体は俺が一番よくわかる。井戸にノックアウトされたか」

精根つきた元二はあえぎながら、自嘲した。

もうこうして下から仰ぐ事もないだろう。顔をあげると、皿程の大ききに見える井戸口の上の青い夏空を白い雲が通った。

二十メートルのワイヤーをつぎ足して、七十メートルの所にしるしをつけておいたら、それを二メートル越していた。七十二メートルの深さになっていた。ジョンに打たせたつるはしの数も十二本目だった。

「ジョン、この井戸の石汲みはやめよう。豆粒程の石を落としてもお前をどなりとばしたが、その一番でかい石を井戸の中にはおりこんで見ろ」

「折角苦勞して掘りあげた井戸だ。そんなことは出来ねえよ」

「水が出たら井戸だけれど、水がないのだから、ただの

石穴を掘っただけさ。いいから投げこんで見ろ」

元二にうながされると、ジョンはこぶしぐらいの小石を拾うと井戸の上から手をはなした。

「びゅうーん」うなつて小石は落ちていった。

元二は足もとの砂を一握りして井戸口からさらさらと井戸の中にこぼして見ようとした。

元二の右手の指の関節は、自分のものではないように固くなってしまっていて、握った砂は指の間をこぼれていかなかった。元二はふと眼の中にあついものが湧いてくるのを感じた。

朝の予感

醍醐麻沙夫

略歴 本名 広瀬 富保

生年月日 一九三五年一月三日

出身地 横浜市

渡伯 一九六〇年九月

最初の居住地 サンパウロ市

学歴 学習院大学文学部卒

職業 ピアノ弾奏、商店主、漁師、日語教師などをへて 現在、小説家

趣味 音楽、釣り

本掲載作品は、一九六九年農業と協同一月号に発表

朝の予感

雨は夜中まで降っていたが、ようやく仕事をおえた私とエリオが外へ出たときには、すっかりやんでいた。人の途絶えた深夜の道は、水中に息絶えている大きなミミズのように、引延ばされてまだらに光っている。そこかしこに昼間はその入口さえも気づかないバーのネオンが、幾つか点っている。そのなかで客や女給たちが酒を飲み、笑い声をあげていることが不思議に思えるほど、路は静まりかえっている。

エリオが戸締りをしている間、私は知らない街へでも迷い込んでしまったように、落着きなく周囲を見廻した。確かに、見覚えのある構図の中に家並ははめ込まれている。だが表情がちがうのだ。良く似た二人の人間を見比べると、酷似していればいるほど、ますます二人が他人に見えるように、この街は私の知らない街のように見える。

二人が歩き出すと、私の懸念をよそに私の足は、いつものように舗道のはがれたコンクリートや四角い水溜りを器用によけて動いた。私の目の奥には先刻まで

向い合って坐っていた製図板の白い輝きがちかちかしているのに、私の足は暗い道路を馴れた様子で進むのだ。知らない街をこんなに平気で歩いてよいのだろうか、と私は思う。あたりの情景は私の知っている昼や夕方とは一変していて、異なった遠近法や不可解な精神に支配された街が出現しているのに、足は凹みや水溜りを感じるだけで安心してゐる。「足は鈍感なのだ」と私は考えた。「だが、他人の作った靴を穿いた以上、足だけが私でなくても仕方のないことかも知れない。もし素足だったら：素足だったら、足も私のように怖れるだろう」

私はエリオにつれられて、どこへ行くともなしにぼんやりと歩いていたことに気付いた。

「もう三時半だ、エリオ。タクシーは通るだろうか」「ノーヴェ・デ・ジュリオにゆけはバスがある。おれの家の方へ行くバスは三時五十分に通る。君の方はそれから五分ぐらいすれば通るはずだ」

「こんな時刻にバスがあるとは知らなかった。詳しいんだな」

「君は始めてだが、俺は時々遅くまで残業するから」「奥さんがおこらないか？」

「この年じゃね」

私とは親子ほども年令のちがうエリオは、笑いながら中折帽子をとって禿げ頭をなでた。二人は路を折れ

て、坂道をノーヴェ・デ・ジュリオ通りへ向って下った。空気は生あたたかくて、私たちは澱んだ夜の底へ沈むように急坂を下りる。

大通りは街燈が三列に連らなっている。数多くの歩行者や車の通行のために設計された大通りが無人に堪えているさまは、終演後の大劇場の内部のようである。暗い路から出てその明るさに這入った私は、そこに広々とした寂寥が漂っているのに気付いた。終演後の舞台から城や王子や恋が消え去るように、無人の大通りには何か無漸なものだけが残っている。

昔この大通りは川だった、と聞いたことがある。並びたつビルや車の雑沓にまざれて昼間は気付かないが、この時刻に眠っている大通りを眺めると、確かにそれは浅い谷底の川だった。化粧した女の寝顔を見つめると化粧の底から素顔が浮きだし、ついには化粧の表面を女の黄ばんだ素顔の薄い膜がかかってしまうように、ビルやアスファルトを見つめているとその底から川が浮かび上って来た。私の眼前に横たわり、私に見えているものは川の死骸だった。それも腐敗して原型をどぐめぬ死骸ではなく、例えば死んだ蛇のように生々しく光っている死体だった。

時々、私たちの前を乗用車が追われるように走り去る。それは死体の上を脅えながら急いで走り去ろうと

しているようである。

バスの停留標識を両側から護るように、私とエリオは立っている。私たちの向側は大通りをへだてて、近代的なアパートが建ち並んでいる。一斉の街灯の反映に浮きあがって、それは柔い灰色の土壁の連なりのように見える。昔の家並みの名残りをとどめた狭い石畳の露路が、土壁に開いた穴のように黒々と見える。その石畳は、鼠たちが重く長い尾を丹念に引きずりまわして磨滅させたように、てらてらと光っている。

一人の人間が坐って、アパートの人口の灯を頼りに新聞を見ていた。私は浮浪者だと思いい気にもとめなかったがエリオは二三度首をかしげると、

「エラ（彼女）だろうな」

と言いながら、大通りを渡り始めた。

「彼女？」と私は呟きながら、分厚い新聞にほとんど隠れている人影と、エリオの後姿を見くらべた。その浮浪者のような「彼女」とエリオとの間に、普通の意味での交際などある訳がなかった。最下級の街娼でさえ、こんな時刻に道端に坐って新聞を読んだりはいない。急に好奇心に駆られた私は、エリオの後を追うように大通りを渡った。

エリオは女の近くの舗道に立ち止っている。私もその隣に並ぶように立った。アパートの水道のメーター台のようなものに坐っている女と我々の距離は、五

メートルほどもある。女は顔をあげて私達を見た。唇からあごにかけて、まだ幼なさの残っているような若い黒人の娘だった。

「やはりお前だった」

エリオはいくらか満足そうに笑いながら、父親じみた口調で言った。

「相変らずこんな時間にうろうろするんだな。駄目だ！ 若い娘のすることじゃないだろ。俺はお前を小さい時から知っている。お前は学校もちゃんと行つたんだろ。それなのに何ということだ。こんなことは、お前のように教育をうけた人間のすることじゃない。そこら辺のヴァガボンド達のすることじゃないか」

エリオは五メートルの距離を措いたまゝ、喋っている。若い娘は、新聞から顔をあげて、優しい歌を聴くように微笑しながら、エリオに耳をかたむけている。

二人を眺めながら、私は芝居を見ているような気がした。そんな訓戒を垂れるためなら、もつと近付けばよいのに、エリオは私の横から一步も踏み出そうとはしない。

彼は舞台の均衡を失うのを惧れている役者のように、その場所に立っている。私は、彼が私に遠慮しているのだ、と気付いた。それを遠慮とよんでよいかは分らないが、とにかく私の存在が彼を五メートルの距離に引き止めていた。私と一緒に居ること、エリオは彼

が日常属している階級の人間であった。私を置去りにして、そこから一步踏みだすことを、彼はためらっている。それによつて、私の知らなかった彼の一面を不用意に曝すことを警戒していたのだ。その一面とは、初老の男の単なる助平心であるかも知れないし 又私の想像もしなかったような彼の心の優しさであるかも知れない。

もしも、それが心の優しさであるなら、私はそれをエリオから引き出してみたい、と思った。会話のはづまない外国人の私は、エリオによつて、さしあたり敵でも味方でもない同僚にすぎないだろう。エリオだけではなく、他の人々によつてもそうだろう。私は随分長い間、その位置に止まっていたと思う。エリオの一面を見ることによつて、私はそこから踏み出そうとしていた。いくら私が外国人だからと云つても、私は自分自身によつてだけではなく、他の人によつても何者かでなければならぬのだ。今 私がエリオの行為をうながしたら、娘に対する本心を見ようとしたら、私はエリオによつて何者かになるのではないか。たとえばにしろ、味方にしろ、何者かに。

私は言葉を探しながらエリオの横顔を見た、自分の置かれた位置を踏みだして、エリオの内面に入るのは、やはり一種の勇気が要る。私が考えをまとめて口を開こうとした時、エリオの帽子の下の暗い後頭部から、

赤いテントウ虫が這い出したように、遠いバスの明りが現われた。初め、無意味な点にすぎなかったそのあかりは、すぐに明確な意志、避けがたい力の象徴のようなものとして、私の目に映じた。エリオから何かを引きだそうとしていた私の心に挑戦し私の行為を封ずるように、それはぐんぐんと私の目の中でふくれて行った。：・私はその挑戦にたやすく敗けた。私は元通りの位置に押しもどされた。

「バスが来た！」

探していた言葉を放棄して私は言った。あまつさえ、その口調は私の予想以上にあわてていて、いつそう私をがっかりさせた。

エリオは飛翔している鳥の種類を確めるようにパスの来る方向へ首をつき出していたが、赤い文字板が見えるほど近づく、「私のバスだ」と短く言った。

「君のはこのすぐあとだ。じゃ、又明日。午後から」

それから 私と娘に「アデウス・サンパウロ」と笑いながら言って駆け出した。私もエリオもここからかなりはなれた処に住んでいるが、サンパウロ市外というほどでもない。駆けてゆくエリオの後姿が「バスが来た」と言った私の口調に劣らずあわてていて、私を気軽にした。バスが来たことよりも、もつと大切なことを言わなければならなかったのではないか、と思っていた私の気持の負い目をエリオのあわてた後姿が帳

消しにしたのである。

気楽になった私は「どうして我々は、バスのどときに無力なのだろう」などと思った。たしかに、夜中に一台しか通らぬバスなどは、もう、バスではなく、単なる「暴力」のようなものである。

非常なスピードで来たバスは、舗道から身をのり出すようにして手を挙げているエリオを認めると、避けようのない障害物に出合ったように鋭くきしりながら急停車し、再びスピードをあげて走り去った。

・・・私は一人になった。今までは私がエリオを拘束していたが、エリオが居なくなってみると、私もまた自由になっていた。私は私のバスが来る迄、娘と話してみようと思った。

私が動かないので、娘は新聞から顔をあげた。私は娘に少し近寄った。何となく言葉が口について出た。

「何故、新聞を読むの？」

娘は私を見て、うふっと笑った。私は妙な質問をしただけ。しかし、娘の返事もやはり奇妙だった。

「もう少ししたつと私の叔父さんが通るわ」

「えっ、叔父さん？」

「そうよ。毎朝、新聞を配っているのよ。私の叔父さんも私を見ると、さっきの人のようにいつも小言を言う。だけど、そのあとで小遣いをくれるわ。それでコー

ヒ―を飲んだり、パンを喰べたりしてから私は帰る」
娘はそれほど熱心に新聞を読んでいたのではないらしく、そう言いながら新聞を畳んで置くと、立ち上った。

わりに大柄な娘だった。

私は驚いて娘の全身を見た。

横縞の入った水兵のような木綿のスウェーターを娘は着ていたが、その下には何も身につけていない。街燈に照らされて、乳房のかたちのはつきりと浮き上っている。

乳房の豊かさに押しあげられて、二つの乳首が薄いスウェーターを盛りあげている。スウェーターの裾はめくれて破れており、安物の明るい色のブルージンを穿いている。その下には素足がコンクリートを踏んで立っている。その姿はまるで、女優が性的魅力をきわだたせようとして選んだ扮装にさえ似ていたが、その娘にそのような作為があるうとは思えぬ。何故なら、娘は私の目に彼女の姿がどう映じているかについては、まったく無関心に見えたから。私を驚かせたほどの娘の若さをおおうには、その貧しい服装はあまり無力であつたに過ぎないのだ。

娘が私の視線にこだわらないで街灯の光のなかに立っているのも、私も又、自然を眺めるように娘の姿を眺めた。立っている娘の姿は単純で豊かに見える。私は

その乳房のふくらみや、しつかりと立っている足を美しいと思った。私は、これ程素直な気持で生身の女を見つめたことはないように思う。眺めている私の心に、その乳房に触れたいという願望が生じた。

おそらく私は彫像をみるように、その娘を見ていたのだ。裸婦像の前に佇んだ鑑賞者の目は、最初ブロンズの冷たい光沢を見る。だが彫像の豊かな美しさが鑑賞者の心に浸みわたった時、彫像はすでに彼の体温を持っている。そうしたら、彼は手をのばして彫像に触れようとするだろう。生身の女のように反応などはないことを彼は知っている。だが、手をさしのべずにはいられない。手で触れることによって、美を感じている自己を確かめようとでもするように、彼は彫像に近づく。：：。

私の目に、娘の肌の光沢はブロンズのような抵抗のある質感を与えたのだろうか？ 人が彫刻された裸体に魅せられたにしても、決してその性器のためではないだろう。たとえ性器が彫られていたとしても、それが閉されているものだ。私たちは知っている。それを自明なこととして、なお裸体に魅せられる：：。

娘の単純で豊かな立ち姿を眺めていた私の心に浮かんだのは、そのような種類の情念である。私に性欲はなかった。

「叔父さんはすぐ通るの？」

「まだよ」

「それなら少し歩かないか」

誘いながら、誘っている私の心にためらいが生じた。私の心には性欲がないのに、私の発音した言葉が性欲を持っていたからだ。私の情念とは関係なく、深夜に女を誘う言葉には、銅鏡にぬられた水銀のように、男の性欲が密着していた。それは娘へも伝わったにちがいないが、むしろ私は信用した。私の裡にねていた性欲が、名を呼ばれたもののように、ふと頭をあげたのを私は感じた。

私の言葉をきいて、娘はふっと笑った。

夜のなかに、私の言葉は青銅の鏡になって、一瞬娘の軀をうつしだしたのだ。娘は鏡に照らされた自分の軀を無関心に見て、うふっと笑っただけである。青銅の鏡は闇の中に消え、私のうちの性欲も消えた……。私は不思議なものを見るように娘を見た。娘を誘う私の態度の中に、男としての心が動いているととられても仕方がないのに、娘の表情には警戒も同意も見出せなかった。白痴でもなさそうだ。強いて云えば、娘は何かほかのものに気をとられているように見える。私など、どうでもよいように見える。それにもかかわらず、私に向けられた娘の含み笑いには、云いようのない優しさがある。

娘は私と並ぶと、足許の新聞には見むきもしないで歩きだした。新聞は元からそこにあつたのかも知れない。娘と大通りを横断しながら、私はふと、何も手に持っていない女と一緒に道を歩くのは初めてではないか、と思った。この娘は何も手に持っていない。私の知っている女達は、いつも何かしら手に持っている。ハンドバックやら紙包みやら。ついそこ迄の用事で何も持たずに外出するにしても、心配そうな手持無沙汰な表情をして、手は早く何かを持ちたがっている。それは煙草を切らした男の手のように、いらいらとして見える。私と歩いている娘の手は何も持っていない。そしてそれが当然のここのように、自然に見える。

私達は舗道をゆつくりと、トンネルの方へ向って歩いた。そこかしこに、小さな水溜りがある。私はそれを避けて歩いたが、娘は真直ぐに歩いた。水溜りで娘の素足は、微かな楽しそうな水音を立てた。娘の足音を聞いている私は、二人が波打際を歩いているように思えた。海辺を歩くように、娘は歩いている。

「海に行つたことはある？」私は聞いた。

娘は「ない」と答えた。

「行つてみたいと思う？」

「行きたい」

「僕は港町で育つたんだ」

「いいわね」

「でも随分長いあいだ海を見ないな」

「私は一度も見たことがない」

「……」

人の裸体がほんとうに似合うのは海だけだ。森や湖にくらべると、海はどんなにあけひろがつているだろう。そこに裸で立つことには、目もくらむような眩惑がある。

その眩惑は、波や砂丘や積乱雲と人体とが幾何学的な相似をしているという認識に他ならない。一直線にのびる波や、壮重にわき上る雲や、歩む人は調和―海から生まれたものだ。そこでこそ人体は彫像よりも美しい。

建物の中や木立の下では、青銅や大理石の彫像よりも美しい人体を私は想像することができない。海のほとりでこそ、人体は純粹で比類なく美しいのだ。馬よりも、魚よりも美しいかも知れない……。

だが、おそらく今の私は、雲や日光に深い羞恥を感じないでは、海に向って裸になることはできないだろうと思う。私はまだ若い。だが随分長い間、背広を着てネクタイをしめて、この都会にくらしている。私の顔は私の職業に必要な神経質さをそなえて、皺ぶかく締っていいこうとしているのに、身体の皮膚は弱々しく

たるみ始めている。私が海辺で裸になれば、顔と身体は別々の材料で作られているように見えるにちがいない。顔はにかわのようなもので威厳たつぷりに、身体はしんこ細工のような頼りない作り方で。学校を卒えてこのかた、私は自分の肉体に関しては、頭部と内臓のことしか考えなかったのだから仕方がない。もし海辺で裸になったら、私の身体は、口から吐き出された回虫のように、みじめに見えるかもしれない。しかし、輝く波や積乱雲に対して劣等感に打ちひしがれたとしても、自分の裸体を白日の中の回虫のように弱々しく感じながらも、私は少年のときのようにもう一度、海辺で裸になってみたいと思う。

私は娘を見た。海辺に立つその裸体を想像した。娘の顔と身体は同質の美しさを持っていて、自然そのものに照応した昂然たる輝きがある。肌には、塩と白砂がまぶさって光っている。私は娘の全身に私の視線を放ち遣る。

私はその全身に手をふれたいと願う。私が手をふれると粗い塩や白砂は娘の肌から落ち、あとにはこまかい塩と白砂が光っているだろう。

私たちの横を、バスが疾走し走った。―私の、バスだった。もう朝までバスはない。それが私を置き去りにして遠ざかるのを見て、私の心に行きへのきっかけ

が生まれた。私は手をのばして、歩きながら娘を抱きよせた。

娘の軀がほんの一瞬のあいだ固くなり、すぐにふつと柔らむ。私の手はたやすくスウェーダーの裾をくぐり、肌にふれた。汗ばんでもいないのに、吸いつくようにきめの細かい肌だった。

私は娘の脇腹をかかえるようにしながら歩いた。そんな風に私にされながらも、娘の軀は決して媚びてはいない。反抗もしていない。小舟が波にたゆたうように、私に身を委せている。乳房にふれようとしてのばしかけた私の右手は、乳房のすぐ下で止まっていた。

：・私は娘の全身に触れたい、と思ったのである。娘を全裸にすること：・その全体を見ること、全体に触れること。娘の乳房や腹や手足を見、息づいている全身を私が感ずること。それは欲情ではなく、都会に住む私の自然へのあこがれのような気持ちだった。

私はサンパウロの全体をみたことがあるだろうか。私は毎日、切れつぱしの図面ばかりをひいているのではないか？ 私の生活はさまざまな属性の断片のよせあつめから成り立っているだけではないのか？ 私は自分の技術や、靴や、財布などなしには生きていけない。しかし、それらをそっくりとってしまっても、なお残るものがあるはずだ。その残るものが、自分そのものではないだろうか。

娘の裸体に触れたいと敬っているのは、そういう「自分」ではないか。

灯の消えたドライブ・インの空地と、低い崖の間に暗い道が通じている。その角まで来た私は、歩きながら娘の軀をそちらへ向けてゆっくりと押した。小舟を押して方向を変えるように、娘の軀は私のうちに重く沈みこみ、二人の力の均衡の一瞬が過ぎると、娘の軀から私に伝わる重みがずり落ち、私達は暗い道に向っていた。

低い木の下で私は娘と対いあつて立った。あたたかい夜なので、娘を裸にしても風邪をひかす心配はない。大通りの街燈の光りは、ドライブ・インの生垣にさえぎられて、ここ迄は届かない。

私は娘のスウエターに手をかけた。「だめよ」と娘は言ったが、すぐに、着換えをさせられる子供のように従順になった。スウエターを生垣に掛けてから、私は娘の腰を側面から抱き込むようにして、ブルージンのゆるんだボタン穴からボタンを外した。娘はそれしか身につけていなかった。その時、娘の乳房が私の耳にあたって柔らかな音がした。それは不思議な音楽のように、私のうちに響いた。娘の軀のなかに音楽が鳴っているように私には思えた。

私はブルージンをスウエターの上に置いてから娘の

方へ向きなかつた。……しかし、そこには誰もいない。私の目は娘を見なかつた。黒い肌は、娘の裸身を窺然たる闇そのものに化していた。

私は、黙ったまま立っていた。私の目は何も見なかつたが、私は全裸の娘が私の前に立っている気配を感じていた。私の耳には娘の乳房の、波の音のような音楽が聞こえていた。それは乳首に接触したときの鼓膜の残響と云うよりは、私の耳のなかで何かが共鳴しているような、亢まっていく音楽だつた。耳朵に甘みのように残っている乳房の柔らかさは、私の全身に伝わり、全身をめぐるに従い、その肉の重みを増して私をいいようなない快感のうちにしめつけた。

私は決して、興奮してはいなかつた。冷静だつた。それにもかかわらず、目まいのするほど深い快感に涵されていた。周囲の重く濃密な闇そのものが、娘のやわらかな肉となつて私を包んでいた。それを全身に感じることで、私は存在し充足していたと云える。全裸の肉は闇に化身し、闇は液体のように私を包んだ。私は、私と娘の呼吸を感じていた。それはお互いの呼吸でありながら、一つの生物の呼吸のように思える。イソギンチャクの呼吸のように周囲と己とが分ちがたく深い呼吸であり、私と娘との間の空気は海水のように重くあたたかい。海水の質感を持った空気は、私と

娘の全身に浸み込み、はきだされては混じりあい、お互の体温で更に濃くなつて、又私たちのうちに満ちた。

もう訝しまなかつたが、娘は身じろぎもせず、そこに立っている。私にはそれが、あたかも一つの存在が男と女にわかれて対峙しているもののように思えた。―与えたり、与えられようとはせずに、しかも与え、与えられるもの―それも、血のように、体液のようなものではないか……。・・。

私はそつと両手をのばした。娘の両肩がそこにある。掌をひろげたまゝ、私は両手をずらせた。同じ速さですべる両手が、娘の胸のふくらみを感じはじめた時、私の手は激しくふるえた。前にも述べたように、私は決して興奮してはいなかつた。にもかかわらず、そのまざれもないなだらかさが私を戦慄させた。その柔らみながら隆まるなだらかさは、予感に似ていた。予感が人を説明のできない不安におとし入れるように、それが何処からきたのかも分らずに、私は激しい戦慄に襲われた。

私は随分長い間、娘の胸に手をあてたまま立っていたように思う。その乳房を支えているのは娘の軀であるのに、私の掌は二つの乳房の正確な重さを感じていた。その重さは絶え間なく私の裡に流れ込んで、私を満たせ落着かせた。

それから私は、右手をずらせて下腹にあてた。脂肪に包まれた腸や膀胱のあいまいなやわらかさを掌の下に感じた時、暗く不定形をいらだたしさが私をとらえた。それは愉悦と紙一重のいらだたしさだった。女の内臓にこそ、最も鋭敏な快感が隠されているのかも知れないのに、脂肪はそれを甘美なあいまいさで包んでしまう。その感性の沼のようなあいまいさは、私を狂おしくさせた。私は逃れるように手をそらせた。下腹部の毛は硬く乾いている。私の手がふれた時、娘は軽い吐息をもらした。私の掌は恥骨にそって、しなう。恥骨の硬さが気持よかった。その硬さは私にアマゾンのインディオが使う女性用装身具を想い出させる。火を通した灰色の三角形のその土片には、一面に文様が描かれている。そのうすくみがかれた土片を掌にのせた時、私の掌はその曲面になじみ私は不思議なほどの厚みと重みを感じる。

私は左手を、娘の尻にあてゝ見る。土片から感じた厚みは、確実に私の手の間に存在している。

私の両手の間に在る量。それを感じているのは、まぎれもない私なのだ。何者でもある必要のない「私」そのものなのだ。そして、私の手の間に在るものは、一人の娘である。私はこの娘を、私の服装や財布によつて得たのではない。娘を得たのは私そのものなのだ。二人の間には何もない。私たちは名前も、年令も知ら

ない。顔かたちでさえも、お互にはつきりとは見ていない。それなのに、娘によつて私が今感じているこの深い満足はどこから来るのか？私の感じている自己の存在の強烈な自覚はどこから来たのか？　しいて二人の間に在るものを挙げるなら、それは同意だけである。それも駆け引きなどは始めから考えられない、純粹な同意である。「お互いの存在に対する同意」と云つたら、すでに対立と和解を含んでしまう。「同じ存在である同意」とでもしか云いようのない一体感である。娘が存在しているように私も存在している。というだけのことである。

誇張なしに、私は今生きているのだと思つた。私はそれを実感した。

私は娘の肌が少し冷えたように思つた。私は上衣のボタンを外し、娘を包むようにして抱きしめた。娘は手を私のうしろにまわし、私の胸の中でじつとしていた。

「寒くはないか」

「寒くない」

「風邪をひかせたら可哀そうだ」

「風邪なんかひいたことない」

「……」

私の腕の中で、娘は大きく息を吸つた。私のシャツ

に触れていた乳房は、押しつけられ蜜の波紋のように二人の間にひろがった。

その時、娘はふっと何かに気付いたように顔をあげた。抱いていた猫が、私の気付かない気配を感じて敏捷に身をおこすように、娘は私から少し身を離れた。もう一度大きく呼吸をした。

「夜明けの匂いをする」

と、娘は言った。

「夜明けの匂い？」

私は訊ねた。

「そう。夜明けの匂い。…。夜が終って朝が来るまえに、いつもこの匂いをするの」

「……」

「夜明けの匂いがしはじめたわ。私はこの匂いを持っていたのよ」

私から少し身体を離れたまゝ、娘は言った。生々とした響きがその声にある。不意に娘が私から遠ざかっていくような声だった。

「待っていた？」

「そう。待っていたの」

「夜明けの匂いって、どんな匂いなんだろう？」

私が言うと娘はうふつというあの笑い方をした。私は口をつぐんで、大きく息をしてみた。湿ったような、

夜のあたゝかさと朝の冷たさの混りあつた匂いがした。しかしそれが娘のいう夜明けの匂いかどうかは分らない。私の感じた匂いよりも、もっと精緻で鮮やかな匂いを娘は感じているにちがいない。

私たちは腕をお互いの体にまわしている。私の腕に力を込めれば、私はたやすく娘の軀を再び抱くことが出来た。しかし、娘の言葉をきいた私は、娘の軀をこれ以上抱くことを断念した。夜明けの匂いをかぎとる娘の喚覚は敏感なのだろうし、私は服を着ていた。どんな服だって布地の匂いを持っているだけではなく、昼や夜や仕事や食堂などの匂いさえも含んでいるかも知れない。そんな服を着たまゝ、夜明けの匂いを感じている娘を抱きつづける気にはなれなかった。

「私も全裸だったら」と私は思った。もし私が全裸だったら、躊躇せずに私は娘を抱きつづけたろう。娘の軀をつうじて、私も夜明けの匂いを感じたかもしれない。だが、私は自分の服をとろうとはしなかった。私に勇気が欠けていたからではない。私がネクタイやズボンをとったり、パンツや靴下を脱いで、道端で裸になつても滑稽でしかないだろう。私は娘から手を離れた。私と娘は、もはや同じ存在ではないのだ。娘の軀が遠のいたように感じられる。

私は娘が身につけていたものをとると娘に着せた。

暁闇の中に、白く娘の姿体が浮かびあがった。

どちらからともなく、私たちは歩き始めた。

「いつも夜、外を歩くの？」

「いつもじゃない。でも家にいると時々どうしても我慢ができなくなる。夜が更けてゆく夜明けがせまってくるのが分る。その匂いのなかにいたくて、私は外に出るわ」

私はバスの停留所の近くで初めて娘と対い合って立っていた時のことを想いだした。私の視線を無関心にうけて立っていた娘が、何かに心をうばわれていたように見えたことを。

：娘は心をうばわれていたのだ。ずっと今まで。

私の思いはそこで慄然として已んだ。

私たちは大通りに出た。行手の丘の下にトンネルが黄色い電燈をつけて開いている。灰色のコンクリートの空洞に反映する黄色い光りは、そこだけ霧が立ちこめているように見える。私たちは、トンネルの上の高みに登った。トンネルの周囲は緑地帯になっていて、道のハート型の帯はそこで途切れている。縁の急傾斜を見下ろすと大通りはずいぶんと下に見える。それにもかゝわらず、一ばん近いハート型の緑地帯は私たちの目よりも高い。大通りにちらぼる街燈から湧きあがっている光りの遍満をたゝえた、私たちとハート型の緑地帯との

空間の深さが、私にこの都会の大きさを感じさせる。

「夜明けの匂いがそんなに好きなの？」

「私はそれだけで生きているのよ」

「でも朝になれば、その匂いはなくなるんだろう」

「そう。でも・・・朝になり、昼になり、また夜になるでしょ」

「昼間は何をしているの？」

女は笑った。「あなたは？」

「僕・・・」私は答えにつまった。「・・・そうだな。僕は何もしてないかも知れない。君のように満足して生きている訳じゃない」

「あなたにだって、ビィーダ（生）はあるわ」

「僕には、欲しいものや心配事があるだけさ」

私たちは一つの小さな台石に腰を下ろした。石が狭いので、私たちは身をよせあつて座った。腿と腿を密着させ、内側の腕を交差させた。娘は私のひざに手を置き、私は娘のものに手をかいた。薄着なのに、娘の軀はあたたかい。そんなふうに身体をつけあつて座っている、私には娘の存在が再び身近く戻ってきたように思えた。

「夜明けの匂いがする」と娘が言った時、私は私の手の中にいると思っていた娘が、急に遠のいてしまったように思われたのである。私はさつきから気にかかっていたことを、口に出した。

「君を裸にしたとも僕は何も望まなかった、何も待ってはいなかった。あの時、君に触れながら僕は自分が生きていてを感じていたんだ。本当に生きていることを感じていた。君もそうかと思っていた。僕たちは一つのもののように、何も言わなくても理解し合っていたと思ったんだ。だから僕は何も言わなかった。君の沈黙も、同じ理由だと思っていた。・・・だが君は、ただ夜明けの匂いを待っていただけだったんだね」

「それは待つものじゃないわ」

娘は言った。私には娘の言った意味が、よく分らなかった。待つものではない、とはどういうことだろうか。

だが私は聞き返さなかった。私がなぜ娘を裸にしたかそして娘に触れて何を感じたかを、私は本当には娘に理解させられぬように、娘も彼女の待っている夜明けの匂いと共感のようなものを、私に説明することはできないだろう。

私たちは再び黙りあった。身をよせているも私には娘が何も（考えて）いないのが分る。そして、娘が何かを（感じて）いるのが分る。私の身体は娘の体温を快く感じていながらも、私の心はこだわっていた。

―あの時、娘を全裸にした時、おそらく私はたった一人だったのだ。疑いもなく、私は孤独だったのだ。私が生を実感したのは、その深い孤独の中であった。私

の行為は、徒しかったのではなかったか。見知らぬ乗客たちのように私たちは闇のなかの一つの座席に乗り合わせただけではなかったか。

下の大通りは、車の往き来が激しくなっていた。かわたれ星の光りが黎明とも靄とも見分け難い白さにふと消された瞬間を私は見た。帰ろう、と思った。

「帰ろう。ミルク入りの熱いコーヒーを飲んで帰ろう」
「ええ」

私たちは、元の道を戻りはじめた。大通りに出ると、勤めに出る多くの人影とすれちがった。黒々とした人影は、背中に朝のほのかな明るみを背負って急いでいる。

車は目覚し時計のように騒音を立てて、無理に朝を起こそうとしている。まだ早いので、あいているコーヒー店はなかなかない。

あたりが灰白になると、人々は時々私たちを振り向いて見るようになった。私はただせわしない想いがした。私の刻は過ぎてしまった。街は自覚めはじめ、日常は回復しようとしている。私たちは黙りながら、ただコーヒーを飲むために一緒に歩いている。私はコーヒーを娘におごることで、空しかった行為を清算したいと思っていた。

娘が、まだ残っていた水溜りの中を歩いた時、私の

心には夜の爽やかさがよみがえった。娘は浜辺を歩むように歩く：：・

立ち飲みのコーヒー店を見つけた時は、もうすっかり明るくなっていた。ここは市の中心部にかなり近い。私たちはトンネルから、一キロメートルほど歩いたことになる。店頭に私たちが立つと店の中のテーブルに坐っていた労働者風の男達が、無遠慮に私たちを見つめた。

確かに、あまりに貧しい身なりの黒人の娘と背広を着た日本人の私との組み合わせは不自然かもしれない。しかし、男達のぶしっけな目付きが、その不自然な組み合わせのうちに、私の猟奇的な欲望しか読みとっていないのを感じると恥かしさが私の身内を走った。これから働きに行かねばならぬ男達が私たちを見る目付きには、夜うろついている遊びずきな男たちとは違うみだらさがある。こんな時刻迄あるいていた私に対する羨望と軽蔑の入りまじったみだらさがある。更に、私の連れの身なりの貧しさ故のぶしっけさがある。私は怒りに近い感情がこみ上げて来るのを感じながらも、強いて彼等の視線を無視した。私は店員までもが娘にぞんざいな応答をしないように、娘の注文をきいてから、二人分の注文を店員にした。あとから、もし店員が乱暴を口をきいても娘は傷つかないかも知れない、と私は思った。娘はそんなことには馴れているかも知

れない。傷つくのは私だけなのだ。いづれにしても、人のあいだに出て来た為に、私たちは急にバラバラにされてしまったようだった。夜のことが、随分遠い出来ごとのように思えた。

娘は沢山砂糖を入れて、おいしそうにコーヒを飲んでいる。

コーヒを飲み終えると 私たちにはもうすることがなかった。だが、とにかく私は娘にもう借りはないのだこれですることは、為た。私はすぐに昨夜のことを忘れるだろう。私たちは舗道に出て、みじかい間みつめ合った。

「御馳走してくれて、有難う」

娘が言った。それから、さようならと云うように微笑むと、ふりむいて歩き出した。

私は娘が礼をいうことを期待していなかった。だから、それは思いがけない言葉だった。自分の立場ばかりを考えていて、迂潤にも娘が礼をするなどとは思っていなかった。私は精算したはずなのに、二人の間には精算できないものがあったことに、初めて気付いた。

私は呆然として去っていく娘の後姿を見まもった。私の耳には、娘の足音が鮮かによみがえっていた。私の手には、全裸の娘の触覚が蘇っていた。なだらかに隆まる胸のふくらみにふれた戦慄は、あのときと同じ

強さで私を襲った。娘の乳房や下腹部の柔らかさが、去って行く娘の後姿と重なった時、私の裡に朝のたとえようもなく鮮烈な性欲がほとばしった。それはたれこめた暁雲を破って速かに射す凜烈な朝日のように、私を撃ち、私のうちに充溢した。苦しいほどの性欲だった。私には娘の姿しか見えない。衝動が私をつき動かそうとしている。

私は駆けよって娘を抱きしめようと思った。そして娘を犯すのだ。私は自分を失ったのか。それとも、今が本当の自分なのか。私には分らない。ただ娘を抱きしめたいと希うだけだ。私は夢中で一步、踏み出した。……だが、私がこの朝の都会の中で娘と抱き合ったにしても、娘が私を受け入れてくれるとしても、それから私たちは何処へ行けばよいのだろうか。何処に私達の愛し合う場処があるのだろうか。何処に……。

私は弱々しく立ち止った。娘は振り向かない。私は空しくその後姿を見つめていた。あの浜辺を歩くような娘の足音は、私の欲情の海へ向ってためらいもなく進んでくる女の足音ではなかったか。娘を全裸にした時、何故私は欲情を感じなかったのだろうか。何故、私の嫌悪しているはずの日常が戻ったいま、性欲が突然に私を襲ったのだろう。私は病んでいるのか。熱病のような不測の欲情に灼かれて、苦しくて、私はほとんど立っていられなかった。駆けて行くのだ！ とどこ

かで声がきこえる。朝の騒音と人ごみの中に消えていく娘の後姿を見ながら、私はただ立ちすくんでいる。

洪水

高橋英一

略歴

本名 高橋 英一

ペンネーム 五条 騎一郎

生年月日 一九三三年五月五日

出身地 大分県 竹田市

渡伯 一九五六年十二月十一日

最初の入植地 トメアスー植民地（家族の呼び寄せ）、

三カ月後、ベレーン市郊外タパナンに転居

職業歴 最初農業、一九五七年六月 在ベレーン日本

国総領事館に転職一九七二年九月同館退職、一九

七三年六月在リオ・デ・ジャネイロ 日本国総領事

館に就職、一九七五年八月、在ブラジル日本国大

使館 に転籍、現在に至る。

学歴 北九州大学外国語部米英科卒業

趣味 囲碁

本掲載作品は、一九七〇年パウリスタ年鑑に発表

洪水

「ありがとう」とぼつりと言って、植民地本部へ帰る、ブラジル人職員の運転するジープから降りた桜井徳次郎は、河べりの雑草の茂る細道をゆつくりと歩み始めた。

河向うの黒々と続く原始林の彼方には、丁度雨上がりのあとの、アマゾンを象徴するような夕焼雲が広がっていた。彼は、脂気の抜けたたわしのように、ばさばさに乾いた貧相な髪を夕陽に反射させながら、戦後数年間薬の行商をしていたときの習慣で、いくらか前屈みに歩いている。まだ四十五なのに、既に生活に疲れきった五十代の男のように老けていた。

「あ・お父ちゃん、お帰りーッ」

家の前にいた、九つに夜る次女の美津子が目敏とく徳次郎を認めて小走りに走ってきた。

「美津子かー。そんなに走ったらあかん。危ないぜー。河岸は滑るし、草に足をとられるからをあー」

徳次郎は眼を上げると、弱々しいが、いたわりの声で応えた。

美津子は一日中、父親のいなかったのが淋しかった

のか、近づくと、いきなり腕にぶら下がって「お父ちゃん何処に行つとつたのんで」と、あまえるように訊いた。

「ベレーンや、ベレーンの町に行つとつたんや」

「へーえ、ベレンの町になあ。あたいも行つてみたいなあ。お父ちゃん、いつかつれて行つてえ」

「そうか、町に行きたいか。行きたいやろうなあ。お前たちは町に一べんも行ったことがないからをあ。ほんならな、美津子、ブラジル語をいっぱい勉強するんやで。勉強がよう出来るようになったら、町につれてつたるしそのうち生活が楽になったら、ベレーンの学校にだつて行つてもいい」

「うわーッ、うれしい」

はずんだ声を出して喜ぶ美津子に、彼は心がなごむような気がして、彼女の頭を撫でた。

小径の右手は、叢をとおして直ぐ河になっており、今は丁度引潮で、三メートル近くも水位が下がっていて、によつきりと河から突き出た木の幹や枝に、どろどろに溶けた泥がへばりつき、不気味を姿をさらけ出していた。

左手は整地もされていない畑に、焼け残りの大木がどろどろと横たわっていたり、その向うの整地された僅かな土地に、トマトやキウリが植えられていて、入植して僅か八ヶ月という新しい移住地の状態を物

語っていた。

徳次郎は、病死した先妻の富子によく似ている美津子に愛情を覚えながら、易々として彼女に手を引つ張られまだ果実をつけていない、僅かなバナナやパイアの樹々の立つ貧弱な坂家に帰るのであった。

戸口を入ると、家の中は既に暗くなっていた。奥の台所には、佗しげな薄明るいランプが灯っている。徳次郎は、土間に入ったとたん、何とも言えない憂鬱な気になって、床板の上へ上って行くのを気重く感じた。

彼の背後にかすかを人の気配がした。どきりとして後ろを振少返ると、働き者の長女の栄子が、裸足のまゝ水を汲んだバケツを両手に持って立っていた。

「お父ちゃんだったの」

栄子は十二才で、美津子よりは三つ年上で性格がおっとりしており、長姉らしい落着いた眼で徳次郎を迎えた。

徳次郎は、そつと美津子の手を外すと、黙ったまま床の上へ上って行った。一彼は食卓の前にそろりと身体を引き寄せて座り、ランプの傍で夕食となるまでの僅かな間を、何か心の動揺を紛わせようと努めているような、非常に落着きのない動作で、古雑誌をぺらぺらとめくって拾い読みを始めた。裏の窓からは雨期特有の湿気を帯びた冷たい河風が、間断なく吹き込んでいる。

やがて食事の用意が整って、妻の房江が明夫をつれて上がってきた。食卓には、畑からとってきたばかりの、僅かにピンポン玉の大きさしかない貧弱な黄色いトマトの輪切りと、キュウリの漬物と、昼食のときの残り物らしいフエジョアードしか並んでいない。

重苦しいほどに沈黙した夕食が始まった。子供達はうつむいたまゝ茶碗をかゝえ、まるで餓えたように忙しげに箸を動かしている。

「あんた……今日は、朝からどこに行っちよつたの？」

房江だけが、まだ食事の手をつけずに、訊いた。

三人の子供は、避けがたい決定的な瞬間がきたとも思うように、どきりとして房江を見上げ、憶病な小動物のように不安気に徳次郎の方を向いた。ランプの明りを受けて、子供達の顔は蒼白であり、房江の眼さえも眼窩がぐっと落ちくぼんで、眼尻だけがいやに吊り上り気味の険悪な顔に映っている。

「ベレーンや……。ベレーンに行っちよつたんや」

徳次郎は、気乗りしない態度で弱々しく応えた。

「ベレーンだって？だれと何をしに行ったんですッ！あんな遠い所に……」

房子はすかさず気色ばんで訊いた。

「いや、一人で行ったんや。組合の船に乗って、町の市場調査になあ」

「へん、市場調査？ この忙がしいのに、何が市場調査

をもんかね。そんなこと言うてもうちには野菜だって、生産物はなんぼもないじゃないの。・トマトもキウリもアルファツセも、いくらもないじゃないの。キャベツだっていくら肥料をやっても、赤ん坊の頭の大きさにもならないし、おまけに毎日毎日雨ばかり降って、腐ったりしてしもうて・・・・」

「それは、いまは雨期やから、しょうがないやないか・・・・ベレーンの野菜市場でなあ、昔の移民さんにきいたらいまが野菜は一番出来にくい時季やと言うとった。そやけどな、野菜が少ないから高値になって、こういうときに少しでも余計に作った者は、大金を儲けるチャンスがある。うちらは入植したばかりやし、まだ経験がないけど、こうしてだんだん経験を重ねたら、来年はもつともつと楽になると思うんやがな・・」

「何をのんきをことを言うちよるんね、この人は・じゃから、関西の人は嫌いなんじゃ。朝から晩まで、一日中仕事を放ったらかしにして出てかつて、何が経験なもんかね」

「ちがうったら、遊びに行ったんやないちゆうのに。なんば言うても判らんのやなあ」

徳次郎は、房江のヒステリー気味の甲高い声に、半ば締めたようにぼやいた。

彼は、房江の陰悪な眼と、・今後の成り行きを心配して怯えきった子供達の眼を意識して、いやが上にも

貧困という敵の重苦しさを感じた。彼は、何時間もかけて議論したあとのように、急に疲労と咽喉の渴きを覚えて、傍の薬缶を掴むと、茶碗にお湯を注ぎ、何もかも忘れてしまおうとでもするように、がぶがぶと音を立てて飲んだ。

F植民地は、アマゾン河口都市ベレーンの東南、陸路約五十キロの地点に在り、支流F河の沿岸約三〇キロに亘るヴァルゼア（低温地帯）を利用して、米作を主作とした、営農を行うべく計画された。ブラジル連邦政府直営の植民地であつた。F河の水は、海水の干満に従つて増減するし、しかもこの辺りは塩水に侵されなかつたので、水に恵まれた米作の適地と看做されたのであつた。

日本人移住者は、植民地本部から河岸を東方へと、第一次が十四家族、第二次が八家族、第三次が十一家族というようにして、順次にほぼ二ヶ月毎に入植していった。

桜井徳次郎は第二次入植で、植民地本部から四キロ離れた上流の地点に配耕されていた。耕地には、植民地当局が小さい坂家を建てゝおり、整地こそされていなかったが、約1町歩の土地が伐り開かれていた。徳次郎達はよく焼けきれなかつた、黒焦げの太木を隅に除けたりしてやつと畑らしいものを作り、手初めに野

菜を蒔いたものであった。彼は農業の経験は浅いが、房江が九州の農家育ちであったから、着伯後三、四ヶ月もすると、小量ながら野菜を出荷することが出来るようになった。

やがて十二月に入ると、野菜が出来にくいという雨期になった。雨期といっても、アマゾンの雨期は大したことはないと聞いていたし、実際その頃は、日本の梅雨のように、朝からぶっ続けで一日中降るということはなかった。大抵は一日のうち午後一時頃から三十分か、長くて一時間ばかり降るだけで、あとは曇りか、或いは場違いのように、カーツと灼熱の太陽が照りつけるのである。

ところが、入植後初めての新年を迎え、一月も半ばを過ぎると、本格的な雨期になって流石に雨量が多くなってきた。朝からどんよりと曇っている日があるかと思うと、必ずといっていい位、午後一時頃になって、滝のような大粒の雨が降って来た。その雨はまるで叩きつけるような土砂降りで、家の周りの土地や河は一寸先も見えなくなるのである。この頃になって、土地の現地人達は「今年は雨が特に多いのう」ともらしていた。

一月下旬、土地の新聞に、アンデス山脈の雪解けによる増水と、降雨量が異状に多い旨が報じられた。そして二月中旬には、アマゾン中流のバイシヨ・アマゾー

ナス辺りで、増水による家屋浸水、倒潰、流失が続き、更に多数の牧牛が流される程の十六年振りの洪水と伝えた。

アンデス山脈や、ギアナ山系から集った水は、アマゾン河を流れて大西洋に達するまでに約三ヶ月を要するといわれる。このように上流が洪水と報じられている頃はP植民地はそれほど影響は感じられなかった。しかし三月になると、いよいよP植民地の状況は悪化してきた。

雨が午前中降ったかと思うと、同じ日の午後にも降ったわへ時には続いて夜中にも降ったりして、時刻に関係をく無差別に降るようになってきた。畑は低地湿地である上に、連日大雨が降ってじめじめしており、作物は甚大な被害を蒙ることになった。キウリは、花が咲いたかと思うと、ぽろりと落て了い、やつと実がついたかと思うと、小粒のもので、それもほんの僅かしかない。トマトは、人からも聞いてジュールペーバという茄子科の植物の台木に接木までしたのに、その効果もなく青枯れて次第に倒れてゆく。雨にたゝかれたとき、跳ね返りの土が葉に当って腐ったりしないようにと、籾穀をまいて育てたアルファッセは、まるで塩をふって漬物にでもしたように、くしゃくしゃにいじけた葉になって、惨憺たる状況であつた。

心をいらいらさせるような雨の日が続き、その日も

朝から小雨が降っており今日一日もまた仕事になりそうにない、と判断したからこそ、徳次郎は組合の船に乗ってベレーンに出かけたのであった。彼は、このような時季に、市場にはどのような野菜が並んでおりどの位の値がついているかと、関心を深めていたのである。房江は徳次郎が朝から晩まで黙々と働いてさえいれば機嫌がよかったが、徳次郎にしてみれば、菓の行商の経験があり生活態度をどうしても商人の眼で見ることになって、ただ慢然と野菜を作り、その野菜がよく出来ないからといって、手をこまねいているわけにはゆかなかった。そうしてベレーンに行ったことで、彼女に嫌味を言われて嫌な思いをし、結果的には彼女の云うように、がむしやらに働ききえすればよいのであるが、兎に角その結果、彼はこのような雨期には野菜が出来なくて、どのような野菜でも、出荷さえすればよい値で売れるということを確認得た。彼は嫌な思いをしたが、それが非常に参考となり励ましとなり、心の支えとなったのである。

雨が小降りになると、徳次郎はいそいそと麦わら帽をかぶり裸足で裏の畑に出た。後ろから美津子がついて来るのを知っていたが、黙っていた。いつもなら「風邪をひくからあかん。子供は外に出るんやない」といって、家へ帰るようにと、半ば強制的に命令するよ

うになるのだが、その日は違っていた。労働力が少いうえ、毎日雨の日が続いて、働く時間も少いので、子供ながら仕事の手助けになると思っただので、自然に黙認した形になっていた。

「美津子、寒くないか？」

彼は倒れた茄子を立て直しながら云？た。

「ううん、ちっとも寒くないわ、日本に居たときは、もっと寒いときもあつたから……」

美津子は、傍の水はけの悪い箇所を、鍬でいじりながら答えた。

「うん、お前はえらいなあ。美津子えゝか人間はなあどんなに苦しいことがあつてもな、我慢して頑張るんですよ。一生懸命やればな、そのうち神様だって助けてくれる。今は時季が悪うて雨ばかり降って、野菜が余り出来んけどな、この茄子やって、ベレーンじや相当いゝ値がついとる。そのうち、うちだって野菜がいっぱい出来るようになるし、そうなると相当金が儲かるんやからな。そやから雨が降つとるからって、なまけたらあかんのやで、いまにきつといゝときが来る」

彼は自分自身に言いきかせるように、ゆっくりといくらか口数多く喋った。こんなことは、僅か九才の子供に話してもしようがないような気もしたが、反対に、抑圧されたようにこのまま黙って、心の中にしまっておれないような気がして、いつの間にか口からとび出

していたのであった。

四月に入ると、雨量はさらに多くなってきた。朝から晩まで、終日どんよりと曇っていてその間に必ずといつていゝくらい、何度も雨が降った。小雨になると、それを待ち受けていた一家の者は、畑に走り出て仕事をした。

雨続きのために、キャベツは拳の大ききで、既に表面が黒くなって腐り始めていた。トマトは葉をグニヤリと垂れて、実は青いまま割れていた。キウリは支柱を上りきらずに、葉や茎が黄色に枯れてゆく。畑に深い溝を掘っていくら水はけをよくしても、降り続く雨にはかなわなかった。

働けども働けども、自然は人の努力を拒絶し続けた。連日降り続く雨は、次第に人の気持をも、重苦しく耐え難いものにしてゆく。房江は、襲いかゝる自然の脅威に挑戦し反撥するかのように、風邪をひくかマラリアに羅りそうなほどに、風に吹かれ雨に濡れても、髪を乱して一心に働いていた。小量の野菜でも、市場に売出さないことには生活が成り立たないのであった。しかも、日本から来てそろそろ一年になろうとしており、こゝらで何とか打開策をたてないことには、どうにもならない。

という焦りも覚えるようになっていた。

房江は、いつの間にか徳次郎に相談することなく、彼女の身の廻りのものや、子供達の衣服までもブラジル人に手離して、生活費に当てゝいた。日本から持つて来た物には、それほどめばしい物はなかったが、ハンドバックやスーツケース等は思ったよりも高価に売れるのであった。しかし、それ等の物を売るにも限度があった。携行荷物はそれほど多くはなかったからだ。

雨上りの夕方、房江は遠い下流の植民地事務所に出かけて、職員相手に慣れぬポルトガル語を駆使して、腕時計を売ってきた。家に帰る途中、彼女は金を得た悦びを感じるよりも反対に彼女の腕から片時も離れたことのない時計が惜しくてならず、何か心の中の大切な物が失われたような淋しさを味わった。それで、こうまでして生活しなければならぬ、自分の家族や環境が情けなくなり、どんよりと低く垂れ籠めた曇り空を見上げて嘆息した。

徳次郎は家の前で、房江が帰って来るしよんぼりとした姿を認めたとき、何か売ってきたらしいことは察しがついたが、何も訊かないでいた。何か一言でも問いかけることによって、これまでにどうにか均衡を保っていた重苦しいほどの沈黙が、突然破壊されそうな気がしたからだ。しかし、彼は彼女に感謝するよりも、これであと何日間かはどうか食いつなげ、生活の均衡を保てると思って、ほっと安堵した。

相変わらず薄暗いランプの下で、沈黙した夕食が始まった。皿の触れ合う軽い音と、裏の叢で鳴く虫の音以外は全く静寂であつた。徳次郎は食事しながら、眼の前の戸棚の上にある目覚し時計を心細げに見て、あれが売られるのは何時の日であろうか、などと思つた。実際、今の状態では、先の見通しは真暗であつた。雨期が終つても当分の間は売り喰いをしなければならぬといことは判るがあの目覚し時計が売れてしまつたとき、この家の中には換金出来そうな物は全くなつてしまふような気がするし、それから先は一体どうなるのであろうか、自分にもよく判らない。子供達には、野菜さえ出来れば金儲けになるからと、出来るだけ明るい気分は引き立てようと努めて言いきかせてはいるが、この連日の雨では心が滅入るばかりで、どうしてよいかさっぱり判らない。天災だと思えば仕方のないことであるが、着伯後僅か1年で受ける経験にしては余りにも痛手であつた。先の見通しが立たないばかりに、気はいらいらするばかりで、日が経つに従つて自信を喪失するばかりである。

外は、また雨が降りだしたようであつた。板壁にピシピシと横をぐりに降りつける雨とともに、窓の隙間から冷たい風が吹き込んでくる。椰子の葉は、まるで磯風でも押し寄せてくるかのように、苛立たしげな音を立ててざわめいていた。

徳次郎は、床板に伸べられた煎餅蒲団にごろりと横たわった。

「ねえ、あんた……」

間もなく台所から上ってきた房江が、重苦しい語調で彼の背に呼びかけた。

彼はへまたか……Vと、うんざりした気持と同時に、反射的にへ今日は何かあるぞVという決定的な瞬間に迫られたときのような、どきりとした気持でもつて、「なんや……」と言いながら、房江の方を振り返った。房江の顔は、床に置いたランプの明りを下からまともに受けて、まるで能面か幽霊のように蒼白く浮いていた。唇だけがいやに大きく、両眼は薄暗い影にくまどられて、陰気に見える。

「あんた……。わたしは、日本に帰りたくなった……」
彼女の唇から、ぽつりとこぼれた。

「な、なんやって？　日本に帰る？」

彼は、何時かはこういう最悪の事態も起り得るかも知れないと予想したこともあったがそれがいま、実際に房江の口で言われたのでびつく少してしまった。

「わたしは大分考えたけど、あんたと別れるのが一番いいように思うんです」

「すると離婚したいちゅうんやな」

「そうです。明夫だけつれて、日本に帰ろうと思うちよるんです」

「なんでまた、急に今頃になって、そんなことを言い出すんや……」

徳次郎は、ひよつとしたら彼女が大切な物を売ってきたからこんなことを言い出したのではないか、というのを頭の中にちらりとかすめながら、むくりと蒲団の上に起き上ると、詰るように問いかけた。後ろに寝ている栄子と美津子は、向うをむいてはいるが、今しがた横になったばかりなので、二人の話にじつときゝ耳を立てゝいるに違いない。彼は娘達の眼を背に意識しながら、幼い子供にまで、痛々しい思いをさせる自分を、情けなく思った。

「わたしは疲れたんです。なんぼ働いても働いても報われないし、こんなことなら、日本に帰る方がいゝ……」

房江はそう言うと、突っ伏して、両手を顔に当てゝ泣きだした。

現在の困窮状態は、彼の家ばかりではなくて、この植民地全体の問題であつたが、彼は最近の降り続く雨と生活苦のために自信を喪失しつゝあつたので、いま急に房江に離婚話を持ち出されて泣かれて見ると、生活苦と自信喪失によるみじめな敗北感が錯綜して、どうしてよいか判断に迷つた。

「泣いたって、しょうがないやんか……」

彼は途方にくれたようにぼそりと言うと、房江の傍にだらしなく寝込んでいる明夫を見た。明夫は徳次郎

と房江との間に生れた唯一人の子供であるが、その瞬間、明夫が他人のような遠い存在に思えた。

離婚ということが、軽々しく言い出されるべき性質のものでないことは、当然房江にも判っているであろうが僻いてむせび泣いている彼女の背中を見てみると、彼女が言いださずにはおれなくなった心情が判るような気がして、彼は益々深刻になってきた。しかし夫婦の仲というものは、他人には決して解らないほどのしつかりとした強い絆で結ばれている筈だから、こんな具合にしてあつさりと瓦解したりしてはならないと思った。

「いま、お前が日本に帰ったら、後に残る子供が可哀そうやないか。せつかく、栄子も美津子もお前に馴れてきたというのに……」

徳次郎は、肩を丸めて眼をしょぼしょぼさせて言った。こんなことを言った位いで、房江の決心が動くとは思えなかったが、ともかく救いを求めるように、何とか言わずにはおれなかった。

彼は、そつと二人の娘の寝顔をみつめた。子供たちは最初のうちこそ、びくびく臆病そうにきゝ耳を立てゝ、両親の話を開いていたであろうが、今は全く眠ってしまったていて無邪気を軽い寝息を立てゝいた。彼は、「わたしが若いのに病気になったりして、幼い子供達が可哀そう。わたしが死んだら、栄子と美津子を

よろしくお願い致します」と、農協病院で哀願しながら死んで行った富子の顔を思いだした。富子はいわゆる美人ではなかったが、気立のやさしい農村の女であつた。彼女は、彼が菓の行商で彼女の家立ち寄つたとき、控え目にそつとお茶を出してくれたのだつた。三回・四回と訪問が重なるうちに、どちらからともなく求め合つて結ばれたのである。彼は結婚後、農業にはなかなか馴れなかったが、子供が二人も出来ると、もうその土地の者になりきることが出来た。そうして平凡だが幸福を日が続いていたのに僅か二ヶ月余の入院で富子が他界すると、残されたものは娘二人だけであつた。養父母は彼にこのまゝ残つて欲しいと希望したが、富子が死んだ後は心が抜けたようになって、何もかも張合いをなくしてしまつたので、家の整理が終つたら娘二人を連れて関西に引揚げ、新しくやり直そうと思つてゐた。房江との縁談が持ち上つたのは身辺整理が一段落し、精神的にも落着きを取り戻した半年後であつた。房江は、隣村の女で気の強そうな女であつたが良く働くという評判であつた。彼は土地の有力者の紹介で、房江と見合をしたとき、彼女を好きでも嫌いでもなかったが、彼女が先妻の富子よりはいくらか大柄で身体が丈夫そうだったので、二人の子供さえよく育ててくれれば結婚してもよいと思つた。そして話がスムーズに運び、再婚してみると、子供達は案

外早く房江に馴れた。しかし、房江の家は、田畑が少いうえに、彼女の両親をはじめ、長男の家族も同居していたので、徳次郎はいずれは街に勤めを求めて独立しなければならぬ立場にあった。戦後も十二、三年して、日本もやつと復興しつゝあつたときである。

「ブラジルへ行こう」と言い出したのは房江であつた。複雑で煩わしい家庭生活と、はつきりした見通しのつかない生活を続けるよりは、思いきつて外国に移住し、初めからやり直そうと云うのである。しかし、彼は房江にすゝめられたから移住する氣になつたのではなかつた。彼自身も、このまゝでは嫌だし、なんとかしなければならぬ、行ける所なら何処にでもよいから行つてみたいと思つていた矢先なので、彼女に言出されると、直ぐにその氣になつたのであつた。

考えてみると、彼の人生では、先妻富子との幸福な生活と二人の娘の出生が、彼の最大の喜びであつたような氣がする。その後、宮子の死という最悪の悲哀に直面し嚴肅な人生の岐路に立たされもした。が、房江との再婚は、波打際に打ち寄せる大波小波の様に新しい希望を抱かせる一つの転機でもあつた。間もなく、明夫が生れると、再び幸福を取り戻したような氣がしたものだ。そうしてむかえたアマゾンへの移住は、よりよい幸福を追求するための彼等の最善の方法ではなかつたか。

徳次郎は、房江がいま離婚したいという気持ちが判り過ぎるほどよく判った。彼女は貧しい農村育ちではあるがこれほど苦しい生活を経験したこともないであろうし、これほど人生の挫折感、絶望を味わったこともない、であろうからだ。けれども、彼は、八生活は苦しいが、その苦境を乗り切ってこそ、真の幸福が得られるのだVと思い到り、どうしても離婚はしてならないと思った。

「生活は苦しい。それに、今日もお前が何か物をブラジル人に売ってきたことも、俺はちゃんとは知つとる。だけどやな、苦しいのはうちだけやない。みんなも困つとるんや。みんな一生懸命死にもの狂いに働いておるんやそれに、こんな生活が長いこと続く筈はないきつと、よくなる。もうしばらくの辛棒や」

彼は低い声でそう言いながら、咽び泣いている房江の肩をそつと撫でた。

洪水になったのは、夜も更けた二時頃であつた。徳次郎は最初、何事が起つたのか判らなかつた。房江に離婚話を持ち出され、その問題に翻弄され、したゝかに疲れていたのも何か嫌な夢を見ているような気がしたのだ。

外は、相変らず風を伴った雨が降っているようであつたが、河の水音が異様であつた。いつもは、河の

水音は家まで聞えないのに、その昔が前庭の方に迫っていて、ざぶざぶと芋を洗っているような異様な音で身近に聞えるのであった。

「おい、みんな。何か、水の音がするぞッ」

徳次郎は、落着きのない声で叫ぶと跳ね起きた。栄子と美津子が吃驚して起き上り、怯えた明夫が突然、大声で泣きだした。

彼はランプを手にして、表の戸を開けた。すると、ゴーツというすさまじい音を立て、河が荒れ狂い、濁流が渦巻いて眼前に迫っていた。彼は一瞬、棒立ちになり、畑の作物が流されてしまうと思った。日本の台風のととき家屋の浸水、倒潰、流失を何度も見た経験があるので、余りの驚ろきで、不気味な濁流のために、家も人も一度に押し流されてしまうのではないかと戦っていた。

床まで浸水した恐怖の夜が明けた朝は、雨がぴたりと止んでいて、意外にすがすがしかった。嵐の後の静けさというものがこういうものなのか、椰子の枝がヘシ折れていたりしている姿は痛ましいが、全く静かであつた。

徳次郎は啞然として畑の被害状況を見廻っていた。僅か三、四時間の冠水であつたが、丹精して作った野菜は殆んど流され、残った少数の野菜も泥だらけに

なつて、ほぼ全滅の状態であつた。

彼はぼんやりと振り返つた。すると、家の直ぐ傍で、房江が水溜りの畑を鍬で掘っていた。いつの間にか、長女の栄子も手伝っている。彼は感激した。無言で働いている房江が「たつたこれだけのことでへこたれたまるかね。さあ、元気を出して働きましょう」と言っているような気がした。彼女が、昨夜泣いて離婚を訴えた同一の女とはどうしても思えない。それ程自然で日常的な姿であつた。彼女は、子供を連れて日本に帰る不安とか、将来に対して不利だとも思つて思い直したのであろうか。それとも、洪水で何もかも失つた徳次郎に同情したのであろうか。彼は房江の変心を意外に思ったが、兎も角その光景に安堵した。

するとそのとき、河の方で、「あーッ！」という美津子の悲鳴が上つた。

「ど、どうしたんヤツ？」

徳次郎はそう言つて、反射的に走りだしていた。家の傍に居た房江も、その瞬間に鍬を放り投げて、走り出すのが見えた。美津子は河の中に突き出た小枝に掴つて、流されまいと必死にもがいていた。遊んでいて、道端にまで減水してそれから一向に減らない水に、足をさらわれたようである。

房江がいきなりぎぶぎぶと水の中に入つて、腰の辺りまで浸つて行つた。彼女の動作は素早く、一端頭ま

で浸ってしたゝかに水を飲んでぐつたりとなつた美津子の身体を、がつしりと抱き寄せると、直ぐに庭に上ってきた。

「だ、だいじょうぶか？」

駆け寄つた徳次郎は性急にきいた。

房江は水を飲んでぐつたりとなつた美津子を、庭先の板の上に横たえると、胸に両手を当てゝ落着いた態度で人工呼吸を始めた。

「だいじょうぶやろか……」

徳次郎は蒼白な美津子の顔をのぞいて、神に祈るように呟いた。

髪の毛を乱した房江が、ちよつとばかり手を止めて、黙って彼を振り返ると、自信ありげにこつくりとうなずいた。

雲間から洩れた薄い陽が、みんなの身体に柔かくふり注いだ。

断 絶

則近正義

本掲載作品は、一九七三年、コロニア文学二〇号に発表された。

◎ 作者はモジ・ダス・クルーゼス市 在住、 職業は造園業 短歌人として、往時「椰子樹」で 活躍したことがある。

断絶

父が最初の発作で卒倒したのは、十二月の中旬、丁度クリスマスの一週間前の甚だしく蒸し暑い日の午後であつた。鶏卵処理場の薄汚い壁に掛かっている日本製の古い寒暖計は、午前十一時既に三十度を越していた。産卵全盛期に入つたばかりの二千羽の成鶏は殆んど一日中餌にはろくに見向きもせず、水だけは驚くほど多量に飲んだ。

鶏達はみんな両方の翼をだらりと投出しだらしない恰好で地べたに腹這いとなり、喉を申し合わせたように一斉にひくひく痙攣させて息苦しそうな呼吸をしていた。この日の最高温度は三十四度を記録し、脱肛で七羽の犠牲鶏を出し、産卵率は前日に比較して一、二%の減少を見た。

僕はその時育雛舎の中で、今朝方僻化場から届いた一千四十羽の雛にその日の最後の餌を与える準備を整えていた。木炭ストーブを燃やしている育雛舎の中は温度・湿度共に少々上昇気味で、顔がほてるほど暑かつた。漸く十数枚の新聞紙を雛を一羽も下敷にしないうようにひどく時間を掛けて敷き終り、餌を古新聞の上にはら撒いてやろうとした時であつた。その異様な

声を僕が耳にしたのは。

声は鶏卵処理場の方でしたようであつた。「わあ！」とも「おーい！」とも聞こえ、母の声のようにも、又父の声とも聞こえた。声に驚いて雛達は、瞬間、号令を掛けて並べたように一斉に地面に跨ってしまった。餌のバケツを提げていた僕は、立ち尽くして息を飲んだ。

「雅樹イ！ま、ま、雅樹イ！」

今度のは、正しく母の声だつた。甚だしく慌てた声であつた。一千羽の雛達はもう一度吃驚して、今度は隔板の隅々に綿の山のように幾つかの白い塊となつて折重なつた。僕は無意識でバケツを乱暴に地面に投げ棄て、育雛舎から出た。

鶏卵処理場の中に駆込んで見ると、痩せぎすで背の高い父の体に小柄を母が遮二無二抱きついている姿が、僕の眼に止まつた。

「ど、何うしたの……」

「早く、雅樹イ、早く！」

母は両足を広げて踏ん張り、今必死に父を支えているのだ。不図気が付くと、父の両手から白い液体の雫がきらきら午後の室内の光線を反射させて、絶え間なく鈍い速度で落ちている。雫は、父のズボンに垂れ落ち、ズボンの膝から下をべっとり濡らしている。側へ近寄って見ると、父は左右の両手に一個ずつ握り潰ぶ

した鶏卵を後生大事に持って突っ立っているのだ。父は口を少年のように無邪気にぽかんと開け、これも矢張り大きく見開いた両眼は、空虚ろで、何処を見ているのか見当がつかない。焦点のない父の眼は、寸義も動かないでいる。瞬きだにしない。辺りに嘔吐を催すほどの生臭い卵白の臭いが立ち籠めている。

「なにしてるの、雅樹。早く、早く、父さんを……、寝台へ！……」

ひどく掠れた母の声だった。俄然僕は我に返り、材木のように固い父の軀を横倒しにして両手で抱えると、大股で、足取重く、走って鶏舎から家の方に向った。母も肩で大きく息をし乍ら、走って僕の後から従いて来た。

父の軀は案外重く、意外に冷たかった。

炎天下のアスファルトの街を、僕は尻をサドルから離し、尻を頭よりも遥かに高く上げて自転車のペダルを漕いだ。顔中から噴き出る汗が、顎からぽたぽた落ちた。僕は魚類みたいに口をぱくぱくさせて息をしていた。荒々しい息をしながら僕は、先刻から訳の分らぬことを口走っている。

「はあ、はあ……父さん、死ぬな！……はあ、はあ……父さん、死ぬな！……」一体、父の身の上を僕が心配したことが、果してこれまでに一度でもあっただろうか。父は、今死にかけている。こうやって医者を呼び

に来てゐる間にも、先程僕が寝かせて来たあの寝台の上で、今の今父は息を引き取っているかも知れない。不思議なことに、僕の両眼は、涙が溢れ出る寸前の状態にあつた。永い年月、何時も同じ屋根の下で暮らした乍ら、さながら仇同志のように反目し、憎悪し、傷付け合つてばかりゐる父と僕なのに、矢張り血の繋りは争われないのであろうか。これほど僕を慌てさせ、「死ぬな！死ぬな！」と咳き込んで呼びやめぬ今の僕は、果して正気なのであろうか……。

僕は街路樹に自転車を投げ棄てるように立て掛け、ネルソン医師の広い自動廻転式ガラス扉のある診療所に飛び込んだ。僕は汚れた仕事着のまゝで来たこと、靴も履き替えずに来たことに、漸くこの時気が付いた。

寝台の縁に上品を科を作つて浅く腰掛けたネルソン医師はおしの如く押し黙つて、念入り過ぎるほど念入りな診察を続けている。伸びにくい固くなつた父の手を執つて脈を調べ、両眼をこじ開けて眼球を覗き、口腔の温度も計った。しなやかな白い女性的な手で医師は、血圧器の黒い帯を畳み乍ら、「全く、恐れ入りました。血圧が、二五〇も、あるんですからな。意識がなくなるのは当然ですよ」誰に云うともなく呟き、父の頭から足先まで何回も眺め廻し、軽く布団を元通りに直し、つと立上つた。

「先生。大丈夫でしようか……」

適当な距離を保って遠慮勝ちに側に立って見ていた母が、干乾びた声で聞いた。が、医師は、それとは全く無関係の返事をした。

「あの一寸、恐れ入ります……。コップに半分、砂糖水を作って下さい」

母に振向き、広げて見せた親指と人指指ととの間隔で水の分量を示し、医師は再び寝台の縁に腰を下した。ややあつて、医師の矢継早の質問が始まった。父は喉の乾きを訴えはしなかったか、疲労や頭痛を感じなかったか、怒りっぽくないか、尿の回数が多くないか……、医師はふだんの父に就いて何も彼も正確に知り尽くしているような訊き方だった。やがて砂糖水を手にした母がおろおろと部屋に戻って来た。母は恭しく捧げるような所作で、コップを医師の手に渡し乍ら、訊いた。

「あのう、先生。遠くに嫁いだ娘が二人いるんですが、呼んだ方が宜しいでしょうか知ら」

「左様ですか。念の為に、知らせて上げたら良いでしょう」

余り興味のない顔付きで母に素っ気なく答え、ネルソン医師は平素の医師らしくないや乱暴を手付きで砂糖水を半ば強制的に、父の口の中へ注ぎ込んだ。父は最初一寸むせたが、やがてごぼごぼと嗽のような

軽い快い音を喉の奥で立てゝ全部飲み込んだ。飲み終った瞬間、父は軽い舌打を一つしたようであった。母は手早く前掛けを外し、痩せこけた父の顎の周りを拭いてやりに行つた。医師は膝の上で処方箋を書き始めた。

ベルが短かく鳴つた。風のない夕暮れであつた。西空で先刻までぎらぎら燃えていた巨大な橙色の太陽は、既に沈んでいたが、気温は些かも低下する気配はなかった。

僕は残光が幽かに明かるい鶏舎の中にいた。撒餌を鱈腹食べ終つた鶏達は自分々々の寝場所にそれぞれ落着いてくつろぎ、僕は最後の採卵を滞りなく終え、家に帰る準備を急いでいた処だ。仕事が片付いた途端に、僕は何故か妙に父のことが氣に掛かり始めていた。ベルが又鳴つた。

鶏舎から直接家の表へ出ると、そこに屯している三人の人影を認めた。みんな顔見知りの人達だった。僕が近付いて行くと、

「おお、雅樹君。精が出るのう。全く、今日の暑さは何うじゃ。処でよ、雅樹君、親父さんの具合は」

ポルトガル人独特の巻舌の発音でマノエルさんが、三人の誰よりも先に口を開いた。恰福の良いマノエルさんのどら声は、厭でも遠くから聞こえる。

「ご心配、有難う、五時半頃、僕が覗いて見た時には、未だ意識が戻ってなかったんです」

「そりゃ、心配だ。不可んな。入って見せて貰うぞ」

「どうぞ、母が部屋に居ますから。妹達も来ています」

自分の家にも入る調子で気さくにベランダからどこか入って行くので、結局僕は、彼の巾の広い遥ましい背中と話す恰好になった。

「注射！入って良いかね」

K薬局の痩せっぽちの二世店員が、待ち草臥れた不満を顔中で表現して、性急な声を出した。

「入り給へ。御苦労さん」

二世青年は甲高い口笛をおちよこちよいに途切れ勝ちに鳴らし乍ら、小走りにマノエルさんの後を追った。僕は後戻りを余儀なくされ、もう一人待っている人に僕の方から声を掛けて近付いて行った。

双方歩み寄り、固く握手を交した時、街中の街燈が一斉に点いた。何時も乍ら、ぞっとする冷たい手だ。然も彼は何時も手を容易には離そうとしない。街の屋並の上に漂っていた余光も次第に薄れ始め、気温も漸く下って来た感じになった。

「実は、ですね。今日はずうっと一日中、事務所でお待ちしてたのですが、はい」

僕は彼との約束を、今日という今日は、全く迂闊に忘れてしまっていた。

「処で、ですね。さて今度は、何時頃に……」

「何とも言えないね。父の病気の方が……」

「はい。ご尤もです。左様ですとも。大変ですねえ。御心配ですねえ。全く」

この時、ジャイル氏独特の癖の揉み手が始まった。商談が円滑に進行しない場合必ずやり出す、彼の癖だ。彼の話を半ば上の空で聞いていた僕は、次第に不愉快になって行く自分に気付いた。胸がむかついて来た。すると父の病気のことが増々気になり始めた。

ドアをそつと押して父の寝室に入ると、強い薬品の臭いがすぐ鼻に来了。電燈が既に点っていた。僕的眼は至って自然に何よりも先に寝台の上の父を見た。父は、頑として睡っていた。

四人は父の寝台の片側に行儀良く並んで腰掛けていたが、僕が入ったので雑談の声が途切れ、僕の方を一斉に見た。母と妹達三人の泣き腫らした六つの眼は末だ美しい桜色に潤んでいたが、僕の予想に反してそれぞれ澄み切った明かるい眼差しをしていた。その眼差しに接したことが、僕の心を幾分楽にした。

「雅樹君よ。親父さん、未だ眼を醒さんのう」

「……………」

返事の言葉に窮した僕は、困惑の眼を母に振向けたが母も同様に眼を逸らし、睡っている父の顔に眼を落

とした。マノエルさんは部厚い節くれ立った手を睡っている父の額に当てた。が、父の顔は微々たる反応も示さなかった。

みんな黙り込んでしまった。暗い不安と絶望の翳が、又みんなの顔に拡がり始めた。これは不可ん、と僕は思った。一刻も早く、何か喋らなくちや……。

「もう、半時間……、半時間だけ待って見ようと思うがマノエルさん」

「そうするが良い」

「それでも駄目なら、もう一回医者……」

「そうじゃ、そうじゃ。おれや、ちよつくら家に帰って来るとするよ。半時間程したら必ず戻って来るからう」

あっさりした軽い握手を一人々と交し、未練を少しも残さずとつと出て行つた。

「夕飯にしようよ。遅くなっちゃった……」

母が偶然思い出したように提案した。疲れたような弱々しい声だった。その時であった。父が、低い呻き声を洩らした。みんな息を呑んだ。みんなの眼が父の顔に集中した。枕下にぶら下げてある時計が、矢鱈にせわしげな音を立て、秒を刻んでいる。父が日本から持って来た自慢の懐中時計だ、ややあって、父は両眼をぱつと見開いた。

それから一人きりで上半身を起こし、頭を二三回横

に振って、

「頭がふらふらする。おかしいな。俺や、何時寝に来たんじやろ」

と呟いた。舌がもつれていた。更に、数回頭を振ってから、部屋中を見廻わし、

「おや、佐代子、何時来たんか。何だ何だ、道子、お前も来とったんか。こりや、何うしたんだい。何ぞ変ったことでも……。それより、今、一体、何時だ。おや、義歯をしたまんま寝とつたらしいぞ。変てこなことばかり、あるもんじや。誰ぞ、おれにお茶を持って来て呉れんか」

母は眼をぎよろつかせ唯々突つ立っているばかりだ。道子も佐代子も似たような痴呆の表情で、物も言わず、身動きだにしないている。三人の眼から前後して白く光るものが落ち始めるのを、僕は見た。勿論、僕の両眼にも同じ白いものが溢れて来た。

「あゝ、便所に行きとうなったわい。おっと、どっこいしょ！」

父は止むを得ず、誰の手も借りずに寝台の上に起き上った。

二

一寸、散歩がてらに髪をつんで、薬局に薬を取りに

行つて来るぞ、と母に告げて街へ出掛けたまゝ歸つて来ない父を待ち切れず、母と僕とは珍しく遅い昼食を認めていた。午後一時を少し廻っていた。僕も母も無口になつて、落着かぬ氣持になつて飯を喰べていた。ベルが鳴つた。僕がフオークを置いて表へ出ると、家の真ん前に緑色のバスが停車していた。それでなくても広くない表の通りが、一層暗く、狭くなつた感じになつていた。緑の帽子とお揃いのシャツの若い半黒の運転手がさも意味ありげににやにやして、そこに立っていた。

「オジサンを連れて来たんだ。バスの中で、急に變になつちやつてね。物を言わなくなつたんだ」

「オジサンで、家の親父のことかね……」

「そうだよ、ノ、ノンミアーマさんだろう」

「うん、それで、親父は、ど、何処に……」

「このバスの中さ！」

バスに一步踏み込んだ僕は、戸口に近い最前席で見しらぬ黒人の婆さんの膝に抱かれてぐつたりと伸びている父を見た。血の氣を完全に失つた父の蒼白の顔は誰が見ても、死人のそれであつた。恰も母が幼児に乳を含ませる時の恰好で父を抱いている黒人の婆さんは、人懐っこい顔に微笑を見せ、優しい目で僕に挨拶した。「何うも、何うも、面倒を掛けたね。有難う！」

側に行くと、右手を父の軀からわざわざ離し改めて

僕に握手を求めた。だゝつ広く、温い、燃えているような手だった。

「みんな、手伝った、手伝った！」

運転手が先に立って父を老婆から横取りするように両脇に抱きかゝえて持ち上げると、乗客の若い衆達が、柔かい骨無しのような父の軀に纏り付いて軽々と父をバスから下した。

膝の上で処方箋を広げ乍ら、

「処で、食餌療法は嚴重に実行されとるでしような」

と医師は、先ず念を押した。

「はい、やっています」

「やつとります」

母と僕が同時に答えた。二人共、同じように力の籠った声で。

インシュリンを打ったら五分間以内に必ず食餌を摂ること、なるべく頭脳を酷使しないこと、等に就いて医師は再び注意を促した。インシュリン注射液は血液中の糖分を焼き消す薬品で急速に体内の糖分が低下するのだと言う。又、頭を使い過ぎると脳を通過する血液中の糖分が過度に消耗されるのだそうだ。

今日父は午前中床屋で長時間碁を打った後、薬局に寄ってインシュリンを打って貰い、バスで帰ろうとした。

途中で意識を失った父を運転手は、厭がる乗客に交替で抱かせて終点まで連れて行き、又連れて戻った。帰途、途中で乗込んだ日系少女が知っていた父の名前と住所を教えたのだと言う。

「不可ませんなあ！全く、全く、無茶を通り越して、無謀と言う以外には……」

医師は小刻みに頭を左右に振った。

突然、ドアが乱暴に開いて、慌てふためいた足音が侵入して来た。足音は複数だった。

「母さんよう。父さんが、又倒れたのですって……」
「伺うしたのよ。大丈夫なの……」

マノエルきんにタクシーで呼びに行って貰っていた道子と佐代子が今漸く到着したのだ。道子が抱えて来た玉恵の方に母が何も言わずに両手を差出すと、玉恵はその手に移って行き、母の首にすがり付いた。

「才婆チャン。お爺チャン、死んだの」

甲高い怯えた声で訊いた。母は玉恵の栗色の頭髪を撫でてやり乍ら、頭を大きく横に振って見せた。マノエルさんは誰よりも困った顔で、戸口から離れないで立っていた。

「意識が回復するのに、今日は左程時間は掛からない筈です。血圧は百九〇でした。それはそれとして、何ですな。一つ、ご本人は勿論のこと、家の方々にも一層のご協力をお頼みしたいものです」 医師は血圧器を鞆

の中へ挨じ込み、むつつりと立上った。

三

父は両手にべっべつと唾を吐きかけ、又斧を手に執った。犯し難い気塊のようなものが籠るには籠っていたが次第に顔の剣幕が激しくなるのに反比例して、足元が眼に見えてふらつき始めた。もう斧が言うことを聞かない。

疲労だけが瞭然と慕るばかりだ。数回斧を振り上げると数分間斧を杖にして休息しなければならない。糖尿病でとみに衰弱した父の体力はもうこれ以上持続しないのであった。父は痩せた両方の肩を、大袈裟に上下させて深呼吸を続けている。

竹藪の蔭からこつそり覗いていた母と僕は、見兼ねて父の傍へ寄って行つた。何か言い掛けた母を制して、「久し振りで、おれや汗をかいたぞ。何んと良い気持ちじゃろうー」

父は、又改めて手に唾きして、斧を執ろうとした。

「父さん、止めた方が、良いよ」

僕は斧の柄を、むんずと横から掴んだ。

「おい、雅樹。要らぬお節介は止めるよ！おれや、今日は朝から珍しう頗る気分が良かったんじゃ。おれの軀はおれが一番良く知つとる。もう少し割らせろ！こら、

「離せ！」

父が幾ら力んで見た処で、僕の持っている斧はびくとも動こうとしない。

「雅樹、離せと言うたら、離さんかー」

「……………」

もうこれ以上、何を試みても無駄なことを僕は悟った。

日本で永年軍隊生活をし、更に台湾で数年警察に勤めた経験を持つ父は、家庭に於ても家長の自分が常に上官でなければ満足出来兼ねるのであった。それでも母は、父の腕にすがり付いて行き、

「あなた。もつと、自分の軀を大事に……………」

と至って消極的な促し方をした。父は邪険に母の手を振り離し、

「あっちへ、行けッ！お前なんか、黙ってるッ！」

父の軀の末だ何処にこんな力が潜んでいたのだろうと訝る程の大声が、その時父の口を割って出た。

翌朝。母が整えて呉れた珈琲の盆を、僕は父の寝室へ運んだ。何時からか、僕の毎朝の日課となっていた。盆の上には、三切の温かい黒パンとサツカリンの入った熱い珈琲が乗せてある。

黒パンにはバターは付いていないが、母が常に心を籠めて時間を掛けれるだけ掛けて、こんがり狐色に焼

いたものだ。黒パンの焼き方が不足していても、反対に黒くなり過ぎていても、又珈琲が微温くても、熱過ぎてても、父は遠慮なく一々文句を言う。自分を家長の上官だと決め込んでいる父は、部下の妻や息子にはおのずから文句をいう権利があると、考えている。行く度に型にはまったお決まりの文句を聞かされることを考えると、矢張り僕も、父の寝室に入る足が自然と鈍る。母が僕にばかり盆を運ばせるようになったのも、同じ理由に依るのかも知れない。毎度のこと乍ら、黒パンとサツカリンの不味さを、愚図々々聞かされる。共鳴しても、反対すれば尚更のこと、何っちに転んでも叱られるのだからと僕が観念して黙り込んでいると、「聞こえないのか！父親のおれと、話もしない！」と頭から怒鳴りつけられる。

「お早う！珈琲を持って来たよ」

何うしたとか、今日は父の返事がない。

「父さん、父さん……」

未だ寝ているのかなと思って、肩を揺振って見た。全く手応えがない。父は額からたらたら玉の汗を幾筋も流し、人事不省に陥入っていた。

僕がうつかりしてネルソン医師に、昨日の夕方父は薪割りをしていたと告げると、忽ち医師の眼の色が変った。

「何故、そんなことを！全く、あなた方は、自分の親を殺すようなものだ！」

俄然不愛想を顔付きになった医師は、都合が悪くて今日には行けない、と言い出し、義弟のマッシャード医師への紹介状をタイプで認めてくれた。

マッシャード医師は、意識不明の父の軀を左右に手荒く転がして見たり、手足を荒々しく伸ばしたり、縮めて見たりした。まるで丸太でも転がすような乱暴極まりない取扱い方であった。最後に、ネルソン医師と同様、砂糖水を父の口の中へ注いだ。一辺に大量入れたので父は苦しそうに暫くむせたが、少しも意に介さない風であつた。

事務的にてきぱきと型通りの診察を終ると、まだ僕も母も何も開かない中から、「往診代三〇コントに、車代五コントで、はい、三十五コント！」と言い乍ら、処方箋を半ば無理矢理母に押し付けるように手渡した。僕も母も、完全に度胆を抜かれてしまった。

四

鶏舎に羽虫の繁殖する季節となつて、産卵率はじりじりと下がり始めた。月々、莫大な医療費の支出が続くので、それ程沢山もなかった銀行預金が漸く心細くなりはじめていた。母と相談して、羽虫退治を徹底的

にやることに腹を決め、DDTやBHCを思い切つて大量に購入した。砂浴場の砂に混入したり、産卵箱の中や、止まり木にも、毎晩日が暮れてから撒粉器でふんだんに振り掛けた。母が喉の痛みを訴え始めたのは、その頃であつた。

母の喉を甚だ念入りに診察し終つたネルソン医師は、「これは、とても私の手には負えないようですな。でも、絶体安心出来る専門医を紹介してあげますよ」
短かい紹介状と、同じく封筒の住所も、待っている中に馴れたもので自分でタイプで打つて呉れた。

母と僕とがその紹介状を手にして、サンパウロ市セッテ・デ・アブリール街にある薄暗いビルの階段を上つて行つたのは、次の週の月曜日の朝であつた。その日、僕達は無駄足を踏んだ。この著名なルーベンス医師の診察は時間制で然も前以つて申込む仕組になつており、その上五〇コントの前払いであつた。

それから、又数日後。母の喉をX光線で診察し終つたルーベンス医師は、胸に当てといた鉛板を徐ろに外し乍ら、「喉の奥に可成少大きな腫瘍が認められます。が、何う云う種類の腫瘍か、末だ精密検査の結果を見た上でないと、分りません。あ、一寸、こちらへ！」部屋隅にしつらえてある屏風の蔭で母が控え目に着物を着込んでいる隙を見て、医師は僕を隣室へ招じ入れた。
「まあ、お座りなさい。ね、良いですか、驚かないで下

さいよ。そして絶体に、これは絶体にですよ、本人の耳に入れないで下さいよ。実は……、ひよつとしたら……未だ現在の処ひよつとしたらの過程ですが、癌かも……」

「えっ！癌で癌の疑いが……」

僕は自分の耳を疑った。今、一撃の下に脳天をたち割られたような衝撃を感じていた。声が震えているのに、不図、自分でも気が付いた。医師はさっさと喋りたいことだけ喋ると、美白の上衣を脱いで僕を放ったらかして部屋から出て行った。

ガルボン・ブエノ街の日本人経営のホテルに母を一人残して、一先ず僕は家に帰ることにした。寝台が二つ漸く並ぶ程度の狭苦しい部屋であつたが、北向きの明るい温い部屋であつた。読書が何よりも好きな母に、本屋まで行って本数冊を買い求めて来、それを置いて来た。母の精密検査の結果は明後日の午後三時に分る筈だから、それまでに僕は戻って来れば良いのだ。

家を離れると家に居る父や鶏のことが気掛かりになり家に帰ったら帰ったで今度はサンパウロ市に置いて来た母が心配になり出す。今の僕には、何方を向いても頭の痛くなることばかり踵を接して押寄せて来る……。こゝ数ヶ月間に父が発病し今度は母が倒れ、労働力は半減しその反対に父と母の医療費は未だ未だこ

れから何の位要るのか想像も及ばぬ程増々脹れ上つて来る気配を見せている。産卵率は日に日に下がり始め、銀行預金は底をつく一步手前だ。無数に押寄せて来る危機を、一体、僕は何うやつて一つ一つ切抜けて行けば良いのか。何方を向いても、今は底知れぬ真暗闇があるだけだ。僕は鉛のように重い心で、家に帰りついた。

父の部屋の窓から幽かな明りが漏れているのが遠くから見えた。父は未だ起きている様子だった。今日父は一人で、何をして一日過ごしただろう。インシュリンは忘れずに打っただろうか。黒パンを自分で焼いて喰べただろうか……。僕がベルを鳴らすと、老眼鏡を掛けたまゝ戸口に出て来た父は、眼鏡越しにじろつと僕を見た。

「只今……」

「何だ、お前か……。帰ったか……」

余り気乗りのしない声だった。僅かそれだけの言葉の遣り取りがあっただけで、黙り込んだ僕達二人は、前後して家の中に入った。一日中遠く離れていた親子なのに、お互いにこれ以上話し合おうともせず今夜はもうこれで二人共寝てしまうのか……。僕は一寸淋しかった。

話したいことが、いや、話さなければならぬことが、こんなにも今日は山積しているのに――。僕はネク

タイを首から外し乍らさり気ない風を装って、併し、半ば強引に父の寝室に入って行つた。父は寝台の端に腰掛けると、

「まあ、坐れ。どうじゃったか、母さんは」

と始めて僕に話かけて来た。矢張り、父も気には掛けていたのだ。僕は一日中の出来事を極めて卒直に、結論から先に父に話さねばならなかった。

「なに癌？本当か……」

父は一度眼鏡を外し、頗る険しい眼で僕を睨み付け、それからすぐ又、元通りに眼鏡を掛け直し、

「そうか……癌か……」

ゆつくりそう呟いて、今度は自分の膝の上に眼を落した。

翌朝、僕は薄暗い炊事場で父の黒パンを焼いていた。と、寝巻姿の父が、珍しく早く起きて来て、

「雅樹、銀行に今幾ら、金があるか」

と聞いた。僕が即坐にその金額を告げると、
「母さんに、しなきやならんことは、出来る限りしてやって呉れ。な、おれも、明日辺りから、少し金策に歩いて見ることにしよう」

それだけ言うと、僕の返事には耳もかさず又寝室に帰って行つた。間もなく、再び戻って来た父は、珍しく仕事着に着替えていた。その日は、父が昼食を整え

て呉れた。父の自慢料理の葱の卵とじがあつた。久し振りで美味しかった。

僕達一家がブラジルに移住して来て最初に入つたのはR植民地であつた。その地方では茶が主要作物だったので、家中で誰よりも茶摘みの能率の上らない父が、炊事当番を受持つていた。父はどんなに頑張つても、僕の半分以下しか茶の芽を摘みきらなかつた。僕の茶摘みの最高記録は日二十k二百、母は十九K八百で、父のそれは僅か九K三百であつた。往々にして誰でも自分の好きな料理を片寄つて作る傾向があるものだが、父も自分の好物の天ぷらと葱と卵の料理を多く作つた。材料を惜しまない父の料理を少年の日の僕は、仲々美味しいと思つて何時も喰べたものだ。父のこしらえる料理には、必ず砂糖が小量使つてあつた。今にして思えば、あの当時から父は既に糖尿病を煩つていたのかも知れない。

夕方、鶏卵処理場に父はやつて来て、何を思ったのか鶏卵の箱詰を手伝つて呉れ始めた。

「未だ一寸、早いようじゃが、風呂も沸いたし、夕飯も出来たぞ」と父は側に来て、卵を磨いて呉れ乍ら、言つた。

今日の父の行動は全く尋常でなかつた。少々薄気味悪い程であつた。そんなに数多く語り合つた訳でもないが、不思議に二人の心は朝から晩までぴつたりと

一つになっていた。このように満ち足りた一日が、父と僕の二人の生涯に再び到来しようとは、想像もしなかったことだ。

僕にとっては得難い、貴重な一日であつた。今度はきっと父と打ち解けて話ができるだろう。父をもつと大事にして上げなくては不可ない。と僕はしんみりと考えた。

僕は何故か少々感傷に陥入っていた。鼻の奥の方がつんと冷たくなっていた。父に涙の顔を見られたくないので僕は、

「今の中に、お父さん、風呂に入ったらどう」

と奨めた。少し鼻声になっていた。

「じゃ、そうするか。先に入るぞ」

父はすぐ腰を上げた。

その又翌日の、午後一。サンパウロ行きのおんぼろ郊外列車に僕は乗込んでいた。

五

今尚、父の枕元の壁に貼少付けてある食餌療法の表は最初の発作で父が倒れた時ネルソン医師が苦勞してタイプで打って呉れたのを、僕が日本語に翻訳したものだ。

（食べて良い物）と（食べて不可ない物）との二つに分類されており、凡そ二百種類の品目を網羅した膨大な表である。就中、（喰べて不可ない物）は片端から父の好物、又その反対に（食べていゝ物）の大半は父の嫌いな物ばかりなのが、皮肉と言えば皮肉であつた。

何よりも先ず、米の飯が最少限度に制限され、黒パンがそれに替つた。黒パンを主食としてからは、毎曜日に行う尿及び血液の検査の糖分量は僅か微々たるものであつたにせよ確かに徐々に下降線を示し始めていた。

併し乍ら、それと全く平行して、父の軀も眼に見えて衰弱し始めたのも又事実であつた。

ネルソン医師の当初の計画としては、体内で糖分化する率が左程に高くなかつても蛋白質の頗る豊富な（食べて良い物）中の牛乳・牛肉・バター・チーズ等を成るべく多量に父に摂らせて栄養をそれらによつて補いたかつたのであるが、「あんな厭な臭い！毛唐の喰物が、俺の喉を通ると思うかッ」父はにべもなく眉をかめて、再び見向かうともしなかつた。

父に限らず、大抵の日本人がそうであろうが、幼少から習慣付けられた米の白い飯を俄かに腹一ぱい食べられなくなつたとしたら、それは一つのショックに違いない。

しかもその好物に限つてあれも駄目、これも駄目、と

食することを次々禁じられる父にして見れば、如何に病気の為とは分り切っていても、当人の身にとっては矢張り、どんなにか窮屈であり、さぞ辛いことに相違ない。が併し、父の態度には、自分の思うようにならない時八つ当りに拗ねて見る幼児の心理状態に何処か似通ったものを僕は感じるのだ。

父の病気はそんな調子で一進一退を続けていたが、母の喉もルーベンス医師の手によつて一度軽い手術が行われたにも関わらず少しも快方に向かう様子は見えなかった。

深夜、起き出た母が一人便所でひっそりと嗽をやっている音が、毎晩のように僕の部屋にも聞えた。僕はその昔に良く眼を醒まし、氣になるので母の側へ行つて見た。

「母さん、痛む」

「ん、ん。年を拾うと、人間の軀も駄目になるものよね」
口に含んでいた薬水を母はぺつと吐いてそう言った。

父が曹長で軍隊を止めたのは僕が幼稚園に入った年であつた。従つて軍人としての父の記憶は僕は殆ど皆無と言つて良い。その後、台湾の巡査に合格した父は僕が小学一年生から五年生になるまで着地の駐在所勤務を転々し続けた。つまり父は、二つ目の恩給が付いた途端に辞表を提出して日本に引揚げたのであつた。軍人の恩給と巡査のそれとで、余生は左団扇で暮せる

と信じていた父の予算は、日本に帰って見て始めて見事に裏切られているのを知った。その年恩給局に關し新たに發した法令は二種類の恩給を同一人に支給しなくなったのだ。

父がブラジルに移住することを決断したのはその年の、つまり僕が小学校を卒業した直後であつた。

深い溪谷と昼尚暗い原始林と入墨をした裸の蕃人とに囲まれ、夜は薄暗い石油ランプ、良く鹿や猿や猪が家の間近に来て鳴いた。数軒毎に点在する隣の駐在所とはがらがらと手廻し発電式の電話でしか連絡出来ない。頗る辺鄙な生活。恩給が二つ貰えなくなつても、遂に職らしい職に父はあり付けず唯毎日ぶらぶらして過ごした日本での一年間。右も左も唯蒼い海と空。四十日間の単調で無聯極りない船上生活。そして上陸するや否や、腰が抜ける程痛い茶摘み。珈琲もぎ。稻敲き。フェイジョン抜き……。ブラジルに来て始めてやった百姓生活。

どんな境遇に逢着した時にも、これまでの僕の記憶にある限りへ母の口から、苦しい、とか、辛い、とか言う言葉を漏らしたのを僕が聞いたことは未だ嘗て一度もない。その母が一年を拾うと、人間も……。と今自分の苦痛を息子の僕に、そのような表現でしか伝達する術を知らないのである。男勝りで、勝気で、弱音を吐いたことの一度もない母から、このような言い方

をされると、僕は却って強烈に胸を衝かれるのであった。僕は母の嗽が終るまで、じいっと側に立って見ていた。

父の外出する回数がこの頃頻繁になったのと、小遣いを以前よりやや多く要求し出したことに、僕は夙から気付いていた。毎月曜日に行う検査表の糖分率がじりじりと毎週上昇し始めた。

「雅樹君。これは、注意を要しますな」

数週間の検査表を出して来て机上に並べて比較し乍らネルソン医師は頭を傾けてばかりいた。

或る朝。父が飲み終った時間を見計らって珈琲の盆を取りに行った僕は、父の部屋に今迄見たことのない物品を二つ偶然発見した。開きかかっていた父の洋服箆笥の戸を何気なく僕が押すと、戸は反対に完全に開いて、中から一目でそれと分る日本製のアルミ金の可愛らしい薬缶と折畳式男子用蝙蝠傘も共に新品で、良く見るとどちらにも小さな紙片が貼りつけてあり、二つ共同書体の筆跡で「二等賞」と毛筆の小さい字で書いてあった。夕刻。マノエールさんが顔を見せた。実に久し振りだった。父はその時も、町へ出掛けて留子だった。鶏舎に僕だけが居た。母も、丁度夕飯の準備に家に帰った後だった。「親父さんは街かな。処でよ、雅樹君。外でもないが」一段と声を落とし、今日父を

町のボールで見掛けたこと、そのとき父はグワラナを飲んでいたこと、最近既に何回もそんな父を見掛けたことを、ひそひそ遠慮勝ちに喋った。

「断つとくがのう。俺や告げ口しに来たんじゃないんで。親父さんの軀が心配で、知らせるのじゃ。親父さんに長生して貰いとうて、知らせに来たんじゃ。のう、雅樹君分って貰えるな」

何回も強く念を押し、「今日のことは、親父さんにもおふくろさんにも内諸にしといて呉れよ、な」とくどくど又繰返して言い、何時になくむつつりと帰って行った。

次の週の月曜日の午後。出来て来た父の検査表を診療所に僕が持つて行くと、軽い会釈と共に受取った検査表を珍しく医師は無雑作に机上に放り投げ、先ず自ら坐り改めて僕にも坐るように奨めた。机上の検査表をすべて手に執って、裏返して見たり、くるくる廻して見たり、一頻り弄んでから、

「外でもないのですが、野見山さんの病気を治す自信を私は失いました。で、ね、誰か外の医者の方に……」

変に落着き払った厳かな声であった。医師は最近数回に亘って父がボールでグワラナらしき物を飲んでいたので、床屋で囲碁か将棋かに長時間熱中していたのを目撃したことに就いて話した。医師には黙っていたが、実は数日前の日本新開の三面の隅にC線囲碁将棋

大会の報告記事が載っていて、その中に父の名前が小さく二ヶ所に出ているのを僕は見た。碁も将棋も二等賞を取った父の名前が、そこに出ていたのだ。

「で、先ず、この辺で以って、私は野見山さんの病氣から手を引かして載きます」

真剣な眼で僕の顔を見控え、きつぱりと決意を述べた。何があつても、後へは絶体に引かないと言わぬばかりの厳かな医師の声であつた。

僕はマノエールさんの先日の話はネルソン医師にも、又他の誰にも、決して他言しまいと一人決心して今日は診療所に來たのであつたが、又医師の口から図らずも同様の忠告を聞かされる羽目になった。医者から完全に見離されたことは、僕にとっては父の死を宣告されたのと同様な氣持であつた。

「尿の検査はもうしないのか。しなくたって良いのか。おい、雅樹」

と父が、僕を待っていたように、昼食の盆を運んで行った時に訊いたのは、その次の週の月曜日であつた。父は昨夜一晩の尿を既に瓶詰めにしていた。

「あゝ。暫く休むのだと、医者は言っていたよ」

僕は悪いことは承知の上で、父に咄嗟の嘘をついた。「そうか。あの医者はさっぱり駄目だな。ちつとも俺の病氣を治し切らん。第一、毛唐の医者は、言葉が不自由で叶わん、誰ぞ、二世の医者にでも替えて見たら伺

うじやろう。二世なら、俺にも言うことが分つて都合が良い」

マノエールさんのことも、ネルソン医師のことも、僕はこの僕の胸一つに収めて置こう、と考えた。父には勿論、母にも、妹達にも、又外の誰にも決して言うまい、と僕は一人密かに決心をしていた。

「おい。こら雅樹。聞いとるのかー聞いとらんのか！」
父の乱暴な声が、部屋の四方の壁に反響した。

六

「雅樹、雅樹、雅樹。起きろー早く起きろ！」

父の声に、僕は一度に眼が醒めた。手探りで電燈のスイッチを捻った。

「雅樹。早く来て呉れ！」

寝巻姿で、枕の父は、僕が起きるのも待たず、戸口の外へ前屈みに駆けて行った。便所にも、なぜか電燈が点っていた。父は炊事場の戸口から、鶏舎の方に駆けて行く。鶏卵処理場にも、電燈が煌々と点っている。僕は父に追い付いて、父と一緒に鶏卵処理場の中へ駆込んだ。

僕の目の前に、黒い喪服を身に纏った母がぶら下っていた。両手をだらりと垂らした母の軀が宙に浮いていて幽かに幽かに揺れている。太い麻縄が、屋根の棟

木と母の細い首を垂直に繋いでいた。壁際に、長い梯子が立て掛けてあった。

「雅樹。下ろして呉れ、頼む」

父の声は、間もなく言葉にならなくなった。義歯をしていないので白い歯茎を全部見せて大口を開け、誰喚き散らすだけだ。父の喚き声と、電燈の明りとで眼を醒ました鶏達は点燈時間と感遠いしたらしく次々止り木から下りて来て、コー、コー、コー、コー、と悠長を声で鳴き乍ら餌箱を漁り始めた……。

母がぶら下って揺れているのを、無意識に見ていた僕の眼が、からからに乾燥しているのに、不図気が付いた。

喉の奥の方が、今、火が点いたように熱くなってきた。何時からか、大口を開けて辛うじて呼吸を続けているのだ。僕は、父が最初に卒倒した日のことをほんやり想い出していた……。

「何を愚図々々しとるんか。雅樹、早くせんかッ！」

再び、父が僕の耳元近くで喚いた。僕は、梯子の階段を徐ろに昇り始めた。

父と二人で寝台まで母の屍を運んだ時、母の軀には未だ幽かに体温が残っていた。僕は、未だ温い母の首を、額を、顎を、手を、足を、矢鱈に両手で撫で廻した。ゆつくりと時間を掛けて、母の軀の温もりを心ゆくまで僕は愉しんだ。そして次の瞬間、自分でも分ら

ない奇妙な衝動に駆られて、いきなり母の髪の毛をむんずと掴んでいた。

「母さんの、莫迦！莫迦！何うして、こんなことを。母さんの莫迦！莫迦！莫迦！」

僕が乱暴に頭髮を引つ張り廻すので、母の柔い首は、ぐらぐらと左右に揺れた。僕は側にいる父には遠慮もせず、おいおい声をあげて泣き出し、大粒の涙で眼をみはっている母の顔中をべっとり濡らし乍ら、頭髮を増々乱暴に引つ張り続けた。

父の枕の下から出て来たという母の遺書を、父は、「お前だけ読んで置け。俺は、直ぐ焼き棄てるからな」と言つて僕に押し付けた。昨日の朝、僕が黒パンを包んで貰つて歸った桃色の表装紙に、自ら自分の命を絶つことを覚悟した人が死の寸前に書いたものとは思われないほど見事な達筆の草書で、至つて簡潔を文章が認めであつた。

父さんの病気だけでも大変なのに、又私までこんなになつてしまつて、みんなに迷惑ばかり掛けました。本当に済みませんでした。

私は、お先に行かせて貰います。

これからは、私の分も、父さんに尽くして上げて下さい。私から、くれぐれも、お願いします。

父さんも、これからは医者 of 言うことを良く、聞いて早く病気を治して下さい。伺うか、みんな仲良く

して、何時までも幸福に暮して下さいね。

父さん、雅樹。道子。佐代子。玉恵。さようなら。

その他の、みなさん。さようなら。

X月X日

母より

僕は読み終った後も遺書を手にしたまま、尚暫く呆然と していると、「もう、読んだか。焼くぞ」 父は何を考えたのか、僕の眼前で本当にその遺書を、未練気もなく燃やしてしまった。

バス発着所前の街角にある堀齒科医院の狭い人造石の階段を、僕は重い足取りで上って行った。階段を清々しい朝の風が吹き抜けていた。待合室には、流石に、日本人が多かった。僕は空いていた椅子の一つに腰掛けた。

すぐ下のバス発着所のざわめきが、ひっきりなしに発着するバスの出入の音が、乗客達の話声や笑声が、手に取るように響いて来る。

僕は何故此处に来たのか、自分でも良く分らない。

「誰でも良いから、早く行って、誰かに頼んで貰って来い！」と先程父に頭から怒鳴り付けられた時、僕は唯漠然と、全く漠然と堀さんに頼めば、日系人では唯一の市会議員である堀さんなら、或いはやって貰えるかも知れない、とその時僕は咄嗟に思っただけの

ことだ。

程なく、プラスチック製のボールのように丸い赤い禿げ頭の堀さんが奥の診察室から現れ、坐って待っている僕に眼を止めた。明るく響く何時もの声で、

「あ、野見山君。お早う！これや、良かった！君と話したいことがあるんだ。君も、歯の治療かね」

「いゝえ。お願いごとがあつて来たんです。それが、面倒な、お願いなんです」

「そうか。僕も面倒なことを君に頼みたいんだ。まあ、一寸、待っていて呉れ給え」

堀さんは「はい、お次！」と僕の横に坐っていた二世らしい首の短かい色黒の少女と共に、そゝくさと奥へ消えた。

僕は腕を組み、頭を少し垂れ、居睡りでもするような姿勢で椅子に坐っていた。すると今朝方、命果てた母の蒼白の死顔が、まざまざと僕の頭に浮んで来た。何故、母はあのように呆気ない往生を遂げたのである。昨日は日が暮れるまで、あんなにも小まめに一日中鶏舎で働いた母なのに……。深夜、一人起き出て、梯子を一段々登って行った時の母は、一体、何を考えていただろう。病気の父のこと、僕のこと、妹達のこと、を考えていただろうか。いや或いは、唯々夢我夢中で、何も考えていなかったかも知れない。もう物を言わなくなった母。今日中に柩に入れられ、明日は土

の中に埋められる母。人間の命と肉体の脆弱き、果敢なさを、今僕は身に泌みてしみじみ思った……。

まだ台湾に居た頃。小学生だった僕は、宿題を何時も怠けて良く母から叱られた。夕飯の後、仕立台の前に僕を坐らせて母の眼の前で宿題をさせられた。僕が何時もクラスの首席でないと、母は機嫌が悪かった。昼間の遊びの疲れで僕の両方の眼蓋は独りでに潰れるのであった。僕の頭がこつくりこつくりやり始めると、母の竹の鯨尺の物指が、僕の頭の上にびゅうんと小気味良い音を立て、仮借なく飛んで来たものだ。僕が宿題をやり終るまで何時も僕の側で縫物をし乍ら起きていた母。

三年生の二学期。校門のすぐ外に繁茂していた龍眼の巨木の下で、学校でも札付きの六年生の悪童と僕はとつ組み合いの喧嘩をやった。僕が彼の腕にがぶりと噛み付いたのに激情したその上級生は、いきなり路傍に転っていた石を拾って来て僕の顔を眼掛けて投げ付けた。石は見事に僕の鼻に命中し「僕は鼻血を噴いて、ひっくり返った。大量の血を見て驚いた上級生は走って家に逃げ帰ったが、即日、校長から五日間の休校を命じられた。以後、大人になってからも僕は良く鼻血を出したものだ。

通行中の台湾人達の看護を受けて僕は辛うじて家に帰り着いたが、

「駄目じゃないの。雅樹。泣かされたり、怪我をさせられたりするんだったら、喧嘩は始めからしないことよ。雅樹。もう一度行つて、やり返してお出で！」

と、何うしても僕を家に入れて呉れなかった母。

五年生の時、男子生徒の間で浪花節を唸ることが流行し、丁度唱歌の試験の日に僕は声が潰れていた。夜僕にとって始めての「乙」のある通信簿を発見した母は、ヒステリックに長時間僕を叱りつけただけでは遂に満足せず、町外れの丁河に投身すると言出して僕を脅し、雨上りの夜の街へ裸足のままで飛出し、長い板橋の掛かっている暗い河原の方へとつとと駆けて行つて僕を驚かせた母。

やつとのことで僕の順番が廻つて来た。心急いでいる僕は堀さんと診療室の中で差向いで立話を始めた。僕は堀さんに、誰にも話したくない厭な話ばかりしなければならなかった。父と母が病氣勝ちであつたこと。今朝母が鶏舎で縊死自殺を遂げたこと、父が誰か貴方の知人の医師に自然死の死亡診断書を作つて貰うように頼んで呉れと希望していること、等々に就いて面の皮を厚くして至つて大雑把な説明を僕はした。始終、深く考え込んでいるような顔で僕の話をそうか。そうか。と領き乍ら堀さんは親身に最後まで聞いて呉れた。「以前から君の父さんの病氣は開いていたが、母さんもだとは知らなかったなあ。君も、大変だなあ」

堀さんは早速活撥に白衣を脱ぎ捨て、背広に着替え始めた。それを見て、僕は漸く安堵した。ああ、来て良かった！

「話して見んと分らんが、大抵、やって呉れる筈だ。兎に角、氏家ドクターの家に行つて見ようや」

堀さんは僕を元氣付ける為に「さあ、行こう」と軽く僕の肩を一つ敲いた。僕達は狭い急傾斜の階段を転がり落ちるように急いで降りた。

「今度、ね、野見山君。「明星クラブ」で会報を出そうと思うんだ。日本語とブラジル語の半分々々の会報をね。それで、日本語の方の編集を君に頼みたいんだ。一つ、やって呉れるか」

肩を並べて大通の新緑の厚い街路樹の蔭を歩き乍ら、堀さんは僕の横顔に真剣に振向いていた。

「やって、見ましよう。僕に、出来る範囲で」

余り自信のない僕は、少し固い表情で答えた。

町の高台の氏家医師の家は、数本の大木に囲まれた広荘なモダン建築だった。未だ誰も起きていない気配で、黄色い朝の日光が広大な窓ガラスの一枚々々に反射していた。縞の寝巻姿の氏家医師自身が起き出して来た。二世同志の二人は互に抱き合つて、ブラジル式に挨拶した。

「やあ、堀ドクター。珍しい」

「氏家ドクター。元気か。久振りだな」

そこは何も彼もが、桁外れで、眼を見張るばかりに豪華に装飾された広い応接間の中であつた。二人が垢抜けしたジェスチュアを豊富に混ぜて取交す活撥な会話は、ブラジル語だけであつた。極めて華奢なマネキンのような夫人が自ら珈琲を運んで出て来た。家具・絨毯・シャンデリヤ・花壇・置物・ピアノ・蓄音機――何処を見ても何を見ても、僕は圧倒されそうな物ばかりが部屋中に並んでいる。僕にとっては、ここは全くの別世界であつた。夫人が側にいる間は、堀さんも氏家医師も、僕の用件をぶつくり打ち切り、ありきたりの世間話で胡魔化していた。夫人が出て行くのを待つて、

「宜しい。堀ドクター、十時まで、で良いか。衛生局の僕の事務所に取りに寄こし給え。何とかしよう」

「やつて呉れるか。こりや、有難うー・じゃ、頼む」

堀さんは部厚いソファからつと立上ると、氏家医師の両肩を抱き込むようにして、礼を述べた。

バス発着所前の街角まで僕達は殆ど話を交わさず又帰つて来た。堀さんが突然思い出したように僕に振向いて訊いた。

「野見山君。処で、葬式の手順は、出来ているのか」

「いゝえ未だです。それ処じゃなかったんです」

「じゃ、僕がやつて上げようか」

「ええ……、でも……」

「良いから、良いから。僕に任しとけ。全部、やって上げよ」

「有難う。：有難う。ではどうか……」

もうその後は、僕は言葉が出て来なかった。涙の溜った眼で、輪郭がぼやけて二重に写って見える掘さんの赤ら顔を僕はじいと感じて立っていた。

みさ子とわぐり

矢島健介

略歴 本名 梅崎 嘉明

生年月日 一九二三年三月二十一日

出身地 奈良県菟田野町下片岡

渡伯 一九三二年七月二十七日 サントス港着、ら

ふらた丸

最初の入植地 ノロエステ線ペンナ駅シャンテンブレ
耕地、一九四九年サンパウロ市に移転今日に至る。

職業 写真業

文学歴 一九五九年 第二回「椰子樹賞」受賞、一九
六四年、小説「左代の周辺」で第八回「パウリ
スタ文学賞」を受賞

趣味 文学、絵画、写真

本掲載作品は、一九七四年コロニア文学
二十五号に発表

みさ子とわぐり

的場耕地はファゼンダと呼ぶには小さい、百アルケール余の農場であつたが、パトロン、コロノたち全部が日本からの移住者で、お互いに国訛りこそあつたが、それまで伯人農場で不自由なポ語で生活した人々に、日本語で話し合えることは、非常を親しみが持てたし、労働も以前の伯人耕地のそれほど時間にしづられなくともよかつた。

耕地の責任を一身に負っていた監督の原部さんはこの国に古い人で、六人の子供がいた。三番目にわぐりと呼ぶ娘がいて、コロニアの子供たちの間でおわちやんと呼ばれていた。彼女の姉妹は女ばかりで、わぐりと名づけると次に男児が誕生する、という迷信に因んで名付けられたが、その下にも女の子がいた。わぐりの名が効を奏しなかつたらしい。十四才というが、この国育ちの大柄で、髪眉が濃く、鼻や口もとがやや男性的だが、瞼が二重で涼しく、声音がみずみずしかった。幼時火傷で右の手の指がただれ、爪のとれた親指と拳がいたましく見えた。が、そのことにこだわる様子もなく動作は快活だった。しかしそれは表面上のこ

とで、かなり感性が強く、どこか陰影がないでもなかった。

朝の九時頃になると、「雨の日も風の日も泣いて暮らす」と、その頃流行の歌を唄いながらわぐりは、細道つたいに私の家の方にくだって来た。哀愁のおびた詞で彼女の性格に合うとは言えないが、仕事の調子をとるために愛唱しているといった感じで、私の家の前に来ると背負っていた砂袋をおろし、ほっとした表情で顔の汗を拭きながら、「悠二さん、ボタン（水車小屋）に行かない、これから粃の入れ替えに行くのー」と言った。

私の姉や両親は朝早くからコーヒー園に出て、私は家の留守居をしながら、二人の妹と一人の弟の守をしていた。

「ボク、チビツ子が起きると御飯を食べさせなきやならんし、家を留守にしてはいけないうって言われてるんだー」

「じゃ、又くるねー」

わぐりは大様に腰をふって粃を背負うと雑草をわけながら、水車小屋へ降りて行った。中食後、私は食器を洗い終って、少し暇があるので庭先にころがっていた大木に腰かけて陽を浴びていた。野っ原で孵化したひなをつれた親鳥が、愛情一ぱいに呼びながら餌をあさっていた。草の中で豚の鳴く声がした。

ぼんやり坐っていたら全身が麻痺したように疲れが出て、大木の上に横になった。いい気持だった。

思いは故郷にとんでいた。学校がひけると級友たちと軍歌を合唱したり雑談を交しながら、田植の終わったばかりの畦道を我が家に急いだものだった。どう勉強しても勝てなかった級長のFがいた。喧嘩に強いAがいた。びつこのため人並以上身体と髪をゆすって歩くM子がいた。

畦に蛇が出てM子が泣き出し、彼女を背負ってやったことを思い出す。Aがひやかしたので私が口答えし、Aが拳をふり上げ、私が組みつき、Fが中に入っておさまったあの嫌な日の思出も過ぎ去ると妙になつかしく浮んできた。みんな過ぎてしまった。あの連中は今年小学六年になった筈だ。なのに自分は渡伯以来通学を止めていた。

最初に配耕になった耕地に学校はなかった。あつたとしても弟妹の子守で通学は許されなかっただろう。幼ない子供を置いて母も農場に出ないと、父と姉だけの労賃では一家七人の生計がなりたたなかった。不慣れた仕事で能率の上らない理由もあつたが、労賃がめっぽう安かったのだ。

そんなことを次々と思ひ浮かべていると、自分の置かれている地位が不幸であるとか、運命論者的な深い裏付けを持っていたわけでないが、何となく胸がお

しつまって、独りで涙のこぼれることがあった。級友を恋う郷愁であつたかも知れない。もう少し上級校に通いたいはかない欲望であつたかも知れない。私は時に級友に手紙を書いた。センチな訴えが多かつた。それに同情してくれる友が欲しかつた。しかし級友の多くは返事をくれなかつた。

遠く大洋をへだてた人間などにかかずらつていても仕方がないというのか、封筒の横文字が苦手なのか、とにかく私の孤独を癒してくれる何一つなかつた。

「悠二さんー」

私は夢うつつの中にいた。目を開くと、すぐ近くでわぐりが笑つていた。その横に、十一、二才と思われる少女が立っていた。

「この子、野沢みさ子さん、悠二さんの友達に丁度いいでしょう、シユウカイするわー」

わぐりは紹介のことをシユウカイと発音した。もったいぶつたその紹介ぶりが滑稽なので、みさ子という少女はうつむいて笑つていた。頬にえくぼがあつた。髪はおかつぱで丸い顔、驚いたように目が大きくて顔立ちは整っていたが、日焼けして皮膚はあまり白くなかつた。顔を上げないはにかみが可愛らしかつた。

私は寝ぼけ顔を少しはじらいながら、しかし黙つていてはバツが悪いので、みさちゃんも今年この耕地に入つたのか、と聞いた。

「ううんー」と少女は言った。

「それまではどこに居たの？」

「ここから十キロばかり西の方のシャンテ・ブレという耕地だったわー」

「僕もあの耕地に居たんだ、ひどい所だったな、家は貸してくれたが寝るのに床がない、かまどがない、便所が無い、みんな自分等で作らねけりやならなかったろう。周囲にあるものは牧場とコーヒー園と森林、労働者の子供が山羊に乗って遊んでいた。これはどういうことになるんだろうと思ったなー」

「いまだってひどいわ、母あちゃん、父ちゃん、兄いちゃん、みんなコーヒー園に行っちゃうし、私一人で家の掃除から洗濯、豚の世話、風呂の水入れ、夕飯の仕度一日中うごきまわって嫌になっちゃう」

みさ子の日課は又私の日課でもあったし、コロニアの留守を守る多くの子供たちに共通した苦労であった。話題に新鮮味はないが、お互いに同情しあうことができた。

わぐりは、そんな話つまらない、これから川向うの稲畑へ蟻殺しに行くところだが、三人で一緒に行こう、と誘った。

「ママイ達には黙ってればいゝのよ。外出がばれたら私があやまってあげる」

それもそうなのだ。末の弟は昼寝をしていたし、わ

づかな時間なら何とかかなりそうだ。私は妹に留守を言いつけて家を出た。川向うの畑に行くのは初めてで、何か未知な冒険を夢見る心地だった。

わぐりは殺蟻機を肩に勇敢に歩き出した。

殺蟻機はポ語でサルバドールと言って、砲弾型の鉄のかまがついていて、中に炭火を入れ、そこへ批素と硫黄の粉末を注ぎ、一方に取り付けたフイゴであふりながら蟻の巣に毒煙を吹き込んで殺す仕掛けになっていて、かなりの重量があつた。私が代って肩にしたが、暫く行くと肩の肉にめり込むように重かつた。

川に渡してある大木を伝ってゆくと悠長な水車の音がきこえた。

「この川にはマレッタ（マラリア病）があるのよ、わたしはかからないけど、姉ちゃんもママイもみんななかった。悠二さんの家に以前住んでいた人達は、家族全部が寝てしまって、その中の小さい二人が死んだのよ、町の墓につれて行く金がないので、近くの畑に埋めたの、そして次の年こんな病気の多い土地に住めない、と耕地を出て行ってしまったのよ」

「その墓どこなの？」

「いつか教えてあげるわ、小高い丘になっていて、そこには今でも百日草が植わっていて毎年沢山の花を咲かせているわ」

川を渡ると、右手に先住者の植えたバナナの株が並んでいた。鬱蒼として風の吹く毎にざわざわと音をたてた。

「ここで少し休もう」

わぐりはサルバドール投げ出すように大地におろすと、器用に足を横折りにして坐った。わぐりの横に私、その近くにみき子が坐った。バナナ林の蔭はじめじめしていて、いゝ気持ではなかった。

「悠二さん死ぬこと考えたことある？」

「ぼくは考えないことにしてるんだ、嫌なことだから」

「みさちゃんは？」

「わかんないの」

「おわちゃんが死の話なんかするとおかしいな、とても明るい感じだから」

「そう見えるらしいけど：・私たしか淋しさをカモフラージュして生きているのね、本当は反対なのよ、畑で独りで仕事するでしょ、蟻殺しをやるでしょ、殺しても殺しても死に絶えない蟻は、毎日別な方向から出て棉を折ってるでしょ。そんなとき私癪にさわって、何がためにこんな死にもしない蟻を追わなきゃならないのだろうと思うの、蟻を殺すより自分が死んじやおうか、と思うことあるの、このアルセーニコ（枇素）をのむと簡単に死ねるらしいわ：」

「……」

私は答える言葉を知らなかった。利口な娘であるけれど、一徹で少し恐ろしいことだとも思った。わぐりの智慧に近づくには私はまだまだ子供と言つてよかった。

コーヒーの採集期には多忙をきわめた。私は時々母に代つてコーヒー園に弁当を運び、そこでコーヒーの実をさびる作業を見習つた。コーヒー樹の下に寄せ集められてある、紗や木の葉のまじつた実をペネイラ（ふるい）ですくい、力一ばい両手で持ち上げ、腰の調子をとりながらペネイラを揺ると、威勢よく砂は地に落ち、実と葉が残る。

それを斜め後方にふり上げ、右足を一步引きながら落下する実を受けとめると、あふりをくつた木の葉は前方に散つて実だけがペネイラに残る。少し技術の要する仕事だが、動的で勇ましく私の氣に入っていた。一日つづけると手に豆ができ、それが破れ、破れた傷に土壤がはいって手が固まる。顔はまっ黒で埃まみれになるが、帰宅して洗顔した時のさわやかさは何とも言えない。

家にいれば弟妹の世話やら洗濯、炊事といった女々しい仕事に明け暮れ、休日なしだが、農園に出ると日曜日は朝寝をしてもとがめられなかった。親がそれだけ大目に見てくれたので、急に大人になったような錯

覚をおぼえた。午後、私は耕地のテレーロ（コーヒー乾燥場）に出ることになっていた。採集して集められたコーヒーの実は炎天で乾かすので、一日に何回もまぜなければならぬ。

日曜も休めないから手伝ってくれ、とわぐりに言われていた。手伝うといつても逢うとおしやべりで時間をつぶすのがオチだが、わぐりの世間話は人を引きつける魅力があった。あいにく雨模様で、テレーロのコーヒーは昨夜一所に集められ、大きな山となって雨よけのテントをかぶせられてあった。そこにはみさ子が立っていた。身体をくねらせてはにかんだ挨拶をした。わぐりも現われ、今月この空模様では何も仕事にならない。これからあっちのキャンプに行つて遊ぼうと大将株のわぐりはそ久ノ言つて先頭に立ちコロニアの前を西に向つて素枯れた草の細道を歩き出した。道の両側にのびていたカラビシヨの実が、やたらとズボンやズック靴にからみついた。

「歩きかたが下手なんだ」

ひやかすわぐりのスカートにもまるで花模様のようにはカラビシヨはくつついていたが、彼女はまるで無神経に歩いてゆく。私とみさ子はうんざりした。

みさ子は立ち止つてカラビシヨをむしり、追いついては又たち止る動作を繰返しながらそれでも引きかえずともせず、私の腕にしがみついて従つて来た。少

女に腕をとられて私は妙な感じがした。悪い感じではなかった。さつま芋の畑がひらけて、大きな畝が波状に続き私等はそれをまたいで歩いた。乾燥期なのでほとんど蔓が枯れ、所々に大きな芋が背を見せていた。それは何とも言えぬグロテスクを感じだった。何十という畝を渡りきった所は小高い丘になっていて、蟻塚に似た土饅頭があった。赤く盛った塚は二つ並んでいた。周囲には百日草が沢山植わっていたが、ほとんど花は過ぎ　あたり一面は荒涼としていた。何故こんな所に我々を案内したのか、わぐりの行為がちよつと不可解だった。

「悠二さん、覚えてる、この前の話、ここなのよ」
「えっ！」

私は思わず一步引いた。思い出した。先日バナナ林の蔭でわぐりが話したマラリヤ病で死亡した児の墓がこれなのだ。そう言われれば小高い場所でありながら、すごく陰惨な場所だ。物悲しい気持になった。この耕地の開拓当時に入植していたら、私が、或いは弟妹がこの土の中の子供の運命におかれていたかも知れない。そう思うと自分の肉身の墓であるような気がした。十字架一つあるでなし、訪ねる人もほとんど絶えた荒野の果に眠る子供の塚、哀悼をささげるかのように風が野の革をゆすっていた。

「私知ってるのよ、この子が埋められた日を、それは夜

だったわ、その子のママイもマレッタを病んでいて、熱にうなされながら土にしゃがんで、私も一緒に死にたい、子供だけを先にやれない、とわんわん泣いたのよ、その子のパイも泣いていたけど、黙っておばさんを抱いて家につれて帰ったわ、だから死んだ子供はうちのパイが埋めて焼香してやったの、可愛想だったわ、わたしいま思出しても涙が出るわー」

わぐりが言うのと、みさ子も両手で瞼をおさえた。わぐりは静かにしゃがんで両手を合わせた。火傷でただれた右の拳がすごく孤独に見えた。荒野の下に眠る子供も、そこにうづくまる、土に生きる二人の少女もともに哀れに思われた。

雨雲が低くたれ、吹く風がなまぬるく二人のほつれ毛をゆすっていたが、遠くで雷鳴がきこえ　大粒の雨がぱらついて来た。

乾燥期の夜の月は事のほか美しい。澄んだ満月の夜は誰言うことなくテレーロに集まる者が多かった。少女ばかりでなく、青年男女も集まりハーモニカを吹奏し、流行歌を唄った。雑談で友好をあたためた。そこは昼の労働と打って変った幽幻でロマンチックな雰囲気がただよっていた。

私も時には足を運んだ。出てゆくとわぐりやみさ子に逢うことができた。

「鬼ごっこしようか？」

わぐりはそう言った。夜のテレーロはコーヒーの実が一所に集められていて、鬼ごっこにはあつらえむきの広場になっていた。巨大な魔物を思わせるコーヒー倉庫の裏に廻ったり積み上げて山をなしているコーヒーの袋の後に逃げたり、変化に富んでいて、あきること知らず汗を流して走りつづけた。逃げ、又追う人影が幻想の世界をさまようようにテレーロの上を泳ぎまわった。

「いやー」と云ってみさ子は逃げた。追う時より逃げ足が早かった。私が追いすぎるとみさ子は身をかわそうとして、横に身体をひねったが、その時何につまついたのか、どっと横倒しになった。ほとんど手をかけていた私はひょうしぬけがして、同時に彼女の上に倒れてしまった。女の子の柔らかな肌が服をおして荒く息づいていた。膝をつきへ起き上ろうとすると、彼女のスカートが胸までまくれ上っていて、一糸まとわぬ白いすべすべとした下半身が青白い月光に照らし出されていた。股間のふっくら盛り上った異性の部分は、私の全身の血を逆流させ、頬が熱くなった。胸は興奮のために激しく動悸した。みさ子ははにかんだようにじっと私を見上げていた。

私は私の意志に反して、ある強い力が全身を支配し、思わずその可憐な花の蕾に唇をあててしまった。狂わ

しく彼女を抱きしめた。

「みさちゃんが好きだー」

「私も・・・」

私の肩先にあった彼女の手が強く私を抱いた。誰にも知られたくない二人だけの世界がそこにあった。永遠に時が停止すればいいと思った。

幾つぐらいの時だったか、父に連れられて漫画の映画を見たことがあった。少年は一羽の赤い小鳥を飼っていた。利口な鳥で朝籠から出してやると、近所の子供たちと遊んで、夕刻には自分の巣にもどるのだったが、少年は小鳥が他の子供と遊ぶのが気に入らず、いつも自分のそばに置きたく、ついに自由を束縛し、籠の中に閉じこめて一日中眺めていた。小鳥の悲しい鳴き声も、自分への愛撫の声として楽しんでいた。小鳥はやがて死んでしまった。死んでも少年は小鳥が可愛くて捨てることはせず、朝夕小鳥の羽毛をなでて物思いにふけていた。或朝少年は誰よりも早く起きて鳥籠をのぞいてみると、小鳥は美しい紅の宝石に化していた。少年はその宝石を自分のものとして、いつまでも秘密にして生長した、という物語で、私にはよくのみこめなかったが、みさ子との出逢によって物語の内容の美しさがわかったような気がした。私もできることならこの恍惚を永遠の筐の中にしまつて置きたかった。

私は茫然として、彼女を抱き起こしてやることさえ忘れていた。

みさ子はみずから起きてスカートの裾をはらった。月光のせいかな、少し悲しい表情にみえたが、それが何とも　言えぬ聖少女に私の目に映った。

よくフライリツペ投げをして遊んだ。フライリツペとはコーヒーの实の二つ、又は三つ連らなつた奇型のことで、私達はコーヒー園や、コーヒー乾燥場からなかなか探せないその奇型を拾つて来ては、地に掘つた穴に投げ、早く穴にはじき込んだ者がその実を自分のものにする。という遊びをやつた。七つ八つの子供むきであつたが、娯楽の少ないコロニアの少年少女は、時々そういうたわいない勝負に現をぬかした。

私は勝負事に強くなかつたが、フライリツペ投げは案外うまかつた。時にはわぐりやみさ子のフライリツペを全部まき上げてしまうことがあつた。そういう時、私は得意になるより、相手の心痛を察して手加減をするのが常だつたが、それでも平均して私が勝つた。コーヒーの採集の終つた頃、私は小さな箱に一ぱいのフライリツペを持っていた。わぐりが譲ってくれ、とせがんだがやりたくなかつた。誰が何と言つても分譲する気がなかつたが、みさ子にねだられた折は素直に、自分がこの耕地から移転する日が来たら、その全部を進呈

しようと言ってしまった。耕地から移転というより、みさ子と別れる日が来たら、と心の中で言ったつもりだった。それほど私の心はみさ子に傾いていた。

ところが計らずもその年耕地を移転することになった。コーヒー植付け四年契約農で、四年目には・ハトロンに渡す年だった。勿論引きつづいて働いてほしいと言われたが、コーヒー作より棉作に景気の出はじめていた頃で、父は思い切って棉作に切り換えたのだった。

私は約束通りフィリツペをみさ子とわぐりに二分して与えた。わぐりは嬉しい表情をみせたが、みさ子は悲痛な顔をした。私も少しセンチになった。別離の挨拶にみさ子を強く抱きしめたかった。けれど行動には出られなかった。ばかりか反対に心は沈んでいった。私は十四才になっていた。

カロツタと呼ばれる雑作地は的場耕地より南より八キロばかり離れていた。遊びに行けない距離ではない。馬でも買ってもらって日曜日には的場耕地を訪問するのだ。みさ子はきつと喜んでむかえてくれるだろう。私はそんな空想を持っていたが、親父は馬など買う余裕がないと言った。ばかりか欲ぼって広く耕作したので、日曜日もほとんど休めなかった。

私は野良で働きながら、みさ子のにっこり集う時の白い歯、片えくぼの可愛い、頬を思い出すことがあつ

た。最初見た日よりかなり成長し、胸のふくらみの増した別れの日の姿を忘れることができなかった。みさ子は秋田県の出身だった。秋田は美人の産地だと何かで読んだことがあった。みさ子もいまは益々きれいな娘に成長しているだろう、と想像すると、じつとしていられない衝動にかられた。手紙を出したいと思った。けれど手紙は町の局まわりだからとんでもない時日を要するし、局に出向くのはどこでも父親に決っていたから、娘に男性からの手紙なんかとどいたらとんでもないことになる。かと言ってことづけるほど信頼のける友人は持っていなかった。かりに居たとしてもそういう不良行為（その頃男女の文通など不良行為とみなされていた）に出られなかったろう。私の恋は私の胸の中で燃え、そしてくすぶっていた。

二年過ぎたある日、的場耕地入植十周年記念演芸会が催されることになり、私の家にも招待状が来た。これも社交の一つだ、父は金一封を姉にもたせ、姉の用心棒に私がつきそった。

私と姉が演芸会会場に着いたのは夜の八時過ぎで、張りめぐらしたテントの中ではガス灯が青く燃え、トロントロンと音の悪い太鼓が響いていた。演劇はもう始まっていた。観客席は老人と子供が多く、私の逢いたい友人は一人もいなかった。後で知ったが、彼等は

今夕の役者で、ほとんど舞台裏に集っていたのだ。私は気ぬけした空ろな心で舞台にむかっていた。忠次に扮したみさ子の兄は、少し口をこわばらせ、慣れたとは言えない台詞を吐いていた。真剣に動いているわりにその役になり切れず、かえって悪い癖となつて現れていた。少年の目に演技がわかつているとは言えないが、心に持つ不満が皮肉な目を芝居に向けていたのかも知れない。

「リヤ王物語」的一幕もあつて、王を虐待する姉娘にみさ子が扮していた。みさ子は別離の日より随分成長した。

ひよろ長い姿で、顔一面に白粉をぬり、意地悪な表情で、父の王に対して心にもない悪態をついていた。何故みさ子が姉娘に扮したのか、出るなら末の娘になつて、物語りのすじ書通りに王を可愛がる役につかせたかった。みさ子の性格からしてそれが適役だと思った。私は役を割りあてた男に腹をたてていた。

芝居は中休みとなり、観客の中の家族に近づいて来たみさ子は、一寸と私に会釈しただけで、私が心に抱きつづけていたほど、彼女は私に関心を持っているようになかった。私も裡の心を表現するような動作はしなかった。

それでいて何か物足りない渴きを覚えていたのは一たい何なのだろう。私は彼女に何を求めようとしていた

のだろう。

演芸が終ったのは夜明けの三時頃だった。姉はみさ子の家に宿をとれたが、コロニアはどの家も近郊からの知己友人に宿をかし、すでに満員になっていた、私等少年を容れる余地がなかった。十四、五才から二十才ぐらいの男性は、役者、観客をくるめて宵から燃え続けていたかがり火をかこみ、もうじき夜が明けるから寝ずに雑談をやろう、とどこからかケントンを持ち出して飲みながら、演劇の良し悪しを批判していた。私にも聞いたので上出来だった、と心にもない世辞を言った。これは私の一つの癖で、相手の機嫌をそこねない為に、自分の批判精神をいつも殺していた。こんな会合が面白い筈がない。芝居小屋のテントをはがして来て頭からかぶる男がいたので、私もその片隅に横になった。夜露に濡れたテントが焚火の熱で暖かく、いつ知らずうとうとした。何時間寝たのか、眼が覚めたらあたり一面がすっかり明るくなっていた。焚火はすっかり灰になっていて、暖かく感じたのは私の横に一匹の山羊がうづくまっていたのだった。

私は何とも言えぬ親しみを感じて山羊と一緒に起きた。昨夜の俳優たちは、白粉の半分落ちたみにくい顔を並べて、戦い果てた野武士のようにころがっていた。

早曉の野面はかなり冷えていた。私はあてもなくコロニアの前を西に向って歩いた。人影は一つもなかった。

た。無邪気だった、としか言いようのない過ぎ去った日の思出が、様々な型で軽がえってきた。すべて帰らぬ夢だ。

私は更に歩いた。そこには比翼塚に似た二つの土饅頭が嘗ての日のままに鎮座し、素枯れた百日草に蟻が這っていた。何をするともない私は、その蟻の行動をじっと眺めていた。蟻はいそがしそうに百日草の先まで登りつめ触角を二三回動かしていたが、より先に行く路のないことを知ると次にその茎を伝いつつ降り始めていた。

それも真直に降りるのでなく、時々止っては方向をさぐり、他に方法がないと又下に向ってくだって行つた。その蟻の行動を見つつ、漠然とではあるが、私は人生に徒労のようなものを感じていた。

その後、みさ子とわぐりに逢う機会はなかった。十年近く過ぎたある日、わぐりはある伯人と恋仲となり、そして失恋の果服毒自殺をとげた、と聞いた。わぐりらしくない死だと言われたが、私には彼女の心境がわかるような気がした。朗らかにふるまっていたながら心の底ではいつも人生の深淵を見つめているような女だった。

みさ子は隣の植民地の某氏の息子に嫁ぎ裕福な家庭

を持った、ということもその頃に聞いた。私は少しねたましく思ったが、一方の心では彼女の結婚を祝福してやった。何故なら私はその頃から過労で身体をそこね、すぐく厭世的な人間になっていて、たとえ彼女を自分のものにしても、とうてい幸福にはしてやれない、一歩誤まれは断崖から姿を消す心境になっていた。

ところが、その幸福の絶頂にあつたみさ子が肥満症から心臓麻痺であっけなく世を去った、と、しばらく後に聞かされた。

心に深く棲んでいた友が、こともあろうに二人とも早逝してしまった。私の心は乱れ、空虚にさまよい、そして遠く過ぎ去ってしまった少年の日の、あの百日草の咲く丘にとんでいった。そして二つの赤い塚の前に並んで立った可憐な二人の姿を、空しい両手で抱きしめていた。

流 亡

山野千枝子

略 歴

本名 陣内 し の ぶ

生年月日 一九二〇年一月十二日

出身地 熊本県上益城郡益城町（旧津森村）上小谷

渡伯 一九三五年一月二十三日、あふりか丸

最初の入植地 ノロエステ線カフェランジア駅、サン

タ・マリア耕地 パウリスタ線、マリリアで四年、

奥ソロカバナ、サント・アナスタシオ で三年棉

作。プレシデンテ・プルデ ンデで三年、出聖して

商業、美容院 経営。一九七〇年一月より、コロニ

ア文学会勤務、今日に至る。

学歴 公民学校一年

趣 味 読書

人生観 自分自身に忠実に生きること

本作品は一九七四年パウリスタ年鑑に発表

流亡

街から西の方に向って、墓地への道はのびていた。中心街から幾らも行っただと思えぬのに、何時の間にか舗装路は消えて、乾いた赤土がむき出しになった田舎道にかわっている。オニブスは、もうもうとした土埃の中を緩慢に走って行く。窓も座席も一面に埃を浴び、紺のサイア（スカート）が、昼の陽の中でほけた色に脹らみ、指先で弾くとその部分だけが新鮮ないろを見せた。

かなり急になった坂をオニブスはいつそうゆっくりと上る。ふと、“ジャルジネイラ”ということばが思い浮かんだ。これは、オニブスというより正しくジャルジネイラだ。

二昔も以前に住んでいた奥地の田舎では、あの頃オニブスとは言わず、ジャルジネイラと言ったものだ。土埃をあげ、煙を出して、よたよたと走っていたジャルジネイラー。

あの日も、ちょうど今日のように暑くて、じつとりと汗ばんでいた。土壌の中をジャルジネイラに揺られていたのもそっくりだ。新婚旅行を兼ねて、夫となつ

た高瀬と二人で、彼の知人を訪ねての帰りであつたが、数日来の気疲れと暑さで、小枝子は心身ともにぼつてりとなつていた。見合から結婚へとあわただしく運ばれたために、二人は親しい口をきくこともなく、顔を正視することさえためらつてゐるような夫婦であつた。

でこぼこの田舎道を、ある鈍重なリズムを以つて走りつづけるジャルジネイラの座席で、暑さと疲れがかもす眠気におそわれ、膝の上の風呂敷包みを、危うく取り落としそうになつた。はつとわれに返つたときの恥しさは言いようがなかつた。夫の高瀬は、あるとき窓外の景色を見ていたようであつた。あるいは見る振りをしたのかも知れない。あわてた小枝子と視線がぶつかり、彼は忽ちすうつと窓の外に眼を外らした。それは許し合つた者の眼ではなくて、未だ他人の眼であつた。そしてそれは、その後半年近い結婚生活の間も、つねにある間隔を置いた、ついに溶け合うことのなかつた眼でもあつた。

そんな些細なことが、今日突然に蘇つたのは奇妙であつた。小枝子は隣席の息子をそつと見やつた。それぞれ考へてゐることは異なるとしても、二人は同じ目的を持つてこのオニブスに乗りこみ、同じように先程から沈黙したまゝだつた。なんとなく向けた小枝子の

視線に気付いて、息子の良一はとつさに微笑もうとしたが、それは辛うじて彼の、心遣いを示したただけで、微笑にはならなかった。濃い眉毛も、瞳のやさしさも、高い鼻梁も小枝子には似ていない。父親の高瀬の若い頃にそっくりである。

といつても、本当のところ、小枝子は高瀬の顔をそれほどはつきりと覚えているわけではない。一枚の写真も手許に残していないし、知り合つて半年、つまり結婚して半年未満で、完全に姿を消した男の顔は、ほとんど抽象的なものに過ぎなかった。もしこの良一が生まれなかったら、逢うこともない古い知人の誰彼と同じように、高瀬の顔は、小枝子の記憶の中に、ほんやりと浮かぶにとどまったことであろう。

滞ることなく過ぎた年月の中で、いつの間にかあの頃の高瀬の年令に近づいた良一は、不思議に父親の面影を見せるようになっていた。それはある何気ない表情に現われ、ときにちよつとした動作などにも思い出させるものがあつた。息子を通して、そのような高瀬の外貌を思い出すことはできても、内面的なものとはほとんど漠然としていて、いわば高瀬は小枝子にとって、長い間「幻」に近い存在に過ぎなかった。

その頃、M市の奥地に原始林を購入した小枝子の父はそのために所用が多く、ときどき泊りがけの旅に出

た。

ある日、父親は見知らぬ一人の青年を伴って帰って来た。

「奇遇だ！」と言う父の眼が輝いていた。父の中学時代の教師で、ずっと昔渡伯したまゝ消息を絶っていた高瀬という人のことは、父母の間でよく話題になるので、小枝子も知っていた。青年は、その高瀬先生の息子とのことであつた。

「これは縁というものだ。あんまりよう似た人だと思つて訊ねてみると、やっぱり先生の息子さんだった。驚いたよ。お気の毒に御両親は早く亡くなられ、兄さん達は日本に帰ってしまつて、一人ぼっちだそうだ。先生があゝの世から引き合わせて下さったのかも知れんて……そんな気がする」

と、父は考え探そうに母に言うのだった。

一泊して青年が帰つたあと、人の好い母親は一も二もなく、父の言うなりでたわいが無い。

「あんな立沢な青年は、めつたに見つかるものじゃない。パパイの話じゃ、どうやら向うから来て下さるお気侍があるらしいよ。お前はまあ本当に運がいゝんだよ」

娘の気持は自分達次第と思ひこんでいる単純さで、高瀬を誉めそやすのだった。体格も容貌もすぐれている高瀬は、田舎育ちで世間を知らぬ小夜子が当惑して

しまうほど立派な青年に見えた。

それにしても、一度逢っただけで、結婚を承諾したという高瀬はともかく、小枝子にはやはり多少の不安と、娘らしい感傷とがあつて、決して進んで受け入れたわけではなかった。が、そんな根拠の不確かな、かすかな低抗などは、激情的で我まゝな父親と、お人好しの母親の心を掠めるほどのものでさえなかった。話は忽ち纏まつてしまった。

間もなく一家は、焼け煉ぶっているあら山に仮の家を建て、移り住み、高瀬を迎えた。

高瀬に対する父親の期待は大きかった。棉作の黄金時代で、M市を中心として四方の原始杯は、日本人に依つて次々と伐り倒され焼かれでいた。来る日も来る日も、空はうす曇りしていて空気は重く、地上には煙の臭いがただよっていた。焼け跡を片づけて棉を植えつけるのは容易なことではなかった。請負の伯入労働者も大勢雇つた。母と小枝子も、食事の支度もそこそこ畑に出て、焼け残りの小枝を集めて焼いたりして働くのだった。男手を得て父の夢は途方もなく脈らんでいった。それに引き代え、都会生活に慣れてしまつていた高瀬は、

「女まで真黒になつて働くなんて、感心できないね。金はあるんだろ？。カマラーダだけでやればいいじゃない

いか」

と、小枝子に向ってぶつぶつと文句を言うようになった。

「でもね、パイはやつとこの十アルケールを買ったのよ、今から。パトロン気分ではどうかと思うわ。わたしたち、末だ若いんだもの、働くの当り前じゃない？。どの家だって、元気な女が引っ込んでいる処なぞないわよ」

小枝子は柔かく言い返したつもりであつたが、夫は無言で、じろりと彼女を見返して答えなかつた。

雑作や野菜など、あらゆるものを植え付けたり、豚や鶏を飼って豊かな食生活を楽しみたい、というのが父親の理想であつた。始めて豚を殺したとき、捨てるところは全部サボンを作ってみよう、と父と母とが話しているのを聞いた高瀬は、撫然とした表情で、

「二日も三日もいやな臭いをさせて、サボンなど作つて幾らになるんだ。買ったサボンの方がよっぽど気持ちがいいよ」

などと小枝子に向って、彼女の心を痛めるような言葉をつくのだつた。

森林を伐採して焼き払ったあら山の出外れに、無断でカボツクロが拓いていたらしい一アルケール足らずの草畑があつた。多角農を理想とする父は、その土地にまず雑作を植え付ける計画をたてた。それを聞いた

高瀬は、その場ではむつつりとして黙っていたが、夜になって小板子と二人になると、

「あら山だけでも大変なのに、パイの理想家には呆れるよ。あんな草畑まで手をのばしたら、今に仕事は手遅れになって、結果は虻蜂取らずだ。ふん、僕は知らないよ、そうなくても」

と、又してもぶつぶつ言うのだった。

ブラジル人の労働者には、アラードを使える者がいない、と分ると、高瀬は自分がやると言い出した。父は内心危ぶんでいるらしかったが、若い者のことだ、やらせてみよう、と思つたらしかった。

少年の頃やったことがあるからと云つて、高瀬は珍しく弾んだ調子で出て行つた。

一時間ほど経ってから、父は仕事の様子を見に行つたが、慌ただしく帰ってくるなり大声で小枝子を呼んだ。すぐ畑に行つて高瀬のしていることを止めさせて来い、というのだ。何事かと小走りになつた小枝子は、あらしの外れに行つてみて驚いた。裸の馬に轡だけつけ、手綱を握つた高瀬は、とびかゝつては長靴の脚で馬の腹を蹴り上げている。恐れおびえた馬がわなわなと震えているのが遠くから見えた。高瀬は手綱の先でビシリツと馬の貌を叩き、馬がのけぞるとたんに、飛びかゝつて腹を蹴り上げるのだ。彼の顔は紅潮し、シャツはべつとりと濡れている。栗毛の馬も汗で黒く光つ

ている。

「止めてつ。何をするのよ、可哀想に！」

走り寄った小枝子は、高瀬の手から手綱を取り上げた。

「こいつまで僕の言うことを訊かない」

ハアハアと息を弾ませている高瀬の顔を、小枝子は呆れて見つめた。一体この人は正気かしら、そう思った。栗毛は鈍重で、乗馬には向かなかったが、父親が充分に仕込んだ、一家にとって大切な耕馬であつた。

畑の始まりの一部分が、あるところは深くあるところは浅ぐ、ジクザグに削り決られて高瀬と馬との苦闘を露わに見せていた。

父は、そのことについて一言も文句らしいことを言わなかったが、小枝子ら母子は、困惑の思いを素速く眼と眼で伝えあつた。

こんなことがあるたびに、小枝子は、高瀬の仕事に対する熱意が少ないのだと思い、口には出さないものの、全面的に父母の側について彼を見ている自分を意識した。

カミニヨン一台の棉を取引きすれば、かなりの現金収入を得ていた仲買仕事の都会生活に比べて、一年間をかけて、毎日汗と土とにまみれる田舎の暮しは、やがて耐え難い馬鹿馬鹿しいものに思えて来たのかも知

れない。あるいは、憧れていたものと違った妻という女に対して不満と悔いを感じ始めたのかも知れなかった。はたから見れば、ごくつまらぬ小さなことでも、重なり重なりしているうちにできた溝は、決して父母たちとだけのもではなく、小枝子がそれほど気にとめずにいた間に、高瀬の心の中で溝は意外に深く、覆いがたいまでになっていたのだった。

「舅たちと僕の性格は水と油です。絶体に入合えないことが分りました。僕は別の方針を立てます。もう二度とあの家には帰らないつもりです」

と、媒酌人である塚田氏に言い残して立ち去った、と聞いたときの一家のショックは大きかった。妻である小枝子にさえ、何一つ打ちあけるでもなく、突然に出て行ってしまった高瀬に、彼女はいきなり平手打ちを喰ったように茫然となった。

「あるところでナ、とてもいい仕事を見つけて働いてる。あんたを待つとるよ、俺が後は引き受けるから行きなさい」

二週間ほど過ぎた頃、塚田氏はそつと小枝子にそうささやいた。而し、老い始めている両親を置いて、夫を追うには、あまりにも彼との繋りは淡く弱かった。小枝子はすでに懐妊していることに気づいていた。両親の間にあって、宙に吊られたように、彼女はどうすればいいのか分らなかった。生理の狂いから来る感情

の不均衡は、遠い先々のことを計る思慮をさえ奪ってしまった。彼女は、自分だけがひどく傷つけられ、甚だしい侮辱をうけたと思ひ込んだ。夫の心を覗こうともしなかった癖に、夫は自分を確つきりと守ってくれるもの、と勝手に理想の枠を彼に押しはめていた小枝子の高慢は、いきなり鼻をもぎとるようなしたゝかさで、このような報復を受けたのだった。

激怒した父親が、直ちに親族会議を開いて離婚を決議したとき、長兄である父親に対して、大勢の親類は異議を狭まなかった。戦前のその頃は、家の威信を傷つけられたという感情が大方を支配していたので、本人の小枝子自身が反対でもすればとにかく、婿養子としての高瀬のとった態度は許せなかった。母は結婚に賛成したときと同じように、今度も父の意見に従うだけだった。十代で嫁いできたという母は、一まわりも追う年長の夫を盲信していて、女の不幸なぞまるで知らず、まして自分自身の意見など何一つ持たない、心の稚ない女であつた。

ただ一人、父の妹である恵子という叔母が、
「離別ということになれば、生れてくる子供はどうなりますか」

と静かな声で兄に詰め寄つた。

この叔母は思慮の深い女で、妹でありながら決して兄に盲従することがなかった。小枝子の結婚話が始

まったときにも、あまりに早急すぎることを進言したのであったが、豪放な小枝子の父親は笑いとはして受けつけなかったのであった。

この叔母は、家具商である温厚な須崎との間に、子供のいないことを除けば不足のない夫婦であった。須崎夫妻は、小枝子たち一家にとって、どの親類よりも頼りになる人達であった。

しばらく誰も答える者がなかった。やがて須崎の叔父が、

「小枝子は若いし、ゆくゆく独りというわけにもゆきますまい。わし等の子として籍に入れてはどうでしょうか」

と申しでたとき、救われたようにほっとした空気が皆の間に流れた。

“生れる子供”、と呟いた小枝子の全身を鋭い痛みが走った。

坂の頂点がオニブスの終点になっていた。終点で降りたのは、小枝子達母子の他に僅か三、四人にすぎなかった。

「ひどい埃だね」

と、良一が労るように言う。良一の濃緑のマーリヤ（ウール）のシャツも、小枝子の紺のサイアも、埃を吸ってぼけた色になっている。二人は、それぞれ服を

はたいた。

オニブスから降りると、右に向って草むらの中に小道が伸びていた。それはやがて下りとなり、墓地の入口へとつづいている。道は舗装を始めるらしく、小石がいったい撒かれてあつて、靴底にごろごろと当たり歩き辛い。道の両側には、ひねこびた雑草がすっかり埃を浴びてしらけている。幼いときから都会で育った良一には、この辺りの風物はまるで無縁であり、何んの感興もあるはずがない。暑さと埃の中を黙々と歩く彼の眼は、このような自然のありさまを嫌悪してでもいるかに見える。

墓地は、門をはいると直ぐ右手に事務所があり、それにつづいて遺体安置室が並んでいた。中年のモレーノと年若い男とが、傍の木蔭で縄煙草を刻んでいた。小枝子たちを見るとすぐ立上って挨拶をした。柔和な目口つきをしている。

良一の依頼に応じて、年長のモレーノは、一抱えほどもある埋葬の台帳を繰り始めた。敬虔で親切さが溢れている感じである。ながい都会生活で、人間関係の冷たさに馴れた小枝子は、こんなことにさえ今日は感動を覚えるのだった。

若い男の案内で、小枝子たちは椿の並木道を従って行った。風情のない田舎の墓地に不似合なこの檜の並木は墓地開設と同時に植えられたものだそうだ。照り

つける陽の下から、その下蔭に入ると、そこは生き返るような涼気をたゝえていた。良一はあい変らず緊張した姿で、少し重たげに足を運んでいる。涼しさを感じないように見える。小枝子には、そんな息子の様子を観察するだけの余裕があつた。

檜の並木を出ると、間もなく新墓地が展けていた。若い男は、何号地の何番、と呟きながら丁寧に見て歩いてたが、“此処だ”と云つて立ちどまつた。

高瀬渉の墓であつた。二人は言葉もなく途方にくれた思いで立っていた。なんの変哲もない、ただ土を盛り上げただけの墓である。

周囲には、木で作られた同じ十字架が立ち並び、打ちつけられた鉄片にある番号が、亡くなった人々のなきがらの所在を、僅かに示していた。

のど元まで出かゝる声が、言葉にならず空しく消える。さびしさとか悲しさとかでもない。味ったことのない、言いようのない気持で、盛上げられた赤土の墓を小枝子は、じつと見つめていた。

日傘の下で、小夜子はびっしりと汗をかいていた。彼女は着いたときのまゝ立っていたし、息子はしゃがんでいた。彼は炎天の下でうずくまり、手を伸ばして墓の番号札をそつと撫でていた。逞しい腕は茶褐色に日焼けし、汗で濡れている。二人とも言わねばならぬ言葉を持っていながら、何を言うべきかに戸惑つてい

るような不自由さを感じていた。

「墓を立てゝやらなくちや、ねえ」

しばらくして、小夜子はそんなことを言った。

「あゝ、そりや無論だよ」

と、少し掠れた、しかし力強い声が応えた。死んだ人に対する言葉は何もでて来ない。一昨日、領事館から高瀬死亡の報せがあり、それを良一に告げて以来、母子はほとんど会話らしいものを交わしていなかった。

ハンドバックを開いて、鉛筆をとり出すと、小枝子は十字架の表に“高瀬渉の墓”と記した。十字架の板はぎすぎすしていて書きづらく、歪んだ字が辛うじて並んだ。太陽の直射と、この土地特有ときく激しい風雨とは、この鉛筆の字を、まもなく消してしまいうだろう。

あたりを見廻すと、同じ土饅頭の墓が、数え切れぬほど並んでいた。

“花ひとつないんだね”

と、良一が押し殺したような声でいった。瞳が光つて濡れているように見える。

“本当に、お花を忘れるなんて、うつかりしていた”
と言いながら、小枝子は辺りを見廻わした。

“あの花を少し失敬してやろう”

と、良一が立上った。見ると少し傾斜した側の墓に、コスモスが溢れるように咲いていた。たぶんこの死者

の家族は、この土地に住み、亡なった地下の人に深い愛情を持っているに違いない。

良一はコスモスの花束を作り、小枝子は早咲きのすでに種子ができているのを見つけてそれを集めた。ざらざらに乾いている土を寄せて、良一が花束を立てる。小枝子は墓の上に掌の中の種子をこぼして土をかけた。焼けて熱いこの土の中で、果して種子が発芽するかどうか、あてにはならないが、彼女は気休めにそんなことをするのだった。

日本には幾人かの兄と一人の姉が居ると聞いていたが、その血縁の者に看取らるゝこともなく急死した高瀬を小枝子は改めて気の毒に思い、血を受けた父親をついに一度も見ることのなかった息子をもつと可哀想に思うのだった。悲しみの渦は流れなかったが、始めて、亡くなつた高瀬を悼み、小枝子の心は次第に澄んでゆくのを覚えた。

悲しみに堪えているのは良一であつた。涙を流してはいないが、胸中に溢れさせているのが、小枝子にはひしひしと感じられた。

“とうとう見ないでしまったね”

と、言おうとして、小枝子は危うく声をのみ下した。それを言えば、無惨に彼の心を打ちのめすことになるに違いない。彼女は唇を噛んで、じつと耐えた。

高瀬と離婚のあと、父母はいく度か再婚を奨めたが、もう強制するということではなかった。それから僅か三、四年の間に、時勢は急変していた。故国の敗戦に依るいちじるしい変り方の中で、日本では女の立場が強くなりそれにつれて家族制度も崩壊しつゝあるという、驚くべきニュースがひんばんに入るようになった。故国の思想や風潮は、遠く離れているブラジルの日系コロニアにも水のように徐々にしみとおりはじめた。小枝子は意識してその流れに共鳴した。結婚も離婚も、父母の意志のままであつた、という口惜しい思いが改めて彼女を動かした。

口に出しはしなかったが、どちらも一度きりでたくさんだ、わたしは一生独身で通す、必ず通してみせる、と固く決心するのだった。

人一倍、傲慢であり反面敏感でもあつた父は、意外に劣等感も強かった。何事にも積極的に頭をもたげ出した小枝子に対して、だんだんと受け身になっていた。時勢の変化は、父を締木にかけるように脅かした。母が間もなく脳溢血で急死し、父は急速に老いこんでいった。

小枝子の言うまゝに、一家は聖市に移転したが、妻を失い、生活の実権を失つた父に、昔の倅はなかった。戦前の頃は、服従することしかすべを知らなかった小枝子が、戦後は父を支える立場になったのだ。十年も

経たない間に、父と娘の位置は逆転した。

父は老いて病み、失意の中に亡なった。すでに小枝子は、得意の縫物で生活を立てていて、こと欠くこともなかったが、心はちつとも晴れなかった。空しさに抗うように、何かを追いつめでもするように、日夜けんめいにミシンを踏んだ。

若かったその頃の小枝子には、幾人かの男が好意を寄せた。妻を亡くした人もいたし、中年の金持で独身のポルトガル人もいた。だが、どの男にも小枝子は強く牽かれることがなかった。無意識のうちに、彼女はますます潔癖になっていった。

そんな頃の或日、小枝子は顧客の一人である田辺夫人の家に仕立物を届けに行った。陽気な夫人に引きとめられて、つい長居した彼女が、急いで門を出ようとする時危うく長身の青年にぶっかりそうになった。夫によく似たその人は、人なつこい微笑を含んで会釈した。小枝子は誘われるように軽く頭を下げたが、何か眩しい思いがした。

その後、幾日か過ぎ息子を連れて街を歩いていると、偶然その青年に会った。上気したような顔に微笑をみせて彼は近づいてきた。

“僕、野村です。姉から貴女のお噂をよく聞いています。お一人で大変ですね”

と言いながら良一の頭を軽く撫でた。日本から来て

間がない野村は如才がなかった。どう考えても、小枝子は自分より二つ四つ年下と思われる青年に、年上のような口を利かれると、返事に困ってどぎまぎするだけだった。

別れて歩き出したとき、手を引かれている良一が、

“母ちゃん、どうしたの、顔がまっかだよ”

と云って見上げた。良一の手には、いつのまにか、板チョコが握らされていた。

その後、田辺夫人の処へ行く度に、野村青年が来ているかしら、と考えている自分に気づいて、小枝子は独りでに顔を赤らめた。

彼女はときどき苦しくなると、朝でも晩でも冷水をかぶった。そしてそのたびに、負けてはならないと決意を新たにするのだった。そのくせ、何に負けてはならないのか、小枝子自身何も分ってはいないのだった。彼女は始終何かを希みながら、具体的に自分の不満が何に根ざしているか分らぬまゝ、やみくもに働きつづけた。何時の間にか、他人からは男勝りといわれているが、小枝子自身は、目に見えぬ何か得体の知れぬものに、必死に立向って生きているのだった。

そんな彼女を巡って立てる小波のように、野村や、その他幾人かの男達が現れたが、彼女に新しい生命を吹きこむまでには至らず、流れのように年月は過ぎていった。

彼女は夜になると、並んでよく眠っている良一の小さな手を握って、すがりつくような思いで呟くのだ。た。

「早く大きくなってね。男らしい男になって頂戴。母ちゃんはどんなことがあつても、おまえを離さない」そして声を押えて泣いた。

数年前、良一の籍のことについて、小枝子はどうしても高瀬に会わねばならぬことになった。別れて二十年近い年月が経っており、その間一度も会ったことがなかった。

別れて以来全く消息を絶った高瀬を探すにあたつて、先ず考えたのは、彼の生死のことであつたが、小枝子はなんとなく彼が生きているように思えた。もちろん彼は結婚しているだろう。子供達もいるだろう。自分の息子と血を分けた子供たちが、何処かにいる、と想像することは、ぞつとするほど不愉快であつた。それなのに、その子たちの母親には不思議になんの感情も動かなかつた。

物質的にも、自分たち母子よりずっと恵まれているだろう。若い頃から堂々とした体躯の持主であつた彼は、五十才近い現在どれほどに恰福のよい姿となつて現われるだろう。彼女は、そんな高瀬に威圧されてはならない、と強く自分を戒めた。

女独りで闘い、生きることと夢中で過ごした二十年近い才月は、小枝子から女らしさの大方を奪い去った。そしてその代償として、大抵のことには物怯じしない太々しいものを与えてくれていた。内にも、外に対してもきびしく生きてきた小枝子は、堕ちはしなかったものの、確かに自分はいびつな女になっているにちがいない、と思うのだった。

小枝子は遂に高瀬に会った。双方とも人を介しての会合であつた。冷静に構えているつもりであつたが、心の一部が言い知れぬ感情で、小刻みに慄えるのを覚えてた。仲介の人々と挨拶を交わしていると、一人の背の高い中老の男が入って来た。“あつ高瀬だ”と危うく声を上げそうになった瞬間、ぴたり、と心の戦慄はとまった。二十年という年月を決して忘れていたわけではなかつたが才月の重みのすべてが、目の前に立つ高瀬にかかっているのではないか、と思われるほどの彼の変わり方であつた。

彼の挨拶を遠くの人声のように聞き、小枝子は軽く黙礼を返した。容貌の変り方は甚だしく、どうしても昔の高瀬につながらない。体躯の肉は落ち、背丈だけが昔のまゝに高かつた。半白となつている髪、肉のゆるんだ頬、口元は入歯を外しているかのように唇がやゝ口中に捲れこんでいる。瞳はうす暗く老いの膜を

被っていた。そしていつそう見苦しいのは彼の服装であつた。くたびれた上着には斑な染みがあり、シャツも着古したもので足にはズツクの靴をはいていた。後で考えると、田舎の人の服装として驚くにあたらないものであつたが、昔、引け目を感じるほど身嗜みのよかつた高瀬しか知らぬ小枝子の目に、現在のこの姿は、無惨という他に言いようのないものであつた。

小枝子がひそかに想像していた高瀬は、余りにも意外な姿で現れた。心の中に用意していた言葉は、すべて不要になり、小枝子はとうとう直接には一語も高瀬と言葉を交わすことなく、会合を終えた。思いがけなかつた、高瀬の零落した姿と、彼が小枝子と同じように、ずっと独身でいた、と聞いたことは、その後しばらくの間、何故かそのために自分が惨めであるかのような、おぞましい思いを彼女の心の中に残した。

高瀬の容姿を、そのまゝ息子に伝えることに小枝子はためらいを覚えた。用談の結果しか訊かぬ良一に、諭すように、“人間は何時どんなことが起きるか知れないのよ。とにかく一度、おまえも逢つてみたらどうかしら”と、言つてみた。そのくせ内心では、心にもないことを言っているのではないか、という自身に対する差恥と嫌惡の入り交つた思いを持て余してもいたのであつた。

“何故？……何んのために？……彼がいつ僕のパイ

だったことがあるの。……僕に對して何をしてくれた。馬鹿馬鹿しい母さんのセンチメンタリズムだよ。僕は、僕とは何も関係ないんだ ” この返事が挑ね返ってきたとき、小枝子はわれにもなくたじろぎ、しばらく動悸が止まなかった。彼女はこれまで、良一に向って何一つ高瀬のことを話したことがなかった。勿論、別れた経緯など彼は何も知らないはずであった。それなのに、どうしてこんな返事が、と、息を殺した。そして又、自分は内々この返事を期待していたのではなかったか、という後ろめたさに似た思いがこみ上げてきた。

バツの悪さと、それでいて、何かしら奇妙な悦びに似た感情と、そして、それらのすべてに裏打ちされずには済まされない、索漠とした思いとが入り交り、顔が歪むのを覚えた。

息子の良一は、明るい闊達な性格で、子供の頃はむしろ腕白であった。一人っ子のひ弱きなどみじんもなかったし、拗ねて、てこずらせた思出もない。父親のことを訊ねもしない。そんな息子に、自分から過去のことを話すこともないと思った。そしていつしか日が過ぎていった。人間として恥じるところはない、と氣負いながらも思慮の浅かった若い頃の自分自身や、無責任な父親高瀬のこと、自尊心ばかり強くて我が儘

だった祖父のことなどあえて子の前にさらけ出すのは、はばかられた。幼い息子に、明らさまに伝えることに依って、そんな人々の血を享けて生れたのか、という劣等感でも持たれては大変だ、と思う怖れでついに過去を物語る機会を逸していた。

そのような、母子ともに不問という不文律の裡に、父親としての高瀬は、無形の存在となってしまうていた。

それにしても父、母、それに祖父母たる者達の、それぞれの愚かしさの犠牲となったのは良一であった。何んの罪もない彼に、生れながらの悲運のベールを被せたのは、父親の高瀬であり、頑固な祖父であり、夫に盲従するしか知らなかった祖母であった。そして、その三人よりも更に責められるべきは、無知であった小枝子自身であることは言うまでもない。自分のすべてを息子に傾けて生きて来た、と心ひそかに自負するとはいえ、詮じつめれば、無意識的な、息子に対する贖罪行為に過ぎないではないかと非難されたとしても、彼女には返す言葉があるであろうか。

領事館から、高瀬の急死を報らせてきたその夜、小枝子はできるだけ平静に、そのことを良一に告げた。

「実はね、今朝領事館から通知があったんだけど……高瀬が、M市の近くで亡くなったんだって。それで、明日にも行かなきゃなるまい、と思うんだけど……良一はどう思う？」

「えゝっ？……」

と、言ったきり眼を控えて、良一は母親の方へ一歩近寄った。無意識に互いに見つめ合ったまゝ二人はしばらく立っていた。

「母さん、直ぐ支度して！…。着替えと、それから寝巻も。僕は。パッセ（切符）を買ってくる」

固い顔をして、詰った声を押し出すように、良一は言った。彼は著しく成長して、この頃は何かにつけて、母の庇護者の立場に立つかたちになっていた。

一晚中乗りとおしたオニブスの席で、小枝子はときどき睡り、ときどき醒めた。その度にそつとうかがうと、隣席の息子はまたゝきもしない眼を、じっと前方の闇に向けていた。

夜明け方M市に着いた。領事館の紹介で訪ねた、この街の有力者という息羽氏の案内で、高瀬の知人達を尋ねて歩いた。それで彼の生活の状態とか、死の際の様子など、大体のことを知ることができた。相変わらず独身であったという高瀬は、或る伯人有力者の援助を得て、果樹を手がけ、かなりの成績をあげ始めていたと聞き、小枝子は意外に思った。

母子は、人々と別れてホテルで休んだあと、夏の陽の照りつける中を、墓地に向ったのであった。

“死んでしまえば、何も言うこともないねえ。この人

も運の悪い人だったのよ ” 感慨をこめて、小枝子はそう呟やいた。

四十年の生涯で、高瀬は関わりのあった、たった一人の男であったが、今更のように彼女は気持の上で高瀬とは他人に過ぎなかったことを思い知った。半年の間、起居をともした過去がありながら心は遂に無縁の男と女に過ぎなかった。しかし息子は彼女と異っていた。見たことも、知ることなかった父親に対して、彼は深い、ある感情を覚えているようであった。平静であろうと必至に努めている良一の態度の中に、小枝子は、父子の血の繁りを感じないわけにはいかなかった。

数年前に、“一度会ってみては”と云った小枝子の提言を、にべもなく撥ねつけたときの息子には、小枝子自身の中の、もう一人の自分を思わせるものがあつた。その同じ息子が、いま、その人の墓前に言葉もないうづくまっている。沈痛なこの姿に対して、応えているのは、二十幾年をともした母親の小枝子ではなくて、この世で遂に相見ることのなかった父親、高瀬なのであった。

幽明を異にしながら、今二人は完全に氣息の繋がっている父と子であった。小枝子は、そんな息子に声をかけることはできなかった。また彼女の割り込む余地は、そこになかった。現在この瞬間だけ、小枝子は彼等に

とつて傍観者なのであった。彼女は日傘を良一にさしかけ、無言で立っていた。

陽射しが驚くほど傾いて、辺りはいつの間にか少し涼しくなっていた。小さな天とう虫が、小夜子の脚にはい上ってくる。彼女はそれを指で何度も弾き落とした。

“人間って、……考えてみると、こんな虫けらと大して変らないみたいね。……可哀想なものね” ああ、同じさ。母さんも、その虫みたいに弾き落とされ弾き落とされて、生きて来たんだろ？” おどけたような明るい声が返ってきた。一昨日以来、

始めて見る微笑を含んだ良一の顔である。彼は充分に、地下の人との会話を了えたのであろうか。

ときどき、小さい白いものが二人の近くを流れるように過ぎる。明るい声に虚を突かれた思いで、小枝子は、つと手を伸ばすと、その白いものを掴んだ。何かの草の穂綿だった。何処から来て何処へ行く、何んの種子であろうか。光る細い白糸のようなものをつけている、この小さな草種子は、果して何処かの土に根付くのであろうか。ふと、高瀬の魂……そんな思いが脳裡を掠める。

自分の生きたいままに、何処という定めもなく、転々として行き、そして遂に家庭というものを持たな

かった男。この穂綿の運命こそ、高瀬の生涯そのものではなかったか。血縁にとらわれず、定着する土地を選ばず、風の流れに託すように生き、且つ終った男であつた。

立上つた二人の足下で、燃えつきた蠟涙がべつとりと土に拵がり、供えたコスモスの花束が、すっかり萎えていた。

墓守りの男たちに心付けを渡し、高瀬の墓石について良一が細かく打合せを済ますと、母子はやつと重荷を下ろした、という表情で微笑し合つた。オニブスの終点には、もう誰一人いない。荒涼と拵がつているカンプ（草原）の、はるか下の方に、点々と見える小さな街の家々。黙って立つ二人を包んで、大気は夕べのうす青い彩を漂わせ始めていた。

“何だろう？……あれは？”

軽く叫んで招きす良一の視線を追つた小枝子の目に、空中を往く霧に似た白い流れが見えた。二人の回りにもその流れから外れた白いものがへんべんと漂つていた。

“草の穂綿よ”

と、小枝子は短く答えた。良一はじつと見つめている。

実際それは見事な穂の流れであつた。見たことも聞いたこともない穂綿の大群が、ゆるやかに空中を流れ

ている。沓い記憶の中にある雪の降るさまに、どこか似ているが、感じはあたたかゝった。二人は言葉もなく見つめていた。間もなく、風向きが変わったらしく、その中心が渦巻いたとみる間に、白い流れが二人の方へ向ってきた。忽ち二人は白い渦の中に包まれてしまった。髪にも服にも、細い羽毛に似た穂綿はまっわりつく。二人は声を上げて笑いながら、しきりに面を払った。

やがてその大群は、街に向っている道の上空を流れて行った。その流れの向うから、小枝子たちの待つ終便のオニブスが、ようやく上って来るのが見えた。

帰郷

新井知里

略歴 本名 新井 知里、

生年月日 一九三八年一月十七日

出身地 長野県飯田市

渡伯 一九六一年十月

最初の居住地 パラナ州マリンガ市 二年後、サンパウロ市に移転、現在に至る。

学歴 長野県立飯田風越高校卒

職業 主婦

本掲載作品は、一九七四年パウリスタ年鑑に発表

帰郷

このところ知子は、ゆううつな日々を送っている。毎日々々がただただ無駄金を使わないように、一日が過ぎればよいと、金の事ばかりに神経を使つて暮す生活に、ほとほと嫌気がさして来ている。

土曜日曜の休日は慣れているが、四日もの連休が続くと、金を使わない為には外に出歩くことはならず、家の前の大通りをスースーと走る家族連れの自家用車を横目でにらみつけて、じつとしていると、なんでこんな思いをしなくてはならぬのか、無性に腹が立つてくる。

これというのも、みんな昨年無理をして一家で日本へ行った為なのだ。

知子の家族は、おとなしいがいたってワンマンな夫の明と、小学校に行っている三人の息子の五人家族である。その五人で渡伯十年目にドヤドヤと訪日したのだから、この帰伯してからの、金銭のつらさも無理もないが知子は無性に腹が立つのである。

昨年日本行きは、これといった金も持たず十年前渡伯した一介の現地雇いのサラリーマンの知子夫妻に

は、少々過ぎたことであつた。

渡伯七年目に細々と貯めた金を集めて、サンパウロの町中に家を買ひ三人の幼な子を育てながら、十年目に訪日したことは、今考えてもずいぶん無謀なことであつた。

知子は三人の子供達を、それは熱心に自分の全知全能をかけて育てている。夫の明に対しても、自分は少々やせてもつくす性である。

その知子の一番の念願は、子供達が小さいうちに、何としても日本の親に孫の顔を見てもらうことであつた。一日とて忘れることの出来ない日本に親の生きてゐるうちに行きたい。行かなきやあ！と心に決めた。

その為には、生活をきりつめ、家にいて出来ることならどんなことでもして金を作ることを考え続けた十年であつた。十年前、渡伯する移民船の中で「たべることが出来るようになったら、錦を飾らなくても肉親のいるうちに日本に行くのだよ」と何度も言い聞かせてくれた老人の声が聞こえ続けた。

明が会社に行っている間に、布地なども売り歩いたし、下宿も何年か続けた。一時間もかかつてコンニャクいもを買ひに行き、作つて売つたりした。

何の苦勞もなく町育ちをし、二十三才で渡伯した知子には、ずいぶんつらいことであつたが、家を買つたら、訪日しようという一つの目標があつたから、苦勞

と思ったことはなかった。生活の励みであり、生きがいであった。明も又、そんな知子のけなげな気持を理解し、一生懸命働き、何年と残業々々の日々であった。お互いに夕食を九時前に食べたことはなかった。

子供達も、そんな両親を見て育ったせいかな頑張り精神があり学校の成績もいつも上位である。

知子は、そんなきりつめた生活の中でも、服装だけはいつも、しゃんとしていないと気のすまないところがあり、表面的には少々派手に見える。

一方、夫の明は縁の下の力持ち的な性分で性格も地味でありだれにも寛大で、人はそばにいるだけでゆったりの気持になる。

そんな得な性分のため、日本行きの費用も本当のところ、手もとに一人分しか無かったのだが、友人達があと工作ってくれたのだ。その借金を返す迄、又二人はこうして、くる日もくる日も働き、連休でも、じつと家にこもっているのだ。

ブラジルを飛び立った飛行機は、マイアミ、サンフランシスコ、ハワイと観光し、日本に着いたのは、暮の三十一日大みそかの夜、八時半であった。

羽田には信州の両親の顔もあるものと思っていたのに、東京にいる義父と義兄、そして知子の妹の雅子と弟の均だけであった。

十年振りに会ったというのに義父も義兄もずいぶん落ちついて見えた。

東京で一人、下宿住いをして未だに出版社に勤めている義父は、七十才にはなっているはずなのに、つやつやした髪をして、十年前よりずっと若々しく見えた。

明が税関にいる間に、知子は三人の息子を連れて義父の前に行き、

「ただ今帰りました」

とやや興奮して帰国のあいさつをした。

義父も義兄も、「ああ」とうなずいたあと

「して今夜のホテルはどうするね」と聞く。

知子はいささかびっくりして、

「ホテルつて？別に決めてないのですが、そちらで…」
と言いかけてやめた。

明も知子も、とにかく日本にさえ着けば、その夜のホテルは、東京にいる明の父と兄が見つけて、待っていてくれるものと思い込んでいた。義兄の清は、大きな会社の調査役ではぶりも良いと聞いていたし、とにかく羽田にさえ着けば故郷の信州に行く迄の、その夜のホテルは取ってくれていると、のん気に思い込んでいたのが誤算であった。

知子は、十年振りで勢い勇んでここ迄一家でたどった気持を、軽くないなされた思いであった。

義兄は義父と顔を合わせて「どこどこに安いホテル

があるけれど、今からでは無理でしょうね」などと話している。

「自分の家へ来て貰っても良いが、家が狭いので…」などと口ごもりながら言う。

途方にくれているところに、先ほどから居合わせていた知子の妹の雅子が、二人の幼児の手を引きながら「なんでしたら私の所に」と口をはさんでくれた。知子は一瞬、今晚は夫の肉親と一緒にいるのが常識だがと思ったが、先程からのホテル間答で、あまりにわびしい気持になっていたので、夫の気持を聞く迄もなく、二人の顔を見ながら

「今晚は、妹の家にやっかいになりますわ」

ときっぱり言ってから信州にいる知子の両親は、又この事で夫の家族を、けちよんけちよんにやつつけることであろうと胸がさわいだ。

知子の実家と婚家とは、何事につけて水と油ほどの違いがある。

義父は地主の長男でありながら、農業を嫌い長いこと教員をしていた。

小学校の教員を退職すると、畑仕事などして暮らす生活は義父には出来ず大きな家も重荷になり、一つ年上の姉さん女房である義母の深い理解のもとに、一人東京に走ったのだった。それが私達が渡伯して間もない頃だから、かれこれ十年東京で一人暮しである。同

じように昔教員であつた義母は、二月に一度は東京に行き、義父の洗濯などするのが、何よりの楽しみのものである。

「お金など二の次ですよ、知子さん」と詩など書きながら、氣持大事に生きているから倉は七つも持ちながら、家の囲りは荒れほうだい、田のあぜ道にペンペン草をはやして、清く正しく生きている。

こんな婚家と、貧乏な百姓の次男で高等小学校しか出ていないが、苦勞して大会社の課長になり、しようしやな町中の家に住んでいる知子の実家とは、物事に対してずいぶん違いがある。こちらは氣持より物質で価値を計りたがる方である。

知子が明と急に恋をして結婚しブラジルに来たときも 大切な娘をやつたのに、結納もなかったと、後々まで言われたものである。

そんなことがあつたから十年振りに歸つて来たのに、ホテルも取つてなかったとあつては今度はどんなにのしることであろうか。 知子は明を深く愛しているだけに、義父や義兄をうらむより、そのことの方に胸が痛んだ。

雅子の夫の運轉する車に、何回も税関を通つた大きなトラックをつめ込んで走り出した車の中で、知子はあらためて二つ違いの妹を見た。

十年振りで見る雅子は、娘時代のほっそりとしてお

しやれだった姿は、いっぺんしてどつしりと貫線のあ
る中年女になっていた。夫が働きもので、三十そこそ
こでありながら十数台車を置いて、乾物問屋をしてい
るということである。

ほっそりとして長い髪をした知子とくらべると、雅
子は小がらながらどつしりと見える。

子供の頃から娘時代にかけて、雅子とは姉妹とい
いながら、ずいぶん仲の悪い姉妹であった。外目には美
しく仲の良い姉妹であったが、お互いに競争心のかた
まりのような姉妹であった。娘時代は知子の方がずつ
と太っていたから、ケンカなどすると、よく「姉ちゃ
んの大根足」とはやしたてられたものである。

「姉ちゃん、お母さんも昔とくらべたら、ずいぶん裕福
になって、一個五千円もするクリームをつけて喜こん
でいるんだから」

「ふーん、五千円のもの！」

知子はブラジルの値にして一〇〇コントスのクリー
ムを考えただけで目をまるくした。

「クリームだけじゃないのよ。着物だって十万、十五万
の着物をじゃんじゃん買うんだから」

「へえええ……」

知子は大きな指輪をどかりとつけている雅子の手を
見ながら、たずねた。

「それでお父さんも元気なの」

「ええ、お父さんも元気よ、少々かれて来たけど、六十才というのにこの頃 かまぼこの指輪を買い込んで、男なのにつけてしゃれているんだから」

「へええ そうなの、変ったものね、お互い仲良くやつてるの？」

「ええ昔姉ちゃんのいた頃のように、派手な夫婦げんか、もう絶体しなくなったから仲良くなったのよ」

知子は、くる日もくる日も、金が足りないの、大切にしてくれないの、とふてくされていた母を想った。

みんなが、楽になり豊かになり、バンザイなんだナ、日本も少しの間にずいぶん変わったのだと知子は思った。

大宮にある雅子の家に着いたのは、もう夜も十一時を過ぎていた。

ブラジルからの三人の息子達は、靴のままどんどんとタタミの上にあがってしまった。少し遅れて着いた知子に「なんです、靴のままです」という雅子の甲高い声がとんで来た。

「ああ、本当になんてこと、日本では靴をぬいて入るのですよ」

知子は子供達をたしなめて狭い玄関に、靴をぬいだ。

「ママ、カラーテレビだよ」

子供達はもう夢中でテレビの前にすわりこんだ。

「まあ、ゆっくりして下さい」

酒を呑まない義弟は、大みそかというのに甘茶をがぶがぶ飲んでいる。明は居ごこち悪そうに「ハイハイ」とつぶやいた。

知子はブラジルから持って来たトランクをさっそくあけて、みやげ物の蝶の細工を出した。

「これを額に入れて飾って下さい」

「あゝ、これはどうも」

義弟は手にとって、良く見もしないでダンスの上にポンと置いた。

「雅ちゃん、この宝石、気に入るかしら？」

知子は無理をして買い求めて来た大きな黄色い宝石を出した。その石を手にとった雅子は言った。

「姉ちゃん、大きいのはいいけれど、このカットは古いのよ、私は四角いカットがほしかったのに：・安物は嫌いな」

「そう、さんざん考えて買ったのよ、大きいのが欲しいと書いてあったから、これにしたのだけど：」

知子はまるで自分が悪いことでもしたようにうなだれた。

この宝石を買うのにサンパウロの町中を三人の子供達を連れて、一日中歩き回ったことを想った。

テレビからは大みそかの特別番組、紅白歌合戦が、にぎやかに見える。あの歌手も、この歌手も、見える

見える。日本では、こんな身近に見えるのね、茶の間において：・知子はなんとなく泣けそうになった。

「姉ちゃん、のんびりテレビなんか見ていないで、ふとんを敷くのを手伝ってよ、大勢だもの大変だワ」

雅子の大きな声で我にかえった知子は、せつせと狭い洋間のじゅうたんの上に、ふとんを敷き始めた。

明日は、いよいよ信州、一日とて忘れることのないなかつた故郷の土を踏むのだ。

懐かしい故郷・・・

夫の明の実家は、かれ草を踏んで、長いあぜ道を歩いたところに、昔のままひっそりと建っていた。

がたぴしという小さな格子戸を、明が、

「ただ今」

と開けて入った後に、知子と三人の子供達が続いた。誰も出て来ない、しーんと家の中が静まりかえっている。「おかしいわね」知子はつぶやいてから、はっと目をこらした。うす暗い上りかまちの上に、義母をはじめとして、義兄 義妹、甥、姪とずっと一列に並んで、しんと静かに正座している。

知子は、「あれえ！」とかなんとかさけんで飛び出して来て、オイオイとうれし泣きに泣く義母の姿ばかり考えて来ただけに、すっかりめんくらって、三人の息子をせきたてて高いかまちを上がった。

明を先に、知子、子供達と一列に義母達の前に並んで正座するのを待って、義母はおごそかに、

「このたびは、遠いところをご苦労様で御座いました」とあいさつして、ブラジルの孫達に

「正明さん、この方はあなたのおじさんですよ。この人は、いとこの克明ですよ」

と一人一人説明した。

知子夫婦はなんとあいさつしてよいものかただただ十年振りで再会した肉親の顔をぽかんと見つめていた。

義母は七十才にはなっているはずである。東京で会った義父と違い、やはり昔より顔なども一回り小さくなったように見えた。

十年振りで懐かしい息子に再会したというのに、こんな時にも昔教員だった、しっかりものの義母は、一つとしてとりみだすことがなかった。

ひととおりの再会のあいさつがすむと、ふすまをはずして二つの部屋を続けた広間で、東京から、かけつけた義父と義兄も入って、おごそかな祝宴がはじまった。兄弟が七人もいるとこんな時、実に、にぎやかである。

明は用意してあった丹前に着かえ、もうずっとこの家にいたような顔をして、うれしそうに兄弟と、日本酒をくみかわしている。

「こうしていると十年経ったとは思えないなあ」

と長兄がもう酒で真赤になった顔で、しみじみと言った。誰の胸も、その思いで一杯であった。

信州の田舎の夜は、こんな想いの家族を包んで静かにふけていった。

明日は知子の本当の心のふる里、実家に行ける。

知子は昨夜の東京での出来ごと、みんな消えて行く思いであつた。

翌朝は義兄の自動車で三十分の近くの市にある知子の実家に向つた。胸が弾み、それでいて会うのがこわいような：・実の父母に十年振りで会うのはこんなに心がさわぐのか。

高級住宅の建ち並ぶ一角に、知子の実家は高々とたっていた。囲りを見渡しても、道と大きな家々とがあるだけである。家の横にあつた美しい池も無く、沢山の桑畑も梅の木々も、ことごとく無くなっている。柿の木一本もみあたらない。区画整理で整然とした通りに画して、新しい大きな家が冷ややかに建っているだけである。

知子の頭の中がくるくるまわる。なんにもない。つま草した土手も、ほととぎすのさえずつた梅の木々も、十年々々々々。

知子達の車の音を聞きつけて出て来たのは母だった。

「まあ、知ちゃん！」

と云つてまじまじ見ていた母は、くるりと後を向いて

「お父さん、知子が来ましたよ、早く用意して下さい」
そう言ったきりバタバタと又、家の中に入ってしまつた。知子が明を促して、その後から玄関を入ろうとすると、又、バタバタとハンドバックをさげた母が出て来て、

「こんなところでは、ごちそうも出来ないから、料理屋々々」

と、興奮した声でせき立てながら、そそくさとタクシーを呼びとめた。母のあとから父も出て来た。知子はあつけにとられて、たゞ二人の顔を見つめていた。

母は五十八才にしては若々しく、昔そのままである。口紅をぬり、物の良さそうな着物を着ている。父の方は母と三つほどしか違わないのに、ずいぶん老人くさくなつていて、ぎくりとした。

「お母さん、ごちそうなんていららないのよ、家のごはんが喰べたいのよ」

「家だつて？こんなに大勢で食べるといったら大変よ、ごちそうなんて作るより、食べに行く方がいいんだよ」
「本当になんにもいららないのよ、漬物でいいのよ」

「なにを言っているの、早く早く」

知子は家の中に入りたかつた。入つてゆつくり家中を見たかつた。

遠いブラジルから、一家でやっと来たというのに、
ごちそうなんて食べたくない、ちよつとしたねぎらい
の言葉がほしいだけなのに…… タクシーに乗りこ
むと母は待ち兼ていたように言った。

「なんでそんなにやせたの。髪もボサボサじゃあない
の、昔の知ちゃんとすっかり違ってしまつて」

「そうかしら、子供も三人だから……」

知子は下を向いてボソボソ答えた。それでもせい
いっぱいのおしやれをして来たつもりなのに、やせた
のは十年間、異国で一生懸命がんばって生きて来た証
拠なのに……親にはさみしくうつるのだろう。

それでも今はだまってみてほしい。子供を連れ
た遠い旅で、十年振りの故郷に気が動転している知子
の気持を半分でもわかつてほしい。

「ほんとうにその髪は嫌だね、明日美容院に行つて切つ
て来なさい。顔の色もどうしてそんなに黒くなったの」
知子は又してもうつむいた。父も話の中に入つて来
て、

「ほかのことはどうでもいいが、その歯のそつ歯になつ
たのが一番気になる」

と言う。

知子は父にそう言われると、

「お父さんだって、昔はもつとすごいそつ歯だったの
に、総入歯になったからといって人のことばかり言う

ことないワ」

とむきになつて言つた。

知子は父とは氣持が通じ合うから、少しばかりのん気に話せる。昔から、父っ子であつた。母には胸の中のことを整理してからでない又何を言うのも恐ろしい。母の言う言葉に反論したら、何倍にもなつて返つて来た昔がそうさせるのだ。

料理屋では、先程からの母との問答で、すっかり食欲など失せていた。

明はここでも如才なく、酒をくみかわしている。三人の子供達は生れて始めての箸をあつかいかねていた。

この料理屋は、十年前知子の両親が結婚式もしないで旅立つ知子を、せめて親類縁者だけでも招いて、送り出そうと、知子の渡伯披露をした場所である。その時、知子は琴など弾いたのだが、今はなんの感激も湧いてこない。

料理屋から帰つて、あらためて家の中を見まわした知子は、あまりの変わりように、目を見はつた。タタミの上には、ふかふかとしたじゅうたんが敷かれ、その上に懐かしい炬燵がある。炬燵の横には、はじめて見る、ガラストーブが、あかあかと燃えている。昔は薄っぺらの炬燵かけの上に、ちよこんと小さな台が乗っていたのに、今は、はれやかな部屋に変わっている。その炬燵にあたつても、知子の心は落着かなかつ

た。

母は料理屋で残して持ち帰った鮭の甘煮などをひろげながら育った。

「知ちゃん、これだけ家中で飛行機で来るには、大金を使つて来たのでしよう」

「そりやあ、大金だけど、足りないところは友達が貸してくれたから」

「へえええ、お金を貸してくれる人がブラジルにはいるかな、借金などしてくることはないのに」

「そんなこと言つたつて、無理をしなかったら、いつまでたつてもこれないのよ。三十年経つても、四十年経つても」

「そんな大金を飛行機に使つて、もつたいたいと思わないの？え」

「ちつとももつたいたいと思わないわ、明さんが人に好かれてゐるから、こうして貸して下さったんだし、錦飾つてこようと思つたら、お母さん達がいなかった、ではなんにもならないでしょう」

「それにしても、そんな大金があつたら、もう一軒大きな家を作つたら、いいじゃないの」

「物じゃあないのよ、お母さん達だつて孫の顔を見たくなかったの」

「見たいのはあたり前だよ。だけど、そんな大金もつたいないねえ」

信州の谷間だけしか知らない人間に、知子の異郷での故郷恋しい気持ちなんて、誰にもわからないのだ。「さつきもちよつと見たけど、子供達の下着など、うすよごれて、ブラジルつてみんなあんなふうなの？ 知子の着ているセーターも戦争中のような毛糸だし、嫌だねえ」

「後進国だからしょうがないよ」

父は先程から後進国後進国とつぶやいている。

知子が明と結婚したいばかりに、親の反対を押し切って、強引に渡伯した昔が、こんな問答にするのだろうか。

話が一段落するのを待って、明は子達を促して寝室のある二階にのぼっていった。

親子三人になると母が口をきった。

「明さんの方では、ホテルもとつてかかなかったそうじゃあないの、あきれたものだねえ、お父さんも、兄さんも東京にいるのにどういふつもりか普通じゃあないよ」

教員あがりなんてつまらんもんき」

知子はなにを言う言葉もなかった。時計のボンボンという音を、ぼんやり聞いていた。

「何をボヤボヤしているの、子供が三人もいるというのに何時だと思っているの、ふとんを敷くこともしないで」

知子は一瞬ぽかんとして、あわてて二階にかけあがった。そうだ！ふとんを敷くのだった。十毎間のベツト暮しで、すっかり忘れていた。忘れてもいたし、先程から気持も動転しているのだ。ドタドタと上ってきた母は、

「なんだね、みんなまがった敷方をして、子供にねまきも着せてないじゃないの、まあ、ゆつくりおやすみ」母の下りて行くのを待って、知子は、ワァーと泣きふした。

「こんな家私の実家じゃあない、母じゃない、日本になんか、来るんじゃないかった。来るんじゃないかった！」明も子供達もただびつくりして、しよんぼりその姿を見つめていた。

子供達の目にも涙があった。

三人の子供達は、その晩から、毎晩ブラジルに早く帰ろうと言い続けた。

母も十年前は、あれほど物質的ではなかった。物質文明がこんな信州の谷間にもしつかりと根をおろしているようであった。

知子は、又せつせと内職の人形の手を早めた。あの大金の代償が、あんな思いだったとは、腹が立つより、わびしく悲しく、せつないのだ。

「明さん、もう二年、借金を返すまで、又しんぼうしんぼうね」

「うん、二年、がんばるんだよ」

狂 犬

松井たろう

略 歴 本名 松井 太郎

生年月日 一九一七年十月二十五日

出身地 兵庫県神戸市

渡 伯 一九三六年十月一日サントス着

最初の入植地 パウリスタ線ガルサ駅のブラジル人耕地、後マリリア郡内で十数年農業、次に、パウリスタ線奥に移る。病を得て、モジ・ダス・クルーゼス駅近郊に移る。

農業ひとすじ

文学歴 一九六六年「農業と協同」五月号に 「ひでりの村」発表 一九七〇年「農業と協同」七、八月号に「ある移民の生涯」発表

趣 味 読書、創作

本掲載作品は、一九七五年コロニア文学二十七号に発表

狂 犬

新州道00号が開通してこのかた、難所といわれるイタクリの山越えで、パライバ東北地帯からM市に結ぶ旧道は、ぱったりと往還がとだえた。曲りくねった急な坂道をときたま上ってくるのは、この山のあちこちの谷間から、伐りだす材木を積んだ車ぐらいである。山と山の切れ目にある峠の前後には、なお一そう高い峯がそびえ年中風が吹き上げた。深い谷をひかえた前方の山腹には、暗灰色の丸い巨石が点々と露出している。縁の絨毯を敷つめたような斜面を、放牛の踏みかためた小道がジグザグに、幾条となく山上に昇っている。峠の広場には老齢の杉に囲まれた祠と、ジューリ才爺の居酒屋がある。

車の往来で賑わったつい半年ほど前までは、どちら側から来た運転手たちも、こゝから先は下り坂になるので車を止めて一服した。岩のわれ目に差し込んだ青竹から流れ落ちる清冽な水で顔や手の汚れをおとし喉をうるおした。前蓋を上げてラジエタに如露で水を足したり、積荷の具合を見たり、タイヤを点検したのち、牧童が牛車で砂糖黍を運んでいるペンキ絵の下に、「銘

酒山の露」と書いた古びた看板の下をくぐつて、一寸一杯腹の虫ころしをやるのであった。

長い乾期の末、春のさきがけの長雨が降った。山霧が谷底から渦を巻いて湧いてくる日である。宿り木の垂れ下がった杉の太い横枝のあちこちに、探菰を伏せたような土の鳥の巣がかゝつてゐる。黄色泥こねのジョンがひよいと首を出し、キッキキキとひくゝ鳴くなり隠れてしまった。日は高く昇つてゐる時刻ではあったが、居酒屋は戸を半開きにしてカンテラを灯している。話相手の客もこず主は売台を前に黙然と坐つて、――こう商いが暇になれば早晚店を閉めて、谷底の地所に引つ込むより仕方があるまい――などと考えていた。一台の車が山腹を上つて来る気配がある。風に排気音は消されがちだが、確実に近づいてきた。すぐその曲り角をこえたと、主が耳を澄ましていると、おんぼろ車が店の前で一きわガソリンをふかして止つた。扉を押して一人の女がとび下りた。案内知つたようすでつかつかと店にはいると、

「爺さん。達者かね」

と女は売台から顔だけ出している主のジューリオに尋ねた。

「おゝ、誰かと思ったらアンナじゃねえか、えろう久しぶりだが、どうしたぞね」

「ジョアナ養母さんはまだ下の谷窪にゐるかね」

「いないでどうするかい、神様のお呼びまではなあー」
ジューリオは軽く売台をたゝいた。

「当分養母さんの所で厄介になろうと思つてね」

「へえ、古巣へ戻つてきたという訳かね、亭主はどうしたね」

「木に打たれて、おつ死んじやつた。男がいなくては山にいても仕方がないからね」

「お前も男運のない女だな、で何人いるんだ」

「上が男一人であと女二人さ」

「そりやあ、一苦勞だぜお前」

主はアンナの足許から頭の先まで一瞥を走らせた。
生活の貧しさが女を荒んだものにしていた。

「おー、寒む、冷えるね、爺さん火酒一杯おくれよ」

ジューリオ爺は売台の下から、山蔓で巻いた大瓶を取りだし、コップになみなみと注いだ。女は息もつかずに呑み干し、肩をふるわせチュツと唾を床にとばした。

「ジョージ、シコ小父さんに一寸休んで行くといつておくれ」

アンナは車に向つて叫んだ。

三人の子供と運転手のシコが、うす暗い店にはいった。中老で痩せて背の高いシコは二年前に女房を亡くした。小兒麻痺の娘が一人いて、なにかと不自由なので、亭主を死なしたアンナに気があるのだが、まだ一

月もたゝぬ後家に言いよるのもどんなものかと思ひあぐんでいた。

ジューリオが空のコップを台の上におくと、シコは手をふった。

「爺さん、子供らに何か喰わすものあるかね、朝早かったから何も腹に入れてないんだよ」

アンナの催促に、主は黙って領き、いくつかのパンの腹をさき味付肉をはさんで売台の上においた。

一心にパンをかじっているジョージに目を注いでいたジューリオは、アンナの耳もとに口をよせて、

「良く似ているな、そっくりだぜ」

と感心したようにいった。

「当り前さ。爺さん、いくら知らんと逃げてても、子供の方から似てゆくんだから」

「そうさな」

と主は合点するように首をたてにふった。

「ときに、あの人はどんな具合かね」

「忘れられんと見えるな、近頃は男ぶりも上つてえゝ旦那衆になつとるで」

「奥さんはいるんだろうね」

「そりやお前ー アンナお前一生の不覚だったな、もう少しの辛棒だったんだぜー」

アンナはそれには答えず、

「もう一杯注いでおくれ」

と空コップを前にすべらした。

「おい々々、そんなにやっても大丈夫かい」

「こんなもので三杯や四杯なんでもないんだよ、山で手が上ってね」

外ではシコは待ち切れずに、警笛を鳴らした。アンナはよろけながら店を出た。やがて霧の中を車は出たようである。主は売台をかたづけながら、

「やれ々々、又一騒動おきなればいゝが」

とつぶやいた。

本道から左に折れユーカリ林の傾斜地を、いく重にも疊んだ支道を下ると、やゝ開けた谷間に出る。山坂を削り谷を埋めて、中野養鶏場の十幾棟かの鶏舎が並んでいる。

若い女が手籠の卵を、手押車につんでおして行った。選卵場の小屋にくると、

「あんた、前からどうも変だと思っていたんだけど、一ばん端の鶏舎の卵だれかに盗られているわ、きつと」
「今までそんなこと一度だって無かったじゃないか」

まだ四十前だが小肥りして、腹の出かゝった主人の東吾は、腑に落ちないようすで首をかしげた。一週間たった。細君の君江は念のため、印をつけて残しておいたのが無くなっている。

東吾は一おう雇人を疑ってみたが、みな素性の知れ

ている者ばかりで、疑うとすれば新しく雇い入れたペードロだが、つい一と月ほど前炭焼きのペードロがきて、使ってくれというので、「うちで働くよりバナナ卸しにいった方が日当になるだろう」と東吾がいうと「へへー、それがバナナ売ってはいかんといわれまして旦那、変てこな難かしい世の中になってきやしたものでー」といつて次のような泣ごとを並べた。

親の代から炭焼きが家業のペードロだが、もうとつくに廃業していた。西向きで陽当りの良い地所に、バナナ園を持っていたので、一週二回ラバの背中にふりわけて乗せた竹籠にバナナの房をつめ、M市の朝市に出かけていた。ところがある朝、運わるく監督に捕まり、鑑札なしに物を売買してはいけないといわれ、こんど見つければ罰金をとると脅かされて青くなった。仲間の一人が見かねて彼に鑑札は代書人にたのめば市役所へ請願してくれると、教えてくれたので行ってみると、五種類もの書類の提出を要求されたので、ペードロは朝市に行くのを締めるより仕方がなかった。

祖父の代から住んでいるいまの地所は、占有地で地権もなく税金を払っていない。出生証明書は深箱の底にしまつてあつたが、何年か前の失火で焼失したまゝになっている。バナナが売れなくなつて、暮しの苦しくなつてきたペードロは、塩をかけられたナメクジのように、生きる道をさがして動きはじめ、仕事の口を

中野養鶏場に求めにきたような訳で、ペードロに卵盗人などやれないと東吾は思った。君江の気にかかつていることは、卵が盗まれるようになった十日ほど前に、この辺りでは見かけない少年が卵を買いにきたことである。犬のなき声に君江が台所から出てみるとその少年が立っていた。裸足でぼろを着ているが、褐色のうすい皮膚の顔立ちは整っている。君江は身ぢかな者に似ていると思ったが、思いだせなかった。

「何か用事なの」

「ひゞ卵売ってむくれ」

「うちはひゞ卵売らないの、黙って農場にはいつてきてはいけないわ、立札見なかった」「俺、見たよ。だけど母さん病氣なんだ」 近くの山にきている流れ者の山伐り人夫の子供だろうと、君江は思った。すげなく追いつ返すのも可哀想と考えなおして、少年を選卵場までつれて行き、別に分けてあつたいくつかを、古新聞に丸めてあたえ、今後ははいけないと言ってきかせた。少年は痩せた腕に手提袋をぶら下げて、喧ましくなき騒ぐ鶏舎の間を帰って行った。君江はなんとなく変な子供だと考えながら見送っていた。

養鶏界は近年にない不況に喘いでいた。破産する業者も出たという噂が流れた。東吾は放っておけない期

限つきの借金の処分に、所有地のユーカリ林を売ることに決め、請負人を尋ねての帰途、久しぶりにジューリオの店によってみた。売台に肘をはって居睡りしていた主は東吾の声に目をさまし、「これは珍らしい」といって立ち上った。

「達者で結構だね爺さん、商売は相変わらずかね」

「相変ずもなんの、新道が出来て以来さっぱりで、わしもよる年波だし店を閉じて、谷底へ引つ込むことにしましたわい」

「それは名残りおいしいね、爺さん自慢の手作りを一寸一杯という訳にいかなくなるね、死んだ親爺などは此処のじゃなくては、口にしなかったからな」

「へえー亡くなった先代には随分とご最屑になりました」

「爺さん、一杯もらおうかい」

ジューリオは台の下から大瓶を取り出し、口をかたむけてコップにつき終ると背を向けて庖丁を動かしていたが、やがで小皿に白黴の生えたチーズのいく切れかを盛って、東吾の前においた。

「旦那、こんな肴しかござんせん、自家用に家の者が作ってるんで」

東吾が一切れ口に入れてみると、なか々々の風味である。

「これはいけるね」と東吾がはめると、

の子はたしか十三才のはずである。こんなことを妻が知ったなら必ず一騒動持ち上ると思えば、東吾の気分はしだいに沈んだ。

君江の自殺未遂以来十年からの彼らの仲はしっくりいっていない。感情的な妻は未だにしこりを残して、夫の要求に素直に応じたことがない。東吾のひつつこい求めにやつと膝を開くぐらいで、時に東吾の情欲の高まりで、変った体位に誘っても妻は頑固にこばみ、無理に強いるとくるりと背を向けてしまう。こうなるといくら東吾が宥めても、だまって返事さえしない。心の煮えたぎる思いに耐えかねて、こんな女と一緒にあったのは失敗だったと、しみじみ後悔した。なぜあの時子まで孕んでいたアンナを捨て、二年もの間遠縁に当るC市の種鶏場に逃げていたのだろう。父はあんな女を家に入れるなら勘当すると激怒したが、たとえ日雇に落ちぶれても良い、アンナを連れて家を出なかつたかと、悔まれてならない気持になる時がある。

アンナはジョアナ後家の養女で、人の噂では旅の女が一晩ジョアナの家で宿をとり、足手まといの女の子を預けて、行つたきり帰つてこないという。

その頃はジョアナの夫もまだ達者で、炭焼きも結構商売になっていた。夫婦の間に子も無かつたので育てることにした。少女期からもう美貌の前芽をみせていたが、成長するにつれて男たちから騒がれるように

なった。なかには手を出す若者もいたが、アンナは相手にしなかった。彼女はそこらあたりの山男の女房で一生埋れる気はなかった。

ある日、山で木を伐っていた養父は、突然胸われでたおれた。一家の働き手を失ったので、アンナは卵選りに中野養鶏場に通うようになった。彼女は十六才であつた。

肌こそ小麦色であつたが、細い鼻すじの通つた顔立ちには整っていて、先住民の血を多分に引く美形である。癖のない黒い髪をきつちりとなでつけ、うしろで二つに分けて肩に垂らしていた。朝露にぬれたジャボチカバのようにうるんだ瞳はとくに魅力があつた。小作りの容貌はまだ少女期を脱していない幼いところが残っていたが、肉体はもう成熟した一人前の女で、触れゝば枝から放れおちる、熟れ切つた赤いマンガ（マンゴー）を想わせた。

東吾は修学がものにならず、呼びもどされて嫌々ながら家業を手伝っていた。アンナに目をつけた彼は選卵場に入りびたつて、陽気に冗談など飛ばして雇人を笑わした。アンナも気さくを東吾に好意を持つようになった。

もし彼が求婚してくれば承知しても良いと、当国風にごく簡単に考えていた。

夏の雨もしだいに遠のくと、空が青くすみ山では朝

夕冷えこむ初秋の季節となった。標高八百米をこす海岸山脈の尾根つたいのこの辺りでは、春の木々の芽吹きが遅いわりに、柿、桃、イツペ、木綿などの落葉は早い。山笹の繁みから突き出たわらびの枯葉の目立つ頃、イタクリ鎮守の社の祭日がくる。

山の有志たちは祠に石灰をぬり、庭を清め参道には青竹を切ってアーチを組んだ。町からは楽団が呼ばれていた。アンナと約束した東吾は昼すぎ祭に出かけた。賑やかな楽の音が流れてくる。遠方から来た人たちもいるとみえて、道路の片側に車が並んでいる。広場は群集でごった返している。東吾は老杉の根元で人待ち顔のアンナを見つけた。目立たない地味な服装で彼女は来ていたが肌色の首粉と桃色の口紅が肌に合って美しかった。二人は腕を組んで社にはいり聖像をおがんだ。裏口から広場へ出た。今日の縁日をあてにして香具師たちはそれぞれに店を張っていて、どの店にも田舎者がたかって騒いでいる。二人は人出の中をもまれてゆくと、知った顔に出合う。東吾は若者たちの連れているどの愛人と比べてみても、アンナは誰にも劣らないと思つて満足した。

日が傾むくと谷間から霧が湧き、山々は青ずんで急に気温が下がってきた。夜になると野外舞踏会があるはずだが、まだ時間があつた。賞品に煙草をくれる輪投げをして二人は暇をつぶした。山の冷氣はうすい

毛糸の上衣を通して泌みた。アンナが寒がるので東吾は誘って売店でショウガ酒をのんだ。電燈が一せいに点った。群集はどよめき始めた時、待っていたとばかり一発の花火が空高く打ち上げられとどろき渡ると、爆音は千々にくだけて山彦となり山々に反響した。続いて一発上がり、又一発上がった。そしてしばらく休憩していた楽団が演奏をはじめた。二人はぴったり密着して踊った。動くにしたがって酔いがまわってきた。東吾は相手を抱きしめ自分の胸で、女の乳房をかるく圧迫した。アンナは男の為すまゝになつて踊った。

東吾は車できていたのでアンナを送つてゆくことにした。雑木林の支道にはいり下り坂にかゝつた時、東吾は始動スイッチの鍵を廻して電流を切った。学生時代は女友達にことかゝなかつた彼も、父の許に呼び戻されて女に不自由していた。東吾は前からアンナに目をつけて機会をねらっていた。生娘を相手にしては後で面倒なことは知っていた。場合によつてはアンナ位の女なら、結婚しても悪くないと考えたりした。下腹に淫欲のはった男は、草の根に身をひそめ獲物を待つ、残忍を野獣の目で女をなめまわした。アンナはまだ酔のさめやらぬ態で、ぐったりと男に身をもたせかけている。上り坂にかゝると卓はしぜんと止まつた。

「どうしたの」

アンナはうす目を開けて尋ねた。

「故障らしい」

東吾は懷中電燈を手にも、運転席からゆつくりおりて、前蓋を上げ発動機の具合を調べる風を装った。

「アンナ、道具がいるんだ一寸立ってくれ」

と男は手荒く女の座席を持ちあげた。アンナは転げ落ちそ久ノになり、片足をのぼして床を踏むと、しぜんと腿を開いた姿勢になった。東吾は女の足首を掴んで引きよせた。不意を襲われた彼女は本能的に抵抗はしたが、本気ではなかった。

「いやあー、いやあー」

といゝながら男に抱きついていった。上げた腕のくぼみから腋臭が匂った。男は女の髪の中に指をいれて引きよせて口を吸った。

あくる朝、東吾は選卵場を覗いてみたが、アンナはきていない。ーあいつ恥ずかしくてこをいのかをー、と思った。まだ喰い足りない気が男に残っていた。

一日おいて翌日 アンナは派手な服装で働きにきた。

「えらくめかしこんだもんだ、何かあったのかい、アンナ」

中年女の MARIA が冷かした。

「ふんー」

とアンナは鼻の先で返事して、出荷伝票を切っている東吾にすりよって、

「昨日町へいってこれ買ってきたの、似合うかしら」

女は一夜で花咲いた感じである。笑った目がうるんで恥じらいが宿った。東吾は自分のものになった女を見て一昨夜の想出に残忍な喜びを感じていた。

朝食後、マリアは一番はしの鶏舎へ採卵にいった。アンナは明日の出荷の箱詰めにかゝつていた。

「おい、裏へいこう」

「なにさ」

アンナは含み笑いの目付きで、恋しい男を見つめた。東吾はよつてくると女を抱きしめなにか耳もとで囁いた。

女は顔を赤くして、

「いや、いや昼日中なんか」

ともかく彼女を無理に、崖下の倉庫の露路に連れこんだ。人目を盗んでの野合がつづくうちに、女は肉の疼きに目ざめて、男の要求を待つようにさえなった。

冬の終りの長い乾期の末に、春のさきがけの長雨があった。霧に煙った谷間にせゝらぎが高まった。水ぎわのイッペは黄色い花を一せいに開いた。山家の庭の木棉は飴色の若芽を崩えださし用心深い山柿の芽も青くふくらんできた。

ある日、アンナは東吾に、

「子供ができたらしいわ」

と告げた。男はおかしいほど慌てた。

「真実かい」

「嘘と思つて。あんたがいうこと聞かないんだもの」

東吾は困ったことになったと思つたが、顔に出す訳にはいかない。

「まだ誰にもいってないだろうね」

「こんなこと、誰に話せるの、恥かしくて」

「心配するな、なんとかする。当分気づかれないようにしてくれ」

「一緒になつてくれるんだろうね」

「心配するなといつでるじゃないか、たゞ親爺がうるさいんだ」

女から逃げて一人になつた東吾は、

「チエツ、どじをふんだな」

と腹立たしそうにつぶやき、車の滑り止めに敷いた道の小石を思いきり蹴つた。どうしたものかと考えても、別に良い思案も浮んでこない。口さきの約束を守つて、アンナを妻にするほどの良心は男にない。事が面倒になれば女を家に入れてもよいと思うほど、アンナの熱い肉に愛着があつた。しかし反対するに決っている両親に反抗して、二人手に手をとつて、その日暮しの生活に落ちるほどの決心と勇氣は男になかつた。中年女の MARIA は仕事をすまし、弁当がらを手にして腰をのばしているところへ、東吾がはいつてきた。

「MARIA、一寸話があるんだが」

「若旦那、なにがご用で」

前から時々卵を腹に隠して持ち帰っていたマリアは、事が露見したのかと恐る恐る主人の顔をうかがった。

「実はマリア、力になって貰おうと思ってるね、アンナのことだが」

東吾の話に一安心したマリアは元気づいて

「アンナがどうかしましたかい」

「腹が大きくなったんだよ。それでね、こんなこと俺の口から両親に言いくらいんだ」

「で、若旦那、お頼みとはどんなことですかい」

「頼みというのは、あんたから親爺なりお袋なりに、世間ではこんな噂をしていると、一寸耳に入れてくれ、ばいゝんだ」

「そりゃー、お安いご用ですが、アンナをどうするおつもりですかい」

「どうするってマリア、親爺が許してくれゝば家に入れても良いんだ」

この話は当分内密にしてくれと、東吾はポケットから紙幣一枚を取り出してマリアに与えた。以前にマリアは息子のジョーゴの嫁にと、アンナに当ってみたことがあった。にべもなく断られたマリアは、それを根にもつてアンナを恨んでいた。どこの馬の骨とも分らないアンナが、お人好しの東吾をだまして、ぬけぬけと玉の輿に乗るかと思うと、憎しみの念が湧いてきた。前からどうも変だと思っていたが、もうさかりのつい

た牝犬みたいに出て来ていると聞いて、腹の虫がおさまらない。―なんだい。養鶏場の若奥様におさまって、おいらを顎で追い使うつもりかい、そうなればジョアナの後家も左団扇という身分やわ―。つぶやきながら、雨に洗われて木の根の出た、山道をよたよたと帰って行った。

静かな夜であつた。君江はあみ物の棒をせっせと動かしている。時々手を止めて耳を傾むける。微風のユーカリの梢を渡るかすかなざわめきがする。今晚あたり卵盗人のくるような予感がする。前から手配はすましてあつた。山寄りの鶏舎に二匹の番犬を鎖を長くして繋いである。

「あんた、犬がないているみたいだわ」

「そうか、俺には聞こえないが」

「あれ―、ないている」

こんどは東吾にもはっきり聞きとれた。二匹のなき声がユーカリの森にこだました。東吾は懷中電燈を手にして表に出ると、飼犬のクマを呼んだ。

一週間すぎた。日曜日の朝息子の明がクマに餌を持って行くと、犬の様子が変なので母を呼んだ。君江がきてみると、クマは小舎に隠れて名を呼んでも出てこない。

不審に思った君江は中をのぞいて見ると、犬は涎をたらしてひくゝうなった。用心のため棒切れで皿を前につき出すと、突然犬は飛び出して餌には目もくれず君江の持っている棒の先に噛みついた。青くなつた彼女は子供にいつて東吾を呼びにやつた。

東吾が犬小舎に近よると、又飛びかゝつた。鎖がぴんと張つて、後にもんどり打ってひっくり返つた。犬は怒つて鎖を噛んだ。

「狂犬になつたな」

東吾は細君の方にふり返つていった。

「明、お前近頃クマと遊ばなかつたか」

と息子に尋ねた。

「ないよ」

「これは大事なことだからね、かくすといけないよ」

「明、本当に遊んだことないんだね」

母親は念を押して又尋ねた。何事もひっこくいわれるのが嫌いな明は、

「無いといつたら、無いんだよ」

と怒つてふくれた。

「無かつたら良いんだ」

一晩様子を見て始末しようと思つた。クマが狂犬病に犯されているとすれば、これは大変な事だと東吾は考えた。一週間前の夜クマに追われて卵盗人は悲鳴を上げて、谷川をこえて逃げたが、犬から噛まれ

ていれば放っておく訳にはいかない。

東吾は朝のコーヒ―をすますと、妻に森の下見をするといって家を出た。山寄りの鶏舎を廻つて山にはいった。

下草の露はズボンを通して泌みた。谷川の水音の聞える辺りまで来ると、鶏の羽根が散らばっている。東吾は一枚を手にとって見ると、まだ脂気もあり汚れて彩らず、古いものとは思われなかった。谷川は岩石が洗われて自然と飛石の形になり、清水が岩の間をくぐつて流れている。川を渡ると山茗荷が踏みしかれて人の通った跡がある。急坂を上りつめると、思いもよらぬ近さで旧本道に出た。ついその先にアンナの家へ行く枝道が分かれている。向うから声高に話しながら男たちがくる。顔を見られては一寸具合が思いと、東吾は草むらに身をひそめた。

手入れの悪い支道は雨で傷んでいるが、辺りの雑木林のたゞずまいは、十幾年前とすこしも変っていない。道ばたの白蟻の塚や、高くのびた山人つ手の裏葉の白さなど、ついこの間のように想われた。坂道を上りつめると黒づんだ丸瓦のジョアナの家のわきに、アンナの家らしい錆びた鉄板葺きの小屋が見える。

東吾は次第に憂鬱な重い気分になっていった。今さらおめ々と女の前に顔を出せる義理ではないが、そうかといって人伝てにする訳にもいかない。ひどく荒

れたジョアナ婆さんの庭を通るとき、声をかけたが人の気もない。砂糖黍のみだれた茎を分けて出ると、粗末な小屋の前で、女の子二人で砂遊びをしている。東吾は笑顔を見せて近よった。

「母さんいるかい」

子供達は家の方を見て、頷いたので念のため、

「母さんの名は、なんというの」

「ドナ・アンナ」

大きい女の子が答えた。

小屋に近づく戸の前で、東吾は声をかけて返事を待った。「誰だい、はいつておくれ」 かすれた女の声が出た。戸を押すと錆びた蝶番がきしった。土間に女はあぐらに坐り、大鍋を開いた股にはさんで、下し金で木芋をすり落ろしていた。東吾は一目見て同名の人ではないかと疑った。ざんばら髪の五十才とも見える半黒の女が、への字に曲げた口に竹パイプをくわえ、濁った赤い目で来訪者を見上げた。長年にわたる生活の荒廃は女を凄まじいまでに変えていた。東吾の幻影は無残に崩れおちた。

「どなただえ」

女はしわがれた低い声を出した。

「アンナ、俺だよ、東吾だよ」

男は胸をしめつけられる思いでいった。女は目の前に色白で肥えて、生活の苦勞をしらぬ階級に住む一人

の男を見つめた。一日として忘れた事のない男が前にいる。

恋しいと思う心とうらはらに悔い殺しても飽き足らない自分を騙して今の落魄に突き落とした男が立っている。

「何か用かえ」

「今日きたのは他でもないが、一寸尋ねたいことがあるんだ。あんたの息子が夜道に迷うか又間違って、農場へ入りこみ、一週間はど前、いや、はつきりいうと先週の日曜日の夜、うちの飼犬に噛みつかれなかったか、どうかを一寸尋ねにきたんだ。誤解しないでほしい他意はないんだ。たゞ犬に噛まれなかったか、そんな事はなかったか。

正直に言ってくれ、これは大事なことで人の……」

「恥知らず、うちから盗人を出そうとするのかい」

女は東吾に終わりまで言わず、持っていた下ろし金を投げつけた。男の肩で木芋の粉が白く散った。

「アンナ、話したい事は山ほどあるんだ。今日はただ犬に咬まれたか、どうかを知りたいのだ」

「あんたの犬など、悪魔に食われてしまえ」

女は立ち上がると、恐ろしい力で男を外に押し出して、戸をぴしやりと閉めた。

東吾は女から突き出されても、帰る訳にはいかない。何とかして真実を確かめたかった。さいぜん砂遊びをしていた女の子に聞けば、案外糸口は見つかるかと思い、辺りを見渡したが、今の騒ぎに恐れてどこに隠れたか姿は見当たらない。彼は思案に暮れて立ちつくしている、坂下から十三、四歳ぐらいの痩せた少年が、木芋の一株を肩に担いで上がってきた。

「ジョージというのは君かい」

「おれ、ジョージだが」

「ジョージ、君は近頃犬に咬まれなかったか、日曜日の晩だ。事実の事を言ってくれ、場合によっては町にまで行かにやならん」

その時、表戸が開いて、

「ジョージ、お逃げ」

と母親は叫んだ。

少年は担いでいた木芋を放りだし、脱兎のように下の竹藪に逃げた。東吾もすかさず迫って走った。こうなれば少々手荒くしても、真実の事を言わして、町の衛生局まで連れていく決心をした。身軽な少年はまばらな竹の間をすりぬけていく。東吾の長靴は重く、厚く積もった落葉で走りにくい、彼は動悸がして苦しくなった。谷川近くになると竹の密生が陽の光を覆って暗くなった。前方は刺草が交

差して絡まり、獣の抜ける道もない。

ジョージは蟹の這うように横に走ったが、朽ち葉をかぶった切り株に躓いて転んだ。坂を斜めに駆け下った東吾は、難なく少年のシャツの襟首をつかんだ。ジョージが逃れようと必死にもがくと、シャツは音もなく裂けて、片肌がむき出しになった。そこに犬歯の跡と思われる青黒い二つの生傷があった。

「さあ、立った。行こう」

東吾は少年の腕をつかんで引き立てた。

不意に下腹に激痛が走った。彼は一瞬息がつまった。衝撃の反動で肉体は収縮し麻痺は身体の隅々までまわった。京吾は目でジョージを追ったが、前には暗い闇があった。悪寒が背中を這い上がってくる。押さえた右手を放し傷口に目をやった。バンドのところで掌ほどが血に染んでいる。やつとの思いで麻痺した手を青竹に伸ばして身を支えたが、もう歩く力はなかった。

「おつ母あ、おれ、えらい事やってしまった」

ジョージは青黒い顔をして、家に入るなり言った。

「どうしたんだえ」

「おれ、あいつの腹に山刀突き立てただ」

「お前、恐ろしい事をしてくれたね。で、あの人は何処にいるの」

アンナの唇や手はわなわなと震えた。

「藪の中だよ」

「ジョージ、連れていきな」

彼女は水抜きしていた澱粉の南京袋を放り出し、息子の後について走った。薄暗い竹林のなかで、男は手を腹にあて竹を背にして座っていた。駆け寄ったアンナは男の前に膝をおり、肩に両手をかけて揺さぶった。青蠅が羽根を光らせて飛び立った。

「東吾、東吾、しっかりして」

アンナは涙声で叫んだが無駄であった。恐ろしさのあま

り彼女が手をはなすと、支えを失った死体は前向きに倒れた。

「おつ母あ、おめえ、この人知っているんか」

「養鶏場のご主人だよ、お前の父さんになる人だよ」

気も動転していたアンナはつい、息子に隠していた事まで口走っていた。

「おいら、おつ父うはどうに死んだのじやなかったのかい」

「ジョージ、これには事情があつてね」

「それで、おれ読めたよ。いつかゼツカの野郎が、おれたちは父なし子だと言ったら、あいつ鼻の先で笑って、おめえのは死んでいるか、生きているか分かるかいと言いやがったが」

「いつか話すつもりでいたんだよ。いろいろと込み入った訳があつてね」

「なにが、おいらのおつ父うかい。確かな証拠をにぎって、警察に突き出すつもりだったんだ」

「それでお前、殺る気になったのかい」

「そんな気はなかったんだ、おれがいなくなれば母さん困ると思つて」

「ジョージ、お逃げ、後はおつ母が何とかするで」

「何処へゆくだ」

「シコの所へゆくだ、親方に頼んで貰つて、皮はぎでもするだ、おつ母も後からゆくで」

東吾が朝のコーヒーを済まして、山を見に行くと家を出て、昼すぎになつても帰宅しないので、君江は不審に思ったが、便でもあつて市まで行つたのかと、待つたが帰つてこない。その夜君江は一睡もせずにかした。

翌日早くから人をやって、日頃夫の立ちよる処へ問い合せたが、市でも山でも東吾はどこにも寄つていない。

当日彼を見た者もない。一日おいて雷鳴をともなつた大雨があつた。山のつねで深い霧が流れて、五米とは視界のきかない日が続いた。その筋の搜索係がジープできて、くわしく事情を君江から聞きとつて歸つた。

一週間すぎたが何んの手がかりもない。君江はしだいに焦慮と懊悩の夜をおくるようになった。宥めずかして明を寝かしつけた後の、夫の不在の部屋は気味の悪いほど静かである。明るい電燈の下で、君江は思わず溜息をついた。今日は帰るか、明日はと望みをたくして過ぎたが、一週間後の今夜は精魂もつきて、もう

夫は永遠に帰ってこないような気がし、胸が苦しくなり、

「あなた―」

と呼んで、夫の枕に顔を埋めてすすり泣いた。

翌朝、小娘のソーニヤが、飼犬のクマが死んでいる、と君江に知らせた。夫が始末するといつてそのまゝになつていた。犬は齒をむいて鎖の坑に噛みついたまゝ、黄色い目を開けて死んでいた。―こいつ、狂犬になりよつたな―といった夫の声を君江は想い出した。すると夫から犬へ、それから何かに繋がる糸があるように、君江には思われてならない。そういえば犬の発病以来、夫は何か心配事でもあるのか放心の態で、他の事は上の空であつた。犬のことといえば、卵盗人を追わしたぐらいであると考えて、君江ははっと気がついた。夫は何もいわなかつたが、犬は犯人を追いかけて噛んだに違いない。

クマの発病を知つた夫は、どうしても犯人を探し出そうとして、朝早く家を出たと君江は思った。

しかし少年の名も住所も知らない君江は、雇人あたりが知っているのではないかと、少年の年恰好や身なりなど言つて、ペードロに尋ねた。

「奥さま、俺知らねえだ。見たこともねえだ」

と頼りない返事である。ジョンに尋ねても同じであつた。彼等はこの事件の巻き添えになるのを恐れて

いた。

女中のソーニヤに君江は水をむけてみると、

「ジョージかも知れない」

といった。ソーニヤの話から解った事は、ジューリヨの居酒屋から下りて、左にはいったジョアナ婆さんの地所に、二カ月ほど前に移って来た事ぐらいである。

二日たつて霧も少しうすらぎ、青空が時々顔を出しだした昼すぎに、警察から係官がきて、市の方では全然手がか少はないと言った。君江は今までの経緯をくわしく話してあつたが、ソーニヤからの聞きこみを一寸係官に話したところ、「そうですね、市の方の手がかりが無いとすると、山の方を歩いてみますかな」と刑事の返事はなんとも頼りないものであつた。

運転手のシコは帰りぎわに、

「アンナ、お前さんは亭主を亡くしていくらも過つていないから、まだそんな気はないかも知れないが、良かったら俺と一しよにならないか」

と言つたのを憶えていた。こゝにおれないとすると、シコの処へゆくより仕方が無い。アンナは誰か東吾の足取りを尋ねて来ないかと恐れていたが、今日まで誰も来ないとすれば、東吾は人目につかずこつそりと来たのだらう。身のまわりの物を袋につめ、アンナは女

の子二人を連れて朝早く家をでた。昼頃にジョージの来ているはずの森林伐採地についた。すんだ斧の音が山々にこだましている。出会った人夫にシコの小屋を尋ねている処へジープで親方が来た。

「親方、ジョージがお世話になっております」

とアンナは運転席から首をのり出している男にいった。

「ジョージは二日ほど前から熱があって寝ているぜ、熱冷ましをやっているが、今朝シコは薬を買いに山を下りたが、もうかれこれ帰る筈だ。行つて見てやりな」

アンナが谷川に近いシコの小屋につくと、びつこの娘が難儀そうに出てきて、

「あら小母さん、早く見てあげて、ジョージさん変なのよ、手足など震わせて」

小屋の隅に丸太などならべた寝台に、ジョージは丸くかがんで藁布団にころがっている。わずか五日ほどのうちに、げっそり衰弱して骨ばった少年は、両手を蟹のようにこわばらし、開けた口から涎をたらしている。額に手をやると燃えるように熱が高い。アンナは瓶から冷たい水を琺瑯引きのコップに汲んで、息子の口に持ってゆくと、ジョージは野獣の吠えるような声を上げ、片手でコップを払いのけた。これは只事ではないとアンナは思った。今になって東吾がなぜあんなにもしつっこく、ジョージを追いつめて行った意味が

解った。アンナはいても立っても居れない気分襲われて、表に飛び出し、「誰か来てよう」と大声で呼んだ。

河は歌う

海野牛子

略歴 本名 北村 かつ

生年月日 一九〇九年五月二十一日

出身地 和歌山県御坊市

渡伯 一九四一年三月十四日、ブエノスアイレス丸

最初の入植地 ファゼンダ・サンマルチニヨ耕地、後

サンタ・フエー・ド・スールにて営農

職業 主婦

文学について、 移民の苦労話のようなものを書くこと。小さい石の標を建てていくような気持ちで書きたい。

趣味 読書、動物小説が好きである。

本掲載作品は一九七六年、コロニア文学三十号に発表。

河は歌う

稲の穂がもう充分に実が入って、一番初めに蒔いた分は、刈るばかりになっても雨は止まなかった。もう三月半ばであつた。明日こそは、と少しでも雲が切れ、太陽が射してくれる事を哲が待ち望んで居るのに、夜通し降つた雨は、朝になつても止む気配はなかった。どれだけの雨雲が宇宙にあるのだろう、と思われる程降り続いた。何時もは昼間でも雨を喜んで、けろけろと呼び交わす蛙達さえも声を潜めた。

其処は、ラプラタ河に続くという、パラナ河の流れの音を絶えず聞く湿地帯であつた。河の水は日増しにふえて、其処で米作をする為、一二家族が力を合わせて作つた排水溝から、河の水が逆流して来るようになってしまつた。比のあたりがやや小降りになつて、半日位いは微かながら雲の中に太陽を感じるような日でも、伺百キロ、何千キロもの上流から、あらゆる大小の川の雨水を集めて流れて来るのであるから、尚も増水して、今は溝から溢れ出る水が米畑を満たして、一面の水田とも、湖水とも見えるようになってしまつた。深い所では膝までもある水の中では、たとえ雨が上つても、舟でも持つて来るより他に稲を刈る術もな

かった。あまり刈りおくれで稲が倒れて終うような事にでもなったら大変だ。前々年から営々と皆が力を合わせて、排水溝を掘り抜き、パストであつた湿地を開拓して米作地にした。初年度は開拓した面積も僅かであつたし、排水も充分で無かつたせいで収穫は以外に少なかつた。

今年こそは、と充分に早くから地こしらえをして、漸く蒔きつけの終つた日の喜びも、収穫を予想して立てた次年度の計画も振り出しへ戻る事になる。

河から沢山の魚が入って来た。稲の中を波だてて泳ぎ廻っている。半キロ程のクリンバタが主で、さがり初めた稲穂に飛び上つて盛んに粃を食べる。場所によつては穂が影のようになって軽々と立っている。全体から見ればごく僅かなものではあるが、植えてきた身を取つては一穂の稲も、指をむしられる程に惜しい。癪にさわる。

この水が引くとき、出口に網を掛けて皆捕つてやる、と口惜しがる。捕つても比処らあたりへ入つて来た魚は泥臭くて、誰も喜んで食べはしないのだが。パストの高地の方から流れ込む雨水の事も考慮に入れねばならないが、河がどれ程増水するか見当のつかぬ今は、差し当り排水溝の口を塞いで、河からの逆流を止めるより他あるまいと相談が決まつた。

平常は向う岸かとも思える河中の大きな島を霞ませ

て碧く悠々とした流れが、この増水で昼も夜も轟々と岸を・打ち、百千万の石を転がすような響きを立て、生木も粉々に打ち砕き、時には家畜をも流して行くと言う。そうして誰にも見えない深い河底をさらい続ける出水の音を消すように、強い風を伴なって大粒の雨が降り出した。今朝は少し雲が切れて、比の分では晴れるかと思われたのに、忽ち鉛色の雲が渦巻き、厚みを増して横なぐりの雨が家々を包み、上のパストの椰子の木は、ごおーつ、と風の塊りが吹き過ぎる度に、葉を吹き上げられ、吹きよじられて苦悶の声を上げている。

そのような目に三軒の家の真ん中の源次郎の家で七番目の男の子が生れた。貪しくとも祝福されるべき誕生である筈なのに、むざんにも母の夕子の生命と取り替えになつてしまった。

今迄夕子のお産はごく軽く済んで、三日目には家族の為に食事の仕度もした。それ程健康に恵まれていた。其の自信からの油断もあつたであろうが、その時の状態では多少以前と様子が追つていても、予定日が近づいたから町へ出て入院する、と言うような経済的余裕の無い事は夕子自身が一番良く知つて居たのであろう。

夕子は結婚して十七年になる。源次郎は単独移民であつた。夕子の家で働いた頃黙々と働いて無駄使いをしないのと、農具などを大切に扱うのが夕子の両親の

氣に入つて、源次郎が来てから三年目、二十三才の時、二十才になった夕子と結婚させたのであつた。それから十年程平和な日が過ぎて、夕子は五人の子供の母になつて居た。

半年の間に両親を失なつた。一方が欠けると片方が後を追う、と世間でよくいうが、その通りになつて終つた。

後を継ぐべきジョゼは、夕子より七才年下であつた。ジョゼのナモラーダは、近所のイタリヤ人の娘のクララであつた。家にブラジル人の嫁を入れる事に氣の進まなかつた両親が世を去ると、クララは、家の中にも自由勝手に入入りし初めた。

クララは、比の家にある家具も、五頭の馬 二十アルケールの畑も、ジョゼと自分の物である、とふれ歩いた。そして、"夕子達は何時家を出て行くのか"とジョゼを責めるのであつた。

両親が亡くなつた後、カマラーダ（雇い人）達は自然な形で源次郎と夕子に、其の位置を置き代えて、希望を述べたり仕事の指図を仰いだりする。又、ネゴシオ（商用）で来る人も、源次郎を名指して来る。日本人会の用などで来る人達は尚更の事、日本語で用の足りる源次郎の方へ来た。其のようなわけで、畑に出る時間はジョゼの方が多しになる。それがジョゼには不満であつた。「俺はカマラーダじゃ無い」とエン

シャードを放り出して不貞寝をしたり、馬を駆って遊びに行つて終つたりする。両親から源次郎へ移つて行つた周囲の者からの信用が、ジオゼには我慢ならない程憎い。皆が自分を退け者にして居る、と思うのであつた。「ジオゼの物じゃないか。源次郎なんか追い出して終え」と言うクララに、「一アルケールだつて源次郎になんかやるものか」と誰彼の聞いて居る所でジオゼは言う。

ジオゼの物と言うのは本当である。戦時中の敵性財産凍結令と言うのを後々迄両親が恐れて、ブラジル生のジオゼの名儀で土地を買つたのであつた。夕子の兄は早くから・ジオゼの性質を見抜いて居たものか将来を他に求めてサンパウロへ行つて終つた。源次郎が来る前の年であつた。

ジオゼの言葉が何時しか源次郎の耳に入つた。さすがに無口な源次郎も 夕子は解つて居て呉れるだろうが、自分は土地などに未練があつて此処に居るのでは無い。親に早く別れた自分はブラジルに来て、夕子の両親に実の子のように温く遇された。其の恩義を返す為には、ジオゼが一人前になつて結婚する迄、傍で見えて居てやり度いと思つて居たのだ。だが・ジオゼが自分を疑うのあまり仕事も手につかぬようでは恩返しにはならない。自分は今日限り此処を出る。何処へ行つても

一生懸命に働きさえすれば食べて行ける。

それこそ身の周りの物と、夕子と五人の子供を連れて十三年間一心に働いた家から出た。夕子が持つて行きたいと言う親からもらった品物も、手に提げて行けない程の物は持つて出るな、と源次郎は止めた。

遠くへ来た。ジョゼの噂も聞こえない程遠くへ来たかったのだ。カマラーダもした。夕子は、長女のエレナに下の子供達の守りをさせて、一緒にパウデアアラ（日雇い）達とカミニョンに乗って働きに出た。せめて二アルケール程の借地でも仕度いと思ったが、無一物で子供ばかり多い彼等に、食料も営農資金も貸してくれる所のある筈は無く、来る年も来る年も一段も上へは登れなかった。子供は又一人殖えて六人になった。

◇

◇

◇

甲田は三男のアントニオに商売をさせて見て、これは商売には不向きだと、先頃から思つて居た。耕し蒔き収穫する。心を籠めればそれ丈の物は畑が返して呉れた。

アントニオは根っからの百姓気質に生まれついたものか素朴さが抜けない。人間相手の機微を使い分けられないのである。“貸してくれ”と言われれば誰にも断り切れないので、貸し倒れが大分できていた。

店の方は、アントニオの嫁の藤子と自分とでどうかやれそうなので、アントニオには米作をさせる計画

をして居た。バイアーノ（バイア州の人）の一家族が仲間に入つて、アレンダする土地も決めて居たが、もう一家族位は入れても良いと思つて居た。

そうした或日、仕事をさがしに来た源次郎の一家を引き受ける事にしたのであつた。

その頃、S地方は殆ど開拓されて、珈琲は新しい所でも六、七年物で沢山積れたし、棉作も盛んであつた。電灯が引けた町には活気があつた。

その景氣の良い噂に引かれて来る人も多かつた。其の中の一人である源次郎と話して見ると、夕子の実家と甲田の長男のシチオは、リオ・ムジンを隔てて、見える程の近さでは無いが、河向いの位置であつた。噂としての名前はお互いに知つて居た。

甲田は事情を聞いて同情した。訥々とした話振りの中の、その真剣さに惹かれた。自分達も子供が皆ちいさかつた頃、時には夫婦で食事を控え目にして子供達に食べさせた。今の源次郎を見捨てゝ置けないような、手を放したら転り落ちそうな危さを感じた。

しかし源次郎の一家を引き受けるのと相当な重荷である事は覚悟しなければならない。バイアーノのように当分の米も持つて居り、蒔付けまでは自分の金でやれそうだ。足りなくなつたらホルネツセしてくれ、と言うのとはわけがちがう。初め一からそれこそ一切合財面倒を見なければならぬのである。

河に面した広い湿地であつた。地主はどれ程でも開拓した丈アレンダ（借地）させると言う。もて余し気味の土地であつたから、三年間は只同然のアレンダメントであつた。

源次郎一家も、これで浮かび上らなければ、と夢中で働いた。不便な所で、子供を学校にやれなかつた。上の子供は少しは手助けになつたし、小さい子供達も丈夫で芋の子のように、ころころと泥にまみれて遊んで居た。

源次郎達は、甲田の助けを得て安心して働けた。

一年目は僅かしか開拓できず、排水も充分でなかつたせいで、米の出来は思つたよりも少なかつた。だが皆がそうなのだから仕方無かつた。甲田は、源次郎一家の懸命を働き振はり見ているので、半分しか支払えなかつた借金の事には触れずに、次年度も引続いてホルネツセするから、と励ました。源次郎も夕子も黙つて深く頭を下げたきりだつた。嬉しさのあまり言葉が出せなかつたのであろう。

誰の目にも上作と見え、手にのせて穂の重さを計つて見るのも楽しみなような、できの良い二年目の稲を、刈るばかりになつてからの不幸であつた。

移民の、そして農家の妻達の多くがそうであるように夕子は夫の為に、子等の為に、何時もぎりぎり迄我

慢して働いて来たのであった。身を擦り減らす程に。

産後の出血が止らず、三軒の左端に住むバイアーノのママイである素人の産婆ではどう仕様も無く、コッションを透してしまふ程の激しさであった。

右端のカマラーダを置いて居る家を仮住居にして、半分は町から通って来るアントニオが、漸く小降りになった雨の中をトラットールで、町へ医者を迎えに行った。後にはアントニオのカマラーダと、バイアーノの一家が、源次郎がエレーナを助けて不安そうに夕子を看って居た。

雨は止んだが長雨の為に道路は泥沼のようになった所が多い。両側が畑になっている所では、水のはけ場が無くて泥が深い。途中でトラットールでさえも動けなくなった。附近のフアゼンダから牛を頼んで引き上げて貰ったりした。僅か二十キロ程の道に大変ひま取って、出て行つた時から帰りの待たれたアントニオが、父の甲田を連れて戻って来たのは、もう日が暮れようとする時であった。西の空の雲が切れて何日振りかの夕陽が射して、すぐに水蒸気に被われて沈んで行つた。一寸雲が赤らんだ丈で夕焼けにもならなかった。

S町には医者が二人居た。一人はR市のナモラーダの家へ行って留守であり、一人は手術中と言う事で来てくれない。薬の指示だけ受けて帰って来たのであつ

た。

今でこそ学校出たてながら医者が二人居るが、町のでき初めにはファルマセチコのトニンが医者の代りをしていて。附近の村々からも呼ばれて気軽に馬に乗って来て注射を打ち、一寸した手当てをしてくれた。其のトニンも儲けて店を大きく建て増し、トモベ（車）を乗り廻すようになってからは、昔のように飛んで来てくれなくなった。そのトニンにも頼んで見たが、今は医者が居るのだから医者に頼め、と言われれば、それをもつともな事である。

こうして医者もファルマセチコも来なかった。仮に来てももう間に合わなかった。持つて来た止血の注射液も、空しく包みを解かれぬままにメーザの上に置かれた。

じん！と耳が塞がったように総てのものが停止していた。三才の童女だけが、異様な状態を小さな全身で受け止め泣き崩れて居る姉達を見詰めていた。

源次郎は、精根が抜けて終った背を丸め、両手を膝の間に挟んで目を閉じて居る。僅かに肩が上下する事によって、生きて居る事を思わせる。そして不意に目を開けて四辺を見廻し、その意識に甲田を捉えようと、すがりつくような感情の溢れる瞳で見詰めるのであった。

十五才のエレーナを頭に七人の子供が残された。七

人目の皺だらけの嬰兒。掌を握り拳にして、生命の程も覚束ない嬰兒が、母の身代りとして微かに息を吐いている。

授けてやらねば！と甲田は思う。今の彼等の力になつてやれるのは自分の他には居ない。今の源次郎を見ていると、十年前の自分が比のような姿をしなかつたとは言えない。生来の強氣から、源次郎のようなさまこそ他人には見せなかつた筈だが、もつともつと打ち砕かれ、絶望と憤怒に身が震えたのだった。甲田の妻と次男が強盜に殺されたのであつた。十年程前の事である。

シチオ（農場）の長男夫婦が総べての采配を振れるようになった。甲田も妻も居なくても大丈夫と見きわめがついた時第二の踏み出しとして、生来やや蒲柳の質で農業には不向きと思える次男に商売をさせる事にした。シチオが安定したら商売をして見たい、と以前から希望していたのであつた。

その頃開発会社が売り出したばかりのS町に店を持つた。パラナ河から十二キロ隔たった所で、まだ町とは名ばかりの広大な予定地に、ガソリンポストが一軒、雜貨屋が二軒、ファルマシアが一軒、ホテルが二軒、その他何等かの希望を持って諸方から入つて来た人達と、昔から比の地の僅かな住人達、全部で百家族

程が、二百アルケールの町の予定地の中に、ぽったりと住んでいた。町の中心になる所にイグレージャの定礎式をして、木の十字架が立っていた。其の辺りにもまだ原始林のまゝの森があつた。夜になると、目を凝らしてみないと何処に家が在るのかわからぬ程で有つた。

甲田の店は一番近い隣家まで五、六十メートル離れていた。店ができ上る頃には、向う側の家もでき上るだろうと思つて居たのに、店を始める時になつても向いの家は建て掛けのまま中止して居る。少し周囲が淋し過ぎると思つたが、今更延ばすのは出足が緩みそうであつた。農業をする人達はもう沢山入つて山を拓いており、店に品物も着かぬ内から食料だ、農具だ、と注文を受ける有様であつた。次男に店を持たせる見通しがついた時、誰よりも喜んだ甲田の妻が、ブラジルに来てから初めてとも言える程、久し振りに流行歌を唄い乍ら、次男を手伝つて商品を棚に並べたりして居るので、"周囲が淋しすぎる"などと折角の気分を翳らせるような事は言い出せなかつたのであつた。

あの時、甲田の心をかすめた翳が、悲惨な出来事への予感であつたのか。未開の地に対して迂濶過ぎたのだ。

そうした危険を世間の例として知らないわけではなかつたが、自分達の上には、まさか、と言う自信が不

幸を招いたのだった。

店を初めてから半年程経って甲田は一人で長男のシチオへ行った。銀行融資の事でアッシーナが要ると手紙が来たのであった。S町からシチオまでは一日一便のオニブスでF市迄行き、一泊して翌朝の汽車に乗る。片道二日掛りの旅であった。其の留守の夜を狙われたのであった。

変事の知らせを受けて、長男や親戚の人達と駆けつけたのは、変事の翌々日だった。

S町には未だ警察所は無く、土地会社の誰かが警察権を持っているだけであった。其の人達が翌朝百キロ離れたF市迄出て、甲田のシチオの管轄の警察へ電話を掛けて来たのであった。甲田のシチオへ警察のジープが来たのは、事件から一昼夜経った夜であった。夜半にシチオを発った。F市から奥は未完成の道路で、カミニヨンの轍の跡が深く掘れて、いて、親戚のダブルタイヤのカミニヨンでは溝が合わず、片輪を道の肩に乗せて徐行するより他なかった。

甲田は早く早くと言いだす焦慮を、じっと前方を見つめて我慢して居た。幾人もの口を通して来た知らせである。何処かで間違っていて、妻も息子も生きて居る。そうであって欲しいと願った。甲田は神頼みした事は無かった。だが比の時ばかりは亡母を憶い、母に願った。母の靈魂が守ってくれて、其の助けに依って

生きているのではあるまいか。妻だけは、息子だけは、死ぬ筈が無いと思った。奇蹟などは有り得ない。其の事を真正面から受け止めるより他友かった。

其れから三月程の間に甲田は頭髮が裏白になってしまった。それを周囲の者から言われるまで気がつかなかった。鏡を見ないわけではなかった。しっかりといるつもりでも、呆とした瞳には、日毎に硬い毛が銀の針を植え並べたようになってゆくのも映らなかったのだ。あれから十年になる。と甲田は思う。目撃者の無かった比の種の事件としては珍らしく犯人はすぐ捕ったが、捕ったと言う事で慰められる事は無かった。実地検証に連れて来られた犯人を、撲って撲り殺してやり度い思いに震える両手を握りしめる事で耐えた。憎しみの瞳で其の心臓を突き破ってやり度いと思った。

あの時のやり場の無い口惜しさを思うと、今も全身の毛穴が膨む思いがする。それでも今の源次郎の場合とは比較にならぬ程、自分を支えてくれる人達に恵まれて居た。S町から引き上げた方が良いと言う人も居た。若い頃から商売に興味を持って居た妻であった。次男が店に馴れ初めると、「商売の好きな優しいお嫁さんを貰って、孫を沢山産んで貰って」等と喜んで居たのに、僅半年の夢で終った妻の望みを甲田は比の手で為し遂げでやりたい。非業に果てた二人を祀ってやるにも比処に居るべきだ。シチオに引き上げては墓参り

も容易で無い。六人の子を育て、ミシンの買えない時代には、夜なべにズボンまで縫って着せてくれた。長い苦闘の年月を支え合って来た妻。今から楽な暮らしをさせてやれる。欲しい物も買ってやれる。

と思っていた矢先の不幸である。せめては手厚く祀ってやりたい。その思いに皆が頷いてくれた。

三男のアントニオが店を嗣ぐ事になった。亡妻の末弟勇夫婦と一緒に来る事になった。勇はS地方が万作に適して居ると聞いて、いずれは甲田を頼って来るつもりであつた。アントニオが結婚し、近所が町らしく賑やかになる迄一緒に住み、それから棉作りをすると言う。其の頃は開拓会社が町の予定地を拓きさえすれば、何処でも、どれだけでも、家が建つまでは、只で作らせたので、急いで土地を買い必要も無かつた。

家の内と言うものは、黙って居ても知らぬ間に自分の欲するように捗って行くことを、甲田は当然と思つて居た。だが居なくなつて見て始めて妻の大きな働きを知らされた。

勇夫婦が居てくれても、彼等には二人の幼い子供が居る。到底細かな所までは手が廻らない。甲田は密かに綻びを縫い、当てつけにならない程度に、落ちたボタシも付けた。間も無くアントニオに嫁が来る。そうしたら遠慮なく物を頼めるだろう、と思ひ乍ら。

甲田が源次郎の嬰兒を町へ連れて来たのは一切を済ませた翌日の夕方であつた。

夕子の実家へ電報を打ったが、誰も来なかつた。夕子の実家と甲田のシチオは近い。そこからは昔と違つて汽車とオニブスを乗り継いでも七時間でS町に着く。でもジュゼは来なかつた。夕子の姉の一家はクヤバの方へ行つたきりであつた。サンパウロへ出た兄はブラジル人と

結婚して、実家の父母が生きて居た頃も戻つて来なかつた。夕子も家を出てからは貧しい暮しを恥じて文通もしていなかつたので、だれの住所も分らなかつた。甲田は頼まれるまでもなく、比の嬰兒をどうしたら良いか、と考え続けた。源次郎から、誰か貰つてくれる人をと頼まれた時、連座に引き受けるだけの腹が決つていた。多分そういう事になるだろうと昨夜から思つて居たのであつた。助けてやらねばどうにもなるまい。十五才のエレーナには、この子供達の世話は覚束ない。嬰兒のことだけは考えてやらねばと。

甲田は何でも決断が早い。親しい人達は何か判断しかねる事があると相談に来る。結果がどうなるかは日々に変る周囲の状況に影響される。先の先までは考へ切れない。今の瞬間右なら右と言ひ切る。後は又其の時の図を画くより仕方が無い、と言うのである。

今も、比の嬰兒の遠い将来を考えていては何も出来

ない。何よりも乳を飲めるように計らってやらねばならない。甲田は嬰兒に「水音男」と名付けてやった。激しい出水の河の音の中で生れたからだ。それに他家にやって終えば、相逢う事は無いかも知れない。将来他所ながらも、その消息を知りたいと思う時、この珍しい名前なら探し易い、と言うのであった。

水音男をアントニオの嫁の藤子に頼んだ。藤子には生後三ヶ月のローザが居た。上二人男の子の時と違って乳が出なかった。そして、どうした事か、どの粉乳もローザの腹に合わなくて、何時までも肥らない。度々医者に診て貰い牛乳に代えて見たりして苦勞して居た。突然連れて来られた水音男をみて、藤子はこれは大変と思ったが、平常から「鶴の一声」だと言って、言い出した事は決して後へ引かない舅の氣性を知っている。「貰い手が見附かるまで世話をして呉れ」と言われて、弱々しく泣いている水音男を抱き取るより他無かった。店の硝子瓶の中から新しいママデラを出して来て乳を作りにかかった。

甲田は、一人育てるのも、二人育てるのも違いはあるまい、と思って居るようであったが、藤子としては生易しい事では無かった。

アントニオはあの凶事の情勢から、黙って店を継いだが、雜貨店でピンガも売る、と言うような、と言うよりも元々商売が好きでない。藤子が店に馴れて来る

とアレンダをしてでも農業をしたがった。今は日曜に戻って来るだけで、米作に打ち込んで居る。

舅の甲田は、近頃は彼方此方から縁談の世話を頼まれて、もう十何組纏めた、と趣味のようになってしまい、店の手伝いはあまりしない。女中を相手に子供の世話、台所、店と切り廻わして居るのは藤子であった。

甲田には男の子ばかり六人居た。一人欠けたから今は五人である。アントニオの下三人は、長男と一緒にシチオに居る。そろそろ結婚させる年令が来て居る。年頃の娘を見るとすぐに息子の顔が浮かんで来るのであった。

水音男の世話を頼まれたのは止むを得ない。彼の時の情勢からであったが、それ以前から漠然とした一つの希望があった。

エレーナは爽かな娘であった。年令相応に気が利いて居て、甲田が稲作の具合を見に行つて、源次郎の家に寄ると、夕子に言われるまでもなく、甲田の珈琲好きを覚えて居て、湯を沸かし初める。それが趣く自然の動作である。そうしたエレーナを好ましいと思う、末の子の嫁に丁度良い年頃だと思つて居たのであった。だが今からは母代りを務めねばならぬエレーナでは、当分それは望めまい。半ば諦めながらもなお幾分の希望をつないで居る。

其の上に立つ親切と言えない事も無かった。

藤子は多忙な中で、二人の嬰兒の世話をしていたが、ローザは日々に衰弱して二十日程後に、其の短い生涯を終えた。上二人が男の子であり、欲しいと思つて居た女の子であつた。実家の兄から見舞に貰つた大輪の蘭が二週間経つても容を崩さない。藤子は、その優艶な蘭の花を、じつと見詰めて泣くまいと耐えた。

水音男に手が掛つて、ローザの方がおろそかになつたと言うわけでは無かつた。虚弱な生れつきであつた。短い命を与えられて比の世に生まれて来たのであろう。娘の頃縫い物をして居る藤子のそばで窓に腰掛けて、兄読んで呉れた短歌の中に「おそ秋の空気を二尺四方形ばかり吸いて吾が子は死にゆけるかな」と言うのがあつた。其の子は女の子だつたのだらうかなどと思い、藤子は歌の中の子供をも憐れんだ。

藤子は水音男を見るのさえ苦痛になつた。水音男の為に吾が子が死んだとは思わないが、初めの弱々しさにかかわらず日ましに丈夫に育つて行くのは他人の子である。何故吾が子だけが脆い花片のようにくずれ散つて終つたのであろう。

藤子の心は傷つき、ため息ばかり吐いて涙ぐみ、アントニオにも愁い顔を見せるようになった。

甲田はこれ以上藤子に水音男の世話をさせる事が無

理である事を悟った。若い頃から前へ進む事ばかり考えて、遂ぞ後悔などした事は無かった。だが近頃は吾ながら心弱くなったと思う時があった。できれば水音男を手許に育てゝやりたいと、内心では思つて居たのだが、藤子の心情を思うとそれはできなかった。

水音男は遠くへ貰われて行つた。藤子はローザの為に縫つてあつた幾枚もの着物を、一時の間に合わせに、そして女の服装をさせると丈夫に育つからと全部持たせてやつた。

河の近くでの米作は、夕子の死を契機のように、何となく皆の心に空白ができて、結局は収穫を終えてから開散の形になって終つた。源次郎は近くでメイエーロに入つた。夕子を失つた事に同情して皆が出来るだけの手伝いをした。アントニオはカマラーダを廻してやつた。ハイアーノのママイも子供達の面倒をよく見てやつた。だが源次郎は働く意欲を無くして終い、甲田の励ましにも反応を示さなくなった。只他所へ行きたいと言うのであつた。

アントニオも期待を掛けた二年目の作が、あの長雨の為に思ったより収穫が少なかった事もあつて、米作のような忙がしい仕事よりは牛を飼い、ミリーヨを作りたいと言い出した。すると、パイアーノが「自分はマツトグロッソで牛のフアゼンダに五年働いて居たの

で大抵の事は知って居る。ぜひ連れて行ってくれ」と言うのであつた。

比のバイアーノは二年余り傍で働いて居る間に、アントニオの不断は不愛想だが誠意のある人柄に心引かれてカマラーダでも無いのに、持て余すような仕事には飛んで来て手を貸してくれ、精いっぱい尽してくれて居た。妻と妻の母との三人家族だが皆で良く働いて、今年は幾らか儲かつたと言つて喜んで居る。

アントニオはもう比のバイアーノを使って仕事をする積りになつて居るらしい。甲田としては折角開拓して、今からが儲け時と思うのであつた。これで止めれば資金の掛け損である。だが今までは何事でも素直に甲田の言う通りにして来たアントニオが、今度に限つて熱心に細かい計画を立て、主張する。甲田は、そろそろ男の方針を立てるべき年令でもある。思い通りにやらせて見るのも良いだろうと思つた。

アントニオはシチオに居た頃、家畜の世話を進んでして居た。他の者にはなかなかつかまらない癖のある馬でも、アントニオが呼ぶと遠くの方から嘶きながら駆けて来た。兄弟達が「ビードはアントニオに憧れて居る」といったものであつた。

甲田は少し疲れた。何時になく自動車に酔つたようである。若い末息子夫婦や孫達が賑やかにさわぐせいでもあろうか。手に持った物を皆甲田の足元へ預けて

棧橋の方へ下りて行く末息子のマリオ夫婦と、アントニオの二人の子供、上はもう中学一年である。

甲田の家は男ばかりの家系のようである。甲田には男の子ばかり六人、アントニオには男の子二人、折角女の子が生れたのに育たなかった。シチオの長男にやつと四人目に女の子が生まれた。アントニオの子供達にとって未だ少女のようなマリオの妻の優しさが、好もしく珍らしくて、両方からぶら下って離れない。甲田はこれら四人を上から見下すように堤防の芝草に足を投げ出して座っていた。

向いはマ州である。比方側と同じで別に高い山が見えるわけでは無い。裸に剥けた低い丘陵が重なり合っているに過ぎないであろう。だがマツトグロツソと言う言葉が神秘性を感じさせる故でもあるか、大古から其処に生き続けてきた樹々の姿は、重畳たる山々を思わせて、遠く、遠く、その果ては紫の樹海の色となつて空との境目を霞ませている。

カミニニヨンが五、六台、乗用車が彼方比方に二十台程止っているが、皆がマ州へ渡るわけでは無い。此処まで遊びに来て、中程が盛り上って見えるパラナ河の碧く悠々たる流れを眺めて帰って行く人達がいる。またバルサで向側に渡り、河原を少し歩いて記念に美しい小石を拾って、今乗って渡ったバルサに、こんどは聖州行きのカミニニヨン等と共に乗り込んで、マ州

の土を踏んだ事に満足して帰って来る人達なども居る。甲田の息子夫婦も二人の孫もそれ等の中に交って、マ州側へ写真でも撮る積りか渡って行つた。

やや河下に、牛を乗せたバルサが今着いた所であつた。トロツペーロが堤防の上り口で馬上に立上り、鐙を踏ん張って、背負っている長い鮑色に磨きあげた角笛を、ぐいつと前に廻し大きく息を吸ってから吹きあげた。その野太い音に引かれるように、牛が後から後から栈橋を上がつて来た。

アントニオの牛の方が肥って居るなど、甲田は思う。今朝アントニオが来て「牛が十五頭になったからパパイ見に来てくれ」と言うので、さつき見て来たばかりであつた。甲田は牛の事は良く知らないが、アントニオやバイアーノは、米や棉を作るよりも悠長らしく見える牛飼いの方が、何年か後には米、棉を追い越す、と言うのである。順調に行けば、あるいはそうなるかも知れないと思えるのであつた。店から資金を出したのは初めの四年程で、此处二年程は自給自足でやって居る。

甲田は棉と米を好んで作ったが、今は長男の方もカシナと牛ばかりになつて居る。

マリオだけが百姓に身が人らぬが、農具等の少々な故障は上手に修繕して居る。嫁の里がオフィシーナなのでいずれは其の方面に行く積りらしい。比のあたり

がダムになる前に河を新妻に見せに來た、とマリオは言う。だが多分父に今後の自分の方針につき了解を求めるため來たのであらう、と甲田は思っている。一人ぐらいは他所へ出て行く者が居ても止むを得ない、と思うのであつた。大体息子達は甲田の言う事に叛かなかつたと思うのだが今になって見ると皆が何時の間にか好きな方向に頭を向けたようである。

マリオたち四人の乗つたバルサは向う岸に着いた。マリオ新夫婦が二羽の小鳥のように遠慮無く愛情を交し合う。今の若者達を羨ましいとも、美しいとも思うのであつた。

甲田は、又エレーナの事を思う。マリオ連のような楽しい滑り出しがエレーナの為に用意されていなかった筈は無い。そして源次郎に、娘の倅せな姿を見送つてやれる倅せもあつた筈だ。

「エレーナ達は何処へ行くだろう」と思う時、甲田の瞳には、比の静かな河波の一片々々がきらきらと無数の光りとなつているのさえ見えない暗い心におちていく。エレーナ達の話聞いたのは、つい先刻河へ来る途中で新婚のマリオ夫婦を見せ度い心もあつて、店の客である古谷の畑へ立ち寄つた時であつた。古谷の近くへ源次郎達が越して來たのは近頃らしい。

「エレーナさんも馬鹿だけど、非道いパパイもあつたものですよ」と自分が辱しめられでもしたように、顔を

赤らめて言った古谷夫人の言葉が、何時までも淫靡な余韻をひいて耳に残っているのであった。

“俺も馬鹿だったなあ”と、甲田は、エレーナに縁談を持って行った時の事を思い出す。あれは米作を止めて三年目であった。あの時既にそうであったのだろうか。様子がおかしいとは思ったが、まさか、そのような馬鹿な事が、とは思ひも及ばず、只々娘を手放し度く無い源次郎が、怒りに近い感情を剥き出しにしたのだとばかり思っただった。

夕子を失って三年の月日は源次郎をひどく老け込ませて居た。始めて甲田の店へ来た時の意欲的な人物とはまったく別人のように走っていた。甲田がよく言う「死んだ蛙」のようになって萎んで居た。

夕子は乏しい暮しの中で沢山の子供を育てながら、貧しさを感じさせなかった。夫の運さえ良かったら、大きな事業の片腕も務められる程の天性を具えていたように見えた。そのような妻を失って支えの無い蔓草のようになって終ったのを尤もな事とは思うが、意地の無さに腹立たしい思いがした。

そして甲田を驚かせたのは、十八才になったエレーナが以外に汚れ褻れて居た事であった。ぼろを纏っていても娘盛りと言うものは包み切れぬ匂やかさがあるものだが、エレーナには軟かさがまるで無い。そして何よりも気になった事は、昔のように瞳を上げて正面

から甲田を見ようとしなない事であつた。三年前にはどのような良い娘になるか、と楽しみにした少女であつたのに、病気ではあるまいか、と思つたりした。

縁談の事になると源次郎は、まるで悪事でも勧めに來たように非道く怒つた。「若しも纏まればその家は養鶏をやつて居て、手不足なのだから、家族みな來て貰つても良い」と言っている、と言つたのが侮辱、と取られたのかとも思つた。手土産とは別に、エレーナに布地を持って行つた。それは甲田の末息子マリオには相手が決つたが、以前にはエレーナを、と思つた事さえあつた程で好意からの贈物であつた。源次郎は其れ等の物を頑なに突き返そうとする。「不自由はさせて居ない。要らぬ御世話だ」と言う意味の事を口の中で、もどもぞと言うて居るらしかつた。

縁談であるからには断るのはお互いに自由である。僅かの手土産である。受けた為に義理が重なる程の品物でも無いのに、突き返すと言う事があるうか。

甲田は以前源次郎達を親身になつて世話した。その時の貸し分も、出来る時が來たら払つてくれるように、と言う事で別れた。其の後は、氣苦しかろうと察してわざと近寄らなかつた。それ等の事を恩に被せる積りは無いが、断るにしても挨拶の仕方がありそうなものだと思つたのであつた。

古谷夫人が肩をすばめたり、言い渋つたりしながら

の話によると、エレーナには三才と一才の子供が居る。弟達は家を出てしまつて小さい妹が二人だけ居る。源次郎は日雇いに出たりして、豚小舎のような家で暮して居る。

時には美味しい物が出来て、上げ度いが非道く人嫌いらしいから妹達が来た時に上げる。井戸が無くて古谷家の近くの湧水を汲みに来る妹達を捉えて「エレナさんは貴女達のママイ？」と尋ねる近所の人に、「本当は姉ちゃんだけど、叔母さんよ」と答えるとの事であつた。

「父娘でねえ」と古谷夫人は苦笑いをした。

甲田は夕子が元気で居た頃の源次郎の真面目な働き振りを見て居る。又夕子の実家が出る頃の行動も聞いた限りでは見事なものだと思つて居ただけに、夕子と言う支えを失つた途端に、人の道まで踏み外して墮ちて行つた脆さを口惜しいと思うのであつた。

人それぞれに倖せの受取り方も遣うのだから、他から兎や角言うべきでは無いが、源次郎の地獄の倖せに殉じて、エレーナは何の為に生き誰の為に生きるのであらう。

此処はウルブプンガのダムになる。今甲田が足を投げ出して居る堤防も、六年前にアントニオや源次郎達が米作をした、此処から十キロ程の上流も、今エレ

ナと源次郎が人目を避けて暮して居る藪蔭のあたりも、大きな湖になる。

水位が徐々に上って大地を浸し、総べての物を跡形も無く洗い流し、洗い清めるだろう。

不思議な親子が居た、と言う噂も伝説めいて、やがては人々の記憶から消えて終うだろう。

今、大河の水音の何と密やかな、野の草々の、木の花々の囁きにも似ている事よ。

夕子の死んだ日の荒々しい怒りの音を奏でた河の、ほんの少し下流の同じ流れなのである。水の一粒々々がころころと転がり合い、肩を擦り合わせて笑って居るかのような、それは河の歌とも言えるものであろうか。

河向うからバルサが帰って来る。積まれたカミニョンの間から、人々に交ってマリオ達四人が甲田の方に飛び上るようにして両手を大きく振って居るのが見えた。

コロニア用語注釈

多喜の決心

コロノ（契約農業労働者）

コジンニヤ（台所）

エンプレガーダ（女の使用人）

フェジョアーダ（豆と油、牛や豚の臓物を炊き込んだ食物）

アルモツサ（昼食）

フェジョン（豆）

ジャンタ（夕食）

トラートル（トラクター）

カミニヨネッテ（小型貨物車）

シネーラ（ぞうり）

ボルサ（手下げ鞆）

ブルーザ（ブラウス）

マキナ（機械）

デコタード（胸開きの広い服）

カマラーダ（日傭い労働者）

ウバツーバにて

クルーベ（クラブ）

テラソ（テラス）

クルゼーロ（地名）

コスツレーラ（縫物する女）
レイチとポン（牛乳とパン）
オニブス（バス）
プライア（海辺）
ブルゾン（スポーティな上着）
バールジンニョ（小さな喫茶店）
カリス（コップの小型のもの）
ピング（砂糖黍で作った酒）
マンジョカ（俗に木芋という食用芋）
レビスタ（雑誌）

移植

サイア（スカート）
マンティガ（バター）
ケージョ（チーズ）
アベニータ（大通り）
セントロ（中心地）
オスピタル・サン・ルイス（サン・ルイス病院）
セニョール（男性詞。様、貴方、さん）

井戸

アンタ（貌）
パウダリョ（木の名）
セラリア（製材所）

エンシヤドン。エンシヤーダ（共に農機具）

パルマ（掌をいっばいに拵げて長さを計る方法）

トマカフェー（おやつの時間を差す）

タツー（アルマジロ）

朝の予感

アデウス（さようなら）

遠い虹の橋

ムラータ（黒人と白人の混血女）

カフェーブランコ（陰語。白いコーヒー、つまりピンガのこと）

ゴベルナドール（統治者）

セツカ（乾燥）

フーモ（縄煙草）

カレッタ（荷車）

フラード（穴があくこと）

マリード（夫）

シチオー農園（カルサのポルソ（ズボンのポケット）

パラペンス（おめでとう）

フェスタ（祝）

地表

プレジョン (湿地帯) ジャカレイーワニ) ピツカード
(林を直線に質適する狭路) ムダンサ (移転) ウル
ブ (カラス) ジャポン (日本人を蔑して呼ぶ言葉)
ピツショ (猷) ふたつの間ナモラーダ (恋人) シー
カラ (茶及びコーヒ茶碗) ベルニール (豚の大腿の焼
肉) メルセアリア (雑貨商) ガルフオ (フオーク)
フアーカ (ナイフ) メーザ (机)
エンセラテイラ (床磨機)
セルページャ (ビール)
グワラナ (清涼飲料水)
マカロナーダ (マカロニ料理の一種)
スーベル・メルカード (スーパー・マーケノトージャ
ブチカバー一本フドウ) カンパインニヤー呼鈴) 洪水
アルファツセ (サラダ菜) E町にてパルコン (台)
せせらぎサバトン (深靴一ランショ一小屋一ノル
チスター北伯人) コルシヤ (寝台掛け) ルア・シエイ
ア (満目) レンソ (被りものに使う布) パリヤ帽子
(藁裾) エコルション一寝台の敷布団) カツポエイラ
二度拓いた土地) パトロモニヤ (間合町) ボテコ
「一杯呑屋) カベセイラ (頭部) パンノ (布) コリエ
ター收穫)

カイピリンニヤ（ピンガとリモンと砂糖の混酒）ボ
ン・デ・アスカール（リオ港湾にある山の名）シェッ
キ（小切手）放浪一代レトウ（手形）カボクロ（土
人）フェイランテ（市の商人）

みさ子とわぐり

ペネイラ（針金で作った底の浅い篩）
カラビショ（山野に自生、人や獣について種がはこば
れ繁殖する）
ケントン（生姜酒）

流 亡

オニブス（乗合自動車）
アラード（鋤）
マーリヤ（網目）
モレーノ（色の黒い男）
パッセ（切符）

河は歌う

アレンダ（借地契約）アレンダメント（借地代）
ホルネッセ（供給、調達すること）バイアーノ（バイ
ア人）ファゼンダ（大耕地）ファルマセチコ（薬剤師）
ファルマシア（薬局）

アッシーナ（署名）

ママデーラ（補乳ビン）

メユイロ（折半歩合作者）

ミーリヨ（唐黍）

ビアード（鹿）

カミニオン（貨物自動車）

バルサ（渡し舟）

トロツペーロ（馬を扱う男）

オフィシーナ（工場・作業場）

折れる葺

ガウシオ（南リオグランデ州人を指す）

ポン・ドーセ（菓子パン）

トード・プロント（完了）

第三卷の編集を担当して

薮崎正寿

1

本輯は、コロニア小説選集の第三巻であり、第二巻のあとを受けて、一九六六年以降当地で発表されたその中からえらんだ。また一作者一作品という収載の方法も、選集の性質上第二巻に買かれた原則を妥当とし踏襲した。「組織運動時代」という時代区分の名称は、第一巻の編集者前山隆氏の規定にそのまま従ったのである。

一九六六年五月には、そのすこし前発足していた。”コロニア文学会”よりA5版八十四ページのコロニア文学創刊号が発行されている。爾来十二年間に第三十二号まで号を重ねている。この間会員数はときに増減はあったが大体四百五十人内外を保って支持され、その会員の居住域はほとんど当国の全土に及んだ。このように広く多数の関心をあつめ、協力を得たのはたしかに当地日系人社会で劃期的なことといえ、前山降氏の規定もこれに由来するのである。

しかし、折角毎号百ページを準える発表機関を得た

のにもかかわらず、この期間批評のしごととは必ずしも活潑だったとはいえなかった。すくなくとも私たちが包み込まれているこの国や、日系社会の体質やにすゝるどく迫るような評論はわずかな例外を除いて現われなかった。このことに象徴されるように創作の面でも、一つの世界を提示する理念や、一貫性をそなえる主題の追究やはかばかしく行われなかった。

どの作者も自己自身の位置づけを十分意識化したとはいえず、そのために主題の持続と深化とは不徹底におわったのである。

2

移民はこの同に往み暮しながら、いつも不透明を被膜でこの国と距てられているような心地につきまとい、もどかしさを感じる。その被膜のために自己のほんとうの表示が実現できず、従ってほんとうに理解されることもたのみ難く、しだいに自己自身稀薄に衰弱していくような不安に襲われる。この不確かさから発する不安が私たちを文芸へ向わせるのだと強調したら、あまりに当り前のことを事事しく言い立てているということになるだろうか。

なるほど、自己のほんとうの表示、ほんとうの理解の成立にもどかしさを感じるのは、移民にだけ限られ

たことではないのである。個我意識にめざめたときから総ての者が噛み締めなければならなくなった苦渋であり、人間の必然の運命なのだともいえるのである。

このもどかしさを克服し、理解の領域をひろげようとする営みこそ、人間の歴史の重要な側面なのだともいえるだろう。ほんとうの自己表現への距離のもどかしさと、不確かさから生じる不安とが、“ことば”を大切にすることを人間に悟らせ、文芸へ向わせたのだといえるだろう。

しかし、私たちが自己表現に於いて感じさせられるもどかしさと不安とはそのように基本的で自明な条件だけに限られず、いつも、それに“移民の条件”が折り重なるのである。個我意識にめざめたときから避け難い運命となって各おのを距てた被膜のうえに、もう一重厚ぼったい被膜がかさなって移民を距てるのである。この二重のもどかしさと不安との中に、おそらく移民の小説の最も主要な主題が潜むのだが、移民の負う条件自体が、その展開と深化とを阻む。そういう矛盾を見出さずにはいられないのである。

（二つの対象の密度が、物語の中で保証されるのは、その対象のために捧げられた描写の数や長さやによるのではなくその対象とさまざまな人物との間にある関係の複雑さによる）（文学とは何か）サルトル……。

本巻を編むにあたり通読した二百篇ちかい作品は二つの型に大別することができた。一つは登場人物が極端なくらい日系人に限定され、他の一つはそれほどに素材を狭く切り取らないでブラジル人をも登場させた。しかし、これは主題に根差す相違というよりも、単に方法論によって分れたのだともいえるのである。前者はやや強引に現実を省略し、剰余を切り捨ててしまったのだし、後者は不決断に事実に曳き摺られてしまったのである。当然のことながら前者は登場人物が奥行のある背景を獲得できずに弱よわしさを晒したし、後者はブラジル人を登場させると同時に、おおむね水っぱい作品になった。つまり前者は移民が可能とする認識の限界にこだわりのすぎたのだし、後者は不用心に事実をかかえこみすぎたのである。

由来、作家はよく識るものでなければ書けないし、書かない。

しかし、移民はいつもこの国とこの国の人びとを識るうえで限界をもつ。しかも移民自身、この国とこの国の人びとの中に身を置くのだから、とりもなおさず自己自身の状況・認識に限界をもつのである。

たとえば一篇の小説で、移民がブラジル人から理不尽な扱いを受ける設定がえらばれ、それが重要なモチベーションにされるとしても、その“理不尽”を成立させている風土や社会的条件やに作者の目が行き届い

ていないかぎり、到底リアリティを獲得することはできない。それは同時に、移民の立場に対する説得力の欠如を招く。だが何しろ、移民はこの国とこの国の人びとの中で生活を営むのだから、移民を描こうとするかぎり、その圏内にブラジル人が介在しだすのは避け難い。そして“ブラジル人”への認識にはいつも限界をもつのだから、つまり私たちによつて書かれる小説はいつも認識のミッシング・リンクともいえる陥穽をその構成の上にもつのである。それを飛躍したり迂回したりするかぎり、どうも一つの作品世界の完結は覚束ないのではないかと思われる尤もこれは、存在のリアリティの実現に“関係”を重視するサルトルの理論をあまりに拡大解釈しすぎたかも知れないし、そこからのあまりに過度なペシミズムであるのかも知れない。小説の領域は宏大なのだから、(さまざまな人物との間にある関係の複雑さ)：どころか、一人の移民の生活：：：どころか、その移民が飼育する小動物にだけ対象をしぼっても世界の構造を表わすことは可能かも知れないのである。

しかしながら、私たちが負うのはこの国とこの国の人びとに対する認識の限界ばかりではなく”ことば”の面でも問題をかかえこんでいる。ブラジル語がついに外国語でありつづけるというような判り切ったことではなく、むしろ最も基本的な私たちの日本語に問

題の核芯は潜むのである。移民の日本語は、日本を離れ、ことばの養いの糧となる豊かな会話を離れ、知らず識らずの内に根を衰えさせている。ことばの表現力を常にあたらしくするための機能を衰えさせている。私はなかば戯れに私たちの日本語を冷凍漬の日本語といたりするのだが、この宿命のような困難の重みを、つくづく感じないではいけないのである。

だがしかし、ともかく現に生き、なお生きつづけようとしている移民の群がここに存在する。それぞれの内的必然によつて自己の表示と理解とを獲得したいと思いつめている移民の群がここに存在する。たとえ稔りの可能性は乏しいにしろ移民にも自己の存在証明を繰り返して試みる根拠はある。私は仲間の作者たちに（大きな犬が吠えるからといって小さな犬だって吠えることはできる）というチエホフの言葉を援用し、次のように提言したい。

……むしろ偉大さを望まず、マイナーの作家として徹するように……と。

（編集者から作者へのメッセージ）

（描写の試み）―この作品は作者につきまとう違和感への精いっぱいな抵抗の試みだったともいえる。これを

出発点として、あるいは超克するかとも思われたが、間もなくこの国を去り、ロス・アンジェルズ、サン・フランシスコと漂泊の生活をつづけ、現在は日本で病いを養っているという。

鋭い観察力がいよいよ違和感を深め、傍観者的な姿勢に閉じ籠らせ、永い沈黙を強いているのかも知れない。

（日本から来た女）―この作者がもつ作品は多く、必らずしも代表作というわけではない。しかし作者がもつ多くの可能性が、この小品の中に萌芽として見出される。

（多喜の決心）―編集委員尾関氏の強力な推薦によった。女流にはめずらしい観察のたくましさ、その理由であるらしいが、その後絶えて久しく次作に接しないことを作者のために惜しむ。

（ウバツ―バにて）―低い声で語られる事柄の底に移民の女性の苦しい歴史が潜むのは感じられないではないが、感傷と詠嘆とが過多で小説としての骨格はよわい。

（はまゆうの唄）―サン・パウロの片隅で生きる移民の姿が風俗小説的な手法で描かれている。風俗を描いて

風俗を超えるのが、もちろん望ましいことだが、移民百態が書きつがれるならば、それを稔りの一つだといえる。

（移植）―ブラジル人の男の姿が、女の目を通して手操り寄せられようとしている。種族差や風土や言語やの障壁を、性によって一挙に乗り越えようとする試みは、ひょっとしたら作者の重要な発見かも知れない。

（井戸）―開拓地で移民が井戸を掘りつづけるが、ついに水脈には行き当らずじまいにおわる。その徒労の過程は移民の運命の側面を暗示している。

（遠い虹の橋）―村を文明から距てている河に架橋を思い立った老移民が、その促進のために帰化をし、この国の民衆の中に入っていく。この老移民の意識と行動とは、惜しいことに十分な展開をみせないが、しかし移民全体への重大な問い懸けが試みられている。

（地表）―移民史草創期で最も興味が喚起される“プレイジョン移民地を背景とし、その創設者星名謙一郎を登場させながら、はかばかしい展開がみられずに終わっている。作者の興味の持ち方に発する当然の結果なのだが、折角の素材であるだけに惜しい。

（朝の予感）―作者は、オール読物新人賞受賞後、すでに日本の中間雑誌の有力なレギュラー作家候補となっている。

氏が発展させてきている作品系譜からすれば「聖人たちの湾」（サン・パウロ新聞社文学賞）の収載こそ妥当でもあり、氏自身からもそれとなく、その意向を洩されたのだが委員全員の一致した結論に基づき、これを戴いた。氏ははじめ実に多岐多様な可能性を提げて登場したので、たとい現在それらの大半が置き去りにされているとはいえ、おそらく遠く離れた故郷をなつかしむように、この作品に対ししみじみとふりかえるときが氏自身にくることを疑わない。

（ふたつの間）―この作者には個性的な語感がある。これが過度となるとき往おう一人合点の評を受けるが、あまりそれにはこだわらないで、どこまでも自分の語感を大切にし同時に明晰さを加えてほしい。

（洪水）―移住初期の不如意な生活が冷静にえがかれ、洪水さえ単なる自然現象として処理されている。営農の破綻が夫婦の危機へとつながるのだが、その内面の葛藤が十分に追究されていず、人物たちの印象はよい。

（E町にて）―日常の虚しさから過れるようにふと旅に出た主人公が、ダイヤモンド鉱発見で沸き立っている田舎町に着く。宿屋の主もバスの運転士も役場の吏員もそれぞれスコップやツルハシやを担いで町を空っぽにしていく情景の箇所では、さまざまな展開を期待させるが、結局ダイヤモンドはダイヤモンド以上のものにならない。もし人間に共通する夢や心の飢渴感の象徴として捉えられたなら、主人公のひきずる空虚も普遍性を獲得できただろう。

（放浪一代）―不正土地売りとのいきさつや、交通事故以後の説明が不十分なため、主人公の感慨の域を出ない。しかし老母との対面の数行は感動的だし、作者の揮身の力が籠もる。

（せせらぎ）―苛酷な農耕生活の中で、なめらかな肌やしなやかな指やを喪ってしまっている移民妻が、町住いの女に対して感じる心の翳りが描かれている。単なる感傷ではなく、その女と対座して動揺を隠し切れない夫へそそがれる眼差のいろは深くものかなしい。

（断絶）―わがままで頑固な老父の発病から死までが描かれている。しかしその間に起る母親の異常な死と、主人公の内面とが十分に追究されていず、そのために

重要な背景となるはずの移民的状況は緊張感を示さずにおわっている。

（海に見える町）―主人公は一つの思念にとらわれており、絵画の制作を通して自己確認をしようとする。生活はしだいに窮迫するが、もちろん単なるパンの問題でなく、思想に根差すのだから、行を迫って緊張がたかまる。唯移民の

成功者―氏と主人公との交渉のくだりは描写不足でもあり紋切形でもあつて惜しまれる。

（みさ子とわぐり）―珈琲園に育つ思春期の移民の子たちが登場する。この主題は準二世の理解の原点でもあり、さらに一層の深化を期待する。

（切手）―主人公の負う心の傷が移民の状況と対応したなら一層深さと広さをもったにちがいない。

（流亡）―女主人公の生き方はいかにも地味だし古風のようにだが、移民の女の現実だったにはちがいない。唯、別れた夫との再会でも内面に触れられる部分がすくなく、全編叙情に流れ、読後の感動はよい。

（帰郷）―幾年ぶりで訪目した移民が、事毎に齟齬感

を味あう。その相手が親だったり姉妹だったりするのだから当然苦渋がにじむが、これはもつと痛烈であるべきで、この程度ではホロ苦さの域をでない。

（河は歌う）この作者が登場したのは比較的最近のことです。すでに六十歳を過ぎていられたと思うが、こういう新人の出現は悦ばしい。作中の人物も筋も古めかしいといえはいえるが、しかしこれは作者の年齢にばかりあながち由るのではなく、移民社会の一断面として、こういう体質もあるのだといえる。

（狂犬）―この作者ぐらいブラジル人を巧く書く人はすくない。生まじ言語の障壁などにこだわらず、単に隣人を眺めるようにするところからの結果なのかも知れない。唯この作品に関する限り、感傷がやや過剰といえ、事件の推移も常套をでていない。

（折れる葦）―この作者は第一作以来、常に愛や死やを問い つづける果敢な姿勢を示している。しかし、その主題を追うのに性急すぎ、状況や時代背景やはいつ也十分に書き込まれていない。思想は精神と不可分だし、精神はその形成の諸条件から自由となり得ない以上、“生活”の描かれな い”観念”だけの世界は成立しない。移民、あるいは移民の子……という条

件をになう人間の生活が厚みと深さをもつて描かれるとき、作者年来の主題も勤さをもつにちがいない。

本巻の準備は、選集刊行の母体ともいえるコロニア文学会が、主として経済上の悪条件に直面し、ついに実質的解散に至った時期と重なるため、予想外の困難に見舞われた。殊に予算面で大きな制約を受けた。一旦収載リストに入った作品でも、限ぎりの段階で割愛を余儀なくされたり、一部省略（例えば（移植）、（遠い虹の橋）等）を窮余の一策として強いられた。この点読者並びに作者の方々にお詫びして置く。

さらに付け加えなければならないのは、こうして後書などを記すと、いかにも私一人が推進役を果たしたようだが、実は本巻は委員全員の努力の結晶なのである。それ無しには到底実現不能だったのである。私事に涉って恐縮だが、一昨々年暮れ輪禍に遭って私が著しく行動力を欠いたのも理由となり、総て合議制によつた。収載作品リスト作成にも両三度会合をもち、十分な討議を経て決定した。つまり、終始委員全員の一致した熱意に支えられたのである。とりわけ編集実務上の煩瑣な仕事、印刷所との交渉や校正や造本の手配やの一切は専ら武本由夫氏の力によつた。むしろ氏あつて上梓をみた、といつてよいのである。これらの方々

へ改めて謝意を表すると共に本巻刊行までの経緯を明らかにする。

コロニア小説選集・第三卷

一九七八年八月発行

編集・コロニア文学会

発行所・コロニア文学会

G r e m i o L i t e r a r i o . C o l o n i a .

ブラジル国サンパウロ市

ラルゴ・セツテ・デ・セツテンブロ五二番四階

四〇一号室

印刷所・トッパンプレス印刷会社 サンパウロ市

ムニス・デ・ソーザ街 二五八番